



大藏經



凡例

一、今卷依用の底本は四經共に巴利聖典出版協會 (Pali Text Society) 本にして、兼て暹羅版を參照せり。

一、本文行頭に羅馬數字を以て底本の頁數を附し、彼此參看に便じたり。

一、文中〔 〕印を以て括せる語又は句は、譯者の挿入にして、六號活字〔 〕印を以て括せるは譯者の註記なり。

一、文中⋮乃至⋮又は⋮⋮⋮とあるは、底本に然く省略せるものなり。

一、文字の右肩に附せる白拔羅馬數字は註の對照番號にして、註の文は小誦經にありては各經末に、其の他の三經は各品末に之を出したり。

一、固有名詞の中、音譯の漢譯經典に存するものは可及的に之を探り巴利原音の假名を附せり。但し漢譯は主にサンスクリットよりの翻譯なれば、その音譯は必ずしも巴利語のそれに對應すとは言ふべからず。

一、假名字を以て表せる發音も亦巴利語の正確なる音を寫せるものとは言ひ難し。従つて漢字、假名兩者いづれの表音も、その巴利發音を知る爲には卷末索隱中の原語に依るを要す。

一、索隱は發音索隱と漢字索隱との二種とし、前者は假名字、原語羅馬字、漢字の順に、後者は漢字、原語羅馬字の順に配し、總て五十音順に列位す。而して漢字索隱中には固有名詞の他に術語をも合入したり。

目次 小部經典一

小誦經

宮田菱道譯

本經は小部經典の最初に位する極めて簡短なる集録で、「小讀本」とも稱すべきものである。新入道者が最初に學習するに適する要文と佛教儀式に用ひられる禮讚文である。九部より成つて居り、初めの四部はバーダ(誦文)で極めて短い要文であり、本經を小誦經と名づけるのは之によるのであらう。後の五部はスッタ(經)であり、其中第五、第六、第九の三經は經集(南傳藏卷第二十四)に存するものと同一であり、第七の戸外經は餓鬼事(ペーリ語から來る)經(南傳藏卷第二十四)に見出される。

本經は錫蘭では大いに尊重せられ、現在の錫蘭佛教徒の儀式、生活に缺くべからざるものとして永く行はれて居るものである。第七第八の二經を除いて他の七は今日も佛教徒のバリッター式に誦せられ、家屋の新築、死亡、病氣等のあらゆる機會に降魔祈福の爲に誦せられるといふ。

西紀一八六九年ナルダースによつて本文并に英譯が王立亞細亞協會の雑誌に掲載せられた。然し此より前、第七第八の二經を除いて他は、一八三九年シーロンフレン

ド誌にビリットの翻譯としてゴージャーリーによりて掲げられ、後にザイデンスチニッカーフ及びキンテルニッツも之を獨譯した。漢譯には本經に相當するものはない。

一	三歸文
二	十戒文
三	三十二身分
四	問沙彌文
五	吉祥經
六	三寶經
七	戶外經
八	伏藏經
九	慈悲經

法句經

辻直四郎譯

法句經は二十六品四百二十三偈より成り、釋尊の金口より遊れる無間自説の「法句」、即ち佛教の妙諦を宣示せる勝句を分類蒐集したものと稱せられる。行文概して平易簡潔、而も巧妙なる譬喻を交へて枯燥ならず、その間に佛教の道德觀・社會觀の根本義を教へて佛道入門の指針をなし、南傳三藏中特に珍重せらるゝ珠玉の文字である。之に因縁譚及註解を附した佛音の浩瀚なる註釋 (Dhammapadatthakathā ed. by H. C. Norman, PTS 1906-1915; tr. by E. W. Burlingame: Buddhist Legends, 3 vols., Cambridge Mass. 1921) も廣く世に行はれてゐる。

西暦一八五五年デンマークの碩學フ・ア・ウ・ス・ペルは法句經を出版し、之をラテン語に翻譯し、且つ上記の註釋の抜粹を添へ、學界に不朽の貢獻をなした。Dhammapadam, Extribus codicibus Hauniensibus palice edidit, latine vertit, excerptis ex commentario palico notisque illustravit V. Fausböll, Hauniae 1855. もの第11版は一九〇〇年ローナンベク出版せられ更に一九一四年にはベーリャード・バーンカラ・テークによって新に出版せられた。The Dhammapada, New edition by Suriyagoda Sumangala Thera, PTS 1914. 翻譯に至つては歐米の主要語に移植せられたもの頗る多く、今茲には最も重要なものとして F. Max Müller: The Dhammapada, Sacred Books of the East vol. X, Oxford 1881, 2nd ed. 1898, New ed. 1924; R. Otto Franke: Dharma-Worte, Jena 1923 が擧げらる。本邦に於

ても立花俊道教授(國譯大藏經、經部第十二卷、大正七年)、長井真琴教授(世界文庫、大正十三年)、荻原雲來教授(岩波文庫、昭和十年)等の翻譯がある。本譯は之等先覺巨匠の勞作を自由に参考利用しつゝ出來得る限り忠實にP.T.S出版本を譯出するに務め、誤植句讀等の些細の點は別として之に従ひ得なかつた二三箇所は註を附して明瞭にしておいた。

南傳法句經に相當する北傳梵本は法救(Dharmatāta)撰ウダーナ・ガルガ(Udānavarga)と稱せられ、近時の中亞發掘研究の結果、原本斷片の世に出でたものも少くなくその概要を考究するに難くなる。即ち三十三品より成り、偈數も南傳法句經より遙に多く内容より見ゆる所傳を異にしてゐるとは明白である。特に Sylvain Lévi: L'Apramāda-varga. Étude sur les recensions des Dharmapadas, Journ. Asiatique 1912 II, P. 203-294; P. N. Chakravarti: L'Udānavarga sanskrit. Tome I, (chapitres I -XXI), Paris 1930 参照。尙梵語から翻譯せられた西藏語ウダーナ・ガルガ(Ched-dur-brjod-pahi tshoms)は三十三品より成り、九八五乃至九八九偈(少部分は散文)を含み、カンチャーラ部のみならずタンヂール部にも收められてゐる。早くから英譯によつて知られ(W. W. Rockhill: Udnava-varga, translated from the Tibetan of the Bkah-hgyur with notes and extracts from the commentary of Prajñāvarman, London 1883, Trübner's Or. Ser. (1892) 後に至つて原文も出版された(H. Beckh: Udānavarga, nach dem kanjur und Tanjur herausgegeben, Berlin 1911)、シリ語法句經並に優陀那の偈文の大部分に相當する偈頌を有し、之等の中に見出され

れなう偈頌も概ね南傳三藏の他經中の偈文に相應する。特に L. de la Vallée Poussin: Essai d'identification des gāthās et des udānas en prose de l' Uḍānavarga de Dharmatrāta, Journ.

Asiatique 1912, I, P. 311-330 參照。

次に漢譯經典中法句經或はウダーナ・ヴァルガに類似相應するものに次の四經がある。
一、法句經(法救撰、吳維祇難等譯、西曆三世紀の初、三十九品七百五十二偈)、二、法句譬喻經(西晉法炬・法立共譯、西曆二九〇—三〇六年、四十二品)、三、出曜經(後秦竺佛念譯、西曆三九八—三九九年、三十四品)、四、法集要頌經(法救集、宋天息災譯、十世紀末、三十三品、約九百五十偈)即ち之である。この中第一は偈頌のみより成り、第二はその少數の偈に因縁譚を加へたものである。第三は偈頌のみならず因縁譚註解を含み、第四は大體に於てその偈頌のみを改訂集録したものに過ぎない。而して偈頌に關して見るも、第一第二の一類と第三第四の一類とはその原文を異にし、後者は梵語西藏語のウダーナ・ヴァルガに近い。

以上の外、法句の集録は種々なる宗派に於ても行はれたものゝ如く、西北印度方言の特徴ある一種のアラーカリット語で書かれた法句經が于闐地方から發見せられた。その寫本はカローシュティ文字を以て書かれ、西曆一世紀乃至三世紀に屬すと考へられ内容は梵巴兩本の何れとも一致しない獨立の一異本をなしてゐる。E. Sellart: Le manuscrit Kharosthi du Dhammapada, Les fragments Dutreuil de Rhins, Journ. Asiatique 1898 II, 193 ff.; 545 ff.; Benimadhab Barua and Sailendranath Mitra: Prākrit Dhammapada based

upon M. Senart's Kharosthi manuscript, with text, translation and notes, Calcutta 1921 翻譯。同様にマーテバヌは法句經(Dharmapadā)の名を擧げゝるの千唱(Sahasravarga, ed. Senart vol. III, P. 434-6)及び他の數偈を引用してゐる。大衆部も亦獨立の一異本を有してゐたことを知るに足るのである。

最後にウダーナカルカが中央亞細亞に於ても愛好せられたことは所謂ムカラ語の寫本中に偈頌の翻譯断片のみならずその註釋書(Udānālāmikāra)の断片も存在する事實によつて證明せられる。B方言即ち龜茲語に關しては特々 Sylvain Levi : Fragments de textes kontchéens, Udānavarga, Udānastotra, Udānālāmikāra et Karmavibhāga, Paris 1933; E. Sieg und W. Siegling : Udānavarga-Übersetzungen in „Kučischer Sprache“, Volume Rapson, London 1931, P. 483-499 翻譯。A方言即ち阗耆語に關しては E. Sieg und W. Siegling : Bruchstücke eines Udānavarga-Kommentars (Udānālāmikāra?) im Tocharischen, Festschrift für M. Winteritz, Leipzig 1933, P. 167-173 翻譯。

I 雙品	一
II 不放逸品	110
III 心品	111
IV 華品	112

五	愚品	二六
六	賢品	二八
七	阿羅漢品	三〇
八	千品	三一
九	惡品	三五
一〇	刀杖品	三七
一一	老品	三九
一二	自己品	四一
一三	世品	四三
一四	佛陀品	四四
一五	安樂品	四五
一六	愛好品	四七
一七	忿怒品	四九
一八	垢穢品	五一
一九		五三

一九	法住品	五六
二〇	道品	五九
二一	雜品	六二
二二	地獄品	六四
二三	象品	六七
二四	愛欲品	六九
二五	比丘品	七三
二六	婆羅門品	七七

自 說 經

增永靈鳳譯……八五

本經は小部經典十五經中第三に位し、法句經の次、如是語經の前に存する。部分的に
は註にも記した通り漢譯聖典中にも存するが、全體としてはその相當經を見出し得
ない。元來優陀那(Uddana)とは佛陀が感興に従つて發せられた偈であるから、普通
感興偈又は自說經と稱する。現今の自說經は菩提品、目眞隣陀品、難陀品、彌醯品、蘇那
長老品、生盲品、小品、波吒離村人品の八品より成り、各品には各十經づつを含む。故に
全體では八十經より成つてゐる。各經は長行(散文)と所謂優陀那とに分れる。長行
はその優陀那の發せらるゝ因縁を説く。更に一品の終りには攝頸(Uddana)なるも
のが加へられ、第八品攝頸の末尾には各品を總括する頸が添へられてゐる。各品の
題名は必らずしも一品全體の内容を代表したものでなく、その中の一經又は二三經
によつて選ばれたものに過ぎない。但し第七品は一般に短經より成つてゐるので、
小品といふ名を得たのであらう。第一品は成道、第八品は涅槃に就て述べられてゐ
るやうに、本經は主として佛陀の傳記に關するものが多く集められてゐるのである。
されば律藏の大品、小品、長部經典の大般涅槃經、その他佛傳等に關する文獻と一致す
るもののが存する。佛音は九分教を解釋し、その中優陀那に就て歡喜知に基く偈を伴
ふ八十二の經は優陀那なりと知るべしと言つてゐる。佛音が八十二經とした所
に誤りなしとせば、現存の八十經との間には多少の變化が存すると言はねばならな

い。第五品の六經には大迦旃延の侍者たる蘇那が佛陀の下に赴き、八八品の十六偈を悉く暗誦した記事が見出される。この記事は本經の成立問題に就て一つの示唆を與へると言はれてゐる。是等に關しては尙ほ論すべき問題も残されてゐるが併し本經は上に述べたる意味に於て原始佛教研究には貴重なる文献の一たる價値を失はない。本經の印行は一八八五年 Steinthal 一八九〇年 Windisch によつて果され、英譯は一九〇二年 D. M. Strong 獨譯は一九一〇年 Seidenstücker によつて行はれてゐる。

第一品	菩提品	八五
第二品	目眞隣陀品	九八
第三品	難陀品	一一七
第四品	彌醯品	一三八
第五品	蘇那長老品	一六〇
第六品	生盲品	一八五
第七品	小品	二〇七
第八品	波吒離村人品	二一七

如是語經

石黒彌致譯一一四一

本經の經名は其の説相より出たものである。即ち一節毎に *iti* (如是) の語を以て結び卷頭は *Vuttam̄ hetam̄ bhāgavatā vuttaṁ-arahattā ti me suttam̄* (げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり) に始まり此の首尾を合して *iti vutta-ka* (と説かれしもの、*—如是説(如是語)*) と稱するに至つたものである。

本經は百十二の小經が法數順に一集二集三集四集と集成され、各小經は經序本文・偈文結尾の形式で構成されて居る。中には此の形式でないものもあるが撰者の意圖は此の順序にあつたものと思はれる。本文と偈文とは同一内容を含むものであるが、その成立は本文を先づ述べて然る後に偈文を頤したものではなく、兩者別個に成立したものその後に現在の如き形に整理したらしく其の次第に於ては本文よりも偈文の方が早く成立したものゝやうである。

内容は目次に示す如く三毒・五蓋・六結等を一法より四法までに取り合せて説いてある。對告衆は比丘衆であるが必しも比丘にのみ限られた説法ではなく、第百六經の如く在家向きの教説も存する。又單なる法數の羅列のみでなく第八十二、八十三經、第百九經の如き説話をも含んで居る。

漢譯には本經と類似のものに本事經がある。これは第一法品より第三法品まで、あつて總計百三十八經を有して居る。内容より見ても現形巴利本の翻譯に非ざる

は明白である。概して言へば冗長であつて或點から見れば原本は梵本であつたかと考へられる。漢巴の對照は本譯文の註記を参照せられ度い。

一集

第一品(十經).....一一四一

一貪 二瞋 三癡 四忿 五覆 六慢 七一切 八慢 九貪 一〇瞋

第二品(十經).....一一四九

一一癡 一二忿 一三覆 一四無明 一五愛 一六一七學 一八僧破 一九僧和
二〇汚心

第三品(七經).....一一五九

二一淨心 二二福 二三二利 二四山 二五妄語 二六施 二七慈

二集

第一品(十經).....一一六九

二八二九根門飯食 三〇三一善惡 三二三三戒見 三四無勤無愧 三五三六梵行
非梵行 三七動亂精進

第二品(十二經).....

二七九

三八安穩孤獨

三九見厭 四〇無慚無愧 四一滅不滅 四二慚愧 四三無生

四四涅槃 四五獨居 四六學勝利 四七悟 四八無幸處 四九見

三集

第一品(十經).....

一一九四

五〇不善根

五一界 五二五三受 五四五五求 五六五七漏 五八愛

五九無學

第二品(十經).....

一一〇一

六〇福業事

六一眼 六二根 六三時 六四惡行 六五妙行 六六淨 六七寂

六八六九貪等

第三品(十經).....

一一〇二

七〇惡行

七一秒行 七二出離界 七三色等 七四兒 七五人 七六樂 七七身

等 七八衆生 七九法

第四品(十經).....

一一〇三

八〇不善尋

八一恭敬 八二天聲 八三天 八四三人 八五不淨觀等 八六法

八七尋 八八貪等 八九提婆

第五品(十經).....

三四〇

九〇勝信 九一托鉢 九二和合衣 九三火 九四考察 九五欲生 九六欲繫
九七善戒等 九八施等 九九三明

四集

第一品(十三經).....

三五三

一〇〇梵志 一〇一四事 一〇二漏 一〇三沙門 一〇四比丘 一〇五起愛
一〇六尊敬 一〇七外護 一〇八欺瞞 一〇九河 一一〇行等 一一一具足戒
一一二如來

索 隱

二 一 發音索隱

(4) (1)

小誦經 (クッダカ・パータ)

かの世尊、應供、正等覺者に歸命し奉る。

一 三歸文

私は佛に歸依し奉る。私は法に歸依し奉る。私は僧團に歸依し奉る。再び、私は佛に歸依し奉る。再び、私は法に歸依し奉る。再び、私は僧團に歸依し奉る。三たび、私は佛に歸依し奉る。三たび、私は法に歸依し奉る。三たび、私は僧團に歸依し奉る。

二 十戒文

一、殺生を禁ずる學處を我は受持す。二、與へられざるもの取るを禁ずる學處

を我は受持す。三、非梵行を禁する學處を我は受持す。四、妄語を禁する學處を我は受持す。五、穀酒・果酒・酒類に沈醉するを禁する學處を我は受持す。六、非時食を禁する學處を我は受持す。七、舞誦・唱歌・音樂・觀劇を禁する學處を我は受持す。八、華環・薰香・塗香を持し、扮飾裝飾物を禁する學處を我は受持す。九、高床²大床を禁する學處を我は受持す。十、金銀を受領するを禁する學處を我は受持す。

三 三十二身分

此の體には〔次の如きもの〕あり。毛髮・體毛・爪・齒・外皮・肉・筋・骨・骨髓・腎臟・心臟・肝臟・肺・膜・脾・肺・臟腑・腸間膜・胃・排泄物・膽汁・痰・膿汁・血・汗・脂肪・淚・血漿・唾・鼻液・關節滑液・尿・頭には頭腦あり。

四 問沙彌文

一とは何か。一切衆生は食に依りて住す。二とは何か。名と色と。三とは何か。三受。四とは何か。四聖諦。五とは何か。五取蘊。六とは何か。六內處。

七とは何か。七菩提分。八とは何か。八支聖道。九とは何か。九衆生居。十とは何か。十支を具足せるを阿羅漢と謂ふと。

註①漢譯經典では一切入とあり。地、水、火、風、青、黃、赤、白、空無邊處、識無邊處の十徧處定を擧ぐ。

五 吉祥經

我、是の如く聞けり。或る時、世尊舍衛城の祇樹給孤獨園に住し給ひき。その時、一人のいと美麗なる神、夜更けて祇樹園全體を輝かし佛の所に近づきぬ。近づきて佛に挨拶して一隅に立ちたり。一隅に立てて、彼の神は佛に「次の偈を以て申さく、

一、「多くの神々や人々は最上の福を求める、吉祥に就きて考ふ。願くは最上の吉祥を説き給へ」と。

二、「佛」愚者を避けて賢者と交はり、尊敬すべきものを敬ふ、これぞ最上の吉祥なれ。

三、適當なる所に住し、過去に善業を積み、己の正しき誓願を持つて、これぞ最

上の吉祥なれ。

廣く學び、技藝に長け、能く學ばれし律能く語られしその言葉、これぞ最上の吉祥なれ。

父母に事へ、妻子を養護し、生業に安住する、これぞ最上の吉祥なれ。
六 布施をなし、淨く行ひ、親族を慈護し、非難なき生業に従ふ、これぞ最上の吉祥なれ。

七 惡を離れ遠ざけ、飲酒を慎しみ、法に於て放逸ならざる、これぞ最上の吉祥なれ。
八 敬虔にして、自ら遜り、満足し、恩を知り、隨時に法を聞く、これぞ最上の吉祥なれ。

九 忍辱あり、丁寧にして、沙門と會交し、隨時に法談をなす、これぞ最上の吉祥なれ。
一〇 道行を修し、梵行を行ひ、聖諦を見、涅槃を實證する、これぞ最上の吉祥なれ。
一一 世間の法によりても心搖がず、憂なき垢れなき、安穩なる、これぞ最上の吉

祥なれ。

一一 此の如きを爲す人は、何處にあるも打勝たるゝなく、何處に行くも幸多し。これ彼等の最上の吉祥なり」と。

註 ① Suttanipāta, Mahāmangalasutta に同じ(南傳藏、二四卷參照)。

② 得不得、毀譽稱讐苦樂の八法を云ふ。

六 三寶經

一 此處に集へる鬼神等、地上のものも空中のものも、一切の鬼神等は、歡喜してあれ。而して又、熱心に我が説くところを聞け。

二 [我が教を受けに來れるが故に]、それ故に一切の鬼神よ、皆、傾聽せよ。夜に晝に供祭を捧ぐる人衆に慈悲を垂れよ。それ故に注意して彼等を護れ。

三 人間の世界に於ける或は他の世界に於ける如何なる財も、ばた、天上に於ける勝れたる寶も、如來には比すべくぞなき。これぞ佛に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

四

寂靜の釋迦牟尼が到達し給へる、〔煩惱の〕盡きし、貪欲を離れ、不死なる、勝れたる法、この法に比しては、如何なるものも較ぶるぞなき。これぞ亦、法に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

五

最勝なる佛が稱讚し給へるは、清淨なる不斷の三昧なりと言ふ。此の三昧に等しきものぞなき。これぞ亦、法に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

六

諸の善人の中に於て、稱讚されたる八種の人あり、是等は四雙なり。彼等は善逝の弟子にして供養を受くるに價する人なり。此等の人に對する布施は大なる果あり。これぞ亦、僧團に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。^②

七

堅固なる心をもちて專念して瞿曇の教を信する人は、最高の〔涅槃〕を得、不死に入り、無償にて得、寂靜の樂を享く。これぞ亦、僧團に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

八

譬へば市門の標柱が大地に打込まれてある時、四風に搖がざるが如く、聖

九

諦を深く觀察する善人はその如しと我は説く。これぞ亦僧團に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

巧く説かれたる聖諦を、深甚なる智慧によりて能く理解する人は、假令、大なる放逸の人なりとも、決して第八の生を受くることなし。これぞ亦僧團に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

一〇 一〇 彼は正見を成就すると俱に、三事を捨す。即ち身見、疑戒、禁取見となり。彼は四惡趣を離れ、六逆罪を犯すことなし。これぞ亦僧團に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

一一 彼は身語の、或は又意の惡業をなすとも、それを隠匿するに堪へず。涅槃を見たる人は隠匿するを得ずと説かれたり。これぞ亦僧團に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

一二 恰も夏の初めに、林の樹々の枝に咲く花の如く、その如く、最上の利益を施すために涅槃に至る最勝の法を説き給へり。これぞ亦佛に於けるすぐれたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

一三 最勝にして、最勝を知り、最勝を與へ、最勝を運ぶ無上士は、最勝の法を説き給へり。これぞ亦、佛に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。

一四 前の生は盡き、新しき生は生ぜず、未來の生に貪求する心なく、〔生の〕種子を斷ち、生長するを望まず、賢人なる彼等は燈の如く涅槃す。これぞ亦、僧團に於ける勝れたる寶なり。これ眞理なるが故に、すべてに幸くあれ。
一五 此處に集へる鬼神等、地上のものも、空中のものも、一切の鬼神等、是の如く神と人とに尊敬せられたる佛に歸命せん。幸くあれ。

一六 此處に集へる鬼神等、地上のものも、空中のものも、一切の鬼神等、是の如く神と人とに尊敬せられたる法に歸命せん。幸くあれ。

一七 此處に集へる鬼神等、地上のものも、空中のものも、一切の鬼神等、是の如く神と人とに尊敬せられたる僧團に歸命せん。幸くあれ。

註① Suttanipāta, Ratanasutta に同じ(南傳藏二四卷參照)。

② 四向四果の八を云ふ。四雙は向果四宛あるを云ふ。

③見道十五心の間三界の見惑を断じ、十六心の無間に正見成就して預流果を得たるもの
は七生欲界の生を盡して、第八の生を受けざるを云ふ。

④地獄、餓鬼畜生、修羅を云ふ。

⑤北傳の五逆罪に「從他師」の一を加ふ。

七 戸外經^①

一 彼等は我等の住家の外に、又は街の四辻に立ち、或は〔古き〕各自の家に行きて戸口に立つ。

二 過去の業に縁りて、多くの食物・飲物や、硬き食物、軟き食物の供へられたる時、「此の世の」誰も此等の有情を記憶するものなし。

三 是の如く、慈悲のある人は、因縁ある者の爲に、清淨にして、すぐれたる時に適したる食物・飲物を與ふ。

四 「こは汝ら逝きにし因縁あるものゝためとなれ。因縁あるものは満足してあれ」とて、彼等は此處に集まり、集まりし因縁ある餓鬼等は、

五 多くの食物・飲物に非常に悦び、「此等のものを受けたるその人々により

て、我等因縁あるものは長く生きん。

六 我等のために供養はなさる。又施主は果なきことなし」と。實に此の死の世界には耕作もなく、牧畜もなく、

七 商業の如きもなく、金を以て賣買することもなし。此の世から受くることによりて、死の世界の餓鬼は生きて行く。

八 高き處の水の低きに流るゝが如く、是の如く此の世からの施物は餓鬼に利益あり。

九 溢るゝ川の流の海を満たす如く、その如く此の世からの施物は餓鬼に利益あり。

一〇 「我に施したり我に善業をなせり。彼等は我が因縁あるものなり、友なり、仲間なり」。過去の業を憶ひ起して、餓鬼のために布施を與へしめん。

一一 泣くことも、悲しむことも、其の他歎くことも、餓鬼等のためには何の益ともならず。是の如く因縁あるものは立ちてあり。

一二 されど、此の施物の僧團に與へられ、使用せられなば、長く死人の利益とな

り、よく彼を利す。

一三 此處に記されたるこれは、因縁あるものに對する義務にして、餓鬼には大なる供養がなされ、比丘には力を與ふ。又汝等には少からざる福が得らる。

註① Petavatthu, Tirokuḍapetavatthu に同じ。甫傳藏、「五卷參照」。

八 伏藏經

一 人は深き穴に財寶を埋積し、「何か事の起りたる場合に我が爲となることあらん。」

二 或は王様によりて責められたる時、或は盜賊に奪略されたる時、或は借財から脱がれるため、或は飢饉の場合、不幸の場合にと。此等の目的の爲に、世間にあつて所謂財寶は蓄積せらる。

三 深き穴の中に如何に多く埋積せられてあるも、一切が常に彼のために役立つにはあらず。

四 或は財寶は其の場所より消え、或は所有者の意識が迷ひ、或は龍が持ち去り、或は薬叉がそれを取り去り、^①

五 或は敵、又は相續者が彼の見ざる時に掘り取る。〔それを生ぜし〕福の盡きたる時此等一切は消失すべし。

六、七 婦人にも男子にあれ、或は支提に、或は僧團に、或は個人に、新參者に、或は亦母に父に、又兄に對して、布施をもつて戒行をもつて、自制をもつて、從順をもつて、財寶よく積まれなば、

八 此のよく積まれたる財寶は、力によりて奪はるゝことなく、死後伴ひ從ふものなり。此の世の富を捨離して行くも、これは〔他世〕に持ちて行く。

九 他のものに分ち得ざる寶にして、盜人にも盗まれざる財寶なり。賢者は福業を行ぜよかし、そは彼の死後にも伴ひ行く財寶なり。

一〇 これぞ神にも人にも一切の快樂を與ふる財寶なり。彼等が切望するものはすべて、此〔の財寶〕によりて得らる。

一一 美はしさ、美しき聲、美しき姿、美しき形、權力、侍従者、すべては、此〔の財寶〕に

より得らる。

一二 或る地方の王權、主權、轉輪王の悅樂、或は神々に對する天王權、すべては、此〔の財寶〕によりて得らる。

一三 又人間界の幸福、或は神の世界の所有る悅樂、又、涅槃の所有る樂しみも、すべては、此〔の財寶〕によりて得らる。

一四 道行を修する友のために正しく專注する人には、明と解脱と、明と解脱を具ふる境地、すべては、此〔の財寶〕によりて得らる。

一五 無礙解、〔八〕解脱、聲聞波羅蜜、緣覺、佛地、すべては、此〔の財寶〕によりて得らる。

一六 此の福業を成するは、是の如く大なる神奇なる果あり。それ故に、賢人賢者は福業を賞讃す。

註① ニルバナの譯、此の場合魔術を使ふ妖精の意に用ひらる。

九 慈悲經

一 寂靜なる境を完全に了解して、善利に巧なる人のなすべきことは、堪能な

る、率直なる、正直なる、語りて好く感ぜしめ、柔和にして、高慢ならざることなり。

二 足るを知り、養ひ易く、生活簡素に、根を鎮め、賢明にして、溫謙、〔信者の〕家に於て、貪求することなし。

三 他の智者の非難を受くる如き如何なる卑賤の行もなすこと勿れ。一切の有情は幸福に、安穩にあれ、安樂にあれ。

四 凡そ生きとし生けるものは、「欲に」動けるものも、動かさるものも、残らず、或は長きも、或は大なるも、中庸なるも、短きも、細なるも、麿なるも、

五 或は見ゆるも、或は見えざるも、將た遠きに住するも、近きも、或は已に生じ了りたるも、或は生るゝ〔原因のある〕ものも、一切有情は安樂にあれ。

六 人互に非毀すること勿れ。何處の誰をも輕蔑すること勿れ。怒り腹立ちて、互に苦を望むこと勿れ。

七 怡も母が己が子、一子を自らの命を賭して護るが如く、一切有情に對して

無邊の〔慈悲〕心を修習せよ。

八

無限の慈悲心を一切世界に對して修習せよ。上に下にはた横に、怨意なく、敵意なく、無礙に。

9

立ち歩み、或は坐し、或は臥すとも、彼目覺めてある限りは、此の念を確立すべし。此の教に於て是を梵住と云ふ。

一〇

[妄見]に陥らず、戒徳を護り、正見を具へて、欲を貪求することを制すべし。彼決して再び母胎に宿ることなし。

註❶ Suttanipāta, Mettasutta に同じ(南傳藏「四卷參照」)。

小誦經

一六

法句經（ダンマバダ）

かの世尊、應供、正等覺者に歸命し奉る。

一 雙品

- 一 諸法は意に支配せられ、意を主とし、意より成る。人若し穢れたる意を以て、或は語り或は行はば、苦の彼に隨ふこと、車輪が牽獸の足に〔隨ふ〕が如し。
- 二 諸法は意に支配せられ、意を主とし、意より成る。人若し淨き意を以て、或は語り或は行はば、樂の彼に隨ふこと、影の〔形に隨ひて〕離れざるが如し。
- 三 「彼、我を罵れり、我を擲れり、我を敗れり、我より奪へり」と、かゝる執念を懷く人には、その忿怨熄むことなし。
- 四 「彼、我を罵れり、我を擲れり、我を敗れり、我より奪へり」と、かゝる執念を懷か

ざる人には、その忿怨終熄す。

實に、この世に於て、怨は怨によりて終に熄むことなし。怨を棄てゝこそ始めて熄め。こは萬古不易の法なり。

他の者(愚者)は、「我等はこの世に於て、自ら制すべきものなり」と悟らず。かく悟る者にのみ、それによりて争は熄む。

享樂を事として住し諸根を攝せず、飲食度なく、怠惰にして精勤せざるもの、實に魔王がかかる人を克服すること、風の弱き樹に於けるが如し。

享樂を事とせずして住し、よく諸根を攝し、飲食度あり、信念ありて精勤するもの、實に魔王がかかる人を克服し得ざること、風の巖山に於けるが如し。

九 汚濁を脱せざるもの、袈裟を纏はんとするも、節度なく眞實なれば、彼は

袈裟に相應せず。

一〇 汚濁を瀉棄し、よく戒行に住し、節度を守り眞實あれば、彼は實に袈裟に相應す。^①

一一 非精體を精體と思ひ、精體を非精體と見る人は、邪思惟に住し、精體に到達することなし。

一二 精體に於て精體を知り、非精體に於て非精體を知る人は、正思惟に住し、精體に到達す。

一三 粗く葺きたる家屋に雨の漏る如く、貪欲は修養なき心を侵す。

一四 善く葺きたる家屋に雨の漏らざる如く、貪欲は修養せる心を侵さず。

一五 この世に於て悲しみ、死後に於ても悲しみ、惡業を作せる者は兩處に於て悲しむ。自己の業の汚濁を見て、彼は悲しみ、彼は惱む。

一六 この世に於て歡び、死後に於ても歡び、善業を作せる者は兩處に於て歡ぶ。自己の業の清淨を見て、彼は歡び、彼は楽しむ。

一七 この世に於て苦しみ、死後に於ても苦しみ、惡業を作せる者は兩處に於て苦しむ。「我惡業を作せり」とて苦しみ、惡趣に墮ちて更に苦しむ。

一八 この世に於て喜び、死後に於ても喜び、善業を作せる者は兩處に於て喜ぶ。
「我善業を作せり」とて喜び、善趣に往きて更に喜ぶ。

一九 たとひ經典を誦すること多くとも放逸にして之を實行せざる人は、他人の牛を算ふる牧者に均しく、「眞の」沙門の列に入らず。

二〇 たとひ經典を誦すること少くとも、法に違ひて舉止し、貪欲と瞋恚と愚癡とを棄て、正智を得て心よく解脱し、この世に於てもかの世に於ても執著なきものは、「眞の」沙門の列に入る。

註①原文 kasava-(汚濁)と kasava-(袈裟)との音韻類似を弄べり。

二 不放逸品

二一 不放逸は不死の道にして、放逸は死の道なり。不放逸の人は死せず、放逸の人は死せるに異らず。

二二 よくこの理を悟り、不放逸に通達せる人は不放逸を歎び、聖者の境を楽しむ。

二三 これ等の賢者は禪定に住し、堅忍に充ち、常に勇猛にして、無上安穩の涅槃を得す。

二四

奮勵し、念慮に富み、淨行を作し、熟慮して行ひ、自己を抑制し、正法に従つて生くる不放逸者の聲譽は増大す。

二五

奮勵により、不放逸により、自制により、また調御により、賢慮ある者は瀑流（煩惱）の侵すことなき洲（避難所）を造るべし。

二六

痴鈍愚昧の輩は放逸に耽り、賢慮ある者は不放逸を護ること、最上の寶を〔護る〕が如し。

二七

放逸に耽るべからず、欲樂に親しむべからず。不放逸にして禪定に住する者ののみ、大安樂に達し得ればなり。

二八

識者が不放逸により放逸を却くる時、かゝる賢者は智慧の高閣に登り、憂を去つて憂ある衆愚を瞰下す、宛も山上に立てる人が地上の人を〔瞰下する〕如く。

⁵二九

放逸なる者の中に在りて不放逸に、睡眠者の中に在りてよく覺醒せる賢者は、駿馬の駿馬を後にして〔進む〕が如くに往く。

三〇

摩伽婆（マガボン）（帝釋天）は不放逸によりて諸天の最高位に達せり。人は不放逸を

稱讚し、放逸は常に非難せらる。

三一 不放逸を樂しみ、また放逸に畏怖を感じる比丘は、大小の繫縛を火の如くに焼きつゝ往く。

三二 不放逸を樂しみ、また放逸に畏怖を感じる比丘は、既に涅槃に近づき、決して退轉することなし。

三 心品

三三 賢慮ある者は、戰慄し動搖し護り難く制し難き心を直くすること、宛も箭匠の箭に於けるが如し。

三四 水中の棲處より取り出されて陸上に投げ棄てられし魚の如く、この心は魔王の世界より遁れんとして戰慄す。

三五 捉へ難く輕躁にして欲に隨ひて趣く心を制御するは洵に善し。制御せられたる心は安樂を齋す。

五六 極めて見難く極めて微妙にして欲に隨ひて趣く心を、賢慮ある者は護る

べし。護られたる心は安樂を齎す。

三七 遠く行き獨り動き形骸なく胸窟に隠るゝ心、そを制御する者は魔王の繫縛より脱す。

三八 心安定せず、正法を辨へず、信念動搖する人の智慧は成滿することなし。

三九 心に煩惱なく、思慮惑亂せず、善惡を超脫し、覺醒せる人には恐怖なし。

四〇 この身は水甕の如く〔脆し〕と知り、この心を城廓の如く安立せしめ、智慧の武器を以て魔王と戦ふべし。調伏しては之を監視し懈怠すべからず。

四一 實に久しうからずしてこの身は地上に横たはるべし、意識なく、無用の木片の如く棄てられて。

四二 仇敵が仇敵に對し、怨敵が怨敵に對し、如何なる〔惡〕を作すにもせよ、邪惡に止住する心は、更に大なる惡を人に作すべし。

四三 父母、將また他の親族の作す〔善〕にも勝り、正道に止住する心は、更に大なる善を人に作すべし。

四 華品

四四 誰かこの地界と閻魔界と天界とを征服する。誰か妙説の法句を摘み集むこと、熟練せる人の華を[摘む]如くする。

四五 佛教を修する者は、この地界と閻魔界と天界とを征服せん。佛教を修する者は、妙説の法句を摘み集むこと、熟練せる人の華を[摘む]如くせん。

四六 この身は泡沫に譬ふべきを知り、幻影に等しきを悟る人は、魔王の華箭(誘惑)を壞り、「地獄の」死王(閻魔)に見ゆることなけん。

四七 華(快樂)をのみ摘みて心貪著せる人を、死は捉へ去る宛も眠れる村落を瀑流の漂蕩し去る如く。

四八 華をのみ摘みて心貪著し、愛欲に飽くことなき人を死は克服す。

四九 蜜蜂の、華と色と香とを害ふことなく、甘味のみを探り去る如く、かく智者は村落に乞食すべし。

五〇 他の非違を[觀る]べからず、他の爲せること、爲さざりしことを[觀る]べからず。たゞ自己の爲せること(罪過)爲さざりしこと(懈怠)を觀るべし。

五一

⁸ 愛すべく色麗しくとも芳香なき華の如く、實行なき人の語は、善く説かる
るとも効果なし。

五二

愛すべく色麗しく芳香ある華の如く、實行する人の語は、善く説かれて而
も効果あり。

五三

堆積せる華より、多くの華鬘を造り得る如く、人と生れては多くの善事を
作すべし。

五四

華の香は風に逆ひて進まず、梅檀^{タガラ}又は末利迦^{マリカ}(香木の名)の〔香〕も亦然り。
されど善人の香は風に逆ひても進み、正しき人は一切方に薰す。

五五

栴檀又は多揭羅青蓮華、將またヴァシキ(香木の名)之等の諸香の中、戒の香
最も勝れたり。

五六

多揭羅栴檀に屬するその香は輕微なり。されど持戒者の香は最上にし
て諸天の間に薰す。

五七

戒行を成就し不放逸に住し、正智により解脱せる者には、魔王も近づく能
はず。

五八 大道に棄てられたる塵埃の堆積中に、芳香馥郁として美しき蓮華の生ずる如く、

⁹五九 斯の如く、塵埃にも等しき盲昧の凡夫中に、正等覺者の弟子は智慧を以て輝く。

五 愚品

六〇 不眠者には夜長く、疲れたる人には一由旬^{ゆじゅん}(距離の単位)も長く、正法を知らざる愚者には流轉長し。

六一 道を歩みて自己に勝る人、自己に等しき人に逢はざれば、敢へて獨り行くべし。愚者は斷じて侶伴となすべからず。

六二 我に子あり、我に財あり」とて、愚者は惱む。自己すでに自己のものにあらず。况んやいかで子をや、いかで財をや。

六三 愚者にして[自ら]その愚を知るものは、これによりて既に賢なり。されど愚者にして[自ら]その愚を知るものは、實に[眞の]愚者と稱せらる。

六四

たとひ終生賢者に侍すとも、愚者は正法を悟らざること、宛も食匙の羹味に於けるが如し。

六五¹⁰

たとひ一瞬賢者に侍すとも、智者は直ちに正法を悟ること、宛も舌の羹味に於けるが如し。

六六

無知なる愚者は自己に對し仇敵の如く振舞ふ、苦果を齎す惡業を行ひつ。

六七

行ひて後悔い、顔に涙し、哭泣してその果報をうく、かゝる業は善く作されたるものにあらず。

六八

されど行ひて後悔いず、歡喜愉悦してその果報をうく、かゝる業は善く作されたるものなり。

六九

惡業の未だ熟せざる間、愚者はそを蜜の如く思惟す。されど惡業の熟するや、愚者はその時に至りて苦惱す。

七〇

愚者は〔節食して〕月に月に〔數ヶ月間毎日〕、クサ草の尖端を以て食を取るとも、彼は正法を思量する者の十六分の一にも値せず。

七一 犯したる惡業は、牛乳の如く直ちに凝固せず。灰に覆はれたる火の如く、燃えつゝ愚者に從ふ。

七二 思慮生じて〔却つて〕愚者の災厄となる、そは彼の頭を碎きつゝ、愚者の幸福を滅ぼす。

11 七三 「愚者をして〔虛名〕を欲せしめよ、比丘衆の間にありては上位を、僧院に於て

は主權を、他人〔在家衆〕の間に於ては供養を〔欲せしめよ〕。

七四 「こは我により爲されたりと、在家も出家も共に考ふべし、彼等は爲すべきこと、爲すべからざること、何事に於てもわが意に従ふべし」とは、愚者の思惟なり。〔この故に〕欲心と慢心とは增長す。

七五 一は利得に導く〔道〕にして、一は涅槃に至る〔道〕なりと、かく佛弟子たる比丘は悟りて、尊敬を喜ぶべからず、遠離に專心すべし。

七六 罪過を指示し呵責する智者を見ば、かゝる賢者と交ること、伏藏を告ぐる

六 賢品

人に於けるが如くせよ。かゝる人と交る者には善きことありて、惡しきことなし。

七七 訓誡すべし、教示すべし。不當の事より「他人を」遠ざくべし。かゝる人は實に善人の愛するところ、惡人の憎むところとなる。

七八 惡友と交るべからず、下劣の人を友とすべからず。善友と交るべし、最上の人を友とすべし。

七九 法〔水〕を飲む者は、清澄なる心を以て快適に臥す。賢者は常に聖者の説ける法を楽しむ。

八〇 治水者は水を導き、箭匠は箭を矯め、木匠は木を矯め、賢者は自己を調御す。
八一 固き巖の風に搖がざる如く、賢者は毀譽の中に於て動かず。

八二 深き池の靜にして澄める如く、賢者は法を聞きて心清澄なり。
八三 善人はあらゆるものに於て離欲し、善人は欲を求めて語らず。樂に觸るるも、また苦に觸るゝも、賢者は動する色なし。

八四 自己の爲にも他の爲にも、子と財と國土とを望むべからず。不法により

て自己の繁榮を希ぶべからず。これ戒行・智慧正法を具ふる人なり。

八五 人間の中、彼岸(涅槃)に到達する人は鮮し。此方(生死界)にある他の衆生は、

たゞ岸に沿ひて走るのみ。

八六 ¹³ 法の正しく説かれたる時、[その]法に違ふ人は彼岸に到らん。死の境域

(生死界)は實に越え難し。

八七 賢者は黒法(惡)を棄てゝ、白法(善)を修すべし。家より[出でて]、家なき境界

に到り、孤獨にして[欲]樂なき處に、

八八 [法]藥を求むべし。賢者は諸欲を棄て、無一物となり、自己を心垢より淨むべし。

八九 菩提の支分(七菩提分)に於て心を正しく修養し、執著なく、貪著を棄つるを喜び、煩惱を滅盡して輝く人は、現世に於て涅槃に入れるなり。

七 阿羅漢品

九〇 [有爲の]路を終へて憂患を離れ、一切に於て解脱し、一切の繫縛を斷ちたる

人には苦惱なし。

九一

正念ある人は出家し、彼等は在家を喜ばず。池を棄て去る鵝鳥の如く、彼等はいづれの家をも棄つ。

九二¹⁴

蓄積することなく、正念食をなし、空にして無相の解脱を境とする人の道は、虚空に於ける鳥の〔道〕の如く、追隨し難し。

九三

煩惱を滅盡し、飲食に捉はれず、空にして無相の解脱を境とする人の跡は、虚空に於ける鳥の〔跡〕の如く、追隨し難し。

九四

諸根寂靜に歸して、御者によく調御せられし馬の如く、慢を斷ち、煩惱を滅盡せる人、天神と雖も斯の如き人を羨む。

九五

敬虔なる聖者は、忍辱なること、大地の如く、また門闕に似たり。〔淨きこと〕泥土なき池〔水〕の如し。斯の如き人には輪廻あることなし。

九六

正智によりて解脱し、安穩を得たる聖者の意は寂靜なり。語もまた業も寂靜なり。

九七

妄信なく、無爲〔涅槃〕を悟り、〔輪廻の〕縛縛を斷ち、〔善惡の〕契機を斥け、欲望

を棄てたる人こそ實に最上の人士なれ。

九八
村落に於ても、また森林に於ても、低地に於ても、また丘陵に於ても、阿羅漢の住する處、その地は樂し。

九九
¹⁵ 森林は樂しむべし。衆人の樂しまざる處に於て、離欲の人は樂しまん。
彼等は欲樂を求めさればなり。

註① 正念食者(*parinamaata-bhajana*)とは食事に當り、食物の何物たるかを知り、その不淨なるを知り、食事に眞の悅樂なきを悟る者を云ふ。

八 千品

一〇〇
たとひ無益の語を聚めて一千言を成すとも、聞きて寂靜を得べき、有益の一語之に勝る。

一〇一
たとひ無益の句を聚めて一千偈を成すとも、聞きて寂靜を得べき、一偈の一語之に勝る。

一〇二
無益の句より成る百偈を誦すとも、聞きて寂靜を得べき、一偈の一語之に

勝る。

一〇三 戰場に於て百萬人に勝つとも、一の自己に克つ者こそ實に最上の戰勝者

なれ。

一〇四 克服せられたる自己は、實に他の衆人に勝る。自己を制御し、常に節制して行ふ人の〔勝利を〕、
一〇五 天神も、乾闥婆も、魔王もまた梵天も、かゝる人の勝利を〔轉じて〕敗北となすこと能はず。

一〇六 月に月に千金を投じて供犠すること百年、而も一人のよく修養せる人に供養すること瞬時なれば、この供養はかの百年の祭祀に勝る。

一〇七 林中に於て祭火に奉仕すること百年、而も一人のよく修養せる人に供養すること瞬時なれば、この供養はかの百年の祭祀に勝る。

一〇八 この世に於て、福を求めて一年の間、或は供犠し或は祭祀に從事するものすべては、直行の人（阿羅漢）を敬禮する四分の一に値せず。

一〇九 敬禮を守り、常に長上を尊ぶ人には、四種の法增長す、即ち壽と美と樂と力

と。

二〇 百歳の壽を完うするも、戒を破り三昧に住せざれば、戒を持し禪定に住する者の一日の生、之に勝る。

二一 百歳の壽を完うするも、無知にして三昧に住せざれば、智慧を具し禪定に住する者の一日の生、之に勝る。

二二 百歳の壽を完うするも、怠惰にして精進せざれば、堅固なる精進を行ずる者の一日の生、之に勝る。

二三 百歳の壽を完うするも、生滅の〔理〕を見ざれば、生滅の〔理〕を見る者の一日の生、之に勝る。

二四 百歳の壽を完うするも、不死の道(涅槃)を見ざれば、不死の道を見る者の一日の生、之に勝る。

二五 百歳の壽を完うするも、最上の法を見ざれば、最上の法を見る者の一日の生、之に勝る。

九 悪品

- 一一六 善に急ぐべし、心を惡より遠ざくべし。善を作すに懈怠する者は、その心
惡を喜ぶ。
- 一一七 たとひ人惡を作すも、重ねて之を作すべからず、之を喜ぶべからず。惡の
積集は苦なり。
- 一一八 若し人善を作さば、重ねて之を作すべし、之を喜ぶべし。善の積集は樂な
り。
- 一一九 惡人と雖も、惡の未だ熟せざる間は、福善を見る。然れども惡の熟するや、
その時惡人は苦惡を見る。
- 一二〇 善人と雖も、善の未だ熟せざる間は、苦惡を見る。然れども善の熟するや、
その時善人は福善を見る。
- 一二一 「そは我に報い來らざるべし」とて、惡を輕視すべからず。點滴の落下によ
りて水瓶も盈たさる。微々として積みつゝも愚者は惡に盈たさる。
- 一二二 「そは我に報い來らざるべし」とて、善を輕視すべからず。點滴の落下によ

りて水瓶も盈たさる。微々として積みつゝも賢者は善に盈たさる。

一三 侶伴少く財貨多き商人の、危き道を[避くる]如く、壽を希ふ者の毒を[避くる]

如く、惡業を避くべし。

一四 手に瘡なければ、手にて毒を捉ふも可なり。毒は瘡なき者には入らず。

一五 惡を作さざる者に惡はなし。

一六 邪念なき人を害し清淨にして罪穢なき人を[害せば]惡は反つてその愚者に及ぶ。宛も風に逆つて散らされし微塵の如く。

一七 或者は[人胎]に宿り惡業を造れる者は地獄に[墮ち]、正しき者は天界に昇り、煩惱を滅盡せる者は涅槃に入る。

一八 虛空に於ても、海中に於ても、山間の洞窟に入りても、そこに留りて惡業より免れ得べき處は、世界に無し。

一九 虚空に於ても、海中に於ても、山間の洞窟に入りても、そこに留りて死の力の及ばざる處は世界に無し。

一〇 刀杖品

二九 一切の人は刀杖を怖れ、一切の人は死を懼る。自己に思ひ比べて、[他を]殺すべからず、殺さしむべからず。

二〇 一切の人は刀杖を怖れ、一切の人は生を愛す。自己に思ひ比べて、[他を]殺すべからず、殺さしむべからず。

二一 自己の安樂を欲して、安樂を好む有情を、刀杖を以て害する者は、死後安樂を得ず。

二二 自己の安樂を欲して、安樂を好む有情を、刀杖を以て害せざる者は、死後安樂を得ず。

二三 粗暴の言を用ふべからず。言はれし者また汝に言を返さん。忿怒の言

は實に苦なり。刀杖反つて汝に觸れん。

二四 汝若し壞れたる銅鑼の如く、黙して言はざれば、汝は既に涅槃を得たるなり。汝に忿怒あることなし。

二五 牧者の杖を以て牛を牧場に驅る如く、老と死とは有情の壽命を驅る。

二六 愚者は惡業を作して悟らず、闇鈍にして自己の業により苦しむこと、宛も火に焼かるゝが如し。

二七 罪過なく、邪念なき人を刀杖を以て害する者は、忽ち〔下の如き〕干中の一事に遇ふべし。

二八 劇しき苦痛、老衰、身體の毀損、或は重き病苦、若しくは心の錯亂に遇ふべし。

二九 或は國王より蒙る災禍、或は恐るべき讒誣、或は親族の離散、或は財産の破滅に〔遇ひ〕、

一四〇 一四一 一四二 一四三
或はまた淨火彼の家を焼く。愚癡なる者はその身滅びて後地獄に墮つ。
裸行^①も、螺髻も、汚泥も、斷食も、或は地上の横臥も、塵垢身も、蹲踞も、疑惑を断ぜざる人を淨むることなし。

たとひ〔その身を莊嚴するとも、一切の有情に刀杖を加ふることなく、寂靜に住し、〔心を調御し、自ら制し、梵行を持し、行ふ所平等なる者、彼は婆羅門なり、彼は沙門なり、彼は比丘なり。〕

この世に於て慚愧を以て自己を制する者ありや。良馬の鞭を蒙らざる

如く、彼は誹謗を蒙らず。

一四四
鞭を加へられし良馬の如く、汝等も努力奮勵せよ、信仰と戒行と精進とにより、禪定と法の識別とにより、知と行とを具足して忘るゝことなく、この大なる苦を滅却せよ。

一四五
治水者は水を導き、箭匠は箭を矯め、木匠は木を矯め、有徳者は自己を調御す。

註①裸行以下すべて苦行の種類なり。

一一 老品

一四六
何の喜びぞ、何の歎びぞ、[世は]常に燃えつゝあるを。汝等は暗黒に蔽はる。何ぞ燈明を求めざる。

一四七
見よ粉飾せる形骸を。〔そは〕傷痍の積集にして病患絶えず、多欲にして堅固・常住ならず。

一四八
この形骸は衰退す、病苦の巣窟にして壊れ易し。汚穢の積集は遂に毀る。

生は必ず死に終ればなり。

一四九
秋到りて〔棄てられし〕葫蘆の如く、委棄せられし之等の白骨を見て、何の喜びありや。

一五〇
城廓〔形骸〕は骨を以て造られ、塗るに肉と血とを以てす。その中には老と死と慢と僞と藏せらる。

一五一
美しく飾られたる王車も必ず朽ち、肉體も亦遂に老ゆ。然れども善人の法は老ゆることなし。實に善人は之を善人と相傳ふ。

一五二
寡聞の人〔愚者〕は牡牛の如くに老ゆ。彼の肉は増せども、彼の智は増すことをなし。

一五三
23 われ屋舎を作るもの〔輪廻の原因〕を求めて〔之〕を見出さず、多生の流轉を経たり。生を享ぐること數次〔みな〕苦なり。

一五四
屋舎を作るものよ。汝は見出されたり。再び屋舎を作ることなけん。汝のすべての椽桷は毀たれ、棟梁は摧かれたり。心は萬象を離れて愛欲を滅盡し得たり。

一五五

壯時梵行を修せず、財寶を獲得せざりし者は、魚なき池の老鷺の如くに死滅す。

一五六

壯時梵行を修せず、財寶を獲得せざりし者は、折れたる弓の如く、過去を偲び歎きて横たはる。

註 ● hāsa- = Skt. harṣa-[歡喜]、或は [笑] = Skt. hāsa, 但し N. P. Chakkavarti: L'Uḍānavarga sanskrit p.

1-2 參照。

一一 自己品

一五七

若し自己の愛すべきを知らば、よく之を護るべし。賢者は夜の三分（人生の三期）の中、一分は覺醒してあるべし。

一五八

先づ自己を適所に置き、然る後他を誨へよ。「かゝる賢者は惱むことなからん。」

一五九

若し他を訓ふる如く自ら行はゞ、「自ら」よく調御せられて、「他を」調御し得べし。實に自己は調御し難ければなり。

一六〇 自己の依所は自己のみなり。他に如何なる依所あらんや。自己のよく調御せられたる時人は得難き依所を獲得す。

一六一 自己の作せる惡業は、自己より生じ、自己より起れるものにして、愚者を粉碎すること、金剛石の寶石に於けるが如し。

一六二 破戒甚しき人は、宛も蔓草がその覆へる沙羅樹に「枯死を望む」が如く自己に破滅を望む仇敵の意に従つて、自ら舉動す（即ち破滅す）。

一六三 不善にして自己に害あることは行ひ易く、「自己に益ありて且つ善なることは極めて行ひ難し。

一六四 正法に従つて生くる尊き阿羅漢の教を、邪見に據りて譏る愚者は、自己の破滅の爲に「業果を結ぶこと、宛もカッタカ草（葦蘆の類）の果が實りて却つて自ら滅ぶが如し。

一六五 自ら惡を作して自ら汚れ、自ら惡を作さずして自ら淨し。各々自ら淨となり不淨となる。人は他を淨むること能はず。

一六六 たとひ如何に大「事」なりとも、他の爲に盡して自己の義務を忽諸にすべか

らず。自己の義務を知りて常に自己の義務に専心なるべし。

一三 世品

一六七 下劣の法に従ふべからず、放逸に住すべからず、邪見に従ふべからず、世俗の徒となるべからず。

一六八 奮起すべし、放逸なるべからず。善行の法を行ふべし。法に従つて行ふ

一六九 人は、この世に於てもかの世に於ても安樂に臥す。
一七〇 善行の法を行ふべし。惡行の〔法〕を行ふべからず。法に従つて行ふ人は、この世に於てもかの世に於ても安樂に臥す。

一七一 泡沫を見る如く、陽炎（蜃氣樓）を見る如く、かく世間を觀ずる者を、死王は見
ず。

一七二 來れ、粉飾せられて王車に譬ふべきこの世を見よ。愚者はこの中に沈湎

す、智者は〔之に〕執著することなし。

一七三 前に放逸なるも、後に放逸ならざる人は、宛も雲間を出でし月の如くに、こ

の世を照す。

一七三 その作したる惡業を、善を以て覆ふ人は、宛も雲間を出でし月の如くに、この世を照す。

一七四 この世は暗黒なり。この中に於てよく洞察する者は稀なり。網を脱れし鳥の如く、天に昇る者は少し。

一七五 鵠鳥は太陽の道を行き、通力を以て虚空を行く。賢者は魔王とその眷属とを破りて、世間より離脱す。

一七六 唯一法を犯し、妄語を吐き、來世を信ぜざる人は惡として作さざるなし。

一七七 貪欲の人は天界に趣かず。愚者は決して施與を稱揚せず。賢者は施與を隨喜し、之により來世に於て安樂なり。

一七八 地上に於ける王權よりも、或は天界に趣くよりも、一切世界の主權よりも、預流果^{よるくわ}(涅槃に至る第一階程)は勝れたり。

一七九

その勝利は決して凌駕せられず、その勝利にはこの世に於て何人も及ぶ能はざるかの〔智見〕無邊にして〔流轉の道跡なき佛陀を、如何なる道によりて導き來らんとするや。〕

一八〇

羅網を具して纏綿たる愛欲すら、そを何處にも導き得ざるかの〔智見〕無邊にして〔流轉の道跡なき佛陀を、如何なる道によりて導き來らんとするや。〕

一八一

禪定に專念し、賢明にして出家の寂靜を喜び、正覺を得て憶念に富む賢者は、諸天すら之を羨む。

一八二

人と生るゝは難く、人間の生存は難し。妙法を聞くことは難く、諸佛の出世は難し。

一八三

一切の惡を作さず、善を行ひ、自己の心を淨む。これ諸佛の教なり。

一八四

忍辱忍受は最上の苦行にして、涅槃は最勝なりと諸佛は説く。實に他を害する出家なく、他を惱す沙門なし。

一八五

誹らず害はず、戒律を嚴守し、食するに量を知り、孤獨に坐臥し、高尚なる思慮に專念す。これ諸佛の教なり。

28

一八六 金貨の雨によりても欲心の満足あることなし。欲は甘味少く苦なりと
知りて賢者は、

一八七 天上の欲樂に於ても喜悅せず。正等覺者の弟子は愛欲を滅盡するを喜
ぶ。

一八八 恐怖に驅られて人は、山岳に、森林に、園苑に、聖樹に、種々なる依所を求む。
一八九 然れどもこは安全なる依所にあらず。最上の依所にあらず。かゝる依
所に趣くとも、一切の苦より脱することなし。

一九〇 佛と法と僧とに歸依する者は、正智によりて四種の聖諦を見る。

一九一 苦と、苦の因と、苦の滅と、苦の滅盡に至る八支の聖道、〔即ち之なり〕。

一九二 こは安全なる依所なり。最上の依所なり。かゝる依所に趣きて、一切の
苦より脱す。

一九三 聖者は得難し。彼は隨處に生るゝものにあらず。かゝる賢者の生るゝ
所、その氏族は繁榮す。

一九四 諸佛の現るゝは快く、正法を説くは快し。僧衆の和合するは快く、和合せ

る人々の修行は快し。

一九五 應に供養を享くべき、虚妄を逸脱し憂患を超越せる佛陀、或は佛弟子を供養する者、

一九六 斯の如き寂靜にして畏怖なき人を供養する者の、その大功德は、何人によりても計量せられ難し。

註 ① panthāna ca (ed. PTS) も pantañ ca (Faush., Comm.) と讀むべし。 Dict. PTS: pattha- の項下 參照。

30

一五 安樂品

一九七 我等は怨憎者の中において怨憎なく、實に安樂に生きん。我等は怨憎を

懷く人々の中にありて怨憎なく住せん。

一九八 我等は苦惱者の中にありて苦惱なく、實に安樂に生きん。我等は苦惱ある人々の中にありて苦惱なく住せん。

一九九 我等は貪欲者の中にありて貪欲なく、實に安樂に生きん。我等は貪欲あ

る人々の中にありて貪欲なく住せん。

二〇〇 我等は何物をも有せずして安樂に生きん。我等は光音天神の如く歡喜を以て食となさん。

二〇一 勝利は怨憎を生じ、敗者は苦しみて臥す。寂靜に歸せる人は、勝敗を棄てて安樂に臥す。

二〇二 貪欲に等しき火なく、憎惡に等しき罪なく、〔五〕蘊(肉體的存在)に比すべき苦なく、寂靜に勝る安樂なし。

二〇三 飢餓は最大の病にして、萬象は最大の苦なり。如實に之を知れば最上安樂の涅槃^{あり}。

二〇四 無病は最上の利にして、満足は最上の財なり。信賴は最上の親族にして、涅槃は最上の安樂なり。

二〇五 孤獨の甘味と寂靜の甘味とを飲みたる者は、法悅の甘味を飲みつゝ、恐怖を去り、惡を離る。

二〇六 聖者を見るは善く、乏と共に住するは常に安樂なり。愚者を見ざれば

常に安樂なるべし。

二〇七

愚者と共に道を行く者は、實に長途の間憂愁す。愚者と共に住するは、敵と共に[住する]が如く常に苦なり。賢者は共に住して樂しく、宛も親族との會合の如し。

二〇八
實にこの故に、

賢者、智者、博學の人、堅忍なる人持戒者、聖者、斯の如き善良賢明なる人に隨ふべし、宛も月の星道に[從ふ]如く。

註①光音天又は極光淨天。色界第二禪天の第三天なり。

一六 愛好品

二〇九

冥想なき[行作]に專注して、冥想に專注せず、道義を棄てゝ愛好する所を取る者は、「却つて」冥想に專注する者を羨む。

三二〇

愛好するものと會する勿れ、愛好せざるものと決して[會する勿れ]。愛好するものを見ざるは苦なり。愛好せざるものを見るも亦[苦なり]。

- 三一 故に愛好するものを造る勿れ。愛好するものを失ふは災なればなり。
愛憎なき人には桎梏(煩惱)なし。
- 三二 愛好より憂患生じ、愛好より畏怖生す。愛好を離脱せる人には憂患なし。
何處にか畏怖あらん。
- 三三 親愛より憂患生じ、親愛より畏怖生す。親愛を離脱せる人には憂患なし。
何處にか畏怖あらん。
- 三四 淫欲より憂患生じ、淫欲より畏怖生す。淫欲を離脱せる人には憂患なし。
何處にか畏怖あらん。
- 三五 欲樂より憂患生じ、欲樂より畏怖生す。欲樂を離脱せる人には憂患なし。
何處にか畏怖あらん。
- 三六 愛欲より憂患生じ、愛欲より畏怖生す。愛欲を離脱せる人には憂患なし。
何處にか畏怖あらん。
- 三七 戒行と正見とを具へ、正法に住し、眞實を知り、自ら自己の業務を行ふ者、世人はかかる人を愛好す。

二八

不可說法(涅槃)に望を起して思慮に富み、而も諸欲に心を束縛せられざる者は上流者(涅槃に近づける者)と稱せらる。

二九

久しく異郷にあり、遠隔の地より無事に戻れる歸來者を、親族朋友知己は歓び迎ふ。

三〇³³

之と等しく、福業を作してこの世よりかの世に趣ける人を、福業は迎ふ、宛も愛好する歸來者を親族の〔迎ふる〕如く。

一七 忿怒品

三一

忿怒を去るべし、慢心を棄つべし、一切の繫縛を脱すべし。かく名色(精神・物質)に執著せざる無一物の人には苦の隨ふことなし。

三二

勃發したる忿怒を、動搖する馬車の如くに抑止する人、我は之を〔眞の〕御者と呼ぶ。他は唯手綱を執れるのみ。

三三

忍辱によりて忿怒を克服すべし。善によりて不善を克服すべし。施與によりて吝嗇者を克服すべし。眞實によりて妄語者を〔克服すべし〕。

34

三四

眞實を語るべし。怒るべからず。「自己の所有少しと雖も乞はるれば與ふべし。この三事により諸天の許に到り得べし。

三五

殺生することなく、常に身を制御する賢者は、そこに到りて憂患なき不死の境(涅槃)に達す。

三六

常に覺醒し、晝夜に勉學し、涅槃に志す者の煩惱は終熄す。

三七

アトウラ(優婆塞の名)よ、こは古來より然り、今始まれるにあらず。「即ち」人は黙して坐するを誹り、多言を誹り、寡言をも亦誹る。世に誹られざる者なし。

三八

たゞ誹らるゝのみの人、又はたゞ褒めらるゝのみ的人は、「過去にも」なかりき、「將來にも」なかるべし、現在にも亦なし。

三九

智者よく判別して日々に稱讚し、所行失なく、賢明にして、慧戒兼ね具はるとなす者あらば、

三〇

宛も闇浮檀金にて造りし貨幣の如く、誰か彼を誹り得んや。諸天も彼を稱讚し、彼は梵天によりても亦稱讚せらる。

二三一 身の忿怒を攝護し、身を制御すべし。身の惡行を棄て、身によりて善行を修すべし。

二三二 語の忿怒を攝護し、語を制御すべし。語の惡行を棄て、語によりて善行を修すべし。

二三三 意の忿怒を攝護し、意を制御すべし。意の惡行を棄て、意によりて善行を修すべし。

二三四 意の忿怒を攝護し、意を制御すべし。意の惡行を棄て、意によりて善行を修すべし。

二三五 身を制御し、また語を制御し、意を制御する賢者は實によく制御せるものなり。

註① nekkho jambonadassa ディンブー河より採れる金にて造りし良質の貨幣。

一八 塙穢品

二三五 汝は今や枯葉の如く、閻魔の使者亦汝に近づけり。汝は死出の門に立つ。されど汝に旅路の糧なし。

二三六 汝自ら自己の依所を造れ、速に精勤せよ、賢者たれ。〔心の〕塙穢を拂ひ、罪過

なくば、汝は天の聖地に到らん。

汝は今や齡既に傾き、閻魔の許に近づけり。途上に汝の住所なく、また旅路の糧もなし。

汝自ら自己の依所を造れ、速に精勤せよ、賢者たれ。〔心の〕垢穢を拂ひ、罪過なくば、汝は再び生と老とに近づかざるべし。

賢慮ある者は、漸次に、少量づゝ、刹那々々に、自己の垢穢を拂ふべし、宛も鍛工が銀の〔鑄〕垢を除くが如く。

鐵より生じたる垢穢(錆)が、鐵より生じて鐵を蝕むが如く、自己の業は惡業者を悪趣に導く。

36
二四一 読誦せざるは聖典の垢穢、修復せざるは家屋の垢穢、懈怠は美の垢穢、放逸は番士の垢穢なり。

二四二 不義は婦人の垢穢、吝嗇は施與者の垢穢、實に惡法(惡行)はこの世に於てもかの世に於ても垢穢なり。

二四三 之等の諸垢穢より更に甚だしき垢穢は無明にして、「こは」最大の垢穢な

り。比丘等よ、この垢穢を棄て、無垢となれ。

三四四

慚愧心なく、厚顔・暴戾・大膽・傲慢にして、罪に汚れたる人の生活は安易なり。

三四五

慚愧心あり、常に清淨を求め、執著なく、謙遜にして、清淨の生活を營み、識見

ある人の生活は困難なり。

三四六

生あるものを殺し、妄語を語り、この世に於て與へられざるを取り、他人の妻を犯し、

三四七

スラー酒・メーラヤ酒に沈湎する人は、この世に於て自己の根底を掘るものなり。

三四八

人よ、是の如く知れ、節制なき者は邪惡なりと。貪欲と非法とをして永く汝を苦に陥らしむること勿れ。

三四九

人は實に信ずる所に従ひ、好む所に従ひて施與す。他人の得たる飲食に

對し、不滿を懷く者は、晝も夜も三昧に入るを得ず。

三五〇

かゝる〔心〕を断ち、根元より絶滅する者は、晝も夜も實に三昧に入るを得。

³⁷

得。

二五一 貪欲に等しき火なく、瞋恚に等しき捕捉者なく、愚癡に等しき羅網なく、愛欲に等しき河流なし。

二五二 他人の過失は見易く、自己の〔過失〕は見難し。他人の過失は粋穀の如く撒布し、自己の〔過失〕は、之を隠匿すること、狡猾なる賭博者のカリ（最悪の骰子數）に於けるが如し。

二五三 他人の過失を詮索し、常に怒り易き人の煩惱は增長す。彼は煩惱の滅盡を去ること遠し。

二五四 虚空に道なく、外道に沙門なし。衆生は虚妄を喜び、如來には虚妄なし。

二五五 虚空に道なく、外道に沙門なし。萬象は常住ならず、諸佛に擾亂なし。

一九 法住品

二五六 躁急に事を處するの故を以て、法住者たるにあらず。正と邪とを兩つながらよく辨別し、學識あり。

二五七 躍急ならず如法平等に他を導き、正法を護り賢慮ある者は、法住者と稱せ

らる。

二五八

多言の故を以て賢者たるにあらず。平靜にして怨憎なく、畏怖なき者は、賢者と稱せらる。

二五九

多言の故を以て持法者たるにあらず。聞くこと少きも身を以て法を見、法を輕んぜざる者は、實に持法者なり。

二六〇

頭髮白きの故を以て長老たるにあらず。彼の齡は〔徒に〕熟せるのみ。彼は空しく老いたる者と稱せらる。

二六一

眞實と法と不殺生と節制と調御とを持し、「心の」垢穢を瀉棄したる賢者は、長老と稱せらる。

二六二

嫉妬・慳貪・虛偽ある者は、辯舌の故のみを以て、或は容色の美の故を以て、端正の人たるにあらず。

二六三

かゝる〔惡德を〕斷ち、根元より絶滅し、罪過を瀉棄し、賢慮ある者は、端正の人と稱せらる。

二六四

剃髪すと雖も、戒を破り、妄語を語る者は沙門にあらず。欲望と貪欲とを

有する者いかで沙門たるべき。

39
二六五 大小總べての惡を鎮めたる者は諸惡を鎮めたるの故を以て沙門と稱せらる。

二六六 他人に行乞するの故を以て比丘たるにあらず。一切の法を服膺せる者のみ比丘なり。「行乞の故に」然るにあらず。

二六七 この世に於て善と惡とを棄て、梵行を修し、慎重に世を行く者は實に比丘と稱せらる。

二六八 愚昧にして無知ならば、「唯寂默の故を以て、牟尼(寂默者・賢人)たるを得ず。賢者若し權衡を執るが如くに善を取り、

二六九 惡を斥くれば、彼は牟尼なり。彼は之によりて牟尼なり。この世に於て、「善惡」兩つながら知る者は、之によりて牟尼と稱せらる。

二七〇 生類を害するの故を以て、聖者たるにあらず。一切の生類を害せざるの故を以て、聖者と稱せらる。

二七一 戒律戒行のみによりても、或はまた多聞によりても、或は禪定の達成によ

りても、或は獨臥によりても、

〔四〕 我は凡夫の享け得ざる出家の樂に觸るゝことなし。比丘よ、煩惱の滅盡に達せざれば、決して意を安んずること勿れ。

註 ① *samaṇa*-[沙門] = Skt. śramaṇa- (\sqrt{sram}) が恰も \sqrt{sam} = Skt. $\sqrt{\text{sam}}$ [鎮靜す]より造られたるが如く、*sameti* [鎮靜せしむ] *samitattā*-[鎮靜]により説明す。

② *bhikkhu*-[比丘]: *bhikkhate* [行乞す]。

③ *muni*-[牟尼]の本質は *mona*-[寂默]にあらずして、*munāti* [知る]にありと云ふ意を語源的假面の下に説明せるもの。

④ *ariya*-[聖者]は殺生(*himsati*, *himsā*-)を事とする敵(*ari*)より來るにあらず、*a-riya*=*ahis-mā* [不殺生]と解すべなりと云ふ説明。この場合恐らく *rīssati*=Skt. *rīyati* (Dhātup. IV. 1. 20; *rīṣa hīnsāyām* [參照])の如き動詞を念頭に置きしならん。

⑤ *vissāsa* *āpādi* (ed. PTS) は *vissāsa māpādi* (= *vissāsa mā āpādi*) と正すべし。

一一〇 道品

〔四〕 諸道の中、八支(八支聖道)最も勝れ、諸諦の中、四句(四聖諦)最も勝れ、諸法の中、離欲最も勝れ、二足(人間)の中、具眼者(最も勝る)。

二七四

唯この道あるのみ、知見を淨むるに他の〔道〕あることなし。汝等この〔道〕を行くべし。これ魔王を幻惑するものなり。

二七五

汝等この〔道〕を行かば、苦を終熄せしむべし。〔欲箭〕を除去することを悟りて、我實にこの道を説けり。

二七六

汝等當に努力すべし。如來は說者なり。禪定に住して〔この道を〕行く者は、魔王の繫縛を脱すべし。

二七七

一切の事象は無常なりと、智によりて觀る時、苦を厭離す。これ淨に到る道なり。

二七八

一切の事象は苦なりと、智によりて觀る時、苦を厭離す。これ淨に到る道なり。

二七九

一切の法は無我なりと、智によりて觀る時、苦を厭離す。これ淨に到る道なり。

二八〇

起つべき時に起たず、若く強くして怠惰に陥り、意氣銷沈して懦弱懶惰なる者は、智によりて道を得ることなし。

二六一 語を慎み、意をよく制御し、身を以て不善を作すべからず。この三業道を

淨むべし。〔然らば聖仙所説の道を得ん。〕

二六二 實に智は瑜伽(冥想)より生じ、瑜伽を行ぜざれば智は滅ぶ。この得と失との兩道を知り、自ら努めて、以て智を増大せしむべし。

二六三 欲林を伐れ、樹木を^レ伐るに止る勿れ。欲林より畏怖生ず。欲林と欲叢とを伐りて、比丘等よ、欲林より脱せよ。

二六四 男子の女子に對する欲情、些なりとも斷たれざる間は、彼の心は繫縛せらる、宛も乳を飲む犢牛の母牛に於けるが如く。

二六五 自己に對する愛を斷つこと、秋の蓮を手にて〔折るが如くせよ。寂靜の道のみを固守せよ。涅槃は善逝(佛陀)により説かれたり。〕

二六六 我雨季には此處に住せん、冬と夏とは此處に〔住せん〕と、愚者は思惟して、死の〔到る〕を覺らず。

二六七 子と家畜とに惑溺し、その心これに執著せる人を、死は捉へ去る、宛も眠れる村落を、瀑流の〔漂蕩し去る〕が如く。

42

二八八 子も救ふ能はず、父も親戚も亦[救ふ能はず]。死に捉へられし者を救ふは、親族もなす能はざる所なり。

二八九 この義を知りて、賢者は戒により制御し、涅槃に到る道を速に淨むべし。

註 ① pamocanāñ (ed. PTS) は pamohanañ に改むべし。 Dict. PTS; pamocana- 項下参照。

② vana- に「林及び欲」、vanatha- に「叢及び欲」、nibbana- に「林より脱せる及び離欲せるの兩義を兼ねしめたり。又 nibbana- は nibbāna 「涅槃」と音韻相似たり。第三三四頌(今卷七〇頁) 参照。

一一 雜品

二九〇 若し小樂を棄つるによりて、大樂を見得るとせば、賢者は大樂を見つゝ、小樂を棄つべし。

二九一 他人に苦を與へて、自己の樂を望む。かゝる者は怨憎の繫縛に捉はれて、

怨憎より脱することなし。

二九二 爲すべきことを等閑にし、爲すべからざることを爲し、傲慢にして放逸なる者には煩惱増長す。

二九三

常に身を念じ、爲すべからざることを爲さず、爲すべきことを爲して撓ま
ず、憶念あり思慮ある人には、煩惱終熄す。

二九四

母^①(愛欲)と父(我慢)とを殺し、刹帝利族の二王(斷見・常見)を(殺し)、王國(十二處)
とその從臣(喜貪)とを殺して、婆羅門は苦患なく行く。

二九五

母と父とを殺し、婆羅門族の二王(同上)を(殺し)、虎[將]を第五とするもの(五
蓋、虎^②疑蓋)を殺して、婆羅門は苦患なく行く。

二九六

瞿曇(釋尊)の弟子は常によく覺醒し、晝も夜も常に佛を念ず。

二九七

瞿曇の弟子は常によく覺醒し、晝も夜も常に法を念ず。

二九八

瞿曇の弟子は常によく覺醒し、晝も夜も常に僧を念ず。

二九九

瞿曇の弟子は常によく覺醒し、晝も夜も常に身を念ず。

三〇〇

瞿曇の弟子は常によく覺醒し、晝も夜も不殺生を念ず。

三〇一

瞿曇の弟子は常によく覺醒し、晝も夜も靜慮によりて心樂しむ。

三〇二

出家の生活は難くして樂しみ難し。在家の生活も難くして苦なり。^③ 同
輩と共に住むは苦なり。〔輪廻の〕遍歷者は苦に陥る。故に遍歷者たるべ

からず。然らば苦に陥ることなからん。

三〇三
信あり、戒を具し、譽と財とを得たる者は如何なる處に趣くも到る處に於

て尊敬せらる。

三〇四

遠方にあるとも善人は輝くことヒマラヤ山の如く、近隣にあるとも不善者は見えざること夜陰に放たれし箭の如し。

三〇五

44 獨り臥し獨り行きて倦まず、獨り自己を調御して林中に樂しむものたるべし。

註① 註釋に從ひて譬喩的に解せり。十二處とは眼・耳・鼻・舌・身・意及び色・聲・香・味・觸法を指し、五蓋とは五種の障蓋にして貪欲・瞋恚・睡眠・掉舉・惡作・疑を云ふ。

② 或は「不同輩と共に住むこと」(a-) samānasamivāso (ed. PTS) 但し N. P. Chakravarti; L' Uḍānav. sanskrit p. 129-130 參照。

一一 地獄品

三〇六 不實を語る者は地獄に墮す。或はまた[自ら]爲して、我爲さずと言ふ者も

〔地獄に墮す〕。之等兩種の惡業者は、死後他世(地獄)に於て同等なり。

三〇七

袈裟を頸に纏ふも、惡を行ひ節制なき者多し。かゝる惡人はその惡業によりて地獄に墮す。

三〇八

破戒・無節制にして、國民の施食を享くるよりは、寧ろ火焰の如く灼熱せる鐵丸を食ふこそ勝れ。

三〇九

放逸にして他人の妻を犯す人は、「次の」四事に達す。罪業を得ること、安臥せざること、第三に誹謗、第四に地獄。

三一〇

〔彼は〕罪業を得、また悪趣に墮す。且つ怯えたる〔男〕と怯えたる〔女〕との淫樂は寡し。王も亦〔之に〕酷しき刀杖を加ふ。されば人は他人の妻を犯すべからず。

三一一

擗みそこねし茅草の手を切る如く、修行を謬れる沙門道は人を地獄に導く。

三一二

懈怠の行爲、汚れたる戒行、逡巡せる梵行、かゝるものに大果なし。

三二三

若し爲すべくんば之を爲し、斷乎として之を遂行すべし。懈怠の遊行者は更に多くの欲塵を散するのみ。

三一四 惡業は爲さざること勝れ、後に至りて惡業は人人を苦しむ。善業は爲すこそ勝れ、そを爲して苦しむことなし。

三一五 邊境の城を内外共に護るが如く、自己を護るべし。一刹那も忽せに過ぎ去らしむること勿れ。刹那を忽せにせる者は、地獄に到りて憂患を享く。

三一六 羞づべからざるを羞ぢ、羞づべきを羞ぢず、邪見を懷ける衆生は惡趣に到る。

三一七 怖るべからざることに恐怖を見、怖るべきことに恐怖を見ず、邪見を懷ける衆生は惡趣に到る。

三一八 罪なきことを罪ありと思ひ、罪あることを罪なしと見る、邪見を懷ける衆生は惡趣に到る。

三一九 罪ある所に罪ありと知り、また罪なき所に罪なしと知る、正見を懷ける衆生は善趣に到る。

註① raja・に「塵埃」と「愛欲」との兩義を兼ねしめたり。

二三 象品

三〇 象が戦場に於て、弓より放たれし箭を⁴⁷堪へ忍ぶが如く、我は誹謗を堪へ忍ばん。多くの人は破戒者なればなり。

三一 「人は調御せられたる[象]を戦場に導き、王は調御せられたる[象]に乗る。誹謗を堪へ忍び調御せられたる人は、人中の最勝者なり。

三二 騒の調御せられたるは良し、氣高き信度馬(印度河地方産の駿馬)も良し、大象も亦良し。自己を調御せる人は更に良し。

三三 之等の牽獸によりては未到の境(涅槃)に到ることなからん、調御せられたる人がよく調御せられたる自己を調御せられたる[牽獸]として到るが如くに。

三四 ダナバーラカと名づくる象は、「發情して顎顫より苦汁を分泌し、抑制し

難く、縛せられて一片の[餌]をも食はず。「この[象]は象の林を念ふ。

懶惰にして大食し、惰眠を貪りて輾轉として臥し、穀類に飽満せる大豕の

如くなれば、「かゝる愚者は再々胞胎に入る〔節ち輪廻す〕。」

三二六 この心嘗ては望む所に従ひ、欲に隨ひ樂に隨ひて徘徊せり。今は我全く之を制御せん。宛も鈎を持てる象師の、發情して苦汁を流せる象を制御する如くに。

三二七 汝等不放逸を楽しめ、自己の心を護れ。自己を難處煩惱より救出せよ。宛も泥中に陥れる象の如くに。

三二八 若し思慮に富み、正しく行ひ、賢明なる同行の侶伴を得ば、一切の危難を征服し、熟慮して欣然彼と共に行くべし。

三二九 若し思慮に富み、正しく行ひ、賢明なる同行の侶伴を得ざれば、獨り行くべし。

三三〇 獨り行くこそ勝れ、愚者は斷じて侶伴となすべからず。獨り行くべし、惡事を爲すべからず。寡欲なること宛も林中に於ける象の如くに。

三一 事の起りし時に友は楽しく、満足は如何なる場合にも樂し。生命の盡くる時に善業は楽しく、一切の苦を棄つるは樂し。

世に母を敬ふは樂しく、父を敬ふも亦樂し。世に眞の沙門たることは樂しく、眞の婆羅門たることも亦樂し。

老に至るまで戒持するは樂しく、安立せる信仰は樂し。智慧を得るは樂しく、惡を作さざるは樂し。

一四 愛欲品

三三四 放逸に行ふ人の愛欲は蔓草の如く增長す。彼は生より生に漂ふ、宛も林中に果實を求むる猿の如くに。

三三五 この世に於て、この猛惡にして纏綿たる愛欲に征服せられたる人には、雨を受けたるビーラナ草の如く、その憂患增長す。

三三六 この世に於て、この猛惡にして克服し難き愛欲を征服したる人には、蓮葉より水滴の落つる如く、憂患彼より去る。

三三七 我この善事を汝等に告ぐ。こゝに集れる汝等は、ウシーラ香(ビーラナ草の根)を求むる者のビーラナ草を掘る如く、愛欲の根を掘るべし。流水の葦

を害ふ如く、魔王をして再々汝等を壞らしむること勿れ。

三三八

49
樹根害はれずして固ければ樹は伐らるゝとも再び生ずるが如く愛欲の執著斷たれざれば、この苦(生死の苦)は再々生起す。

三三九

その三十六流(丙外各十八の愛欲)水勢盛に快樂に向ひて流るゝ邪見者を、この奔流(即ち貪欲に執著せる意志)は漂蕩し去る。

三四〇

〔愛欲の〕流は到る處に流れ、〔その〕蔓は芽を發して茂る。この蔓の生ずるを見ば、智慧を以てその根を斷て。

三四一

人の喜悅は奔放にして、且つ愛著す。歡樂に耽り快樂を求むる人かゝる人は實に生と老とを享く。

三四二

愛欲に満たされたる人は、罷に係れる兎の如く馳せ廻る。繫縛と執著とに捉へられ、久しき間再々苦を享く。

三四三

愛欲に満たされたる人は、罷に係れる兎の如く馳せ廻る。故に比丘は自己の離欲を望みて愛欲を除くべし。

三四四^①

欲林を出でて欲林に心を傾け、欲林を脱してまた欲林に走る者實にこの

人を見よ。彼は繫縛を脱してまた繫縛に走るなり。

50
三四五

賢者は鐵木または草より成る繩縛を堅牢なりと謂はず。珠環妻子に對する戀著こそ極めて強し。

三四六

賢者は、この牽引力に富み、弛くして而も脱し難き繩縛を堅牢なりと謂ふ。この(縛)を断ちて戀著なき人は、欲樂を棄てゝ出家す。

三四七

食欲に執著する者は、「欲の」流に隨ひて行くこと、蜘蛛の自ら作れる網に「隨ふが」如し。之を断ちて戀著なき賢者は一切の苦を棄てゝ遊行す。

三四八

有の彼岸に達し、前(未來の煩惱)を離れよ、後(過去の煩惱)を離れよ、中(現在の煩惱)を離れよ。意一切處に於て解脱せば、汝は再び生と老とを享くることなし。疑惑に擾亂せられ、貪欲熾烈にして享樂を事とする人の愛欲は、益々增長す。かゝる人は實にその繫縛を堅くす。

三四九

疑惑の靜止を喜び、身の不淨を觀じ、常に熟慮する人は、實に魔王の繫縛を除かん、彼は之を断たん。

51
三五一

圓成の境に達して畏怖なく、愛欲を離れて罪穢なく、有の箭を断つり。こ

れ〔その〕最後身なり〔即ち更に輪廻せざ〕。

三五二 愛欲を離れて執著なく、聖典の語義に通曉し、前後の順序に従ひて排列せられたる文字〔聖典の文句〕を知る人は、實に最後身を具する者にして、大智者・大丈夫と稱せらる。

三五三 我は一切を征服し、一切を知悉し、一切の法に於て汚さることなし。一切を棄て愛欲を滅して解脱せり。自ら悟りて誰をか〔師と〕云はん。

三四四 法施は一切の施に勝ち、法味は一切の味に勝ち、法樂は一切の樂に勝ち、愛欲の滅盡は一切の苦に勝つ。

三五五 財は愚者を亡し、決して彼岸を求むる者を〔亡さ〕ず。愚者は財欲によりて自己を亡すこと、他人を〔亡すが〕如し。

三五六 田は雑草により損はれ、この世の衆生は貪欲により損はる。されば貪欲を離れし人への施與は大果報あり。

三五七 田は雑草により損はれ、この世の衆生は瞋恚により損はる。されば瞋恚を離れし人への施與は大果報あり。

三五八

田は雑草により損はれ、この世の衆生は愚癡により損はる。されば愚癡を離れし人への施與は大果報あり。

三五九

田は雑草により損はれ、この世の衆生は欲望により損はる。されば欲望を離れし人への施與は大果報あり。

註① *vana-*に林及び欲の二義を兼ねしめたり。第二八三頃(今卷六一頁)参照。

一五 比丘品

三六〇

眼を制するは善し。耳を制するは善し。鼻を制するは善し。舌を制するは善し。

三六一

身を制するは善し。語を制するは善し。意を制するは善し。一切に於て制するは善し。一切に於て制したる比丘は一切の苦より脱す。

三六二

手を慎み、足を慎み、語を慎み、最もよく慎み、内心に喜び、三昧に住し、獨居して満足する者、之を比丘と稱す。

三六三

口を慎み、語る所賢明に、寂靜にして正理と正法とを明かにする比丘は、そ

の説く所甘美なり。

53
三六四 法を樂園とし、法を樂しみ、法に隨つて思惟し、法を憶念する比丘は正法より退墮することなし。

三六五 自己の所得を輕んずべからず。他を羨むべからず。他を羨む比丘は三昧に入ることなし。

三六六 たとひ得る所少しと雖も、比丘若し自己の所得を輕んぜざれば、諸天も實に、「この」生活清淨にして懈怠なき者を稱讚す。

三六七 名色^{精神・物質}に於て全く我執なく、且つ「その」非有の故に憂へざる者は、實に比丘と稱せらる。

三六八 慈悲に住し、佛陀の教を信する比丘は、寂靜にして諸行靜止せる安樂境に到るべし。

三六九 比丘よ、この舟^(の水)身中の邪念を汲み出せ、「水」汲み出されなば、「舟は汝の

爲に疾く進まん。貪欲と瞋恚とを斷たば汝は涅槃に到らん。

三七〇 五を斷つべし、五を棄つべし、而してよく五を勤修すべし。五著を超越せ

る比丘は、瀑流煩惱を渡れる者と稱せらる。

三七一 比丘よ、禪定を修せよ。放逸なる勿れ。汝の心を愛欲に迷ひ行かしむること勿れ。放逸にして〔熱〕鐵丸を呑む勿れ。焼かれつゝ「こは苦なり」と叫ぶこと勿れ。

三七二 智慧なき者に禪定なく、禪定なき者に智慧なし。禪定と智慧とを具へたる者は、實に涅槃に近づけるなり。

三七三 空屋閑寂處⁵⁴に入りて心寂靜に、正しく法を觀する比丘は、人界になき樂を享く。

三七四 人若し諸蘊の生滅を思念すれば、忽ち不死涅槃⁵⁵を知得せし人の歡喜と悦樂とを獲得す。

三七五 こは現世に於て、智慧ある比丘の最初に〔爲すべきこと〕なり。〔即ち〕諸根を攝護し、満足し、戒律に従ひて制御し、生活清淨にして倦むことなき良友と交れ。

三七六 好誼を盡すべし、善行を完うすべし。之によりて悦樂多く、苦を滅盡する

に至らん。

三七七 ヴッシカー草が萎みし花を振ひ落すが如く、比丘等よ、貪欲と瞋恚とを棄てよ。

三七八 身を靜め、語を靜め、寂靜にしてよく三昧に住し、世俗の快樂を瀉棄せる比丘は、寂靜者と稱せらる。

三八〇 自ら自己を勵まし、自ら自己を省察すべし。自ら攝護し、正念を持せば、比丘よ、汝は安樂に住せん。

三八一 實に自己は自己の主にして、自己は自己の依所なり。故に自己を制御せよ、宛も商賈の良馬を〔調御する〕如く。

三八二 慢樂多く、佛陀の教を信ずる比丘は、寂靜にして諸行靜止せる安樂境に到るべし。

三八三 たとひ年少なりと雖も、佛陀の教に精勤する比丘は、雲を離れし月の如くこの世を照す。

註①註釋に從へば「五は順次に、五下分結〔欲界五種の煩惱即ち欲界貪瞋・身見・戒取見・疑・五上分

結(色界・無色界の煩惱)即ち色界貪・無色界貪掉舉・慢・無明、五根即ち信・勤・念・定・慧なりと云ふ。又五著とは貪・瞋・癡・慢・見を指す。然れども恐らく「五はすべて五著を意味するものなるべく、その場合 uttari-bhāvaye は「勤修すべし」の意にあらずして克服すべし」の義に解すべし。

二六 婆羅門品

三八三
婆羅門よ、勇敢に〔欲の〕流を斷て、諸欲を去れ。萬象の滅盡を知りて汝は無作(涅槃)を知る。^①

三八四
婆羅門若し二法(止觀)に於て彼岸に達すれば、この智者に一切の繫縛は終熄す。

三八五
彼岸(來世)も此岸(現世)もなく、彼此兩岸もなく、畏怖を去り、繫縛を棄てたる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

三八六
禪定に入り、垢穢なく安住し、爲すべきをなし、煩惱を去り、最上義(阿羅漢果に達せる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

三八七
日は晝に輝き、月は夜に照らし、刹帝利は武装して輝き、婆羅門は禪定に入

りて輝く。されど佛陀はその光明により、全晝夜に輝く。

三八八
婆羅門とは惡業を除ける者の意にして、行ふ所寂靜なるが故に沙門と稱せらる。自己の垢穢を去る者は、之によりて出家と稱せらる。

三八九
婆羅門を打つべからず。「打たるゝも婆羅門は之に敵對すべからず。婆羅門を打つ者に災あれ。」打たれて乞に敵對する者に、更に災あれ。

三九〇
婆羅門若し愛好するものより心を抑制せば、彼に少からざる利益あり。害心の消滅するに隨ひ、苦惱も之に隨ひて靜止す。

三九一
身と語と意とによる惡業なく、この三處に於て抑制せる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

三九二
正等覺者の説示せる法を、如何なる人より學び得たりとも、その人を恭しく敬禮すべし、宛も婆羅門が祭火を〔敬ふ〕が如く。

三九三
螺髻族姓によりて婆羅門たるに非す。眞實と法とを具する者、彼は幸福なり、彼はまた〔眞の〕婆羅門なり。

三九四
愚者よ、螺髻汝に何の用かあらん、皮衣汝に何の用かあらん。汝の内は不

淨の密林なり。汝は外を清掃するのみ。

三九五

糞
掃衣(弊衣)

を著け、瘦せて脈管露はれ、獨り林中に於て禪定を修する人、我

は之を婆羅門と呼ぶ。

三九六

我はまた胎により母系によりて婆羅門と呼ばず。彼は〔不遜にも世尊を〕
「ボー」〔友との義〕と呼び、彼は實に富裕なれども執著あり。無一物にして執

著なき人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

三九七

一切の結縛を斷ち、畏怖なく執著を超越し、繫縛を離れたる人、我は之を婆
羅門と呼ぶ。

三九八

紐と緒と綱と之に屬するものとを断ち、障礙を除きて覺りたる人、我は之
を婆羅門と呼ぶ。

三九九

罪なくして罵詈と體刑と繩縛とを忍び、忍辱を力とし、勇力を軍兵として
有する人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

四〇〇

忿怒なく、戒を持って德行あり、欲を離れ、調御して最後身に達せる人、我は
之を婆羅門と呼ぶ。

蓮葉に於ける水の如く、錐の尖端に於ける瞿栗粒の如く、諸欲に染著せざる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

既にこの世に於て、自己の苦の滅盡を悟り、重擔を下し、繫縛を離れたる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

智慧深く、賢慮ありて道・非道を辨へ、最上義に達せる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

在家とも出家とも、兩つながら交らず、家なく遊行し、寡欲なる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

弱きも強きも一切の有情の中にありて刀杖を棄て、殺すことなく、殺さしむることなき人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

害意ある者の中にありて害意なく、刀杖を手にせる者の中にありて溫順に、執著ある者の中にありて執著なき人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

その貪欲と瞋恚と慢心と虛偽との脱落せること、宛も錐の尖端より瞿栗粒の「落つる」如くなる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

四〇八 粗暴ならず、教訓的なる眞實の語を發し、之によりて何者をも怒らしめる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

四〇九 この世に於て、長きも短きも、小なるも大なるも、淨きも淨からざるも、與へられざるものを取りざる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

四一〇 この世に對しても、かの世に對しても、欲望なく愛著なく、繫縛を離れたる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

四一一 執著の存するなく、悟り了りて疑惑なく、甘露(涅槃)の奥底に到達せる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

四一二 この世に於て善惡兩種の執著を超脱し、憂患なく垢穢なく清淨なる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

四二三 月の如く無垢・清淨澄明にして暗翳なく、快樂の生起を滅盡したる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

四二四 この泥濘(貪欲等)と越え難き輪廻と愚癡とを越え、渡りて彼岸に達し、禪定に住し、無欲にして疑惑なく、執著を棄て、寂靜なる人、我は之を婆羅門と

呼ぶ。

四五

この世に於て欲樂を棄て、家なくして遊行し、欲樂の生起を滅盡したる人、
我は之を婆羅門と呼ぶ。

四六

この世に於て愛欲を棄て、家なくして遊行し、愛欲の生起を滅盡したる人、
我は之を婆羅門と呼ぶ。

四七

人間の束縛を棄て、天上の束縛を脱し、一切の束縛より離れたる人、我は之
を婆羅門と呼ぶ。

四八

樂と不樂とを棄て、清涼にして煩惱なく、一切世界を克服せる勇者、我は之
を婆羅門と呼ぶ。

四九

有情の消滅と生起とを完全に知り、執著なく安泰にして覺りたる人、我は
之を婆羅門と呼ぶ。

五〇

諸天も乾闥婆も人間も、彼の趣く道を知らず、煩惱を滅盡して阿羅漢とな
りし人、我は之を婆羅門と呼ぶ。

五一

前過去にも、後未來にも、中現在にも何物をも有せず、無一物にして執著な

き人我は之を婆羅門と呼ぶ。

牡牛の如く強く、最も勝れ、勇者にして大仙、勝利に富み、無欲にして[心垢]を洗滌し、覺りたる人我は之を婆羅門と呼ぶ。

前生を知り、天界と惡趣とを見、更に生の滅盡に達し、智に於て完成したる牟尼(賢人)、一切圓滿成就の人我は之を婆羅門と呼ぶ。

註 ① 本品に於ける婆羅門とは煩惱を去り罪業を滅したる人を指す。既に第一四二頌に於てもこの意味に用ひられたり。

② brāhmaṇa-[婆羅門]: bāhita-pāpa-[惡業を除ける者] samaṇa-[沙門]: sama-cariya-[寂靜行の
人] 第二六五頌註 ① 参照) pabbajita-[出家]: pabbajayam (attano malam) (自己の垢穢を)去
る。以上の語源的説明の中最後のものは少くも動詞の語根を共通にす。 pabbajita:
pabbajati, pabbajayam (pres. part, nom.); pabbajeti (caus.), Pāli pabbaj= Skt. pra + vraj.
③ 原文は sa-kīcana- と a-kīcana- とを對立せしむ。註釋に從へば kīcana- には貪欲、執著等
の義ありて、sa-kīcana- は富裕なる、執著あるの兩義を兼ね、a-kīcana- は無一物、無執著
の兩義を兼ね。第四一一頌をも參照せよ。尙 sa ce hoti (ed. PTS) 22 sa ve hoti (Faush.)
に改め譯したり。

④ 註釋に從へば「紐」は忿怒、「緒」は愛著、「綱」と之に屬するものは六十二邪見、「障礙」は無明を

指す。恐らく紐緒網皆繫縛纏結を譬へ言ひしものなるべし。

❸ 譯は abhinā, vostī (ed. PTS) によらず abhinā-vostī (Fausb.) に従へり。

自 説 經 (ウダーナ)

かの世尊、應供、正等覺者に歸命す。

第一品 菩 提 品

一〇

是の如く我聞けり。初めて正覺を成じたまへる世尊は或る時、優樓比螺の尼連禪河の畔りなる菩提樹の下に住まりたまへり。その時、世尊は一たび趺坐を組みたるまゝにて、七日の間、解脱の樂を享けつゝ坐定したまへり。七日を過ぎて後、世尊はその定より起ち、夜の初分にありて、次の如く順次によく縁起の法を観じたまへり、「此有れば彼有り、此生すれば彼生す。即ち無明に縁りて行あり。行に縁りて識あり。識に縁りて名色あり。名色に縁りて六入あり。六入に縁

りて觸あり。觸に縁りて受あり。受に縁りて愛あり。愛に縁りて取あり。取に縁りて有あり。有に縁りて生あり。生に縁りて老死・憂・悲・苦・惱・絶望あり。この苦聚の生起はそれは如し」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

實に^{ハレ}も熱意ありて禪に入れる婆羅門の、諸の法を悟る時、彼縁起の法を知れるが故に、かの諸の疑惑は消え失せたり」と。

二

是の如く我聞けり。初めて正覺を成したまへる世尊は或る時、優樓比螺の尼連禪河の畔りなる菩提樹の下に住^{モト}まりたまへり。その時、世尊は一たび趺坐を組みたるまゝにて、七日の間、解脱の樂を享けつゝ坐定^{サッジン}したまへり。七日を過ぎて後世尊はその定より起ち、夜の中分にありて、次の如く逆次によく縁起の法を観じたまへり、「此無ければ彼無く、此滅すれば彼滅す。即ち無明の滅に縁りて行滅す。行の滅に縁りて識滅す。識の滅に縁りて名色滅す。名色の滅に縁りて六入滅す。六入の滅に縁りて觸滅す。觸の滅に縁りて受滅す。受の滅に縁りて六入滅す。六入の滅に縁りて觸滅す。觸の滅に縁りて受滅す。受に縁りて

りて愛滅す。愛の滅に縁りて取滅す。取の滅に縁りて有滅す。有の滅に縁りて生滅す。生の滅に縁りて老死憂悲苦惱絶望滅す。この苦聚の滅はそれは如しと。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「實にも熱意ありて禪に入れる婆羅門の諸の法を悟る時、彼諸縁の滅盡を知れるが故に、かの諸の疑惑は消え失せたり」と。

三

是の如く我聞けり。初めて正覺を成じたまへる世尊は或る時、優樓比螺の尼連禪河の畔りなる菩提樹の下に住まりたまへり。その時、世尊は一たび趺坐を組みたるまゝにて、七日の間、解脱の樂を享けつゝ坐^(定)したまへり。七日を過ぎて後、世尊はその定より起ち夜の後分にありて、次の如く順次逆次によく緣起の法を観じたまへり、「此有れば彼有り、此生すれば彼生ず。此無ければ彼無く、此滅すれば彼滅す。即ち無明に縁りて……二の一に同じ……苦聚の生起はそれは如し。餘す所なく無明を盡し滅ぼすに縁りて行滅し……二の二に同じ……苦聚の滅はそれは如し」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へ

たまへり。

「實にも熱意ありて禪に入れる婆羅門の諸の法を悟る時、恰も日の大空を照すが如く、彼は惡魔の軍を破りて立てり」と。

四^④

是の如く我聞けり。初めて正覺を成じたまへる世尊は或る時、優樓比螺の尼連禪河の畔りなる羊牧^{アザヤバ}尼拘律林中^{アーラニグローダ}に住まりたまへり。その時、世尊は一たび趺坐を組みたるまゝにて、七日の間、解脱の樂を享けつゝ坐^定したまへり。七日を過ぎて後、世尊はその定より起ちたまへり。時に憍慢性の一婆羅門あり、世尊に近づき、近づきて世尊と互に禮を交し、悅喜すべき話、記憶すべき話をなして一隅に立てり。一隅に立ちて、その婆羅門は世尊に問うて次の如くいへり、「汝瞿曇よ、如何なるをか婆羅門といひ、如何なるをか婆羅門たるの法といふ」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「如何なる婆羅門にてもあれ、邪惡の法を除き、憍慢の心なく、汙垢^{ヌカ}もなく、己の心を制し、吠陀に通じ、梵行を修し終れる者、その婆羅門こそは正^{マサ}しく婆

羅門と稱し得べけれ。彼が慢心は今や、世の何處にもあることなし」と。

五

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、尊者舍利弗・尊者大目犍連・尊者大迦葉・尊者大迦旃延尊者大拘致・尊者大劫賓・尊者大淳陀・尊者阿毘樓駄・尊者離越・尊者提婆達多・尊者⁴阿難等世尊に近づけり。世尊はこれ等諸尊者の遙より來れるを見、見るや比丘等に告げて宣はく、「比丘等よ、これ等の婆羅門來る。比丘等よ、これ等の婆羅門來る」と。かく宣ふや、婆羅門族出の一比丘は世尊に問うて次の如くいへり、「大德よ、如何なるをか婆羅門といひ、如何なるをか婆羅門たるの法といふ」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「邪惡の法を除き常に正念にして、往來し繫縛を盡せる覺者、彼等こそは實にこの世に於ける婆羅門なれ」と。

六^⑥

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへ

り。その時、尊者大迦葉は畢鉢羅窟ビハリグマに住まりて疾み、苦しみ、病篤かりしが、後その病癒えたり。病癒ゆるや、尊者大迦葉は次の如き思ひをなせり、「我托鉢のため王舍城に入らん」と。時に五百の諸天衆は尊者大迦葉のために力を盡して食を得せしめんとせり。尊者大迦葉は五百の諸天衆を斥けて、朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために王舍城の貧民乞食機織業者の住める通に入れり。世尊は尊者大迦葉の托鉢のために王舍城の貧民乞食機織業者の住める通を往來するを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、「他の供養を受けず、他に知られず、自ら制し、精に豎立し、諸惑を盡し、瞋恚を除ける者こそ婆羅門なれと我はいふと。

七^①

是の如く我聞けり。世尊は或る時、波吒梨羊群夜叉の住居なる羊群祠堂に住まりたまへり。その時、世尊は暗夜、雨降りしきれる折、屋外に坐したまへり。羊群夜叉は世尊をして、恐れさせ硬ばらせ身の毛彌立たしめんと欲して、世尊に近づき、世尊の近くにて、三たびアツクロ一、バツクロ一といひて、世尊を嚇おどかさんと

し、次の如く叫びぬ、「沙門よ、こは汝の惡鬼なり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「婆羅門已の法に於て、彼岸に到る時、この惡鬼妖魔を超度せん」と。

八⁹

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、尊者戰勝は世尊を拜せんがために、舍衛城に來りてありき。時に尊者戰勝の舊妻は尊戰勝の舍衛城に來れることを聞き、その兒を伴ひて祇陀林に赴けり。その時、尊者戰勝は一樹の下に於て日中休息のために坐しむたり。尊者戰勝の舊妻は尊者戰勝に近づき、彼に告げていへり、「沙門よ、我が小子を養へ」と。かくいふも、尊者戰勝は黙してありき。尊者戰勝の舊妻は再び彼に告げていへり、「沙門よ、我が小子を養へ」と。尊者戰勝は再び黙してありき。尊者、戰勝の舊妻は三たび彼に告げていへり、「沙門よ、我が小子を養へ」と。尊者戰勝は三たび黙してありき。尊者戰勝の舊妻は「沙門よ、こは汝の子なり。これを養へ」と、かくいひて、その兒を尊者戰勝の前に捨てゝ去れり。尊者戰勝は

⁶その兒を看ず又呼ばざりき。かの舊妻は稍々行きて顧み、尊者戰勝のその兒を看ず又呼ばざることを見て、思へらく、「この沙門には子の用なし」と。それより還り來りて、兒を携へて去れり。世尊は清淨にして人〔眼〕に超えたる天眼を以て、尊者戰勝の舊妻の當惑を見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「來るを喜ぶことなく、去るを悲しむことなし。愛著より脱したる戰勝、彼こそは婆羅門なれと我はいふ」と。

九⁽¹⁾

是の如く我聞けり。世尊は或る時、伽耶^{ガヤ}の象頭山に住まりたまへり。その時、衆多の結髮外道等あり、寒き冬の夜、中間の八日、雪降れる時、伽耶河にありて或は浮び或は沈み或は浮び沈み、水灌ぎ又は火神の祭をなし、これによりて清淨なりと思へり。世尊はかの衆多の結髮外道等の寒き冬の夜、中間の八日、雪降れる時、伽耶河にありて或は浮び或は沈み或は浮び沈み、水灌ぎ又は火神の祭をなし、これによりて清淨なりとなせるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、

この優陀那を唱へたまへり。

多くの人々、こゝにありて浴すれども水によりては清淨ならず。何人に
も眞實と法とだにあらば、彼は清淨なり、彼は婆羅門なり」と。

一〇

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に
住まりたまへり。その時、樹皮衣を著たる婆醯^{ベヒヤ}は海岸なる蘇波羅哥^{スバーラカ}に住み、人々
に尊ばれ重んぜられ貴ばれ供養せられ敬はれ衣服飲食物・坐臥具及び病氣の用
品たる藥料等の資具を得たり。樹皮衣を著たる婆醯には次の如き心の所念起
れり、「何人にもせよ、世に阿羅漢たるもの、阿羅漢道に入れるものゝ中、我はその
⁷一人なるか」と。その時、前世に樹皮衣を著たる婆醯の兄弟たりし天人は同情者
にして、利益を望めるものなるが、己の心を以て、婆醯の心の所念を知り、彼に近づ
きて次の如くいへり、「婆醯よ、汝は阿羅漢にもあらず、阿羅漢道に入れるものに
もあらず、よつて以て阿羅漢たり、阿羅漢道に入るの道も汝にはこれあらず」と。
婆醯の曰く、「然らば何人か人天世界に於て、阿羅漢たるもの、阿羅漢道に入れる

ものぞ」と。答へて曰く、「婆醯よ、北の方に於て舍衛城と名づくる都あり。今その處に世尊・應供・正等覺者は住まりたまふ。婆醯よ、かの世尊は阿羅漢にして且つ阿羅漢たるの法を説きたまふ」と。樹皮衣を著たる婆醯はこの天人のために動かされて、直ちに蘇波羅哥を去り、各處に唯一夜泊して世尊の住まりたまへる舍衛城の祇陀林なる給孤獨〔長者の遊〕園に近づけり。その時、衆多の比丘等は屋外にありて經行せり。樹皮衣を著たる婆醯はその比丘等に近づき、彼等に告げて次の如くいへり、「諸大德よ、世尊・應供・正等覺者は今何處に住まりたまふや。」

我等はかの世尊・應供・正等覺者を拜し奉らんと欲す」と。答へて曰く、「婆醯よ、世尊は托鉢のために今城内に入りたまへり」と。樹皮衣を著たる婆醯は慌しく、祇陀林を出でて、舍衛城に入り世尊の托鉢のために舍衛城を經行したまへる、愛すべく、美はしく、諸根を鎮め、意を落つけ、最上の統御安息に達し、自ら制し、自ら護り、諸根を御したる龍象を見るや、世尊に近づきて、頭面を以て世尊のみ足を禮し、世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊、我がために法を説きたまへ。善逝我がために法を説きたまへ。その法は我にとりて長夜の利益安樂のためなるべ

し」と。かくいふや、世尊は彼に告げて次の如く宣へり、「婆薩よ、今我托鉢に入りたれば時にあらず」と。再び彼は世尊に白していへり、「大德よ、この世尊の命の障りもまた我が命の障りも圖ること難し。大德よ、我に法を……安樂のためなるべし」と。再び世尊は彼に次の如く宣へり、「婆薩よ、今は……時にあらず」と。⁸

三たび彼は世尊に白していへり、「大德よ、この世尊の命の障りも……圖ること難し。大德よ、我に法を……安樂のためなるべし」と。世尊の宣はく、「いざ」、さらば婆薩よ、汝は次の如く學ぶべきなり、「見ては唯見たるまゝならん。聞きては唯聞きたるまゝならん。考へては唯考へたるまゝならん。知りては唯知りたるまゝならん」と。婆薩よ、汝は是の如く學ぶべきなり、「婆薩よ、汝は見ては唯見たるまゝならん……知りては唯知りたるまゝなるべきが故に、婆薩よ、汝はその處にあらず、婆薩よ、汝はその處にあらざるが故に、婆薩よ、汝はこの世にもかの世にも、また兩世の中間にもあらず。これこそは苦の終りなれ」と。世尊のこの略説法によりて、彼の心は直ちに執著なく、煩惱より解脱したり。世尊はこの略説法を以て彼を教へて去りたまへり。世尊の去りたまひて久しからざるに、若

き犢を伴へる牝牛あり、彼を倒して命を奪へり。世尊は托鉢のために舍衛城を往來したまひ、食後に托鉢より歸りて衆多の比丘等と俱に城内を去り、彼の死せるを見て比丘等に次の如く宣へり、「比丘等よ、彼の體を支へよ。臥榻に乗せ、運び去つて荼毘に附し、彼のために塔婆をも設けよ。比丘等よ、汝等の同梵行者死せり」と。「諾、大德よ」とかの比丘等は世尊に應諾して、彼の體を臥榻に乗せ、運び去つて荼毘に附し、彼のために塔婆をも設けて、世尊に近づき、世尊を禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、彼の體を焚きたり。彼のために塔婆をも設けたり。彼の未來は如何。その來生は如何」と。世尊の宣はく、「比丘等よ、彼は賢者にして、大小の法を行へり。法問のために我を惱ませしことなし。比丘等よ、彼は涅槃に入れり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

¹⁵ 水・地・火・風の住著することなき處には、星も光ることなく、日も輝くことなし。「そこには月も光らず、暗黒もまたこれなし。

自ら涅槃を知れる時、聖者たる婆羅門は智によりて、色無色樂苦より解脱

す」と。

「^ルの優陀那も世尊の説き給ふ所なりと我は聞く」と。

菩提品第一

茲に次の如き攝頌あり。

菩提三と、尼拘律諸長老、^{マハーカッサバーダ}波吒梨戰勝^{リーリー}[尊者]、結髮外道、婆醯^{ベーラクシ}[尊者]と
^ルの十なりと。

註① 第一經より第三經まで Mahāvagga I. 1. 1-7. PP. 1-2 参照。五分律十五卷(大正藏111卷
○一一一〇三頁) 四分律三十一卷(大正藏112卷七八一頁、七八六頁) 根本說一切有部

毘奈耶破僧事五卷(大正藏114卷一二六頁) 衆許摩訶帝經七卷(大正藏3卷九五二頁)
佛本行集經三十一卷(大正藏3卷七九九頁)等參照。

② sahetudhamma 有因の法となすも可なり。

③ Compare: Mv. 1, 2, 1-3 PP. 2-3.

④ 慢性のものの原語は hūnukkajātika にし hūnuka は他の言動を見聞してファンと聲
をなす如く甚だ慢なるをさべ。 Seidenstücke は獨譯(Das Buch der feierlichen Worte des
Erhabenen)の三頁に是を譯し standesstolz とする。尙註釋 Paramattha-dipani P. 52 に詳し。
⑤ 禮を交すを挨拶を交すと譯するも可なり。

- ⑥前半 Compare: S. N. vol. V p. 79.
- ⑦雜阿含四十九卷(大正藏、一卷三六二頁) 別譯雜阿含十五卷(大正藏、一卷四八〇頁)參照。
- ⑧akkulopakkulo は嚇しの言なり。註釋六六頁を見よ。
- ⑨雜阿含三十八卷(大正藏、二卷二七八頁) 別譯雜阿含一卷(大正藏、一卷三七六頁)參照。
- ⑩「舊妻」の原語は Purāṇa-dutiyikā にして出家前の妻をいふ。故二本二とは即ち是なり。註釋七二頁を見よ。
- ⑪ Compare: Mv. I. 20, 15 P. 31
- ⑫中間の八日^{アタマ}の原語は antarāṭṭhakā にして註釋七四頁によれば磨伽月の終り四日と頗勒^{バーナ}賽^{ナマ}月の初め四日とを云々なり。この時期は印度の極寒期にして宗教的祭事を行ふを習ひとしたるなり。
- ⑬ Compare: M. N. 7 Vatthupama sutta vol. I. p. 39. 雜阿含四十四卷(大正藏、一卷三二一頁)參照。
- ⑭樹皮衣を著たる婆薩^{バサ}の略。
- ⑮ Compare: D. N. 11 Kevaddha sutta vol. I. p. 223; S. N. I. 3, 7. Sarā vol. I. p. 15. 長阿含十六卷堅固經(大正藏、一卷一〇二頁)一部參照。

第一品 田眞隣陀品

— ❶ —

是の如く我聞けり。初めて正覺を成じたまへる世尊は或る時、優樓比螺の尼連禪河の畔りなる目眞隣陀樹の下に住まりたまへり。その時、世尊は一たび趺坐を組みたるまゝにて七日の間、解脱の樂を享けつゝ、坐定したまへり。時に大雨非時に起り、七日の間、雨降り續き、寒風吹きて天陰れり。文眞隣陀龍王は己の棲家より出で來り、蟻局を以て世尊の體を七重に巻きつゝ、頭上に大なる驥首を立てゝみたり、「寒氣世尊に觸るゝなけれ、暑氣世尊に觸るゝなけれ、蟲蚊風熱蛇世尊に觸るゝなけれ」とて。七日を過ぎて後、世尊はその定より起ちたまへり。文眞隣陀龍王は空震れ雲の去れることを知りて、世尊の體より蟻局を解き、己の姿を變へて儒童の姿をなし、合掌して世尊を禮拜しつゝ、その目前に立てり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「知足にして聞法、智見ある者の獨居は樂し。世の生命ある者に對して能く自ら制し、瞋恚なきは樂し。世に貪欲を離れ諸欲を脱するは樂し。我慢を調伏すること、實に最上の安樂なれ」と。

二[•]

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨長者の遊園に住まりたまへり。その時、食後に托鉢より歸りて、集會堂に聚り集へる衆多の比丘等の間に、次の如き話柄起れり、「法友等よ、摩揭陀の洗尼耶頻毘沙羅王と憍薩羅の波斯匿王とこれ等二王の中、何れが多くの蓄財あり、多くの用財あり、多くの威力ありや」と。その時、かの比丘等の間に起れるこの話柄は未だ終りに達せざりき。世尊は夕刻獨坐より起ちて、集會堂に近づき設けられたる座に著きたまへり。座に著きたまふや、世尊は次の如く比丘等に告げたまへり、「比丘等よ、汝等今如何なる話柄によりて聚り集へるぞ」と。答へて曰く、「大德よ、食後……我等の間に次の如き話柄起れり、「法友等よ、摩揭陀の洗尼耶頻毘沙羅王と憍薩羅の波斯匿王とこれ等二王の中、何れが多くの蓄財あり……大なる威力ありや」と。大德よ、我等の間に起れるこの話柄は未だ終りに達せざりき。然るにこの時、世尊は入り來りたまへり」と。世尊の宣はく、「比丘等よ、かかる談話をなすは汝等善男子

の信仰心よりして家を出でて家なき出家の身となれるものには適切ならず。

比丘等よ、汝等聚り集へるものには二つのなすべきことあり。それは即ち法の談話と尊き沈黙とこれなり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「この世に於ける諸欲の樂と、この天上の樂とは愛盡の樂の十六分の一にも値せず」と。^④

三

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、衆多の小兒等舍衛城と祇陀林との間にあり、杖を以て蛇を殺しあたり。世尊は朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために舍衛城に入りたまへり。世尊はかの衆多の小兒等舍衛城と祇陀林との間にあり、杖を以て蛇を殺しあたるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「己の安樂を求めながら、安樂を求むる生類を杖もて害ふものは未來に於

て、安樂を得ることなし。

己の安樂を求めつゝ、安樂を求むる生類を杖もて害はざるものは未來に於て安樂を得んと。

四

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、世尊は尊ばれ重んぜられ貴ばれ供養せられ敬はれ衣服・飲食物・坐臥具及び病氣の用品たる薬料等の資具を得たまへり。(二の一〇参照)比丘衆も亦尊ばれ重んぜられ：乃至：資具を得たり。然るに外道派に屬する普行沙門等は尊ばれず重んぜられず貴ばれず供養せられず敬はれず衣服・飲食物・坐臥具及び病氣の用品たる薬料等の資具を得ざりき。かの外道派に屬する普行沙門等は世尊や比丘衆の尊敬を受くるを忍び得ずして、里巷や森林に於て比丘等を見るや、良からぬ荒き語を以て罵り誹り怒らせ惱ませり。衆多の比丘等は世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊は今尊ばれ重んぜられ：乃至：資具を得

たまふ。比丘衆も亦尊ばれ重んぜられ：乃至：資具を得。然るに外道派に属する普行沙門等は尊ばれず重んぜられず：乃至：資具を得ず。大徳よ、かの外道派に属する普行沙門等は世尊や比丘衆の尊敬を受くるを：乃至：惱ませりと。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「里巷や森林に於て、樂苦に觸れしもの、そを己に又他に歸すること勿れ。觸は本質④ほんぜきあるに依りて觸る。本質なきものには何に依りて觸の觸るゝことあらん」と。

五

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、伊車能伽羅村出の一優婆塞(何か)所用ありて舍衛城に來れり。かの優婆塞は舍衛城に於てその所用を終りて、世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊はかの優婆塞に告げて次の如く宣へり、「優婆塞よ汝は久しうしてこゝに來るべき道を講じ得たり」と。優婆塞答へて曰く、「大徳よ、我は久しく世尊を拜せんがためにこゝに來らんと欲せり。されど諸の

なすべき務のために阻まれしかば世尊を拜せんがために來ること能はざりきと。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「法を覺り、多く聞ける人は何物をも持たざれども安樂なり。見よ、人は人に戀著し、一物あるがために惱まされつゝあるを」と。

六

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨^{トド}長者の遊園に住まりたまへり。その時、婆羅門族出なる一普行沙門の若き妻女懷姪して出産に近づけり。その妻女は夫に告げて次の如くいへり、「婆羅門よ、汝行きて妾が出産の用に供すべき胡麻油を得來れ」と。かくいふや、かの夫は妻女に告げていへり、「されど我何處よりして汝に胡麻油を得來るべきと。再びその妻女は夫にいへり、「婆羅門よ、汝行きて妾が出産の用に供すべき胡麻油を得來れ」と。再びその夫は妻女に告げていへり、「されど我何處よりして汝に胡麻油を得來るべきと。三たびその妻女は夫にいへり、「婆羅門よ、汝行きて妾が出産の用に供すべき胡麻油を得來れ」と。その時、憍薩羅の波斯匿王の倉に於て沙門婆羅門に

醍醐味胡麻油を飲まんと欲する限り飲むことを許し、但運び去ることを許さざりき。その普行沙門は次の如き思ひをなせり、「橋薩羅の波斯匿王は……運び去ることを許さず。我橋薩羅の波斯匿王の倉に行き胡麻油を飲まんと欲する限り飲みて家に歸り、吐き出して與へては如何、これ彼女の出産の用に供せられん」と。その普行沙門は橋薩羅の波斯匿王の倉に赴き、胡麻油を飲まんと欲する限り飲みて家に歸りしが、起ち上ることも亦坐ることも能くせざりき。彼は苦ししく、辛らく、荒く、烈しき痛みを覺えて輾轉反側せり。世尊は朝時内衣を著け鉢衣を携へて托鉢のために舍衛城に入りたまへり。世尊はその普行沙門が苦しく、辛らく、荒く、烈しき痛みを覺えて輾轉反側せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「實に何物もなきものは安樂なり。これ吠陀に通ぜる人は無一物なればなり。見よ、人は人に戀著する心ありて、一物のために惱まされつゝあるを」と。

七

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨^(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、一優婆塞の一人子にして〔甚だ〕愛すべく喜ぶべきもの死せり。衆多の優婆塞等は濡れたる衣服、濡れたる毛髪のまゝにて、早朝世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊はかの優婆塞等に次の如く宣へり、「優婆塞等よ、汝等何が故に濡れたる衣服、濡れたる毛髪のまゝにて早朝こゝに來れるぞ」と。かく宣ふや、かの優婆塞は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、我が一人子にして〔甚だ〕愛すべく喜ぶべきもの死せり。我等この故に濡れたる衣服、濡れたる毛髪のまゝにて早朝こゝに來れり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「諸天の群も多くの人々も俱に愛の相^(すがた)の甘きに絆^(はだ)さる。苦しみあり捨てられしものは死王のために擒にせらる。

日夜不放逸にして愛の相を捨つるものは死王の餌たる超え難き苦根を掘り盡すなり」と。

是の如く我聞けり。世尊は或る時、軍持なる軍持處林^{クンアイフター・ナツ}に住まりたまへり。その時、スッパワーサーと名づくる拘利人の女子懷妊七年に及び七日の間出産に難澁せり。彼女は苦しく、辛らく、荒く、烈しき痛みを覚えながら次の如き三意念によりて、これを耐へ忍べり、「我が世尊は實にこのかくの如き苦を捨てんがために法を説きたまへる正等覺者なり。このかくの如き苦を捨てんがために道に入れるかの世尊の弟子衆は實によく〔道〕を踐み行けるものなり。このかくの如き苦なき涅槃は實に安樂なり」と。拘利人の女子スッパワーサーは己の夫を呼びて次の如くいへり、「[いざ]我が夫よ、汝世尊のみ許に赴け。赴きて我が語により頭面を以て世尊のみ足を禮せよ。而して世尊の少病少惱にして起居輕安^{モト}氣力あり、安樂に住したまふや否やを問ひ奉りて白せ」、「大德よ、拘利人の女子スッパワーサーは頭面を以て世尊のみ足を禮す。世尊の少病少惱にして起居輕安氣力あり、安樂に住したまふや否やを問ひ奉ると。更に次の如く白せ」、「大德よ、拘利人の女子スッパワーサーは懷妊七年に及び：乃至：出産に難澁す。彼女は苦しく：乃至：痛みを覚えながら、次の如き三意念によりてそれを耐へ忍

べり。即ち我が世尊は實にこのかくの如き：乃至：涅槃は實に安樂なり」と。

「諾とかの拘利人は拘利人の女子スッパワーサーに應諾して世尊に近づき禮敬して一隅に立てり。一隅に立ちて、かの拘利人の子は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、拘利人の女子スッパワーサーは頭面を以て世尊のみ足を禮す。世尊の少病少惱……安樂に住したまふや否やを問ひ奉る。更に次の如く白す、

『大德よ、拘利人の女子スッパワーサーは懷妊七年に及び：乃至：難澁す。彼女は苦しく：乃至：痛みを覺えながら次の如き三意念によりてそれを耐へ忍ベり。即ち我が世尊は實にこのかくの如き：乃至：涅槃は實に安樂なり』と。世尊の宣はく、「拘利人の女子スッパワーサーよ、安樂なれ、無痛にして無病の兒を産まんことを」と。拘利人の女子スッパワーサーは世尊の語と共に安樂無痛にして無病の兒を産めり。「諸、大德よ」とかの拘利人の子は世尊の所説を歡受し隨喜して座より起ち、世尊を禮敬し、右繞の禮をなして己の家に歸れり。拘利人の子は拘利人の女子スッパワーサーが安樂無痛にして無病の兒を産めるを見るや、

次の如く思へり、「噫實に不可思議なり」「噫實に未曾有なり、如來の〔かゝる〕天神力

あり、大威力あることや。實にこの拘利人の女子スッパワーサーは世尊の語と共に安樂無痛にして無病の兒を産めり」と。歡び大いに喜び、快心満足せり。拘利人の女子スッパワーサーは己の夫を呼びて次の如くいへり、「[いざ]我が夫よ、汝世尊のみ許^{もと}に赴け。赴きて我が語により頭面を以て世尊のみ足を禮せよ、而して次の如く白せ、『大德よ、拘利人の女子スッパワーサーは頭面を以て世尊のみ足を禮す』と。更に次の如く白せ、『大德よ、拘利人の女子スッパワーサーは懷姪七年に及び七日の間出産に難澁せり。今や彼女は安樂無痛にして無病の兒を産めり。彼女は七日間の食を以て比丘衆を供養せん。大德よ、世尊は拘利人の女子スッパワーサーのために比丘衆と俱に七回の食^{〔供養〕}を受けたまはんことを』と。『諾』とかの拘利人の子は拘利人の女子スッパワーサーに應諾して世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの拘利人の子は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、拘利人の女子スッパワーサーは頭面を以て世尊のみ足を禮す。而して次の如く白す、『拘利人の女子スッパワーサーは懷姪：乃至：難澁せり。今や彼女は安樂：乃至：比丘衆と俱に受けたまはんことを』と。

然るにその時、佛陀を首とせる比丘衆は一優婆塞のために明日の食供養に招かれてありき。その優婆塞は尊者大目犍連の侍者なりき。世尊は尊者大目犍連に告げて宣はく、「¹⁷いざ」目犍連よ、汝はかの優婆塞の處に赴き彼に語りて次の如くいへ、「法友よ、拘利人の女子スッパワーサーは懷姫：乃至：出産に難澁せり。今彼女は：乃至：供養せんとす」と。拘利人の女子スッパワーサーは七回の食供養を行ふべく、その後かの汝の侍者も亦供養を行ふべし」と。「諾大德よ」と尊者大目犍連は世尊に應諾して、かの優婆塞に近づき、次の如くいへり、「法友よ、拘利人の女子スッパワーサーは：乃至：供養せんとす。拘利人の女子スッパワーサーは：乃至：食供養を行ふべく、その後汝亦行ふべし」と。優婆塞の曰く、「大德よ、尊師」大目犍連若し某がために財命信の三つの法の證者となりたまはば、拘利人の女子スッパワーサーは七回の食供養を行ふべく、その後我亦行はんと。尊者大目犍連は次の如くいへり、「法友よ、我それ等の中、財命の二つの法の證者とならんも、信の證者は實に汝自身なり」と。優婆塞の曰く、「大德よ、尊師」大目犍連若し某がために財命の二つの法の證者となりたまはば拘利人の女子スッパ

ワーサーは……行ふべく、その後……また行はんと。尊者大目犍連はその優婆塞を納得せしめて、世尊に近づき世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、かの優婆塞は拘利人の女子スッパワーサーが七回の食供養を行ふべく、その後彼もまた行ふべきことを納得したり」と。拘利人の女子スッパワーサーは佛陀を首とせる比丘衆をば七日の間、優れたる硬き又は軟き食物を以て、己の手にて飽きて謝するに至るまで供養し、その兒をして世尊及び總ての比丘衆を禮拜せしめたり。尊者舍利弗はその兒に告げていへり、「兒よ、汝身體健かなりや、〔得る所の〕飲食命を繋ぐに足れりや、苦なきや」と。その兒の曰く、「大德、我が舍利弗よ、我七年の間、血壺の中に在りき。「されば如何でか身體健かならん。如何でか〔得る所の〕飲食命を繋ぐに足らん」と。拘利人の女子スッパワーサーは「我が兒は法將と談じつゝあり」とて歡び大いに喜び快心満足せり。世尊は拘利人の女子スッパワーサーに告げて宣く、「汝、スッパワーサーよ、他にかかる兒を得んことを望むや」と。スッパワーサー答へて曰く、「我は他にかかる兒を七人得んことを望む」と。世尊はこの事由を知りて、その時この優陀那を唱へたまへり、

「快からざるものを使き相にて、喜ばざるものを使へる相にて、苦を樂の相にて打克つが如くに放逸なるものに打克たん」と。

九

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の東園なる鹿母講堂に住まりたまへり。その時、鹿母毘舍併^{ヤサカ}に公用ありて、橋薩羅の波斯匿王に繫がれり。橋薩羅の波斯匿王のこれを裁く所、鹿母の望みに隨はざりき。鹿母毘舍併は日中世尊に近づきて、禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊は鹿母毘舍併に告げて次の如く宣へり、「いさ毘舍併よ、汝は何故に日中來れるや」と。毘舍併答へて曰く、「大德よ、妾こゝに公事ありて；乃至；望みに隨はざりき」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「他に從屬することは總て苦なり。あらゆる主權は樂なり。若し人に果すべきことあらばそれに惱まさる。蓋し束縛は超え難きものなればなり」と。

一〇

是の如く我聞けり。世尊は或る時、阿窓夷の菴摩羅林に住まりたまへり。その時、カーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦は森林に入りても、樹下に坐しても、空屋に入りても、常に優陀那を唱へて次の如くいへり、「實にも樂なる哉、實にも樂なる哉」と。衆多の比丘等はカーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦が森林に入りても、樹下に坐しても、空屋に入りても、「實にも樂なる哉、實にも樂なる哉」と。衆多の比丘等はカーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦が森林に入りても、樹下に坐しても、空屋に入りても、「實にも樂なる哉、實にも樂なる哉」と。衆多の比丘等はカーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦はそのかみ俗人たりし時、王者の樂ありしかば今梵行を修して喜ばざるや必せり。彼はそを憶念して森林に入りても、常に優陀那を唱へて次の如くいふならん、「實にも樂なる哉、實にも樂なる哉」と。衆多の比丘等は世尊に近づきて禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して、次の如くいへり、「大德よ、カーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦は森林に入りても……常に優陀那を唱へて次の如くいふなり、「實にも樂なる哉、實にも樂なる哉」と。カーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦はそのかみ：乃至：喜ばざるや必せり。彼はそを憶念して森林に入りても……常

に優陀那を唱へて次の如くいふならん、『實にも樂なる哉、實にも樂なる哉』と。世尊は一比丘に告げて宣はく、「[いさ]比丘よ、汝は我が語を以て比丘跋提梨迦を呼び次の如くいへ、『法友跋提梨迦よ、師は汝を呼びたまふと』。『諾、大德よ』と、その比丘は世尊に應諾して、カーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦に近づき次の如くいへり、「法友跋提梨迦よ、師は汝を呼びたまふと」。「諾、大德よ」とカーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦はその比丘に應諾して、世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊はカーリゴーダーの子なる尊者跋提梨迦に次の如く宣へり、「跋提梨迦よ、汝は森林に入りても……常に優陀那を唱へて『實に樂なる哉、實に樂なる哉』といへりと聞く。そは眞實なりや」と。「然り、大德よ」と答へたり。世尊の宣はく、「[然らば]跋提梨迦よ、汝は如何なる理を見て、森林に入りても……常に優陀那を唱へて次の如くいふや、『實に樂なる哉、實に樂なる哉』と」。答へて曰く、「大德よ、我そのかみ俗人として王者の樂を求めたる時、宮殿内の守備よく設けられ、宮殿外の守備またよく設けられたりき。城内の守備よく設けられ、城外の守備またよく設けられたりき。國內の守備よく設けられ、國外の守

備またよく設けられたりき。大徳よ、かく守備警護されてありながら、この我は恐れ案じ疑ひ慄へて日を送れり。然るに大徳よ、今我森林に入りても、樹下に坐しても、空屋に入りても、唯獨りありても、恐れなく案ぜず疑はず慄へず、樂少きも從順に活潑に鹿の如き心を以て日を送るなり。大徳よ、我はこの理を見て、森林に入りても……常に優陀那を唱へて次の如くいふなり、「實に：乃至：樂なる哉」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「内に怒りなく、この生かの生を超え怖畏を離れ安樂にして憂なきものを諸天なほ見ることを能くせざ」と。

目真隣陀品第二

その攝頌に曰く、

目真隣陀、王、杖と、尊敬、優婆塞と、孕婦、一人子と、スッパワーサー、毘舍佉サカと、力一リゴーダーの跋提梨迦バタライヤなりと。

註❶ Compare: Mv. I, 3, 1-4 P. 3 五分律十五卷(大正藏、二二卷一〇三頁)四分律三十二卷(大正藏、二二卷七八六頁) 四分律十二卷(大正藏、二二卷六四七頁)(優陀那のみ) 根本說一切有部

毘奈耶破僧事五卷(大正藏二四卷一二五一一二六頁) 佛本行集經三十一卷(大正藏三卷八〇〇頁)衆許摩訶帝經七卷(大正藏三卷九五二頁) 方廣大莊嚴經十卷(大正藏三卷六〇一頁) 修行本起經下(大正藏三卷四七一頁) 過去現在因果經三卷(大正藏三卷六四四頁) 太子瑞應本起經下(大正藏三卷四七九頁)等參照。

② 雜阿含十六卷(大正藏二卷一一〇頁)一部參照。

③ 佛本行集經三十一卷(大正藏三卷八〇〇頁)衆許摩訶帝經七卷(大正藏三卷九五一頁)參照。

④ Compare: Dhammapada 131, 132 PP. 19-20. 法句經刀杖品(大正藏四卷五六五頁)參照。

⑤ 安樂を求むる生類をの原語 sukhakāmān' bhūtāni は底本になきも遅羅本に依りて是を附加せり。

⑥ 本質の原語 upadhi はチルドースに依れば五蘊・欲・煩惱・業の意味を有す。元來この語は煩惱若しくは取の意なり。後には涅槃に關係しこの語を依と譯し遂に身體又は身體の本質を指すに到れり。かくの如くこの語の解釋には明かに變遷の跡を見出し得るなり。

⑦ 妻女とは女人の普行沙門の略。夫とは普行沙門の略。

⑧ 飲まんと欲する限りを飽くまでと譯するも可なり。

⑨ 註釋一、「一頁には parijñāna (老ひ朽ちし)とあり。獨譯一、一四頁參照。」

⑩ 硬き又は軟き食物を嚼食瞰食と譯するも可なり。

⑪ 身體健かなりや、得る所の飲食命を繁ぐに足れりやを機嫌よきや身體安泰なりやと

譯するも可なり。

(2) 我七年の間、血蓋の中に在りきは原文にては後にあるも意味を明かにする爲に先に譯せり。

◎ Compare: Cullavagga VII, 1, 5 pp. 183-184; Jitaka 10 vol. I, P. 140. 佛本行集經五十九卷(大正藏、三卷九二四頁) 撲集百緣經九卷、八九天正藏、四卷二四九頁) 等參照。

第二品 難陀品

一

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、一比丘、世尊の近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ち、前世の業果より生じたる苦しく銳く荒く烈しき痛みを耐へ忍びつゝ、正念正智にして惱まさるゝことなく坐したりき。世尊はその比丘の〔己〕の近くにありて、趺坐を組み、乃至、痛みを耐へ忍びつゝ、正念正智にして惱まさるゝことなく坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「諸業を捨て、前世になせる塵勞を振ひ落し、且我所見なく心堅立したる(かかる)比丘は人と俱に語るの要もなし」と。

二〇

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊園)に住まりたまへり。その時、世尊の弟にして叔母の子なる尊者難陀^{ナンダ}は衆多の比丘等に告げて次の如くいへり、「法友等よ、我梵行を行うて喜ばず。梵行を保つこと能はず。(されば)我戒を捨て、俗に還らん」と。一比丘は世尊に近づきて禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊の弟にして叔母の子なる尊者難陀は衆多の比丘等に告げて次の如くいへり、「法友等よ、我梵行を行うて喜ばず……乃至……俗に還らん」と。世尊は一比丘を呼びて宣はく、「いざ比丘よ、汝は我が語を以て、比丘難陀を呼び次の如くいへ、法友難陀よ、師は汝を呼びたまふ」と。「諾、大德よ」とかの比丘は世尊に應諾し、尊者難陀に近づき、次の如くいへり、「法友難陀よ、師は汝を呼びたまふ」と。「諾、法友よ」と尊者難陀はかの比丘に應諾して、世尊に近づき、禮敬して一隅に坐せり。

一隅に坐するや、世尊は尊者難陀に告げて次の如く宣へり、「難陀よ、汝は衆多の比丘等に法友等よ、我梵行を行うて喜ばず；乃至；我戒を捨てゝ俗に還らんといへりと聞く。そは眞實なりや」と。「然り、大德よ」と答へたり。世尊の宣はく、「然らば難陀よ、汝は梵行を行うて喜ばず。梵行を保つこと能はず。[されば]戒を捨てゝ俗に還らん」といふは何故なりや」と。答へて曰く、「大德よ、我家を出で來る時、半ば髪を^{くしき}流りたる釋迦族の國美は我を見て次の如くいへり、「貴子よ、速かに歸り來れ」と。大德よ、この我彼女を思ひ出し、梵行を行うて喜ばず。梵行を保つこと能はず……俗に還らん」と。世尊は尊者難陀の腕を捉へて、恰も力士が曲げたる腕を伸ばし、伸ばしたる腕を曲ぐるが如く、「速かに」祇陀林に消え失せ、三天に現れたまへり。その時、鳩足天の五百の天女等釋提桓因の機嫌奉伺のために來れり。世尊は尊者難陀を呼びて次の如く宣へり、「難陀よ、汝はこれ等鳩足天の五百の天女を見ざるや」と。答へて曰く、「否、大德よ、[我これ等を見る]と。世尊の宣はく、「難陀よ、釋迦族の國美とこれ等鳩足天の五百の天女と何れが[より]麗しく、美しく、愛すべきか、汝如何にか思ふ」と。答へて曰く、「大德よ、恰も手足の燒

かれて、耳鼻の切れたる牝猿の如く、大徳よ、釋迦族の國美はこれ等五百の天女に比しては物の數ならず、少分にも値せず、較ぶべくもあらず。これ等五百の天女は實に「より麗しく、美しく、愛すべし」と。世尊は宣へり、「難陀よ、喜べ、難陀よ、喜べ。我これ等鳩足天の五百の天女を得んために、汝の保證とならん」と。難陀答へて曰く、「大徳よ、世尊若しこれ等鳩足天の五百の天女を得んために、我が保證となりたまはば、大徳世尊よ、我は梵行を樂しまん」と。世尊は尊者難陀の腕を捉へて恰も「乃至」の如く〔速かに〕三十三天に消え失せて、祇陀林に現れたまへり。比丘衆は世尊の弟にして叔母の子なる尊者難陀が天女のための故に梵行を行ひ、世尊はこれ等鳩足天の五百の天女を得るために彼の保證となりたまへり」といふを聞けり。尊者難陀の友なる比丘等は尊者難陀を傭人といふ語にて、又小商といふ語にて呼び次の如くいへり、「尊者難陀は傭人といふにあらずや。尊者難陀は小商といふにあらずや。尊者難陀は天女のための故に梵行を行ふといふにあらずや。世尊は鳩足天の五百の天女を得るために、彼の保證となりたまふといふにあらずや」と。尊者難陀は友等の傭人といふ語にて、又小商といふ語

にて惱み憤り嫌ひて獨り遠ざかり不放逸にして熱烈に專心にして自信あり久
しからずして、目的ありて善男子がよく家を出でて、家なき出家の身となり、その
〔目的の〕無上梵行の窮極をば現法に於て、自ら證知し實現し逮達して住せり。即
ち生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、更に後有を受けずと知れり。尊者難
陀も阿羅漢の一人となれり。他の天女等は夜の更けたる時、いとも麗しく祇陀
林全體を照らし、世尊に近づき、禮敬して一隅に立てり。一隅に立ちて、かの天女
等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊の弟にして叔母の子なる尊者
難陀は諸漏の滅盡よりして漏なく心解脱・慧解脱を現法に於て、自ら證知し實現
し逮達して住す」と。世尊にも次の如き智生じたり、「難陀は諸漏の滅盡よりし
て漏なく……住す」と。尊者難陀はその夜更けて後、世尊に近づき、禮敬して一隅
に坐せり。一隅に坐するや、尊者難陀は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、
世尊は鳩足天の五百の天女を得んために、我が保證となりたまへり。されど大
徳よ、我は〔世尊に〕その約束を解かんと欲す」と。世尊の宣はく、「難陀よ、我既に我
が心を以て汝の心を捉へて知れり、『難陀は諸漏の滅盡よりして……住す』と。

天人等も亦この事由を我に告げて次の如くいへり、「大德よ、世尊の弟にして叔母の子なる尊者難陀は諸漏の滅盡よりして……住す」と。難陀よ、汝執著なくして、心諸漏より解脱したり。されば我その約束を解かんと。世尊はこの事由を知りて、その時この優陀那を唱へたまへり、

「泥土の沼を越え欲の荆を破り、愚癡の滅に達し樂苦に慄へることなき彼こそは眞の比丘なれ」と。

三

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨〔長者の遊〕園に住まりたまへり。その時、野輸那を首として五百の比丘等世尊を拜せんがために舍衛城に著したり。この外來の比丘等は住院の比丘等と互に禮を交し、坐臥の具を設け鉢衣を整ふるに高く大なる音をたてたり。世尊は尊者阿難を呼びて宣はく、「阿難よ、さながら漁師の魚を引上ぐる時の如く、高く大なる音をたつ。〔抑々〕かれ等は何者なりや」と。答へて曰く、「大德よ、野輸那を首としてこの五百の比丘等世尊を拜せんがために舍衛城に著したり。かの外來の比丘等は：乃

至々鉢衣を整ふるに高く大なる音をたつと。世尊は次の如く宣へり、「阿難よ、然らば我が語を以てかの比丘等を呼び次の如くいへ、「師は尊者等を呼びたまふ」と。「諸、大徳よ」と尊者阿難は世尊に應諾して、かの比丘等に近づき、次の如くいへり、「師は尊者等を呼びたまふ」と。「諸、法友よ」とかの比丘等は尊者阿難に應諾して世尊に近づき一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊はかの比丘等に次の如く宣へり、「比丘等よ、汝等はさながら漁師の魚を引上ぐる時の如く、何故に【かく】高く大なる音を立つるや」と。かく宣ふや、尊者野輸那は世尊に白して次の如くいへり、「大徳よ、この五百の比丘等世尊を拜せんがために舍衛城に著したり。この外來の比丘等々乃至々整ふるに【かく】高く大なる音を立つ」と。世尊の宣はく、「比丘等よ、去れ。我汝等を斥く。汝等我が傍に住むこと勿れ」と。「諸、大徳よ」とかの比丘等は世尊に應諾して、座より起ち禮敬して右繞の禮をなし、坐臥の具を整へて、鉢衣を携へ、跋闍國の方へ遊行のために出て立ちたり。跋闍國の内を次第遊行して婆求末河^{婆ヶ木ダ}に近づき、河の畔りに草屋をしつらひて雨安居に入れり。雨安居に入るや、尊者野輸那は比丘等に告げて次の如くいへり、「法友等よ、我等

の利益を望み、利便を圖り、我等に同情したまへる世尊は仁慈のあまり我等を追放したまひしなり。いざ法友等よ、我等の居住を世尊の喜びたまふやうに、我等はそれを營むべきなり」と。「諾、法友よ」とかの比丘等は尊者に應諾したり。かの比丘等は〔他より〕遠ざかり不放逸にして熱烈に専心にして住し、その雨安居の間に皆悉く三明を逮得したり。世尊は隨意の間、舍衛城に住みて後、吠舍離の方へ遊行のために出で立ち、次第遊行して吠舍離に著したまへり。こゝに世尊は吠舍離の大林なる重閣講堂に住まりたまへり。世尊は己が心を以て、婆求末河の畔りなる比丘等の心を忖度し思惟して、尊者阿難を呼びて宣はく、「阿難よ、我にとりてはかの方向明るくなれるが如く見ゆ。阿難よ、我にはかの方向光れるが如く感ぜらる。かの方向とは婆求末河の畔りに比丘等居住する處これなり。我かしこに赴かんと思ふこと厭しからず。阿難よ、汝は婆求末河の畔りなる比丘等の許もとに使を送りて次の如くいへ、『師は尊者等を呼びたまふ。師は尊者等を見んと欲せらる』と。『諾、大德よ』と尊者阿難は世尊に應諾して、一比丘に近づき、次の如くいへり、「いざ法友よ、婆求末河の畔りなる比丘等の許に行きて次の如く

いへ、「師は尊者等を呼びたまふ。師は尊者等を見んと欲せらる」と。「諾、法友よ」とその比丘は尊者阿難に應諾して、恰も力士が曲げたる腕を伸ばし、伸ばしたる腕を曲ぐるが如く、「速かに大林なる重閣講堂に消え失せ、婆求末河の畔りなるかの比丘等の前に現れたり。その比丘は婆求末河の畔りなる比丘等に告げて、次の如くいへり、「師は尊者等を呼びたまふ。師は尊者等を見んと欲せらる」と。「諾、法友よ」とかの比丘等はその比丘に應諾して坐臥の具を整へ、鉢衣を携へて、恰も……の如く〔速かに〕婆求末河の畔りに消え失せ、大林なる重閣講堂に在せる世尊の面前に現れたり。その時、世尊は不動三昧に入りて坐したまへり。かの比丘等は思へらく、「世尊は今如何なる住方にて住したまふや」と。かの比丘等は又思へらく、「世尊は今不動三昧に入りたまふ」と。「されば彼等も亦不動三昧に入りて坐せり。尊者阿難は夜は更け初分已に過ぎたる時、座より起ち〔袈裟〕衣を一肩にして合掌を世尊に向け、次の如く世尊に白せり、「大德よ、今や夜は更け、初分已に過ぎたり。外來の比丘等は久しく坐せり。大德よ、世尊の外來の比丘等と互に禮を交したまんことをと。かくいふも、世尊は〔唯〕黙したまへり。再び

尊者阿難は夜は更け中分已に過ぎたる時、座より起ち〔袈裟〕衣を一肩にして合掌²⁷を世尊に向け、次の如く世尊に白せり、「大德よ今や夜は更け、中分已に過ぎたり。外來の比丘等は久しく坐せり。大德よ、世尊の外來の比丘等と互に禮を交したまはんことを」と。再び世尊は〔唯〕黙したまへり。三たび尊者阿難は夜は更け後分已に過ぎて日昇り夜明けたる時、座を起ちて〔袈裟〕衣を一肩にし、合掌を世尊に向けて次の如く世尊に白せり、「大德よ、今や夜は更け、後分已に過ぎ、日昇り夜明けたり。外來の比丘等は久しく坐せり。大德よ、世尊の外來の比丘等と互に禮を交したまはんことを」と。時に世尊はその三昧より起ちて、尊者阿難に次の如く宣へり、「阿難よ、汝若し知る所あらば、これほどだにも汝に答ふることあらじ。曰く」阿難よ、我は今この五百の比丘等と俱に總て不動三昧に入りて坐せり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「欲の荆をば克服し、惡口・殺生・束縛をも亦克服したる人は樂苦に於て山の如く豎立して動かず又搖ぐことなし。彼こそは〔眞の〕比丘なれ」と。

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、尊者舍利弗は世尊の近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ち、念を正面に据ゑて坐せり。世尊は尊者舍利弗の〔己〕の近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ち、念を正面に据ゑて坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「猶ほ磐石の山の搖ぎなく、よく豎立せるが如く、愚癡なき比丘は山にも似て搖ぐことなし」と。

五

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、尊者大目犍連は世尊の近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ち、身に向けたる念を内に〔よく〕豎立して坐せり。世尊は尊者大目犍連の〔己〕の近くに：乃至：〔よく〕豎立して坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「身に向けたる念は〔よく〕豎立し、六觸處に於て〔よく〕自ら制したり。常に定

に入れる比丘は己の涅槃を知らんと。

六[◎]

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへり。その時、尊者畢陵迦婆蹉^{ビリシダガブツサ}は鄙人といふ語を以て比丘等を呼びたり。時に衆多の比丘等は世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、尊者畢陵迦婆蹉は鄙人といふ語を以て比丘等を呼ぶなり」と。世尊は一比丘に告げて宣はく、「いざ比丘よ、汝は我が語を以て畢陵迦婆蹉を呼び次の如くいへ、「法友畢陵迦婆蹉よ、師は汝を呼ぶたまふ」と。「諾、大德よ」と、かの比丘は世尊に應諾して、尊者畢陵迦婆蹉に近づき彼に告げて次の如くいへり、「法友よ、師は汝を呼びたまふ」と。「諾、法友よ」と尊者畢陵迦婆蹉はその比丘に應諾して、世尊に近づき一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊は尊者畢陵迦婆蹉に次の如く宣へり、「婆蹉よ、汝は鄙人といふ語を以て比丘等を呼べりと聞く、そは眞實なりや」と。「然り、大德よ」と答へたり。世尊は畢陵迦婆蹉の前生を思惟して、比丘等に告げて次の如く宣へり、「比丘等よ、汝等は比

丘婆蹉に對して憤ること勿れ。比丘等よ、婆蹉は瞋恚を内にして、比丘等を呼ぶに鄙人といふ語を以てするにあらず。比丘等よ、比丘婆蹉は五百生の間、續けて²⁹婆羅門の家に生れたり。この鄙人といふ語は彼永き間、習慣的に用ひたるなり。そのためにこの婆蹉は鄙人といふ語を以て比丘等を呼ぶなりと。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「詔なく慢なく貪盡き、我所見なく欲なく、忿は捨てられ、心鎮まれる人こそ婆羅門なれ、彼こそ沙門なれ、彼こそ比丘なれ」と。

七

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへり。その時、尊者大迦葉は畢鉢羅窟に住まり、一たび趺坐を組みたるまゝにて、七日の間、或る定に入りて坐せり。尊者大迦葉は七日を過ぎて後、その定より起てり。尊者大迦葉はその定より起ちて自ら思へらく、「我托鉢のために王舍城に入らん」と。時に五百の諸天衆は尊者大迦葉のために力を盡して食を得せしめんとせり。尊者大迦葉はその五百の諸天衆を斥けて、朝時に内衣を著け鉢衣を

携へて、托鉢のために王舍城に入れり。その時、釋提桓因は尊者大迦葉に食物を施さんと欲して、機織人の相を化作して機を織りたり。阿修羅の女善生スザナーダーは梭を通せり。尊者大迦葉は王舍城に於て次第乞食し、釋提桓因の住居に近づけり。³⁰ 釋提桓因は尊者大迦葉の遙より來れるを見、家より出でて迎へ、手より鉢を取りて家に入り、饋より食物を取り、鉢に満して尊者大迦葉に與へたり。その施食中には種々の羹、種々の副菜、種々の羹味副菜等ありき。尊者大迦葉は思へらく、「³¹ このかくの如き神力あるこの者は抑々何人ぞ」と。尊者大迦葉は又思へらく、「³² こは釋提桓因なり」と。「かく」知りて尊者大迦葉は釋提桓因に次の如くいへり、「拘翼コウシヤ よ、こは汝の爲せし所なり。再びかくの如きことを爲す勿れ」と。釋提桓因の曰く、「大德、迦葉よ、我等にも功德コトダムを積むの要あり。我等も功德を爲すべきなり」と。釋提桓因は尊者大迦葉を禮敬し、右繞の禮をなして空中に飛上り、空中にて三たび次の如き優陀那を唱へたり。

「實に施し、最上の施を迦葉によく行へり。實に施し……よく行へり」と。世尊は清淨にして人耳に超えたる天耳を以て、釋提桓因の空中に飛上り……

次の如き優陀那を唱ふるを聞きたまへり、「實に施し……よく行へり。實に施し……よく行へり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「托鉢によりて生き、自ら養ひて、他の供養を受くることなく、寂靜にして常に[正念]に住する比丘は諸天なほかる人を羨む」と。

八

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、食後に托鉢より歸り、迦里^カ梨樹の傍なる圓形尖頭の屋舎に聚り集へる衆多の比丘等の間に次の如き話柄起れり、「法友等よ、托鉢に出でたる比丘は托鉢のために往來して屢々眼にて快き色を見るを得、屢々耳にて快き聲を聞くを得、屢々鼻にて快き香を嗅ぐを得、屢々舌にて快き味を味ふを得、屢々身にて快き觸處に觸るを得るなり。法友等よ、托鉢に出でたる比丘は尊ばれ重んぜられ貴ばれ供養せられ敬はれて托鉢のために往來するなり。法友等よ、いざ我等も亦托鉢者とならん。」然らば屢々眼にて

快き色を見ることを得ん、屢々耳にて快き聲を聞くことを得ん、屢々鼻にて快き香を嗅ぐことを得ん、屢々舌にて快き味を味ふことを得ん、屢々身にて快き觸處に觸るゝことを得ん。我等も亦尊ばれ重んぜられ貴ばれ供養せられ敬はれて托鉢のために往來せん」と。その時、かの比丘等の間に起れるこの話柄は未だ終りに達せざりき。世尊は夕刻獨坐より起ちて、迦里梨樹の〔傍なる〕圓形尖頭の屋舎に近づき設けられたる座に著きたまへり。座に著きたまふや、世尊は比丘等に次の如く宣へり、「比丘等よ、汝等今如何なる話柄によりて聚り集へるぞ。比丘等よ、汝等の間に起れる如何なる話柄が未だ終りに達せざるぞ」と。答へて曰く、「大德よ、〔こゝに〕食後托鉢より歸り、迦里梨樹の〔傍なる〕圓形尖頭の屋舎に聚り集へる我等の間に次の如き話柄起れり、『托鉢に出でたる：乃至：托鉢のために往來せん』と。大德よ、我等の間に起れるこの話柄は未だ終りに達せざりき。〔然るに〕その時、世尊は入り來りたまへり」と。世尊は次の如く宣へり、「比丘等よ、かかる談話をなすは汝等善男子の信仰心よりして家を出でて家なき出家の身となれるものには適切ならず。比丘等よ、汝等聚り集へるものには二つのなす

べきことあり、そは即ち法の談話と尊き沈黙とこれなり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「托鉢によりて生き、自ら養ひて他の供養を受くることなき比丘は、諸天なほかゝる人を羨む。彼若し聲のみの讚辭を恃むことなくば」と。

九

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨〔長者の遊〕園に住まりたまへり。その時、食後に托鉢より〔前經參照〕衆多の比丘等の間に次の如き話柄起れり、「法友等よ、誰か技藝を知れるや。誰か如何なる技藝を學べるや。如何なるものが技藝中第一のものなりや」と。こゝに於て或るものは次の如くいへり、「象を御するの術は技藝中第一のものなり」と。或るものは次の如くいへり、「馬を御するの術は技藝中第一のものなり」と。或るものは次の如くいへり、「車を御するの術は技藝中第一のものなり」と。或るものは次の如くいへり、「弓術は技藝中第一のものなり」と。或るものは次の如くいへり、「劍術は技藝中第一のものなり」と。或るものは次の如くいへり、「印契の術は技藝中第

「一のものなり」と。或るものは次の如くいへり、「算術は技藝中第一のものなり」と。³²或るものは次
の如くいへり、「數術は技藝中第一のものなり」と。或るものは次の如くいへり、「書術は技藝中第一のものなり」と。或
るものは次に如くいへり、「詩術は技藝中第一のものなり」と。或るものは次に如くいへり、「順世術
は技藝中第一のものなり」と。或るものは次に如くいへり、「田相術は技藝中第一のものなり」と。或
るものは次に如くいへり、「比丘等に次の如く宣へり、『比丘等よ、三の八参照』」と。或
るものは次に如くいへり、「大德よ、『こゝに』食後乃至前經の如し次の如き話柄起れり、『法友等よ、誰か技藝を知れるや……技藝中第一のものなりや』と。或
るものはいへり、「象を御するの術は技藝中第一のものなり」と。大德よ、我等の間に起れるこの話柄
乃至田相術は技藝中第一のものなり」と。大德よ、我等の間に起れるこの話柄
は未だ終りに達せざりき。「然るに」その時、世尊は入り來りたまへり」と。世尊は
次の如く宣へり、「比丘等よ、三の八参照法の談話と尊き沈黙とこれなり」と。世尊は
この事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

技藝によりて生きず、利を欲すること輕く、諸根を制し、諸事に於て解脱を得、家なくして往來し、我所見なく欲なく惡魔を殺して獨り行くものこそ「眞の比丘なれ」と。

一〇

是の如く我聞けり。初めて正覺を成じたまへる世尊は或る時、優樓比螺の尼連禪河の畔りなる菩提樹の下に住^{とど}まりたまへり。その時、世尊は一たび趺坐を組みたるまゝにて、七日の間、解脫の樂を享けつゝ坐^定したまへり。七日を過ぎて後世尊はその定より起ち佛眼を以て世間を見渡し貪瞋癡によりて生せる諸の責苦のために惱まされ、諸の熱惱のために焼かれつゝある有情を見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「この世は熱苦の性にして、觸に累せられ、病を自己として談す。これ蓋しこれなりと思へることのそれとは異なることあればなり。變化の質なる世間は生有に達して、生有のために累せられ〔ながら〕その生有をこそ喜ぶなれ。」

人喜ぶ時、そは怖畏なり。人若し怖畏あらば、そは苦なり。生有を捨離せんがためにこそこの梵行を行ふ。

沙門にもあれ婆羅門にもあれ、生有によりて、生有の離脱を語るあらば、かれ等は總て生有より離脱せざるものなりと我はいふ。

然るに又沙門にもあれ、婆羅門にもあれ、非有によりて、生有の出離を語るあらば、これ等は總て生有より出離せざるものなりと我はいふ。

蓋しこの苦は總て本質ほんぜきによりて生ずるなり、總て取の滅盡よりして苦の生なければなり。

廣くこの世間を見よ。生類は無明によりて累せられ、生を喜び、解脱を得ざるものなり。

蓋し如何なるものにもせよ、隨方隨處にて、これ等の生有は總て無常苦・轉變の法なればなり」と。

「是の如く正智によりてこれを如實に見るものには、生有の渴愛は滅し、非

有の渴愛は喜なり。

總て渴愛の滅よりして、貪欲を残りなく滅することは涅槃なり。
その涅槃に入れる比丘には、取なきことよりして再生はあらず。惡魔は
打克たれ戰に敗^{やぶ}らる。かゝるものは總ての生有に打克てるなりと。

難陀品第三

次の如き攝頌あり、

業^{ナシダ}、難陀^{ナシダ}、野輸^{ノイヂヤ}那^ナと、舍利弗^{サーリーヴ}、拘律陀^{コリーダ}と、畢陵迦^{ビリンダ}、迦葉^{カッサバ}、托鉢^{タツバ}、技藝^{ヒョウイ}、世間^{セイモン}とこの十なり
と。

註 ① 増一阿含九卷慚愧品(大正藏二卷五九一頁) 出曜經二十四卷(大正藏二卷七三九一七四
○頁) 佛本行集經五十七卷(大正藏三卷九一五一九一六頁) 參照。

② 否、大德^ヨの本文は *avāñ bhante* なれど否定の間に對する和文の例に従つて譯したり。

③ 增一阿含三卷弟子品(大正藏二卷五五八頁)一部參照。

④ 條の原語協會本には *vāsata* とあれど毘羅本の *tasala* を可とす。

⑤ 或^ルものは次の如く^ルを或^ルもの等は是の如くとなすも可なり。今は解し易からしむ
る爲にかく譯したり。

⑥瑜伽師地論十九卷偈(大正藏、三十卷三八五頁)参照。

⑦佛本行集經三十二卷(大正藏三卷八〇五頁)参照。

⑧協會本にては意通じ難し。仍て暹羅本に從へり。

⑨暹羅本脚註、本經註釋二一五頁には非有を喜ばずとあり。

第四品 彌 鹽 品

一。

是の如く我聞けり。世尊は或る時チャーリカーなるチャーリカー山に住ま
りたまへり。その時、尊者彌醯^{イギヤ}は世尊の侍者なりき。尊者彌醯は世尊に近づき
て禮敬し一隅に立てり。一隅に立ちて、尊者彌醯は世尊に白して次の如くいへ
り、「大德よ、我托鉢のために闍闊村^{ヂヤントウ}に入らんと欲す」と。世尊の宣はく、「彌醯よ、
汝今正に時よしと思はばそをなせ」と。尊者彌醯は朝時鉢衣を携へて、托鉢のた
めに闍闊村に入れり。托鉢のため闍闊村を往來し、食後に托鉢より歸り、金鞍河^{キミカウ}
の畔りに近づきて金鞍河の畔りを散策・逍遙・往來しつゝ、愛すべく樂しむべき菴
摩羅林を見て次の如く思へり、「この菴摩羅林は實に愛すべく、樂しむべきなり。

實にこは精勤の要ある善男子が精勤を行するには好適の地なり。世尊若し我を聽したまはば、我精勤のためにこの菴摩羅林に入らんと。尊者彌醯は世尊に近づきて、禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや尊者彌醯は世尊に白して次如くいへり、「大德よ、こゝに我朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために闇鬪村に入れり。托鉢のために闇鬪村を往來して、食後に托鉢より歸り、金鞍河の畔りに近づきて、金鞍河の畔りを散策逍遙往來しつゝ愛すべく楽しむべき菴摩羅林を見て次の如く思へり、『實にこの菴摩羅林は愛すべく楽しむべきなり。實にこは精勤の要ある善男子が精勤を行するには好適の地なり。世尊若し我を聽したまはば我精勤のために菴摩羅林に入らんと。大德よ、世尊若し我を聽したまはば我精勤のために菴摩羅林に入らんと。かくいふや、世尊は尊者彌醯に次の如く宣へり、「彌醯よ、今は我一人なり。何人か他の比丘の来るまで暫く待て」と。再び尊者彌醯は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊には更に何ものも爲すべきことなく、爲してこれを積むの要あるなし。然るに大德よ、我には更に爲すべきことあり、爲してこれを積むの要あり。大德よ、若し我を聽した

まはば我精勤のために、かの菴摩羅林に入らん」と。再び世尊は尊者彌醯に次の如く宣へり、「彌醯よ、今は我一人なり。……他の比丘の来るまで暫く待て」と。三たび尊者彌醯は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊には……我精勤のために菴摩羅林に入らん」と。世尊は宣はく、「彌醯よ、精勤といへるものに對して我等は何といふべきぞ。彌醯よ、汝今正に時よしと思はば、そをなせ」と。尊者彌醯は座より起ちて、世尊を禮敬し右繞の禮をなして、かの菴摩羅林に近づき林中に入りて、日中休息のため一樹の下に坐したりき。かの菴摩羅林に住まれる尊者彌醯には三惡不善の覺即ち欲覺恚覺害覺益々起り來れり。尊者彌醯には次の如き思ひ起れり、「[噫]實に不可思議なり。[噫]實に未曾有なり。我信仰心よりして家を出でて家なき出家の身となれり。然るに三惡不善の覺即ち欲覺恚覺害覺に襲はるゝことや」と。尊者彌醯は夕刻獨坐より起ちて、世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、尊者彌醯は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、かの菴摩羅林に住まれる我に三惡不善の覺即ち欲覺：乃至：益々起り來れり。大德よ、我には次の如き思ひ起れり、「[噫]實に不可思議なり：乃

至：襲はるゝことや」と。世尊は彼に告げて次の如く宣へり、「彌醯よ、未熟の心解脱を圓熟せしむるために五法あり。何をか五法となす。」
こゝに彌醯よ、比丘には善き朋友あり、善き伴侶あり。彌醯よ、未熟の心解脱を圓熟せしむるためにこの第一の法あり。
復次に彌醯よ、比丘は持戒者にして波羅提木叉の攝護によりて己を節して住し、「正しき行處親近處を有し、小罪にも怖畏を見、學處を受持し學習するものなり。彌醯よ、未熟の心解脱を圓熟せしむるためにこの第二の法あり。
復次に彌醯よ、比丘は煩惱を排除し、心を開くに適し且つ十全なる厭離・欲滅盡・安靜・正智等覺涅槃に導く話即ち少欲の話・知足の話・遠離の話・他と雜處せざる話・精進の話・戒法の話・禪定の話・智慧の話・解脫の話・解脫智見の話等かくの如き話を望み通りに得るもの煩ひもなく得るもの、苦もなく得るものなり。
彌醯よ、未熟の心解脱を圓熟せしむるためにこの第三の法あり。
復次に彌醯よ、比丘は努力精進して住し、不善法を捨て善法を行ぜんがために決斷あり勇健にして、善法に於て重擔を捨てざらんとするものなり。彌醯よ、未熟なる心解脱を圓熟せしむるためにこの第四の法あり。
復次に彌醯よ、比丘は智者に

して〔物の〕起滅を〔如實に〕知る智慧聖なる洞察の智慧・正しく苦の滅盡に導く智慧を具足するものなり。彌醯よ、未熟なる心解脱を圓熟せしむるためにこの第五の法あり。彌醯よ、未熟なる心解脱を圓熟せしむるためにこれ等の五法あり。

彌醯よ、善き朋友・善き伴侶・善き友人ある比丘には次のことが期待せらるゝなり。³⁷ 卽ち彼は持戒者にして、波羅提木叉の攝護によりて己を節して住し、「正しき」行處・親近處を有し小罪にも怖畏を見、學處を受持し學習するものたるべきことはなり。彌醯よ、善き朋友……比丘には次のことが期待せらるゝなり。即ち彼は煩惱を排除し、心を開くに適し且つ十全なる厭嫌離欲滅盡・安靜・正智等覺涅槃に導く話即ち少欲の話・知足の話・遠離の話・他と雜處せざる話・精進の話・戒法の話・禪定の話・智慧の話・解脫の話・解脫智見の話等かくの如き話を望み通りに得るもの、煩ひもなく得るもの、苦もなく得るものたるべきことはなり。彌醯よ、善き朋友……比丘には次のことが期待せらるゝなり。即ち彼は精進努力して住し、不善法を捨て善法を行せんがために決斷あり勇健にして、善法に於て重擔を捨てざらんとするものたるべきことはなり。彌醯よ、善き朋友……比丘には次の

ことが期待せらるゝなり。即ち彼は智者にして、物の起滅を如實に知る智慧聖なる洞察の智慧。正しく苦の滅盡に導く智慧を具足するものたるべきことはなり。然るに彌醯よ、比丘はこれ等の五法に豎立して更に次の四法を修すべきなり。即ち貪を捨てんがためには不淨觀を修すべく、恚を捨てんがためには慈悲觀を修すべく、覺を滅せんがためには數息觀を修すべく我慢を根絶せんがためには無常觀を修すべきなり。彌醯よ、蓋し無常想ある者には無我想豎立し、無我想ある者は現法に於て我慢の根絶即ち涅槃に達すればなり」と。世尊はこの事由を知りてその時、この優陀那を唱へたまへり。

「覺は卑小のもの、覺は微細のもの、心の喜悅これに従ひ行くなり。これ等心の覺を知らざるものは搖れたる心にて生より生へと走馳するなり。これ等心の覺を知り〔正〕念ある人は熱烈にして自ら制す。佛はこれ等從ひゆく心の喜悅を残りなく捨てたまへり」と。

二

是の如く我聞けり。世尊は或る時、拘尸那羅なる末羅族の沙羅林、憇跋單に住とど

まりたまへり。その時、衆多の比丘等は世尊の近くなる森林洞窟内に住まり、自ら高しとし、橋慢浮薄にして、饒舌多辯忘念にして、正智を缺き、心鎮まらず心迷ひて、諸根を制せざりき。³⁸世尊はかの衆多の比丘等の近くなる森林洞窟に住まり、自ら高しとし、橋慢浮薄にして、饒舌多辯忘念にして、正智を缺き、心鎮まらず、心迷ひて、諸根を制せざるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「身を護らず邪見に陥り昏沈睡眠のために打克たることによりて人は
惡魔に征服せらる。」

されば正思惟を親近處となし、心を護るものにてあれ。正見を先とせるものとして、生起滅盡を知りて昏沈睡眠に打克てる比丘は總ての惡趣を捨てん」と。

三

是の如く我聞けり。世尊は或る時、大比丘衆と俱に橋薩羅國を往來したまへり。世尊は道より下りて、一樹の下^{もと}に近づき設けられたる座に著きたまへり。

時に一牧牛士あり、世尊に近づきて禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊はかの牧牛士を法話によりて教示し激励し鼓舞し悦喜せしめたまへり。かの牧牛士は世尊の法話によりて教示せられ激励せられ鼓舞せられ悦喜せしめるゝや、世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊は比丘衆と俱に我が明日の食供養を受けたまんことを」と。世尊は黙してこれを諾したまへり。かの牧牛士は世尊の諾したまひしことを知りて、座より起ち、世尊を禮敬し右縕の禮をなして去れり。かの牧牛士はその夜更けて後、己が家にて多くの水少き粥や新しき醍醐味を用意せしめ、次の如くいひて世尊に時を告げたり、「大德よ、今正に食事調へり」と。世尊は朝時内衣を著け鉢衣を携へて、比丘衆と俱にかの牧牛士の家に近づき設けられたる座に著きたまへり。かの牧牛士は水少き粥や新しき醍醐味を以て、佛陀を首とせる比丘衆をば己の手にて飽きて謝するに至るまで供養したり。かの牧牛士は世尊の食し終りて鉢より手を下したまふや、一つの低き座を取りて一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊はかの牧牛士を法話によりて教示し激励し鼓舞し悦喜せしめて座より起ち去りたまへり。世尊の去

りたまひて久しからざるに、一人の男子あり、かの牧牛士を國境内に於て殺害したり。衆多の比丘等は世尊に近づきて禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、今日佛陀を首とせる比丘衆は牧牛士によりて水少き粥や新しき醍醐味を以て己の手にて飽きて謝するに至るまで供養せられたり。大德よ、かの牧牛士は一人の男子のために國境内に於て殺害せられたりと聞く」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

⑥
「^カ惡める者は惡める者にこれをなし、かれをなさん。恨ある者は恨ある者にこれをなし、かれをなさん。悪しく導かれたる心はそれよりも更に悪しきことを彼になさん」と。

四。

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへり。その時、尊者舍利弗、尊者大目健連は迦布德迦^{カボタカンダラ}に住まり。その時、尊者舍利弗は明月の夜、頭髪を剃りたるまゝにて、或る定に入り屋外に坐せり。その時、友

なる二夜叉何か所用ありて、北方より南方に赴けり。かの夜叉等は尊者舍利弗が明月の夜、頭髪を剃りたるまゝにて或る定に入り屋外に坐せるを見たり。見て、一夜叉は他の夜叉に次の如くいへり、「友よ、我はこの沙門の頭に一撃を加へんと思ふ」と。かくいふや、かの夜叉はこの夜叉に次の如くいへり、「友よ、止めよ。沙門を撃つこと勿れ。友よかの沙門は偉大にして大神力あり、大威力あり」と。

再び一夜叉は他の夜叉に次の如くいへり、「友よ、我はこの沙門の頭に一撃を加へんと思ふ」と。再びかの夜叉はこの夜叉に次の如くいへり、「友よ、止めよ……大神力あり、大威力あり」と。三たび一夜叉は他の夜叉に次の如くいへり、「友よ、我は……一撃を加へんと思ふ」と。三たびかの夜叉はこの夜叉にいへり、「友よ、止めよ……大神力あり、大威力あり」と。一夜叉は他の夜叉に従はずして尊者舍利弗長老の頭に一撃を加へたり。その一撃は七ラタナ又は七ラタナ半の象を〔地に〕沈め或は大山の頂を打壊す程の力なりき。〔然るに〕その夜叉は暑し暑しといひて、即處にかの大地獄に陥れり。尊者大目健連は清淨にして人眼を超えたる天眼を以てその夜叉が尊者舍利弗の頭に一撃を加ふるを見たり。見て尊者

舍利弗に近づきて次の如くいへり、「法友よ、身體健かなりや、「得る所の」飲食命を繋ぐに足れりや、苦なきや」と。答へて曰く、「法友目犍連よ、我身體健かなり。法友目犍連よ、我得る所の」飲食命を繋ぐに足るなり。但し我が頭に微痛あり」と。尊者目犍連は次の如くいへり、「法友舍利弗よ、不可思議なり。法友舍利弗よ、未曾有なり。汝舍利弗のかゝる天神力あり、大威力あることや。法友舍利弗よ、ここに一夜又ありて汝の頭に一撃を加へたり。そは實に大撃なりき。その一撃は七ラタナ……大山の頂を打壊す程の力なりき。然るに尊者舍利弗の次の如くいへることや、「法友目犍連よ、我は身體健かなり。法友目犍連よ、我は得る所の」飲食命を繋ぐに足るなり。但し我が頭に微痛あり」と。尊者舍利弗は次の如くいへり、「法友目犍連よ、不可思議なり。法友目犍連よ、未曾有なり。尊者大目犍連の大神力あり、大威力あることや。汝は實に夜叉をも見得ればなり。然るに我等は今泥鬼すら見ること能はず」と。世尊は清淨にして人耳に超えたる天耳を以てこれ等二大龍象のかゝる對談を聞きたまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「磐石にも譬ふべき彼の心は豎立して搖ぐことなし。染著すべきものに對して染著なく、怒るべきものに對して怒りなし。かくの如く修練せられたる彼の心には何處よりしてその苦來らんや」と。

五⁽¹⁾

是の如く我聞けり。世尊は或る時、ヨイサンビ 憬賞彌の瞿私多林に住まりたまへり。然るにその時、世尊は煩はされて住まりたまへり。即ち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷王者王大臣・外道・外道の弟子等のために煩はされたまひ、居住苦にして安樂ならざりき。世尊は次の如き思ひをなしたまへり、「我今煩はされて住まるなり」。

即ち比丘・比丘尼……外道の弟子等のために煩はされ、居住苦にして安樂ならざるなり。我獨り群より離れて住まらん」と。世尊は朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のため橋賞彌に入りたまへり。托鉢のため橋賞彌を往來して食後に托鉢より歸りて、自ら坐臥の具を摺み鉢衣を携へて、侍者にも別れを告げず、比丘衆にも暇を告げずして、獨り第二者なく波陀林の方へ遊行に赴き、次第に遊行して波陀林に達したまへり。こゝに於て、世尊は波陀林なる所護林の跋陀沙羅樹の

42

下に住まりたまへり。時に或る貴き象あり、牡象・牝象・若き象・幼き象等のために煩はされて住まりき。彼は尖の切れたる草を食ひ、彼等は彼の撓め折りたる枝を食ひ、彼は濁れる水を飲み、彼河より上るや、牝象等はその體に摩觸して行けり。かくしてかの貴き象は煩はされ、居住苦にして安樂ならざりき。かの貴き象は次の如き思ひをなせり、「我今牡象・牝象・若き象・幼き象等のために煩はされて住まるなり。私は尖の切れたる草を食ひ、彼等は我が撓め折りたる枝を食ひ、私は濁れる水を飲み、我河より上るや、牝象等は我が體に摩觸して行くなり。かくして私は煩はされ、居住苦にして安樂ならざるなり。我獨り群より離れて住まらん」と。かの貴き象は群より離れて波陀林なる所護林の跋提沙羅樹の下に住まりたまへる世尊のみ許に赴けり。赴きて、かの貴き象は世尊の住まりたまへるその土地にて、草を抜き鼻を以て世尊のために飲み水や使ひ水を調へり。獨坐思惟したまへる世尊には次の如き心の所念起れり、「我先に煩はされて住まりき。即ち比丘・比丘尼……外道の弟子等のために煩はされ、居住苦にして安樂ならざりき。この我今煩はされずして住まるなり。即ち比丘・比丘尼……外道の

弟子等のために煩はされず、居住幸にして安樂なり」と。かの貴き象にも次の如き心の所念起れり、「我先に牡象・牝象・若き象・幼き象等のために煩はされて住まれり。我は尖の切れたる草を食ひ、彼等は我が撓め折りたる枝を食ひ、我は濁れる水を飲み、我河より上るや、牝象等は我が體に摩觸して行けり。かくして我は煩はされ、居住苦にして安樂ならざりき。この我今牡象・牝象・若き象・幼き象等に煩はされずして住まるなり。我は尖の切れざる草を食ひ、彼等は我が撓め折りたる枝を食ふことなく、我は濁らざる水を飲み、我河より上るや、牝象等は我が體に摩觸して行くことなし。かくして我は煩はされず、居住幸にして安樂なり」と。世尊は己の遠離を知り又^テその心を以てかの貴き象の心の所念を識りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「^{ながえ}轍の如き牙ある象のすぐれたるこの心は、林間にありて獨り楽しめる優者的心に一如す」と。⁽¹⁾

六

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊園)に

住まりたまへり。その時、尊者賓頭盧頗羅墮誓ビンドーラ バーラ ドグーナは世尊の近くにありて、趺坐を組み身を直く保ちて坐せり。彼は森林住者托鉢者糞掃衣者但三衣者少欲者知足者遠離者他と雜處せざる者努力精進者頭陀説者増上心定に專念する人なりき。⁴³世尊は尊者賓頭盧頗羅墮誓の己の近くにありて、趺坐を組み身を直く保ちて坐せる、かの森林住者托鉢者糞掃衣者但三衣者少欲者知足者遠離者他と雜處せざる者努力精進者頭陀説者増上心定に專念せる人を見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

〔説ることなく害ふことなく、波羅提木叉に於て自制あり、食に於て節度を知り、閑處に坐臥し増上心に專念す。是諸佛の教なり」と。

七

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨長者の遊園に住まりたまへり。その時、尊者舍利弗は世尊の近くにありて、趺坐を組み身を直く保ちて坐し、少欲にして知足、遠離にして他と雜處せず、努力精進して増上心定に專念せり。世尊は尊者舍利弗の近くにありて、趺坐を組み身を直く保ちて坐

し、少欲にして知足、遠離にして他と雑處せず、努力精進して増上心定に專念せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「増上心あり、不放逸なる牟尼の寂黙の道に於て學ぶ。かく心靜止し、常に

〔正〕念ある人には憂あることなし」と。

八⁽¹⁵⁾

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨^(長者の遊園)に住まりたまへり。その時、世尊は尊ばれ重んぜられ貴ばれ供養せられ敬はれ衣服・飲食物坐臥具及び病氣の用品たる薬料等の資具を得たまひき。比丘衆も亦尊ばれ……等の資具を得たり。然るに外道派に屬する普行沙門等は尊ばれず〔三の四参照〕乃至……等の資具を得ざりき。かの外道派に屬する普行沙門等は世尊や比丘衆の尊敬を受くるを忍び得ずして、女人の普行沙門孫陀利^(サンタリ)に近づき次⁴⁴の如く彼女にいへり、「妹よ、親族のために圖るの心ありや」と。答へて曰く、「尊〔師〕等よ、妾は何をかなさん、妾は何をかなし得るや。妾は親族のためには命をも捨てん」と。外道派に屬する普行沙門等は次の如くいへり、「妹よ、然らば常に祇

陀林に赴け」と。「諸尊師等よ」と女人の普行沙門孫陀利はかの外道派に屬する普行沙門等に應諾して常に祇陀林に赴けり。かの外道派に屬する普行沙門等は女人の普行沙門孫陀利の常に祇陀林に來れること、多くの人々によりて見られしを知るや、彼女の命を奪ひて祇陀林の溝坑に埋め、憍薩羅の波斯匿王に近づきて、次の如く王にいへり、「大王よ、我等かの女人の普行沙門孫陀利を見す」と。王は曰く、「然らば汝等は彼女が何處にありと思ふや」と。外道派に屬する普行沙門等は答へて曰く、「大王よ、祇陀林にあらん」と。王は曰く、「然らば汝等祇陀林を搜すべし」と。かの外道派に屬する普行沙門等は祇陀林を搜して、投げ捨て置きたる如き死體を、溝坑より引上げて臥榻に乗せ舍衛城に持ち運び街路より街路に、巷より巷に赴き人々の中に於て次の如く呴かしめたり、「尊師等よ、釋子所屬のもの等の所作を見よ、耻づることなきこの沙門釋子所屬のもの等は汚戒者・惡行者・妄語者・非梵行者なり。然るにこれ等の者は實に法行者・平和住者・梵行者・實語者・持戒者・善行者なりと自稱すべし。これ等の者には沙門道なし。これ等の者には婆羅門道なし。これ等の者の沙門道滅びたり。これ等の者の婆羅

門道滅びたり。如何でかこれ等の者の沙門道あらんや。如何でか、これ等の者の婆羅門道あらんや。これ等の者は沙門道より離れたり。これ等の者は婆羅門道より離れたり。何すれぞ男子のなすことをして女人の命を奪ふや⁽¹⁷⁾と。そ
の時、舍衛城に於て人々比丘等を見、次の如くいひて良からぬ荒き語を以て罵り誹り怒らせ惱ませり、「耻づることなきかの沙門釋子所屬のもの等：乃至：女人の命を奪ふや」と。時に衆多の比丘等朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために舍衛城に入れり。托鉢のために舍衛城を往來し、食後に托鉢より歸りて世尊に近づき世尊を禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白していへり、「今舍衛城に於ける人々は比丘等を見て次の如くいひて良からぬ荒き語を以て罵り誹り怒らせ惱ませり、「耻づることなきかの沙門釋子所屬のもの等：乃至：命を奪ふや」と。世尊は次の如く宣へり、「比丘等よ、この聲は永からざるべし。恐らく七日の間ならん。七日を過ぎて後、消え失せん。かの人々比丘等を見て、良からぬ荒き語を以て罵り誹り怒らせ惱ませば、汝等は次の偈を以て彼等を非難せよ、曰く、

「¹⁸虚言を語るものは悪趣に赴かん。爲して我爲さずといへるものも亦同じ。この兩者は來世に行きては同じ。卑行の人々は他處にても亦同じと。

かの比丘等は世尊のみ許に於てこの偈を學び比丘を見て良からぬ……惱ま
せる人々を次の偈を以て非難せり、「虚言を語るものは：乃至：他處にても亦
同じ」と。人々は次の如き思ひをなせり、「この沙門釋子所屬のもの等はそを爲
せしにあらず。この沙門釋子所屬のもの等のそを爲せしにあらざることを彼
等自ら誓ふと。その聲は永からざりき。七日を過ぎて後消え失せり。衆多の
比丘等は世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は
世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、實に不可思議なり。大德よ、實に未曾有
なり。大德よ、世尊の是の如くよく説きたまひしことや、「比丘等よ、この聲は永
からざるべし。七日を過ぎて後消え失せん」と。大德よ、その聲今や消え失せた
り」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「¹⁹自ら制せざる人々は語を以て傷ふこと、恰も戰場に來れる象を矢を以て

傷そなふが如し。比丘は粗く述べられたる語を聞きて、穢れざる心を以て忍ぶべし」と。

九

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへり。獨坐思惟せる尊者優波先那婆檀提子ウバヤナボンガシタブタに次の如き心の所念起れり、「實に我は得たり。實に我はよく得たり。我が師は世尊應供正等覺者なり。我はよく說かれし法・律に於て家を出でて家なき出家の身となれり。我が同梵行者は持戒善法の人なり。我は戒に於ける充足者なり。我是心鎮まれり。我是心一境にして、漏盡阿羅漢なり。我に大神力あり。我に大威力あり。我が生やよし。我が死やよし」と。世尊は「その心を以て尊者優波先那婆檀提子の心の所念を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

四生命若し苦しまざれば、死の終りに於て悲しむことなし。賢者若し道を見ば、悲しみの中にありて悲しむことなし。有愛を斷ちて、心鎮まれる比丘には生々の輪廻盡きて、再び生を受くることなし」と。

一〇

是の如く我聞けり。世尊は或る時舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊園)に住まりたまへり。その時、尊者舍利弗は世尊の近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ちて、己[心]の安靜を觀察しつゝ坐せり。世尊は尊者舍利弗の[己の]近くにありて、趺坐を組み身を直く保ちて己[心]の安靜を觀察しつゝ坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「心の安靜を得、支柱を折れるかの比丘は生々の輪廻を盡し惡魔の縛より脱れたり」と。

次の如き攝頌あり、

彌醯^{ミヤギ}慢、牧牛士、月夜、第五には象、賓頭盧、舍利弗、孫陀利^{スンダリ}は第八にして、檀提^{バンガタ}の子なる優波先那、舍利弗と、この十なりと。

彌醯品第四

註① 中阿含十卷彌醯經大正藏、一卷四九一頁) Compare: A. N. IX, 3, vol. IV pp. 354-359.

② 今正に時よしと思はばを今正に時に適へりと思はばと譯するも可なり。

③三惡不善の覺即ち欲覺・恚覺・害覺を漢譯の如く三惡不善の念即ち欲念・恚念・害念とするも可なり。

④「知足の話」「遠離の話」の原語 santutṭhikathā, pavivekkakathā 底本になけれども暹羅本に依りて補足せり。

⑤「數息觀」の原語 ānāpānasati を文字通りに譯せば出息入息念なり。

⑥ Compare: Dhammapada 42 P. 6.

⑦ 雜阿含五十卷(大正藏、一卷三六七頁) 別譯雜阿含十五卷(大正藏、二卷四八五頁) 增一阿

含四十五卷不善品(大正藏、二卷七九三頁) 參照。

⑧「擊つ」の原語 āsādēti には辱かしむるの意も存す。

⑨ Compare: Theragāthā V, 191, P. 25 前記雜阿含別譯雜阿含參照。

⑩ Mv. X, 4, 6-7 pp. 352-353. 五分律二十四卷(大正藏、一二卷一六〇頁) 參照。

⑪「煩はむ」の原語 ākīṇa を此處にては圍繞せらると譯するも可なり。

⑫「貴き象」の原語 hattināga を大象と譯するも可なり。

⑬「優者」nāga は佛を指す。

⑭ Compare: Dhammapada V, 185, P. 27; D. N. XIV Mahāpadāna sutta vol. II, pp. 49-50. 法句經述

佛品(大正藏、四卷五六七頁) 參照。

⑮「寂默」の原語 mona を智と譯するも可なり。

⑯ 義足經須陀利經三卷(大正藏、四卷一七六頁) 六度集經五卷(大正藏、三卷三〇頁) 參照。

⑯「男子のなすこと」の原語 purisakicca は註釋二六〇頁に釋して methuna patisevana とあり。是即ち姦行なり。

⑰ Compare: Suttanipata 661, p. 127; Dhammapada 306, p. 44; Itivuttaka 48, p. 42. 法句經地獄品(大正藏)四卷五七〇頁参照。

⑯前記義足經參照。

⑭矢を以ての原語 sarehi は底本にあらわるも註釋二六三頁のを採れり。前記義足經は箭となす。

⑮「法律」dhammavinaya は教の意なり。以下同斷。

⑯「生命若し苦しまざれば」は生きて若し苦しまざればの意なり。

⑰「支柱」とは渴愛の意なり。

第五品 蘇那長老品

一

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊園)に住まりたまへり。その時、橋薩羅の波斯匿王は勝鬘妃アーリカと俱に最も優れたる宮殿の上層に昇りてありしが、橋薩羅の波斯匿王は勝鬘妃に告げて次の如くいへり、

「勝鬘よ、汝には己にも増して愛らしきもの誰か他にこれありや」と。答へて曰く、「大王よ、我には己に増して愛らしきもの他にこれあるなし。されど大王よ、大王には己にも増して愛らしきもの誰か他にこれありや」と。答へて曰く、「勝鬘よ、我も亦己に増して愛らしきもの他にこれあるなし」と。それより橋薩羅の波斯匿王は宮殿より降りて、世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、橋薩羅の波斯匿王は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、我今勝鬘妃と俱に最も優れたる宮殿の上層に昇り、勝鬘妃に告げていへり、「勝鬘よ、汝には己にも増して：乃至：他にこれありや」と。かくいふや、勝鬘妃は我に答へていへり、「大王よ、我には己にも増して：乃至：他にこれありや」と。大德よ、かくいふや、我は勝鬘妃に答へていへり、「勝鬘よ、我も亦己に増して：乃至：他にこれあるなし」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「心して諸方を經めぐりたれども、何處にも己より愛らしきものには出會はざりき。この己はそれぞれ他人にも亦かくの如くなり。されば己を愛するものは他を害ふべからず」と。

二

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。尊者阿難は夕刻獨坐より起ちて、世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、尊者阿難は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、不可思議なり。大德よ、未曾有なり。大德よ、世尊の御母はかくの如く短命なりしことや。世尊の御母は世尊の生れたまひて後、七日にして命終し、兜率天衆の中に生れたまひしことや」と。世尊の宣はく、「然り、阿難よ、蓋し菩薩の母は短命にして、菩薩生れて七日の後、命終し兜率天衆の中に生れ出づればなり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「如何なる生類たりとも、凡そ[世に]あらんもの、總て體を捨て、[未來世に]行かん。これ等總ての失はるゝことを知りて、熱意ある善巧の士は梵行を修すべきなり」と。

三[。]

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへ

り。その時、王舍城に善覺と稱する癩患者・貧人・乞食不運者ありき。その時、世尊は大群集に圍繞せられ、坐して法を説きたまへり。癩患者善覺はその多くの人々の群り集れるを遙かに見て、次の如く思へり、「必らずや、かしこに於て硬き又は軟き食物の配分せらるゝあらん。我も亦かの多くの人々の間に交らん。思ふにかしこに於て硬き又は軟き食物を得ん」と。癩患者善覺はその多くの人々の群に近づき、世尊の大群集に圍繞せられ坐して法を説きたまへるを見て、自ら次の如く思へり、「かしこに於て硬き又は軟き食物の配分せらるゝにあらず。」この沙門瞿曇は群集のために法を説けるなり。我亦法を聽かんと。我亦法を聽かんといひてその一隅に坐せり。世尊は〔その〕心を以てあらゆる〔四衆〕のものを含める群集の心を捉へて、「誰かこゝに法を知り得るものありや」と思惟したまへり。「こゝにこは法を知り得るものなり」と。而して癩患者善覺のために次の如き次第説法をなしたまへり、曰く、「布施の話・持戒の話・生天の話・欲望の過多く、卑しく穢れたること・出離の利益あること等是なり。」世尊は癩患者善覺の心整

ひ、心和ぎ、心覆蓋なく心上り、心澄みたるを知りたまふや、諸佛說法の中にて極めて樞要なるもの、即ち苦集・滅道を說きたまへり。恰も清淨無垢なる布の十分によく染色を受くるが如く、癩患者善覺にはその座に於て^{凡そ如何なる集の法も、}そは總てこれ滅の法なりとの塵垢を離れたる法眼生じたり。癩患者善覺は法を見、法に達し、法を知り、法に通じ、疑を超え、惑を離れ、絕對信に達し、師の教に依りて他に依らざるものとして、座より起ち世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。

一隅に坐するや、癩患者善覺は世尊に白して次の如くいへり、大德よ、不可思議なり。大德よ、未曾有なり。大德よ、恰も倒れたるを起し、掩はれたるを開き、迷へるものに道を示し、眼あるものは色かたちを見んとて、闇中に燈火を運ぶが如く、世尊は諸の方便によりて法を說きたまへることや。大德よ、この我は世尊に歸命す。法に歸命す。比丘衆に歸命す。世尊よ、我を優婆塞となし、今よりして後、生を終るに至るまで歸命せりと見たまはんことをと。癩患者善覺は世尊の法話によりて教示せられ激勵せられ鼓舞せられ悦喜せしめられて、世尊の所説を歡受し隨喜して、座より起ち世尊を禮敬し、右繞の禮をなして去れり。時に若き癩を伴へ

⁵⁰る牝牛が癩患者善覺を倒して命を奪へり。衆多の比丘等は世尊に近づき、禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、かの善覺と名づくる癩患者は世尊の法話によりて教示せられ激勵せられ鼓舞せられ悦喜せしめられしが既に命終せり。彼の未來は如何。その來生は如何」と。世尊答へて宣はく、「比丘等よ、癩患者善覺は賢者にして大小の法を行へり。法問のために我を惱ませしことなし。比丘等よ、癩患者善覺は三結を滅盡して預流に入り不退轉の法を得て定んで正覺に達せんものなり」と。かく宣ふや、一比丘は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、癩患者善覺が貧人・乞食不運者となれる因縁は如何」と。世尊答へて宣はく、「比丘等よ、癩患者善覺は前生實にこの王舍城に於ける長者の子なりき。彼は樂園に遊び、多迦羅支棄辟支佛の托鉢のために城内に入りたまへるを見て、自ら思へらく、「この癩患者は何處を往來するぞ」とて唾を吐き辱かしめて去れり。彼はその業果のために幾年も幾百年も幾千年も地獄にて苦しめり。實にその業の餘果のために、この王舍城に於て貧人・乞食不運者となりしなり。彼は如來の教へたる

法律によりて信を得、戒を得、聞を得、捨離を得、慧を得たり。彼は如來の教へたる法律によりて信を得、戒を得、聞を得、捨離を得、慧を得て身壞命終の後、善趣・天界に生じ三十三天の仲間となれり。彼はそこに於て顏色や稱譽により他の天に優れて輝けり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、「眼あるものは不平等を知りて打克つ如く、賢者は生くる世に於て全く悪を避くべきなり」と。

四

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨〔長者の遊〕園に住まりたまへり。その時、衆多の童兒等舍衛城と祇陀林との間に於て、魚を傷へり。世尊は朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために舍衛城に入りたまへり。世尊はかの衆多の童兒等の舍衛城と祇陀林との間に於て魚を傷へるを見たまひ、彼等に近づきて次の如く宣へり、「汝童兒等よ、汝等は苦を恐るゝや。苦は汝等に不快なりや」と。答へて曰く、「然り大徳よ、我等は苦を恐る。苦は我等には不快なり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「苦若し汝等に快からずば、公にも私にも悪事をなすこと勿れ。

若し悪事をなさんとし又已にこれをなさば逃避によるとも、汝等苦より脱ることなかるべし」と。

五[◎]

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の東園なる鹿母講堂に住まりたまへり。その時、世尊は布薩の日、比丘衆に圍繞せられて坐したまへり。時に尊者阿難は夜は更け、初分を過ぎたる時、座より起ち〔袈裟〕衣を一肩にして合掌を世尊に向け、次の如く世尊に白せり、「大德よ、今や夜は更け、初分已に過ぎたり。比丘衆は久しく坐せり。大德よ、世尊は比丘等のために波羅提木叉を説きたまはんことを」と。かくいふも世尊は唯黙したまへり。再び尊者阿難は夜は更け、中分を過ぎたる時、座より起ち〔袈裟〕衣を一肩にして合掌を世尊に向け、次の如く世尊に白せり、「大德よ、今や夜は更け、中分已に過ぎたり。比丘衆は久しく坐せり。大德よ、世尊は比丘衆のために波羅提木叉を説きたまはんことを」と。かくいふも世尊は唯黙したまへり。三たび尊者阿難は夜は更け後分已に過ぎて日昇り

夜明けたる時、座を起ちて〔袈裟〕衣を一肩にし、合掌を世尊に向け次の如く世尊に白せり、「大德よ、今や夜は更け後分已に過ぎ、日昇り夜明けたり。比丘衆は久しう坐せり。大德よ、世尊は比丘衆のために波羅提木叉を説きたまはんことを」と。世尊は次の如く宣へり、「阿難よ、この衆は不淨なり」と。尊者大目犍連は自ら思へらく、「世尊は、『阿難よ、この衆は不淨なり』と宣へるが、世尊は何人のためにかくはいひたまへるぞ」と。尊者大目犍連は己の心を以て總てを含める比丘衆の心を能く思惟したり。尊者大目犍連は汚戒にして惡法、不淨邪惡の行業あり、己の行爲を隱蔽し沙門にあらずして沙門なりと自稱し、梵行者にあらずして梵行者なりと自稱し、内心腐り、漏に満ち、不淨の性を持てるものゝ、この比丘衆中に坐せるを見たり。見るや、座を起ちてその者に近づき告げて次の如くいへり、「起て法友よ、汝世尊のために看破せらる。汝比丘等と俱に住むこと勿れ」と。彼は〔唯〕黙してありき。再び尊者大目犍連は彼に告げて次の如くいへり、「起て法友よ、汝世尊のために看破せらる。汝比丘等と俱に住むこと勿れ」と。再び彼は〔唯〕黙してありき。三たび尊者大目犍連は彼に告げて次の如くいへり、「起て法友

よ、：乃至：俱に住むこと勿れ」と。三たび彼は〔唯〕黙してありき。尊者大目犍連
は彼の腕を捉へ、門外に追ひ出し門を下して、世尊に近づき次の如く世尊に白せり、「大德よ、彼我がために追ひ出されたり。衆は全く清淨となれり。大德よ、世
尊は比丘等のために波羅提木叉を説きたまはんことを」と。世尊の宣はく、「目
犍連よ、不可思議なり。目犍連よ、未曾有なり。手を取らるゝまで愚者の座に留
⁵³まらんことや」と。更に世尊は比丘等に告げて次の如く宣へり、「比丘等よ、今よ
りして後、我は布薩を行はざるべく、波羅提木叉を説かざるべし。今よりして後、
汝等自ら布薩を行ふべく、波羅提木叉を説くべし。如來が不淨なる衆の中にあ
りて布薩を行ひ波羅提木叉を説くはこれ正理にあらず、可能にあらざるなり。
比丘等よ、大海にはこれ等八種の不可思議未曾有法あり。そを見〔且つ見〕て阿修
羅は大海を楽しむなり。何をか八となす。

〔一〕比丘等よ、大海は次第に凹み、次第に傾き、次第に低くなりて、斷崖の如く忽ち
にしては深からず。比丘等よ。大海は次第に凹み……断崖の如く、忽ちにして
は深からず。比丘等よ、こは大海に於ける第一の不可思議未曾有法なり。そを見

て阿修羅は大海を楽しむなり。

(二)復次に比丘等よ、大海には一定の法ありて「水岸」を越ゆることなし。比丘等よ、大海には一定の法ありて「水岸」を越ゆることなし、比丘等よ、こは大海に於ける第二の不可思議未曾有法なり。そを見て阿修羅は大海を楽しむなり。

(三)復次に比丘等よ、大海は死者の屍と俱に住むことなし。若し大海に死者の屍あらば速かに岸に運び陸に上らしむ。比丘等よ、大海は死者の屍と俱に住む……陸に上らしむ、比丘等よ、こは大海に於ける第三の不可思議未曾有法なり。そを見て阿修羅は大海を楽しむなり。

(四)復次に比丘等よ、如何なる大河にてもあれ、例へば恒伽、搖尤那、阿夷那、提薩羅、遊摩企、それ等が大海に達すれば、原の名モトと族とを捨て、唯大海とのみ稱せらる。比丘等よ、如何なる大河にてもあれ、例へば恒伽、乃至、原の名と族とを捨て、唯大海とのみ稱せらる。比丘等よ、世界に於ける諸の流は大海に入り、雨は空中より降り来る。

而もこれによりて、大海には減少も増加も見ゆることなし。比丘等よ、世界に於ける諸の流は：乃至：減少も増加も見ゆることなし。比丘等よ、こは大海に於ける第五の不可思議：乃至：阿修羅は大海を楽しむなり。

（六）復次に比丘等よ、大海は一味即ち鹹味なり。比丘等よ、大海は一味即ち鹹味なり。比丘等よ、こは大海に於ける第六の不可思議：乃至：阿修羅は大海を楽しむなり。

（七）復次に比丘等よ、大海には多數の寶無數の寶あり。そこにこれ等の寶例へば真珠摩尼琉璃碑磲璧石珊瑚銀金紅玉瑪瑙の如きものあり。比丘等よ、大海には多數の寶：乃至：瑪瑙の如きものあり。比丘等よ、こは大海に於ける第七の不可思議：乃至：大海を楽しむなり。

（八）復次に比丘等よ、大海は多數生類の住處なり。そこにこれ等の生類即ち帝釋天帝釋迦羅帝釋迦羅頻伽羅阿修羅龍乾闥婆あり。更に大海には百由旬の相のもの二百由旬の相のもの三百由旬の相のもの四百由旬の相のもの五百由旬の相のものあり。比丘等よ、大海は多數生類即ち：乃至：相のものあり。比丘等よ、こ

は大海に於ける第八の不可思議：乃至：大海を楽しむなり。

比丘等よ、これ等は大海に於ける八種の不可思議：乃至：大海を楽しむなり。
比丘等よ、これと同じく、この法律にも八種の不可思議未曾有法あり。これを
見て、比丘等はこの法律を楽しむなり。何をか八となす。

（一）比丘等よ、恰も大海は次第に凹み、次第に傾き、次第に低くなりて、斷崖の如く
忽ちにしては深からざるが如く、比丘等よ、この法律に於ても次第學次第行次第
道ありて忽ちにしては證智に達することなし。比丘等よ、この法律に於ても：
乃至：證智に達することなし、比丘等よ、こはこの法律に於ける第一の不可思議
未曾有法なり。そを見て比丘等はこの法律を楽しむなり。

（二）復次に比丘等よ、恰も大海には一定の法ありて〔水岸〕を越ゆることなきが如
く、比丘等よ、我、弟子等のために學處を定めたり、我が弟子等は假令命を取らるゝ
とも、そを犯すことなし。比丘等よ、我、弟子等のために：乃至：そを犯すことな
し、比丘等よ、こはこの法律に於ける第二の不可思議：乃至：この法律を楽しむ
なり。

曰比丘等よ、恰も大海は死者の屍と俱に住むことなく、若し大海に死者の屍あらば速かに岸に運び陸に上らしむるが如く、比丘等よ、汚戒にして惡法、不淨邪惡の行業あり、己の行爲を隱蔽し沙門にあらずして沙門なりと自稱し、梵行者にあらずして梵行者なりと自稱し、内心腐り、漏に満ち不淨の性を持てる、その者と〔大〕衆は俱に住むことなく、集ひて速かに彼を斥くるなり。彼比丘衆の中間に坐すと雖も、彼は〔大〕衆より遠ざかり、〔大〕衆も亦彼より遠ざかるなり。比丘等よ、汚戒にして：乃至：遠ざかるなり、比丘等よ、こはこの法律に於ける第三の不可思議：乃至：この法律を樂しむなり。

曰比丘等よ、恰も如何なる大河にてもあれ、例へば恆伽・搖尤那・阿夷那和提・薩羅遊擣企、それ等が大海に達すれば、原の名と族とを捨て、唯大海とのみ稱せらるるが如く、比丘等よ、四姓即ち刹帝利・婆羅門・吠舍・首陀羅の彼等が如來の教へたまへる法律に於て、家を出でて家なき出家の身となれば、原の名と族とを捨て、唯沙門釋子所屬のものとのみ稱せらるゝなり。比丘等よ、四姓：乃至：稱せらるるなり、比丘等よ、こはこの法律に於ける第四の不可思議：乃至：この法律を樂

しむなり。

毘比丘等よ、恰も世界に於ける諸の流は大海に入り、雨は空中より降り来るも、これによりて大海には減少も増加も見ゆることなきが如く、比丘等よ、多くの比丘等が無餘涅槃界に入るも、これによりて涅槃界には減少も増加も見ゆることなし。比丘等よ、多くの比丘等：乃至：見ゆることなし、比丘等よ、こはこの法律に於ける第五の不可思議：乃至：この法律を楽しむなり。

毘比丘等よ、恰も大海は一味即ち鹹味なるが如く、比丘等よ、この^⑩法[律]は一味即ち解脱味なり。比丘等よ、この^⑪法[律]は一味即ち解脱味なり、比丘等よ、こはこの法律に於ける第六の不可思議：乃至：この法律を楽しむなり。

毘比丘等よ、恰も大海には多數の寶無數の寶あり。そこにこれ等の寶例へば真珠摩尼・琉璃・碑礎・璧石・珊瑚・銀・金・紅玉・瑪瑙の如きものあるが如く、比丘等よ、この^⑫法[律]には多數の寶無數の寶例へば四念處・四正勤・四神足・五根・五力・七覺支・八正道等よ、こはこの法律に於ける第七の不可思議：乃至：この法律を楽しむなり。

内比丘等よ、恰も大海は多數生類の住處にして、そこにこれ等の生類即ち帝覺・
帝覺伽羅・帝覺羅頻伽羅・阿修羅・龍・乾闥婆あり、更に大海には百由旬の相のもの、二
百由旬の相のもの、三百由旬の相のもの、四百由旬の相のもの、五百由旬の相のもの
の存するが如く、比丘等よ、この法律は多くの善きものゝ住處にして、そこにこれ
等の善きもの即ち預流向のもの、預流果實現のために修行しつゝあるもの、一來
向のもの、一來果實現のために修行しつゝあるもの、不還向のもの、不還果實現の
ために修行しつゝあるもの、阿羅漢向のもの、阿羅漢果實現のために修行しつゝ
あるものあり。比丘等よ、この法律は多くの：乃至：修行しつゝあるものあり、
比丘等よ、こはこの法律に於ける第八の不可思議：乃至：この法律を楽しむな
り。

比丘等よ、これ等はこの法律に於ける八種の不可思議未曾有法なり。そを見
て比丘等はこの法律を楽しむなり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優
陀那を唱へたまへり、

蔽はれたるものには雨漏り、蔽はざるものには雨漏らじ。されば蔽は

れたるものはこれを開け、かくせばそれに雨漏ることあらじ」と。

六⁽¹⁾

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、尊者大迦旃延は阿槃提なる拘羅羅伽羅の波樓多山に住まれり。優婆塞蘇那俱胝耳は時に尊者大迦旃延の侍者なりき。獨坐思惟せる優婆塞蘇那俱胝耳には次の如き心の所念起れり、「尊師天迦旃延の法を説きたまへる如くんば、俗家に住める者には極めて完全に極めて清淨にして、恰も硯磲貝を削れる如き純潔なる梵行を行すること難し。我寧ろ鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、家を出てて家なき出家の身とならん」と。優婆塞蘇那俱胝耳は尊者大迦旃延に近づき、禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、優婆塞蘇那俱胝耳は尊者大迦旃延に次の如くいへり、「大德よ、こゝに獨坐思惟せる我に是の如き心の所念起れり、「尊師」大迦旃延の法を説きたまへる如くんば：乃至：出家の身とならんと。大德よ、尊師大迦旃延の我を出家せしめたまへ」と。かくいふや、尊者大迦旃延は優婆塞蘇那俱胝耳に告げて次の如くいへり、「蘇那よ、生涯一食一

臥の梵行は行じ易からず。望むらくは蘇那よ、汝は〔そこに〕在家人なるまゝにて、時に應じ諸佛の教なる一食一臥の梵行を行ぜよ」と。出家の希望を懷きし優婆塞蘇那俱胝耳にはその〔出家の〕念止みたり。再び獨坐思惟せる優婆塞蘇那俱胝耳には次の如き心の所念起れり、「尊師天迦旃延の法を説きたまへる如くんば：乃至：出家の身とならん」と。再び優婆塞蘇那俱胝耳は尊者大迦旃延に近づき……次の如くいへり、「大德よ、こゝに獨坐思惟せる我に：乃至：大德よ、尊師大迦旃延は我を出家せしめたまへ」と。かくいふや、尊者大迦旃延は優婆塞蘇那俱胝耳に告げて次の如くいへり、「蘇那よ、生涯：乃至：梵行を行ぜよ」と。再び出家の希望を懷きし優婆塞蘇那俱胝耳にはその〔出家の〕念止みたり。三たび獨坐思惟せる優婆塞蘇那俱胝耳には次の如き心の所念起れり、「尊師天迦旃延の法を説きたまへる如くんば：乃至：出家の身とならん」と。三び優婆塞蘇那俱胝耳は尊者大迦旃延に近づき……次の如くいへり、「大德よ、こゝに獨坐思惟せらる我に：乃至：大德よ、尊師天迦旃延は我を出家せしめたまへ」と。尊者大迦旃延は優婆塞蘇那俱胝耳を出家せしめぬ。その時、阿槃提^{アヴァンティ}、南^{スダッキナーバダ}路には比丘少な

かりしかば、尊者大迦旃延は三ヶ年を過ぎ辛酸苦難の後、こゝかしこより十群の比丘衆を集めて尊者蘇那に具足戒を授けたり。雨安居を終りて獨坐思惟せる尊者蘇那に次の如き心の所念起れり、「我未だ眼のあたりかの世尊を見奉りしことなく、唯かの世尊は斯く斯くなりと聞きしのみ。和尚若し我を聽したまはば、我は世尊應供正等覺者を拜せんがために赴かん」と。尊者蘇那は夕刻獨坐より起ちて尊者大迦旃延に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、尊者蘇那は尊者大迦旃延に告げていへり、「大德よ、こゝに獨坐思惟せる我に次の如き心の所念起れり、『我未だ眼のあたり：乃至：和尚若し我を聽したまはば、我は世尊應供正等覺者を拜せんがために赴かん』と」。尊者大迦旃延は曰く、「善き哉、善き哉。蘇那よ、汝はかの世尊應供正等覺者を拜せんがために行け。蘇那よ、汝は愛すべく信すべく諸根を鎮め意を落つけ最上の安息統御に達し、自ら制し自ら護り諸根を御したる龍象にてあるかの世尊を拜せん。さらば我が語により頭面を以て世尊のみ足を禮せよ。而して世尊の少病少惱にして起居輕安、氣力あり安樂に住したまふや否やを問ひ奉りて白せ、『大德よ、我が和尚たる尊者

大迦旃延は頭面を以て世尊のみ足を禮す。世尊の少病少惱にして：乃至：安樂に住したまふや否やを問ひ奉る」と。「諸、大德よ」と尊者蘇那は尊者大迦旃延の言を歎受し隨喜して、座より起ち、尊者大迦旃延を禮敬して、右繞の禮をなし坐臥の具を摺みて、鉢衣を携へ、舍衛城の方へ遊行に赴けり。次第に遊行して舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に達し、世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。

一隅に坐するや、尊者蘇那は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、我が和尚たる尊者大迦旃延は頭面を以て世尊のみ足：乃至：住したまふや否やを問ひ奉る」と。世尊の宣はく、「比丘よ、身體健かなりや。〔得る所の〕飲食命を繋ぐに足れりや。旅をなして疲れ少なかりしや。托鉢のために疲るゝ所なかりしや」と。

答へて曰く、「世尊よ、身體健かに、〔得る所の〕飲食命を繋ぐに足り、旅をなして疲れ少く、托鉢のために疲るゝ所なし」と。世尊は尊者阿難を呼びて次の如く宣へり、「阿難よ、この外來の比丘のために坐臥處を調へよ」と。尊者阿難は自ら思へらく、「世尊の人のために我に命じて、『阿難よ、この外來の比丘のために坐臥處を調へよ』と宣ふ時、世尊は自らその比丘と俱に同室せんことを望みたまふ。即

ち世尊は尊者蘇那と同室せんことを望みたまふなり」と。ために世尊の住したまへる室に、尊者蘇那の坐臥處を調べたり。世尊は夜遅くまで屋外に坐して時を過し、足を洗ひて家に入りたまへり。尊者蘇那も夜遅くまで家に入れり。世尊は夜の明け方起き出で、尊者蘇那を呼びて次の如く宣へり、「汝は比丘等のために法を説くの心なきや」と。「諾大德よ」と尊者蘇那は世尊に應諾して^⑩八八品中の十六偈を残りなく詠唱したり。尊者蘇那の詠唱終るや、世尊は甚だこれを隨喜し、次の如く宣へり、「善き哉、善き哉。比丘よ、比丘は八八品中の十六偈をよく學得し、よく記憶し、よく理解し得たり。明白にして誤りなく意義明かなる麗しき聲を有す。比丘よ、汝は法臘幾歳なりや」と。答へて曰く、「世尊よ、我は法臘一歳なり」と。世尊の宣はく、「比丘よ、汝何故にかくも遲れたるや」と。答へて曰く、「大德よ、我久しく諸欲に患難あることを見たり。されど在家の生活は邪魔多く、すること多く爲すべきこと多し」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

本質なき者は世の患難を見法を知り、聖者は惡に於て樂しまず、清淨なる

人は惡に於て樂しまざるなり」と。

60

七

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、尊者疑惑離カンカーレーヴタ曰は世尊の近くにありて、趺坐を組み身を直く保ちて、己の超越疑惑の清淨を觀察しつゝ坐せり。世尊は尊者疑惑離曰の「我が近くにありて、趺坐を組み身を直く保ちて、己の超越疑惑の清淨を觀察しつつ坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「この世或はかの世、自ら抱ける又他の抱ける如何なる疑をも、禪思者にして熱烈に梵行を行するものは總てこれを捨つ」と。

八^⑯

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへり。その時、尊者阿難はその布薩日の朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために王舍城に入れり。提婆達多は尊者阿難の托鉢のために王舍城を往來するを

見て、尊者阿難に近づき次の如くいへり、「法友阿難よ、今日よりして後、我は世尊の外に、比丘の外に布薩を行はん、僧伽の行事をも亦行はん」と。尊者阿難は托鉢のために王舍城を往來し、食後に托鉢より歸りて、世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、尊者阿難は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、我朝時内衣を著け鉢衣を携へて托鉢のために王舍城に入れり。大德よ、提婆達多は我が托鉢のために王舍城を往來するを見て、我に近づき、次の如くいへり、「法友阿難よ、今日よりして後……行はん」と。大德よ、今日提婆達多は僧伽を破らん。布薩と僧伽の行事とを行はん」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「⁽¹⁾善人には善はなし易く、悪人には善はなし難し。悪人には惡はなし易く、聖者には惡はなし難し」と。

九

是の如く我聞けり。世尊は或る時、大比丘衆と共に橋薩羅國を遊行したまへり。その時、衆多の若年婆羅門等激しき音をたてつゝ、世尊の近くを過ぎ行けり。

世尊は衆多の若年婆羅門等の激しき音をたてつゝ、その近くを過ぎ行けるを見たまへり。世尊はその事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「¹⁷辭の道を説く人の賢き語は多辯を望む限りは、「人に忘れられ、「自ら誰によりて導かれたりやを知ることなし」と。

一〇

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊園)に住まりたまへり。その時、尊者周利槃特^{チヨリバンダカ}は世尊の近くにありて、趺坐を組み身を直く保ち、〔正〕念を面前にかけて坐せり。世尊は尊者周利槃特の〔己の〕近くにありて、趺坐を組み身を直く保ち、〔正〕念を面前にかけて坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「豎立せる身、安住せる心を以て、立ち坐し、又は臥しつゝ、比丘はこの念を決定しながら過未の利益を得。過未の利益を得たる比丘は死王の見ざる處に往かんと。

茲に次の如き攝頌あり、

王短命、癩患者、童兒等と、布薩、蘇那離^{ソーナ・レーヴタ}曰、難陀、驥音を揚ぐる〔青年等〕、槃特^{パンダカ}と共に〔十〕なりと。

註 ❶ Compare: S. N. III, 18 Mallikā vol. I. P. 75.

❷ 「勝鬘」の原名 Mallikā を音譯して末利となすも可なり。

❸ 佛本行集經十一卷(大正藏三卷七〇一頁)、衆許摩訶帝經三卷(大正藏三卷九四〇頁)、過去現在因果經一卷(大正藏三卷六二七頁)等參照。

❹ Compare: S. N. XI, 2, 4. Dalidō vol. I. P. 231-232. 雜阿含四十六卷(大正藏二卷三三三頁)別譯雜阿含三卷(大正藏二卷三九〇頁)一部參照。

❺ Compare: S. N. LVI, II, I Tathāgatena vutta 1. vol. P. 423; Mv. I, 6, 29 P. 11.

❻ Compare: Cv. IX, 1-2 pp. 238-240; A. N. XIX vol. IV pp. 197-204; A. N. XX vol. IV pp. 204-208.

增一阿含三十七卷八難品四(大正藏二卷七五二一七五三頁)、增一阿含四十四卷十不善品(1)(大正藏二卷七八六頁)、中阿含八卷阿修羅經(大正藏一卷四七五一四七七頁)、中阿含九卷瞻波經(大正藏一卷四七八一四七九頁)、中阿含二十九卷瞻波經(大正藏一卷六一一頁)、恆水經(大正藏一卷八一七頁)、法海經(大正藏一卷八一八頁)、海八德經(大正藏一卷八一九頁)、五分律二十八卷(大正藏二二卷一八〇一一八一頁)、四分律三十六卷(大正藏二二卷八二四一八二五頁)、十誦律三十三卷(大正藏二三卷二三九一二四〇頁)

摩訶僧祇律二十七卷(大正藏'一一卷四四七頁)等參照。

⑦名と族との原語 namagotta を姓名と譯するも可ならん。

⑧⑨⑩⑪底本には單に dhammo とのみあれど還羅本には dhammadvayā とあり。

⑫摩訶僧祇律五卷(大正藏'一一卷二六三頁)にもあり。

⑬ Compare: Mv. v, 13, 1-10 pp. 194-197. 五分律二十一卷(大正藏'一一卷一四四頁) 四分律三十九卷(大正藏'一一卷八四五頁) 十誦律二十五卷(大正藏'一一卷一八一頁) 摩訶僧祇律二十三卷(大正藏'一一卷四一五一四一六頁)等參照。

⑭ Suttanipāta にあり。

⑮ Compare: Cv. VII, 3, 17 P. 198. 四分律四十六卷(大正藏'一一卷九〇九頁) 類似の文、佛傳律本に多し。

⑯ 五分律二十五卷(大正藏'一一卷一六四頁)にもあり。

⑰ Compare: Mv. X, 3 P. 349; Jātaka IX, 2 vol. III, P. 483.

第六品 生盲品

一^①

是の如く我聞けり。世尊は或る時、吠舍離城の大林なる重閣講堂に住まりたまへり。世尊は朝時、内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために吠舍離城に入りた

まへり。托鉢のために吠舍離城を往來し、食後に托鉢より歸りて、尊者阿難に告げて次の如く宣へり、「阿難よ、坐具を取り我日中休息のため遮頗羅祠堂に赴かんと欲す」と。「諾、大德よ」と尊者阿難は世尊に應諾して坐具を携へて、世尊の後より從ひ行けり。世尊は遮頗羅祠堂に近づき設けられたる座に著きたまへり。座に著きたまふや、世尊は尊者阿難に次の如く宣へり、「阿難よ、快きかな吠舍離城。快きかな優陀延祠堂^{ウタナ}。快きかな瞿曇祠堂。快きかなサッタンバ祠堂。快きかな多子祠堂。快きかなサーランダダ祠堂。快きかな遮頗羅祠堂。阿難よ、何人にもせよ、四神足を増修し實行し達成し完成し力行し積聚し實修したるものは若し望めば、彼一劫の間、若しは一劫以上の間生き伸び得べし。阿難よ、如來は四神足^{シムツ}を實修したり。阿難よ、若し望めば、如來は一劫の間、若しくは一劫以上の間生き伸び得べし」と。かくの如く、尊者阿難は世尊の明かなる徵を示したまひても、明かなる光を點じたまひても解了し得ざりき。而して世尊に白して次の如く望む所なかりき、「大德よ、多くの人々の利益のため、多くの人々の安樂のため、世間の慈愍のため、人天の便利利益安樂のために、世尊は一劫の間住ま^{とど}

りたまへ、善逝は一劫の間住まりたまへ」と。かの心は恰も惡魔のために憑かれたるが如くなりき。再び世尊は尊者阿難に告げて次の如く宣へり、「阿難よ、快きかな：乃至：如來は一劫の間、若しくは一劫以上の間生き伸び得べし」と。かくの如く、尊者阿難は世尊の：乃至：かの心は恰も惡魔のために憑かれたるが如くなりき。三たび世尊は尊者阿難に告げて次の如く宣へり、「阿難よ、快きかな：乃至：如來は一劫の間、若しくは一劫以上の間生き伸び得べし」と。かくの如く、尊者阿難は世尊の：乃至：かの心は恰も惡魔のために憑かれたるが如くなりき。世尊は尊者阿難に告げて次の如く宣へり、「阿難よ、汝行け。今正に時よしと思はばそをなせ」と。「諾、大德よ」と尊者阿難は世尊に應諾して、座を起ち禮敬し、右繞の禮をなして、近くなる一樹の下に坐せり。

尊者阿難の去りて久しからざるに、惡魔波旬は世尊に近づきて、一隅に立てり。一隅に立てて、惡魔波旬は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊は今般涅槃したまふべし、善逝は今般涅槃したまふべし。大德よ、今は世尊の般涅槃したまふべき時なり。世尊は曾て宣へり、「波旬よ、我が比丘なる弟子等にして知能

を得、よく自ら修練し、信解を得、〔最上の〕安穏を得、多聞にして持法者たり、大小の法を行ひ、行跡方正にして隨法行者たり、己の師のものを學びて〔他に〕語り説き示し公宣し開示し分別し明白にせざる間は、我般涅槃せざるべし。又起れる他人の非難を法を以てよく制御し、神通を伴へる法を説かざる間は、我般涅槃せざるべし」と。然るに大徳よ、今世尊の比丘なる弟子等は知能を得……己の師のものを學びて〔他に〕語り説き示し公宣し開示し分別し明白にす。又起れる他人の非難を法を以てよく制御し神通を伴へる法を説く。大徳よ、世尊は今般涅槃したまふべし、善逝は今般涅槃したまふべし。大徳よ、今は世尊の般涅槃したまふべき時なり。世尊は曾て語りたまへり、「波旬よ、我が比丘尼なる弟子等にして知能を得：乃至：隨法行者たり：乃至：神通を伴へる法を説く。大徳よ、世尊は今般涅槃したまふべし。大徳よ、今は世尊の比丘尼なる弟子等は：乃至：神通を伴へる法を説く。大徳よ、今は世尊の般涅槃したまふべき時なり。世尊は曾て語りたまへり、「波旬よ、我が優婆塞なる弟子等にして知能を得：乃至：神通を伴へる法

を説かざる間は我般涅槃せざるべし」と。然るに大徳よ、今世尊の優婆塞なる弟子等は知能を得：乃至：神通を伴へる法を説く。大徳よ、世尊は今、般涅槃したまふべし、善逝は今、般涅槃したまふべし。大徳よ、今は世尊の般涅槃したまふべき時なり。世尊は曾て語りたまへり、「波旬よ、我が優婆夷なる弟子等にして知能を得：乃至：神通を伴へる法を説かざる間は、我般涅槃せざるべし」と。然るに大徳よ、今世尊の優婆夷なる弟子等は知能を得：乃至：神通を伴へる法を説く。大徳よ、世尊は今、般涅槃したまふべし、善逝は今、般涅槃したまふべし。大徳よ、今世尊の般涅槃したまふべき時なり。世尊は曾て宣へり、「波旬よ、我が梵行の満ち榮えて、委しく説かれ、廣く知られ、衆人のものとなり、人天によりてよく説き明かされざる間は、我般涅槃せざるべし」と。然るに大徳よ、今世尊の梵行は満ち榮えて、委しく説かれ、廣く知られ、衆人のものとなり、人天によりてよく説き明かさるゝに至れり。大徳よ、世尊は今、般涅槃したまふべし、善逝は今、般涅槃したまふべし。大徳よ、今は世尊の般涅槃したまふべき時なり」と。かくいふや、世尊は惡魔波旬に告げて次の如く宣へり、「波旬よ、憂ふること勿れ。如來の般涅槃

槃は久しうからざるべし。今より三ヶ月の後如來は般涅槃すべし」と。世尊は遮頗羅祠堂に於て正念正智にして生命の素因を捨てたまへり。世尊の生命の素因を捨てたまふや、恐ろしく身の毛彌立つべき大地震あり、天鼓自ら鳴り響きぬ。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「生には平等あり、不平等あり。牟尼は生有の素因を捨てたまへり。内心喜び安靜を得たるものには鎧を破るが如くに己の生を破るなり」と。

二[◎]

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の東園なる鹿母講堂に住まりたま^{とど}ヘリ。⁶⁵その時、世尊は夕刻獨坐より起ちて、門屋外に坐したまへり。時に憍薩羅の波斯匿王は世尊に近づき、禮敬して一隅に坐せり。その時、七人の結髮外道七人の尼乾子の徒、七人の無衣外道七人の一衣外道、七人の普行沙門の腋毛・爪・體毛を長く伸ばせるもの等、種々の荷を天秤棒に負ひて、世尊の近くを過ぎ行けり。憍薩羅の波斯匿王は彼等七人の結髮外道七人の尼乾子の徒、七人の無衣外道、七人の一衣外道、七人の普行沙門の腋毛・爪・體毛を長く伸ばせるもの等の種々の荷

を天秤棒に負ひて、世尊の近くを過ぎ行くを見て、座より起ち上衣を一肩にし、右膝を地に附けて彼等七人の結髮外道・七人の尼乾子の徒七人の無衣外道・七人の一衣外道・七人の普行沙門等の方に合掌を向けて、次の如く三たび己の名を白せり、「大德等よ、我は橋薩羅の波斯匿王なり。大德等よ、我は橋薩羅の波斯匿王なり。大德等よ、我は橋薩羅の波斯匿王なり」と。橋薩羅の波斯匿王は彼等七人の結髮外道・七人の尼乾子の徒・七人の無衣外道・七人の普行沙門等の去りて久しからざるに、世尊に近づきて、禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、橋薩羅の波斯匿王は世尊に問ひて次の如くいへり、「大德よ、何人にもせよ、世に阿羅漢たるもの、阿羅漢道に入れるものゝ中に彼等は數へらるゝや」と。世尊答へて宣はく、「大王よ、汝在俗者、諸欲を享樂し、兒女に累せられて生活を營み、迦尸國産の栴檀香を受用し、華鬘・香・塗香を所持し金銀を受納する者にして、これ等は阿羅漢たり、これ等は阿羅漢道に入れるものなり」と[かく]知ること易からず。

大王よ、俱に住むことによりて「初めて」、戒は知らるべきなり。それも長き間[俱に住むことによる]。又少しく思惟することによるにあらず。如何に況んや思

惟せざることに於てをや。それは又智慧ある者によりて「知らるべく」智慧なき者によりてにあらず。大王よ、俱に交ることによりて「初めて」、清淨なることは知らるべきなり。それも長き間々乃至々智慧なき者によりてにあらず。大王よ、不幸なる場合に於て「初めて」、力は知らるべきなり。それも長き間々乃至々智慧なき者によりてにあらず。大王よ、會話によりて「初めて」、智慧は知らるべきなり。それも長き間々乃至々智慧なき者によりてにあらずと。波斯匿王は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、實に不可思議なり。大德よ、實に未曾有なり。世尊のよく宣ひしことや。即ち汝在俗者諸欲を享樂し：乃至々金銀を受納する者にして、「これ等は阿羅漢：乃至々阿羅漢道に入れるものなり」とかく知ること易からず。俱に住むことによりて：乃至々智慧は知らるべきなり。それも長き間々乃至々智慧なき者によりてにあらず。大德よ、これ等は我が臣下にして盜人たり、徘徊者たり、國中を廻りて還り來るなり。彼等先づ廻り、我は後より廻り行かん。大德よ、今や彼等はその塵埃を洗ひ清めて、よく沐浴し、よく油を塗り、鬚髮を調へ、白衣を著け、五欲の樂を所持し具足して耽るならんと。世

尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「總ての場合には努力すること勿れ、他の者の用人となる勿れ。他によりて生くる勿れ、法によりて生きよ、商估として行くこと勿れ」と。

三

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、世尊は自ら捨離したまひし諸の惡不善の法と、修練によりて成満したまひし諸の善法とを觀察しつゝ坐したまへり。世尊は自ら捨離したまひし諸の惡不善の法と、修練によりて成満したまひし諸の善法とを知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

『前にはありき、その時はあらざりき。前にはなかりき、その時はありき。前にはなかりき、後にもなかるべし、今もなし』と。

四

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、種々の外道派に屬する多くの沙門婆羅門、普行出家の

67

徒等は托鉢のために舍衛城に入れり、彼等は諸種の意見あるもの、諸種の信仰あるものの、諸種の好みあるもの、諸種の見處に依れるものなりき。或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき、「世界は常住なり。こは眞實にして他は虚妄なり」と。又或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき、「世界は無常なり。こは眞實にして他は虚妄なり」と。又或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき、「世界は有邊なり。こは眞實にして他は虚妄なり」と。又或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき、「世界は無邊なり。こは眞實にして他は虚妄なり」と。又或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき、「命と體とは同一なり。こは眞實にして他は虚妄なり」と。又或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき、「如來は死後あり。こは眞實にして他は虚妄なり」と。又或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき、「如來は死後なし。こは眞實にして他は虚妄なり」と。又或る

沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき、「如來は死後あり而も死後なし。こは眞實にして他は虚妄なり」と。又或る沙門婆羅門等は次の如く語り次の如く見るものなりき、「如來は死後あるにあらず亦死後なきにあらず。こは眞實にして他は虚妄なり」と。彼等は次の如くいひて口論し、議論し、論難し、各々銳き舌鋒を以て突き合ひつゝ日を送れり、「此の如きは法なり、彼の如きは法にあらず。此の如きは法にあらず、彼の如きは法なり」と。

その時衆多の比丘等は朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために舍衛城に入れり。托鉢のために舍衛城を往來して、食後に托鉢より歸り、世尊に近づきて禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、こゝに種々の外道派に屬する多くの沙門婆羅門、普行出家の徒等は托鉢のために舍衛城に入れり、彼等は諸種の意見あるもの：乃至：諸種の見處に依れるものなり。或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなり、「世界は：乃至：こは眞實にして他は虚妄なり」と。彼等は次の如くいひて、口論し：乃至：銳き舌鋒を以て突き合ひつゝ日を送るなり、「此の如きは法な

り：乃至：彼の如きは法なり」と。世尊は次の如く宣へり、「比丘等よ、外道派に屬する普行出家の徒等は盲目にして眼目なし、理を知らず、非理を知らず、法を知らず、非法を知らざるなり。彼等は理を知らざる者、非理を知らざる者、法を知らざる者、非法を知らざる者にして、次の如くいひて口論し：乃至：銳き舌鋒を以て突き合ひつゝ、日を送るなり、『此の如きは法なり：乃至：彼の如きは法なり』と。比丘等よ、今は昔、この舍衛城に一王ありき。比丘等よ、その王は或る家臣を呼びて次の如くいへり、「いざ家臣よ、汝は舍衛城に居る限りの生盲、それ等總てを一處に集めよ」と。比丘等よ、かの家臣は「諾、王よ」とその王に應諾して舍衛城に居る限りの生盲、それ等總てを引連れて王に近づきていへり、「王よ、舍衛城に居る限りの生盲等は集れり」と。その王は彼に告げて次の如くいへり、「然らば正に生盲等をして象を見せしめよ」と。かの家臣は「諾、王よ」とその王に應諾して生盲等をして象を見せしめていへり、「生盲等よ、象は是の如くなり」と。或る生盲等には象の頭を見せしめていへり、「生盲等よ、象は是の如くなり」と。又或る生盲等には象の耳を見せしめていへり、「生盲等よ、象は是の如くなり」と。又或る生

盲等には象の牙を見せしめていへり、生盲等よ、象は是の如くなりと。又或る生盲等には象の鼻を見せしめていへり、生盲等よ、象は是の如くなりと。又或る生盲等には象の體を見せしめていへり、生盲等よ、象は是の如くなりと。又或る生盲等には象の脚を見せしめていへり、生盲等よ、……と。又或る生盲等には象の背を見せしめていへり、生盲等よ、……と。又或る生盲等には象の尾を見せしめていへり、生盲等よ、……と。又或る生盲等には象の尾尖を見せしめていへり、生盲等よ、……と。比丘等よ、その時、かの家臣は生盲等に象を見せしめて、王に近づき次の如くいへり、「王よ、かの生盲等は象を見たり。今正に時よしと思惟したまはば、そをなしたまへ」と。比丘等よ、その王はかの生盲等に近づきていへり、「生盲等よ、汝等は象を見たるや」と。生盲等は答へていへり、「然り、王よ、我等は象を見たり」と。その王の曰く、「生盲等よ、象は如何なるものなりや語れ」と。比丘等よ、象の頭を見たる生盲等はいへり、「王よ、象は恰も甕^{かめ}の如し」と。比丘等よ、象の耳を見たる生盲等はいへり、「王よ、象は恰も簞^{すきさき}の如し」と。比丘等よ、象の牙を見たる生盲等はいへり、「……恰も犁先^{すきさき}の如し」と。比丘等よ、象の鼻を見たる生盲等はいへり、「……」

り、……恰も犂の轅の如し」と。……體を……「穀倉」と。……脚を……「柱」と。……「と。……背……「白」と。……尾……「杵」と。……尾尖……「等」と。彼等は次の如くいひて互に拳を以て争へり「此の如きは象なり、彼の如きは象にあらず。此の如きは象にあらず、彼の如きは象なり」と。

然るに比丘等よ、その王は大いに喜べり。比丘等よ、是の如く外道派に属する普行出家の徒等は盲目にして眼目なし：乃至：次の如くいひて口論し……銳き舌鋒を以て突き合ひつゝ日を送るなり、「此の如きは法なり：乃至：彼の如きは法なり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、「實にも或る沙門婆羅門等はこれ等の見に執著す。唯一部分のみを見る人々はこれを論じて争ふなり」と。

五

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊園]に住まりたまへり。その時、種々の外道派に属する多くの沙門婆羅門、普行出家の徒等は托鉢のために舍衛城に入れり、彼等は諸種の意見あるもの、諸種の信仰あ

るもの、諸種の好みあるもの、諸種の見處に依れるものなりき。或る沙門婆羅門等は次の如く語り、次の如く見るものなりき「我も世界も俱に常住なり。こは眞實にして他は虚妄なり」と。(六の四參照)或る沙門婆羅門等は……「我も世界も俱に無常なり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「我も世界も俱に常住にして而も無常なり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「我も世界も俱に常住にもあらず無常にもあらず……」と。又或る沙門婆羅門等は……「我も世界も俱に自ら作りしものなり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「我も世界も俱に他に作られしものなり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「我も世界も俱に自ら作りしもの而も他に作られしものなり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「我も世界も俱に自ら作らず亦他に作られず、無因にして生ぜしものなり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「苦樂は常住なり。我も世界も俱に常住なり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「苦樂は無常なり。我も世界も俱に無常なり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「苦樂は常住にして而も無常なり。我も世界も俱に常住にして而も無常なり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「苦樂は常住にもあらず

亦無常にもあらず。我も世界も俱に常住にもあらず亦無常にもあらず……と。
又或る沙門婆羅門等は……「苦樂は自ら作りしものなり。我も世界も俱に自ら
作りしものなり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「苦樂は他に作られしもの
なり。我も世界も俱に他に作られしものなり……」と。又或る沙門婆羅門等は：
「苦樂は自ら作りしもの而も他に作られしものなり。我も世界も俱に自ら作
りしもの而も他に作られしものなり……」と。又或る沙門婆羅門等は……「苦樂
は自ら作らず亦他に作られず、無因にして生ぜしものなり。我も世界も俱に自
ら作らず亦他に作られず、無因にして生ぜしものなり……」と。彼等は次の如く
いひて口論し：（六の四参照）「此の如きは法なり；乃至；彼の如きは法なり」と。
その時、衆多の比丘等は朝時（六の四参照）……世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、
こゝに衆多の……諸種の見處に依れるものなり。或る沙門婆羅門等は：乃至
：次の如くいひて口論し……銳き舌鋒を以て突き合ひつゝ日を送るなり、此の
如きは法なり；乃至；彼の如きは法なり」と。世尊は次の如く宣へり、「比丘等
よ、外道派に屬する普行出家の徒等は盲目にして眼目なし、理を知らず、非理を知

らず、法を知らざる者、非法を知らざるなり。彼等は理を知らざる者、法を知らざる者、非法を知らざる者にして、次の如くいひて口論し……銳き舌鋒を以て突き合ひつゝ日を送るなり、「此の如きは法なり」と乃至「彼の如きは法なり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「或る沙門婆羅門等はこれ等の見に住著すといふ。彼等は〔涅槃〕のその滲潤に達するなくして中間に沈む」と。

六

(六の五に同じ。但し次の如くに終る)

世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「これ等の人々は自といふ念に囚はれ、他といふ念に縛せらる。或るものにはこれを知ることなく、又そを矢なりと見ず。矢なりと豫め見たる人には我は爲すといふ念も起ることなく、他が爲すといふ念も起ることなし。これ等の人々は慢心を持ち、慢心の枷、慢心の繫縛あり、見處に於て精進すとも輪廻を超ゆることなし」と。

七

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。その時、尊者須菩提^{スブティ}は世尊の近くにありて、趺坐を組み身を直く保ち、無尋定に達して坐せり。世尊は尊者須菩提の〔己の〕近くにありて、趺坐を組み身を直く保ち、無尋定に達して坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「尋^⑩は滅され内に残りなく能く整へられ、執著を超えて色想なく四軌^⑪を超えたる人は再生に赴くことなし」と。

八

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへり。その時、王舍城に二つの集團ありて一人の遊女に執著し戀慕したり。彼等は口論し議論し論難し互に手を以て打ち、土塊を以て打ち、杖を以て打ち、刀を以て打てり。彼等はそこにて死に近づき又は死に均しき苦に逢へり。その時、衆多の比丘等朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために王舍城に入れり。托鉢

のために王舍城を往來し、食後に托鉢より歸りて世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、こゝに王舍城に二つの集團ありて：乃至：死に均しき苦に逢へり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「到達せしこと到達すべきこと、これ等二つは煩ひある未成學者の塵堆なり。學の精たる戒禁は生活なり、梵行は奉侍なり、といふ是一つの極なり。諸欲の中には過失なし」とかくの如くいふもの、是一つの極なり。これ等二つの極は墓場を増すものなり。墓場は邪見を増すものなり。彼等二つの極を知らずして、或る者は執著し或る者は通り過ぐ。それを知りてそこに居らざるものはそを以て知らしむるための務めは彼等になしと考ふと。

九

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊園)に住まりたまへり。その時、世尊は黒闇の夜、胡麻油燈の燃ゆる屋外に坐したまへ

り。その時、多くの蛾、その胡麻油燈中に落ち轉がり、災難に逢ひ、禍難に逢ひ、自滅に陥れり。世尊は多くの蛾のその胡麻油燈中に落ち轉がり、災難に逢ひ、禍難に逢ひ、自滅に陥れるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「走り近づき去り過ぐるも精體には到らず、唯新たなる繫縛を増すのみ。
蓋し恰も蛾の火中に陥るが如く見聞に精體ありとして、或る者は執著すればなり」と。

一〇

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。尊者阿難は世尊に近づきて、禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、尊者阿難は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、如來應供正等覺者出世したまはざる中は外道派に屬する普行沙門の徒等は尊ばれ重んぜられ貴ばれ供養せられ敬はれ衣服飲食物・坐臥具及び病氣の用品たる藥料等の資具を得たり。大德よ、如來應供正等覺者出世したまひしが故に、その時より外道派に屬

する普行沙門の徒等は尊ばれず重んぜられず貴ばれず供養せられず敬はれず衣服：乃至：病氣の用品たる薬料等の資具を得ざるなり。大德よ、今や世尊は比丘衆と俱に尊ばれ重んぜられ貴ばれ供養せられ敬はれ衣服：乃至：病氣の用品たる薬料等の資具を得たまふと。世尊の宣はく「然り阿難よ、如來應供・正等覺者出世せざる中は外道派に屬する普行沙門の徒等は尊ばれ：乃至：薬料等の資具を得たり。阿難よ、如來應供・正等覺者出世せしが故に、その時より外道派に屬する普行沙門の徒等は尊ばれず：乃至：薬料等の資具を得ざるなり。今や世尊は比丘衆と俱に尊ばれ：乃至：病氣の用品たる薬料等の資具を得るなり」と。世尊はこの事由を知りて、その時この優陀那を唱へたまへり。

「日昇らざる中はかの螢も光を放つ。日昇れば光を攝めて輝かず。外道等の輝くはかくの如し。正等覺者世に出でざる中は愚者は淨められず、弟子は輝かず。邪見の徒は苦より離れ得ざるなり」と。

攝頌に曰く、

生盲品第六

捨命、獨坐、それを云へり、といふと、〔二〕外道と、第七には須菩提^{スボーディ}といへると、遊女、走り過ぐるは第九にして〔第十の〕出生するといふの十なりと。

註① Compare: D. N. XVI Mahaparinibbāna-sutta vol. II pp. 23-26; S. N. LI. 10 Cetiya vol. V pp. 258-262; A. N. VIII 76, 1-9 vol. IV pp. 308-311. 長阿含二卷遊行經(大正藏)一卷一五頁參照。

② 生命の素因の原語 āyusāṅkhāra は生^ムんとする想ひの意なり。

③ 瑜伽師地論十九卷偈(大正藏)三十卷三八三頁(參照)。

④ 「平等」の原語 tula を獨英兩譯俱に短き意に解すれども今は從はず。而して sambhavam にて切りて譯せり。

⑤ Compare: S. N. III. 2, 1 Jatilo vol. I pp. 77-79. 雜阿含四十二卷(大正藏)二卷三〇五-三一〇六頁) 別譯 雜阿含四卷(大正藏)二卷三九九頁(參照)。

⑥ 我が臣下の原語 mamapurisa を右に引用せし漢譯は我家人・我所使人となす。

⑦ 徒衆者の原語 ocara^{kā} を放浪人探偵搜索者とも譯し得。W. Geiger は是を die Späher と譯せり。Zeitschrift für Buddhismus 1928 (3) S. 301.

⑧ Compare: Theragāthā v. 180 p. 23.

⑨ Compare: D. N. IX Pottiḥpāda-sutta vol. I pp. 187-188; M. N. LXIII Cūla-mālūnkyā-sutta vol. I pp. 426-431. 長阿含十七卷布吒婆樓經(大正藏)一卷一一一頁) 中阿含六十卷箭喻經(大正藏)一卷八〇四一八〇五頁) 一部參照^⑩引用經にもあり。

⑩ 如來の原語 tathāgata は有情生類の意なり。

⑪長阿含十九卷世記經(大正藏、一卷一二八—一二九頁) 大樓炭經三卷(大正藏、一卷二八九—二九〇頁) 起世經五卷(大正藏、一卷三三五頁) 起世因本經五卷(大正藏、一卷三九〇頁) 參照。

⑫瑜伽師地論十九卷偈(大正藏、三十卷三八四頁) 參照。「尋」の原語 vitakka は舊譯の覺なり。

⑬四軛の原語 catuyoga は四流と同一内容なり。

⑭ānusikkino にて切り yeva を yeca とす。暹羅本 參照。

第七品 小 品

一

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊園)に住まりたまへり。その時、尊者舍利弗は尊者羅婆那跋提(ラクンタカバティヤ)を諸の方便を用ひ法話によりて教示し激励し鼓舞し悦喜せしめたり。尊者舍利弗のために諸の方便を用ひ法話によりて教示せられ激励せられ鼓舞せられ悦喜せしめられたる尊者羅婆那跋提の心は執著を離れ煩惱を脱したり。世尊は尊者舍利弗のために諸の方便を用ひ法話によりて教示せられ激励せられ鼓舞せられ悦喜せしめら

れたる尊者羅婆那跋提の心の執著を離れ煩惱を脱したるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「上にも下にも一切處にもよく解脱し、こは我なりといふことをも見ず。

かくの如く解脱したる者は再び生を受けざらんがため曾て渡りしことなき暴流を渡れり」と。

二

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨[長者の遊]園に住まりたまへり。尊者舍利弗は尙ほ有學者なりと考へられたる尊者羅婆那跋提を益々盛に諸の方便を用ひ法話によりて教示し激励し鼓舞し悦喜せしめた
り。世尊は尊者舍利弗の尙ほ有學者なりと考へられたる尊者羅婆那跋提を諸の方便を用ひ法話によりて教示し激励し鼓舞し悦喜せしめたるを見たまへり。
世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「輪廻を断ちて彼は無欲に入れり。涸れ果てたる河は流れず、斷たれたる輪廻は轉することなし。これこそは苦の終りなれ」と。

三

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、舍衛城の人々度を過ぎて大いに諸欲に執し、それを樂しみ貪り、醉ひ狂喜し渴望し、諸欲に住著して日を送れり。衆多の比丘は朝時内衣を著け鉢衣を携へて托鉢のために舍衛城を往來し、食後に托鉢より歸りて世尊に近づき禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、こゝに舍衛城の人々々乃至諸欲に住著して日を送れり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「諸欲に執し諸欲に著せるものは結使に過あるを見ることなし。これ蓋し結使に執著せるものは廣くして大なる河を渡ることなればなり」と。

四

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、舍衛城の人々は度を過ぎて大いに諸欲に執し、それを樂しみ貪り、醉ひ狂喜し渴望し、盲目にして諸欲に住著して日を送れり。世尊は

朝時内衣を著け鉢衣を携へて托鉢のために舍衛城に入りたまへり。世尊は舍衛城に於て、これ等の人々の度を過ぎて：乃至⁷⁶：日を送れるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「欲に盲目なるもの、網に蔽はれしもの、愛欲の蔽ひ〔もの〕に蔽はれしもの、放逸の友に囚はれたるものは恰も筌^{さなづか}の口にある魚の如く、乳を飲む犢の親牛に向ふがごとくにして老死に赴く」と。

五^⑨

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨^{きとく}長者の遊園に住まりたまへり。その時、尊者羅婆那跋提は衆多の比丘等の後より從ひて、世尊に近づけり。世尊は尊者羅婆那跋提の衆多の比丘等の後より從ひて、顔色悪しく醜く、形體倭小にして、大いに比丘等の嘲笑を受くるが如き容貌をして遙より來れるを見たまへり。見るや、世尊は比丘等に次の如く宣へり、「比丘等よ、汝等はかの比丘が遙より來れるを見ざるや」と。答へて曰く、「否、大德よ〔我等彼を見る〕」と。世尊は次の如く宣へり、「比丘等よ、この比丘は大神力あり、大威力あ

り。又この比丘の曾て成就せざりしかの定は實に得易きものにあらず。更に又善男子の目的ありて、よく家を出で、家なき出家の身となりてその〔目的の〕無上梵行の窮極をば彼は現法に於て自ら證知し實現し逮達して住するなり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

部分に於て缺くるところなく白き蔽ひあり、一の輻ある車は轉ず。流れを斷ち苦なく縛なくして來れるを見よ」と。

六

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨〔長者の遊〕園に住まりたまへり。その時、尊者阿若憍陳如^{アシヤ・ゾー・ンガニヤ}は世尊の近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ちて、愛欲の滅盡たる解脫を觀察しつゝ坐せり。世尊は尊者阿若憍陳如の〔己の〕近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ちて、愛欲の滅盡たる解脫を觀察しつゝ坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「地中にその根なく葉あるなし。何處にか蔓樹あらんや。その縛より脱

せる堅固の士を誰か侮ることをよくせんや。天猶ほ彼を讃め稱ふ。梵天によりても亦讃め稱へらるゝ。

七

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨長者の遊園に住まりたまへり。その時、世尊は己の妄想念の滅盡を觀察しつゝ坐したまへり。世尊は己の妄想念の滅盡を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。
●その妄想も豎立もなく、繫縛も障礙をも超えたり。その欲を離れて往來せる牟尼をば人天兩界のものは侮り得るなし」と。

八

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨長者の遊園に住まりたまへり。その時、尊者大迦旃延は世尊の近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ち、身に向ける内念を面前に固く立てゝ坐せり。世尊は尊者大迦旃延の〔己の〕近くにありて、趺坐を組み、身を直く保ち、身に向ける内念を固く面前に立てゝ坐せるを見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱

へたまへり、

「若し人の身に向けたる念、一切時、常に確立してあらば、「我想」彼にもあらず、我にもあらざらん。〔我想〕彼にもあらじ、我にもこれなからん。次第に住するものにしてこゝに彼はやがて執著を超えん」と。

九

是の如く我聞けり。世尊は或る時、大比丘衆と俱に末羅國を遊行しつゝトウーナと稱する婆羅門村に達したまへり。トウーナの婆羅門居士等は實に釋迦族出にして出家せる沙門〔友〕瞿曇は大比丘衆と俱に末羅國を遊行しつゝトウーナに達せりといふを聞けり。彼等は井戸を草と糲穀とを以て縁^{ふち}まで満したり、「かの禿頭の徒似而非沙門の類に水を施すこと勿れ」とて。世尊は道より下りて一樹の下^{もと}に近づき、設けられたる座に著きたまへり。座に著きたまふや、世尊は尊者阿難に次の如く宣へり、「汝阿難よ、願くはその井戸より我に水を持ち來れ」と。かく宣ふや、尊者阿難は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、今その井戸はトウーナの婆羅門居士等により、草と糲穀とを以て縁まで満たされたり、「かの禿

頭の徒似而非沙門の類に水を施すことなかれ」とて。再び世尊は尊者阿難に次の如く宣へり、「汝阿難よ、願くはその井戸より……持ち來れ」と。再び尊者阿難は世尊に白^{まう}して次の如くいへり、「大德よ、今その井戸はトゥーナの婆羅門居士等により、草と糲穀とを以て縁まで満たされたり、かの禿頭の徒似而非沙門に水を施すこと勿れ」とて。三たび世尊は尊者阿難に次の如く宣へり、「汝阿難よ、願くはその井戸より……持ち來れ」と。「諾、大德よ」と尊者阿難は世尊に應諾して、鉢を携へかの井戸に近づけり。尊者阿難が近づくや、その井戸は草と糲穀とをば總て縁より吹き出し、清くして濁りなく澄みたる水は縁に到るまで満ちて流るゝが如くなりき。尊者阿難は思へらく、「[噫]實に不可思議なり。[噫]實に未曾有なり。如來の大神力あり、大威力あることや。蓋しかの井戸、我近づくや、その草と糲穀とをば總て縁まで吹き出して……流るゝが如くなればなり」と。鉢を以て水を携へ、世尊に近づきて、次の如く世尊に白^{まう}せり、「[噫]實に不可思議なり……流るゝが如くなればなり。世尊の水を飲みたまはんことを。善逝の水を飲みたまはんことを」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「若し一切時に於て水あらば、井戸を以て何をかなさん。愛を根本より破拆しては、何ものをか尋ねて歩まんぞ」と。

一〇

是の如く我聞けり。世尊は或る時、憍賞彌の瞿私多林に住まりたまへり。その時、優填王の苑に出でたる時、後宮火を失し、奢摩囉帝サマーヴィティを首として五百の婦女等死せり。その時、衆多の比丘等は朝時内衣を著け鉢衣を携へて、托鉢のために憍賞彌を往來し、食後に托鉢より歸りて世尊に近づき、禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、かの比丘等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、今優填王の苑に出でし時、後宮火を失し、奢摩囉帝を首として五百の婦女等死せり。大德よ、かの優婆夷等の未來は如何。その來生は如何」と。世尊の宣はく、「こゝにかの優婆夷等にして預流に達せるものあり。一來に達せるものあり。不還に達せるものあり。比丘等よ、總てかの優婆夷等は死して果報なきにあらず」。世尊はこの事由を知りてその時、この優陀那を唱へたまへり。

「愚癡に縛せられたるこの世は可能の相に見ゆ。本質に縛せられたる愚

人は闇黒に包まれて、永恆の如くに見ゆ。されど見るものには何物もあることなし」と。

小品第七

次の如き攝頌あり、

かくして二人の羅婆那跋提^{ラクシタカバティ}あり、諸欲に執する有情^一あり、羅婆渴愛^{ラクシタカバヒテ}の滅盡、妄想の滅盡、迦旃延^{カツチャーナ}、井戸^{ウツド}、優填^{ウターナ}なりと。

註① Compare: S. N. XXI, 6 Bhaddi vol. II p. 279. 雜阿含三十八卷(大正藏、一卷二七八頁) 別譯

雜阿含一卷(大正藏、二卷三七四頁)參照。

② 否定の間に對する和文の例に從ひて譯せり。

③ Compare: S. N. XLI. 5. Kāmabhu vol. IV p. 291 p. 292. 雜阿含二十一卷(大正藏、一卷一四九頁)參照。

④ 瑜伽師地論十九卷偈(大正藏、三十卷三八四頁)參照。

⑤ 「妄想」の原語 papañca を戲論と譯するも可なり。

⑥ 「可能の相」の原語 bhabbartūpa をよき相と譯するも可なり。

第八品 波吒離村人品

一

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨(長者の遊)園に住まりたまへり。その時、世尊は涅槃に關する法話を以て、比丘衆を教示し激励し鼓舞し悦喜せしめたまへり。かの比丘等は〔その意義〕を理解し思惟し凡て心の中に統和し耳を傾けて法を聞けり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「比丘等よ、かゝる處あり。そこには地も水も火も風も空無邊處も識無邊處も無所有處も非想非非想處もこれなく、此世他世もなく、月日の兩者もなし。比丘等よ、我はそれを來ともいはず、去ともいはず、住ともいはず、死ともいはず、生ともいはず。そこは依護なく轉生なく縁境なき處、是こそ苦の終りなれと我はいふ。」

二

(八の一に同じ) 世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「見難きは無我なりといふ。蓋し眞諦は見易からざればなり。知る人は愛を識知し見る人には何ものもなし」と。

三

八の一、二、三に同じ) 世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、
比丘等よ、生ぜざるもの、あらざるもの、造られざるもの、作爲されざるもの
あり。比丘等よ、若しその生ぜず、あらず、造られず、作爲されざるものあら
ざれば、そこには生ぜざるもの、あるもの、造られたるもの、作爲されたるもの
の出要はこれあらざるべし。比丘等よ、生ぜず、あらず、造られず、作爲され
ざるものあるが故に、生ぜざるもの、あるもの、造られたるもの、作爲されたる
もの、出要これあるなり」と。

四

(八の一、二、三に同じ) 世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、
依止あるものには動轉あり、依止なきものには動轉なし。動轉なければ
輕安あり。輕安あれば喜なし。喜なければ來去なし。來去なければ死

生なし。死生なれば此世もなく他世もなく兩者の中間もなし。これこそ苦の終りなれ」と。

五^②

是の如く我聞けり。世尊は或る時、大比丘衆と俱に末羅國に遊行して波婆に達したまへり。こゝに世尊は波婆なる鍛工の子なる淳陀の菴摩羅林に住まりたまへり。鍛工の子なる淳陀は世尊の大比丘衆と俱に末羅國に遊行したまひて波婆に達し、波婆なる己の菴摩羅林に住まりたまふといふを聞けり。鍛工の子なる淳陀は世尊に近づきて禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊は鍛工の子なる淳陀をば法話によりて教示し激勵し鼓舞し悦喜せしめたまへり。

鍛工の子なる淳陀は世尊によりて教示せられ激勵せられ鼓舞せられ悦喜せしめられて、世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊の比丘衆と俱に我が明日の食供養を受けたまはんことをと。世尊は黙してこれを諾したまへり。鍛工の子なる淳陀は世尊の諾したまひしことを知りて、座より起ち、世尊に禮敬し、右繞の禮をなして去れり。鍛工の子なる淳陀はその夜更けて後、己が家にて優れ

たる硬き又は軟き食物及び多量の栴檀樹茸を用意せしめ、次の如くいひて世尊⁸²に時を知らしめたり、「大德よ、今、正に食事調へり」と。世尊は朝時内衣を著け鉢衣を携へて、比丘衆と俱に鍛工の子なる淳陀の家に近づき、設けられたる座に著きたまへり。座に著きたまふや、世尊は鍛工の子なる淳陀に次の如く宣へり、「淳陀よ汝が調へたる栴檀樹茸を以て唯我のみを供養せよ。而して「同じく」調へたる他の硬き又は軟き食物を以て比丘衆を供養せよ」と。「諾、大德よ」と鍛工の子なる淳陀は世尊に應諾して、調へたる栴檀樹茸を世尊に供養し、「同じく」調へたる他の硬き又は軟き食物を以て比丘衆を供養せり。世尊は又鍛工の子なる淳陀に告げて宣はく、「淳陀よ、残りたる栴檀樹茸は汝穴を掘りてこれを埋めよ。淳陀よ我は人天魔梵の世界に於て、沙門婆羅門・人・天を合せたる集りに於て、如來を外にしてはそを食ひて十分に消化し得るものあるを見ず」と。「諾、大德よ」と鍛工の子なる淳陀は世尊に應諾して、残りたる栴檀樹茸を穴に埋め世尊に近づきて、禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、世尊は鍛工の子なる淳陀を法話によりて教示し激励し鼓舞し悦喜せしめたまひ座より起ちて去りたまへり。鍛工の

子なる淳陀の供養物を食したまへる世尊には激しき病起り、血痢にして死に近き程の強痛起れり。茲に於てか世尊は正念正智にして苦しむことなくして耐へ忍びたまへり。世尊は尊者阿難に告げて次の如く宣へり、「阿難よ、[いさ]我等拘戸那羅に赴かん」と。諸大德よと尊者阿難は世尊に應諾せり。

是の如く我聞けり。鍛工の子なる淳陀の供養物を食ひて雄者は激しく死に近き程の重き病に罹りたまへり。

梅檀樹茸を食したまへる師には重き病起れり。世尊は血痢しつゝも「我は拘戸那羅の都に赴かん」と宣へり。

時に世尊は道より下りて、一樹の下に近づき、尊者阿難に次の如く宣へり、「汝阿難よ、願くは我がために四重の僧伽梨衣を數け。我疲れたり。憩はんと欲す」と。「諸大德よ」と、尊者阿難は世尊に應諾して四重の僧伽梨衣を數けり。世尊は設けられたる座に著きたまへり。座に著きたまふや、世尊は尊者阿難に次の如く宣へり、「汝阿難よ、願くは我に水を持ち來れ。我渴きたり。阿難よ、我水を飲まんと欲す」と。かく宣ふや、尊者阿難は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、

今五百輛の車通過したり。車輪によりて斷たれたる、その水は淺く、搔き亂され濁りて流るゝなり。大德よ、かの迦屈嚙河は近くにあり、清淨にして甘美清涼透明・昇降に便にして快適なり。世尊はその處に於て水を飲み肢體を冷したまふべし」と。再び世尊は尊者阿難に次の如く宣へり、「阿難よ願くは我に水を持ち來れ。我渴きたり。阿難よ、我水を飲まんと欲す」と。再び尊者阿難は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、今：乃至：肢體を冷したまふべし」と。三たび世尊は尊者阿難に次の如く宣へり、「汝阿難よ、願くは：乃至：水を飲まんと欲す」と。諸大德よ」と尊者阿難は世尊に應諾し、鉢を携へて、その河に近づけり。その河は車輪によりて斷たれ、淺く、搔き亂され濁りて流れつゝありしが、尊者阿難の近づくや、清く澄み濁りなくして流れたり。尊者阿難は「噫實に不可思議なり、噫實に未曾有なり。如來の大神力あり、大威力あることや。この河は車輪によりて斷たれ、淺く、搔き亂され濁りて流れつゝありしが、我近づくや、清く澄み濁りなくして流るゝなり」といひて、鉢にて水を携へ世尊に近づきて次の如く白せり、「大德よ不可思議なり。大德よ、未曾有なり。如來の……濁りなくして流れつゝ

84あり。世尊の水を飲みたまはんことを。善逝の水を飲みたまはんことを」と。

世尊は水を飲みたまへり。

世尊は大比丘衆と俱に迦毘喫河に近づき迦毘喫河に入り、水を浴び、水を飲み、再び出てて菴摩羅林に近づき尊者淳陀に次の如く宣へり、「汝淳陀よ、願くは我に四重の僧伽梨衣を敷け。我疲れたり。臥せんと欲す」と。「諾、大德よ」と尊者淳陀は世尊に應諾して四重の僧伽梨衣を敷けり。世尊は〔速かに〕起たんとの想を抱きて、正念正智にして足を重ねて、右脇を下にし、獅子の臥に〔仰ひて〕臥したまへり。尊者淳陀はそこに世尊の面前に坐せり。

「佛陀は清く甘く澄める迦毘喫河に赴きて、師即ちこの世に並びなき如來は痛く疲れたる姿體にて水中に飛び入りたまへり。水を浴び水を飲み、^④比丘衆の群中にて尊ばれたまへる師は水を出で來りたまへり。

茲に師・世尊法を轉ずる人・大聖は菴摩羅林に近づきたまへり。

淳陀と名づくる比丘を呼びて次の如く宣へり、「我がために四重のものを擴げよ。我臥せんと欲す」と。

彼淳陀は修練せる人、〔佛〕にせかれて四重のものを速かに敷けり。
師は痛く疲れたる姿體にて臥したまへり。

淳陀はそこに〔佛〕の面前に坐せり」と。

時に世尊は尊者阿難に次の如く宣へり、「阿難よ、鍛工の子なる淳陀にかくい
ひて或は追悔の念を起さしむるものあらん、『法友淳陀よ、如來が汝の最後の供
養を受けて、涅槃に入りたまふことは汝の不利益なり、汝の惡得なり』と。阿難よ、
⁸⁵鍛工の子なる淳陀の追悔の念は次の如くいひて滅除せらるべきなり、『法友淳
陀よ、如來が汝の最後の供養を受けて、涅槃に入りたまふことは汝の利益なり、汝
の善得なり。法友淳陀よ、我は世尊の面前にありてこれを聞けり。面前にあり
て受納したり。〔即ち〕これ等二つの供養は正に相等しき結果あり、果報あり、他の
供養よりも遙かに大なる結果あり、果報あり。何をか二といふ。その供養物を
食して如來は無上の等覺を得たまふと又その供養物を食して無餘涅槃に入り
たまふと、これ等二つの供養は正に相等しき結果あり、果報あり、他の供養よりも
遙かに大なる結果あり、果報あり。鍛工の子なる尊者淳陀は壽命增長の業を積

みたり。尊者淳陀は麗色增長の業を積みたり。尊者淳陀は福樂增長の業を積みたり。尊者淳陀は生天の助となるべき業を積みたり。尊者淳陀は稱譽增長の業を積みたり。尊者淳陀は主權を得るの助けとなるべき業を積みたり」と。是の如くして鍛工の子なる淳陀の追悔の念は滅除せらるべきなり」と。世尊はこの事由を知りて、その時この優陀那を唱へたまへり。

『⁶與ふるものにこそ功德は増さるゝなれ。自ら制するものには怨恨の積まるゝことなし。善巧者は惡を捨て、貪瞋癡の滅盡よりして般涅槃に入れり』と。

六⁷

是の如く我聞けり。世尊は或る時、大比丘衆と俱に摩揭陀國に遊行して波吒離村^{リガーマ}に達したまへり。波吒離村の優婆塞等は「世尊の大比丘衆と俱に摩揭陀國を遊行して、波吒離村に達したまへり」といふを聞けり。波吒離村の優婆塞等は世尊に近づき、禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、波吒離村の優婆塞等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、世尊は我等の休息堂^{の供養}を受けたま

はんことを」と。世尊は黙してこれを諾したまへり。波吒離村の優婆塞等は世尊の諾したまへることを知りて座より起ち、世尊に禮敬し、右繞の禮をなして、かの休息堂に近づけり。近づきて、總て敷物を休息堂に敷きつめて、座を設け、水瓶を備へて、胡麻油の燈火を用意し世尊に近づけり。近づきて、世尊に禮敬し、一隅に立てり。一隅に立ちて、波吒離村の優婆塞等は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、休息堂は總て敷物を以て敷かれ、座は設けられ、水瓶は備へられ、胡麻油の燈火も用意せられたり。世尊は今正に時よしと思惟したまはば、そをなしたまへ」と。世尊は朝時内衣を著け、鉢衣を携へて比丘衆と俱に休息堂に近づき足を洗ひて、休息堂に入り、中央の柱に倚り、東方に向ひて坐したまへり。比丘衆も亦足を洗ひて、休息堂に入り、中央の壁に倚りて、世尊を前にし、東方に向ひて坐せり。波吒離村の優婆塞等も亦足を洗ひて、休息堂に入り、東方の壁に倚りて、世尊を前にし、西方に向ひて坐せり。

世尊は波吒離村の優婆塞等に告げて次の如く宣へり、「居士等よ、汚戒者の破戒には、これ等五種の患難あり。何をか五種となす。」こゝに居士等よ、汚戒者

破戒者は放逸を原として大なる失財に逢ふ。これ汚戒者破戒の第一の患難なり。(二)復次に居士等よ、汚戒者破戒者には惡名聞起る。これ汚戒者破戒の第二の患難なり。(三)復次に居士等よ、汚戒者破戒者は如何なる類の集會に入るにもせよ、そが刹帝利の集會にてもあれ、婆羅門の集會にてもあれ、居士の集會にてもあれ沙門の集會にてもあれ、自信なく恥ぢらひてこれに入る。これ汚戒者破戒⁸⁷の第三の患難なり。(四)復次に居士等よ、汚戒者破戒者は迷ひ惑ひて死す。これ汚戒者破戒の第四の患難なり。(五)復次に居士等よ、汚戒者破戒者は身壊れ命終りて後、惡生惡趣墮處地獄に生る。これ汚戒者破戒の第五の患難なり。居士等よ、これ等は汚戒者破戒の五種の患難なり。

居士等よ、持戒者の成戒にはこれ等五種の功德あり。何をか五種となす。(一)こゝに居士等よ、持戒者成戒者は不放逸を原として大なる積財を得。これ持戒者成戒の第一の功德なり。(二)復次に居士等よ、持戒者成戒者には好名聞起る。これ持戒者成戒の第二の功德なり。(三)復次に居士等よ、持戒者成戒者は如何なる類の集會にもせよ、そが刹帝利の集會にてもあれ、婆羅門の集會にてもあれ、居

士の集會にてもあれ沙門の集會にてもあれ、自信あり恥ぢらふことなく、これに入る。これ持戒者成戒の第三の功德なり。四復次に居士等よ、持戒者成戒者は迷ひ惑ふことなくして死す。これ持戒者成戒の第四の功德なり。五復次に居士等よ、持戒者成戒者は身壞れ命終りて後、善趣・天界に生る。これ持戒者成戒の第五の功德なり。居士等よ、これ等は持戒者成戒の五種の功德なり」と。

世尊は波吒離村の優婆塞等を夜の更くるまで、法話によりて教示し激勵し鼓舞し悦喜せしめたまひ、次の如くいひて、「彼等を去らしめたまへり、居士等よ、夜は更けたり。今正に時よしと思はばそをなせ」と。波吒離村の優婆塞等は世尊の法話を歎受し、隨喜して座より起ち、世尊を禮敬し、右繞の禮をなして去れり。

波吒離村の優婆塞等去りて久しうからざるに、世尊は空屋に入りたまへり。その時、摩揭陀の大臣須尼陀^{スニダ}と禹舍^{アサカラ}とは跋闍族^{バチャ}を防がんがために波吒離村に都を築きつゝありき。時に千といふ多數の天人ありて、波吒離村に於て土地を占有せり。某の場所にて大力ある天人等の土地を占有せるや、そこは大力ある王者や王大臣が住居を作らんとて心を傾けたる處なりき。某の場所にて中位の天

人等の土地を占有せるや、そこは中位の力ある王者や王大臣が住居を作らんとて心を傾けたる處なりき。某の場所にて力劣れる天人等の土地を占有せるや、そこは力劣れる王者や王大臣が住居を作らんとて心を傾けたる處なりき。世尊は清淨にして人〔眼〕を超えたる天眼を以て、それ等千といふ多くの天人等の波吒離村の土地を占有せるを見たまへり。某の場所にて大力ある……住居を作らんとて心を傾けたる處なりき。某の場所にて中位の……住居を作らんとて心を傾けたる處なりき。某の場所にて力劣れる……住居を作らんとて心を傾けたる處なりき。世尊は夜の明け方起きてて尊者阿難に告げて次の如く宣へり、「阿難よ、何人か波吒離村に於て都を築かんとするぞ」と。答へて曰く、「大徳よ、摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは跋闍族を防がんがために波吒離村に都を築かんとするなり」と。世尊は次の如く宣へり、「阿難よ、恰も三十三天〔の天子〕と俱に協議したるが如く、阿難よ、摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは跋闍族を防がんがために波吒離村に於て都を築きつゝあり。阿難よ、こゝに我は清淨にして人〔眼〕を超えたる天眼を以て、千といふ多くの天人等の波吒離村に於て土地を占有せる

を見たり。某の場所にて……作らんとて心を傾けたる處なりき。「三たび」阿難よ、この處が貴き場所たる限り、商賈の通路たる限り、こゝは貨物の〔積〕卸に於て第一の都たらん。「されど阿難よ、波吒離子〔城〕には火水及び離間の三障難あらん」と。

摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは世尊に近づきて互に禮を交し、悦喜すべき話、記憶すべき話をなして一隅に立てり。一隅に立ちて、摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは世尊に次の如く白^{まう}せり、「尊師瞿曇は比丘衆と俱に今日我等の食供養を受けたまはんことを」と。世尊は黙してこれを諾したまへり。摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは世尊の諾したまへることを知りて、己の家に赴けり。赴きて、己の家にて、優れたる硬き又は軟き食物を用意せしめ次の如くいひて、世尊に時を知らせり、「尊師瞿曇よ、今、正に食事調へり」と。世尊は朝時内衣を著け鉢衣を携へて、比丘衆と俱に摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍との家に近づき、設けられたる座に著きたまへり。摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは佛陀を首とせる比丘衆をば優れたる硬き又は軟き食物を以て、己の手にて飽きて謝するに至るまで供養したり。摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは世尊の食し了りて、鉢より手を下^{おち}したま

へるを見、一つの低き座をとりて一隅に坐せり。一隅に坐せる摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とに對して世尊は次の偈を以て隨喜の意を述べたまへり、

〔某の地方に賢き性質のもの等住居を定めて、戒徳あり、自制あり、梵行あるものを養ひ、

そこにありし天人等は彼等に供養物を捧ぐれば、彼等は供養せられて、自ら彼を供養し、尊敬せられて自ら彼を尊敬す。それより恰も母のその實子を愛撫するが如くに、彼を憐む。

天人に惠を受けたる人は常に善福を見る」と。

世尊は摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とに對し、この偈を以て隨喜の意を表し、座より起ちて去りたまへり。その時、摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは世尊の後より從ひ行けり。而して次の如く思へり、「今日沙門瞿曇の門より出でたまはば、その門を瞿曇門と名づけん。某の渡場より恆河を渡りたまはば、その渡場を瞿曇渡場と名づけん」と。世尊は門より出でたまへり。その門を瞿曇門と名づけたり。世尊は恆河に近づきたまへり。その時、恆河は鳥が水を飲み得る程に岸

と同じ高さに〔水〕満ちたりき。此岸より彼岸に赴かんと欲して或る人々は舟を搜せり。或る人々は筏を搜せり。或る人々は桴を作れり。世尊は恰も力士が曲げたる腕を伸ばし、伸ばせる腕を曲ぐるが如く、〔速かに〕比丘衆と俱に恒河の此岸より没して彼岸に立ちたまへり。此岸より彼岸に渡らんと欲して、かの人人の或るものは舟を捜し、或るものは筏を捜し、又或るものは桴を作れるを世尊は見たまへり。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、「或るものは橋を作り沼を捨て、河海を渡る。世の〔愚なる〕人々の桴を作る間に、かゝる賢者は渡り過ぐるなり」と。

七

是の如く我聞けり。世尊は或る時、隨僧那伽婆摩羅と俱に憍薩羅國に於て、大道に従ひて歩みたまへり。尊者那伽婆摩羅は途中岐路を見たり。見て、世尊に白して次の如くいへり、「大德世尊よ、これ我等の道なり、我等これを行かん」と。かくいふや、世尊は那伽婆摩羅に告げて宣へり、「那伽婆摩羅よ、これ我等の道なり、我等これを行かん」と。(中略) 三たび尊者那伽婆摩羅は世尊に白して次の如く

いへり、「大德世尊よ、これ我等の道なり、我等これを行かん」と。尊者那伽娑摩羅は、大德世尊よ、鉢衣こゝにありといひて、世尊の鉢衣をそこなる大地に捨て、去れり。尊者那伽娑摩羅がその道を行くや、途中盜人あり、出で來りて手足を打ち鉢を毀し僧伽梨衣を裂きたり。尊者那伽娑摩羅は毀されたる鉢を持ち裂かれ

たる僧伽梨衣を携へて世尊に近づき、禮敬して一隅に坐せり。一隅に坐するや、尊者那伽娑摩羅は世尊に白して次の如くいへり、「大德よ、我かの道を行くや、途中盜人あり、出で來りて手足を打ち鉢を毀し僧伽梨衣を裂けり」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり。

「俱に行じ一處に住し他の人々と混ぜる智者は惡を知りて捨つること、恰も乳を飲む蒼鷺の水を捨て、乳のみを飲むが如し」と。

八

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の東園なる鹿母講堂に住まりたまへり。その時、鹿母毘舍併の〔甚だ〕愛すべく喜ぶべき孫死せり。鹿母毘舍併は濡れたる衣服、濡れたる毛髪のまゝにて、日中世尊に近づき、禮敬して一隅に坐せり。

一隅に坐するや、世尊は鹿母毘舍佛建に告げて次の如く宣へり、「毘舍佛建よ、何が故に汝は濡れたる衣服、濡れたる毛髪のまゝにて、日中こゝに來れるや」と。答へて曰く、「大德よ、妾が甚だ愛すべく喜ぶべき孫死せり。妾はこの故に濡れたる衣服、濡れたる毛髪のまゝにて、日中こゝに來れるなり」と。世尊の宣はく、「毘舍佛建よ、汝は舍衛城に於てあらん限りの人數の子と孫とを得んと望むや」と。答へて曰く、「世尊よ、妾はそこにあらん限りの人數の子と孫とを得んと望むなり」と。世尊の宣はく、「毘舍佛建よ、されど舍衛城に於ては日々幾何の人々死するや」と。答へて曰く、「大德よ、舍衛城に於ては日々十人の人々死することあり。九人の人々……八人……七人……六人……五人……四人……三人……二人……大德よ、舍衛城に於て日々唯一人ののみ死することあり。大德よ、舍衛城に於て人々の死せざることなきなり」と。世尊の宣はく、「毘舍佛建よ、汝はそを如何に考ふるや、汝は何時何處にて濡れたる衣服を著け、濡れたる毛髪をなすことなからんや」と。答へて曰く、「大德よ、否かくの如きことこれあるべし。大德よ、妾にはそれ程多くの子や孫は不用なり」と。世尊は次の如く宣へり、「毘舍佛建よ、百の愛す

るものを持てる人には百の苦しみあり。九十の愛するものを持てる人には九十の苦しみあり。八十の愛するものを持てる人には八十の苦しみあり。七十の愛するものを持てる人には七十の苦しみあり。六十の愛するものを持てる人には六十の苦しみあり。五十の愛するものを持てる人には五十の苦しみあり。四十の愛するものを持てる人には四十の苦しみあり。三十の愛するものを持てる人には三十の苦しみあり。二十の愛するものを持てる人には二十の苦しみあり。十の愛するものを持てる人には十の苦しみあり。九の愛するものを持てる人には九の苦しみあり。八の愛するものを持てる人には八の苦しみあり。七の愛するものを持てる人には七の苦しみあり。六の愛するものを持てる人には六の苦しみあり。五の愛するものを持てる人には五の苦しみあり。四の愛するものを持てる人には四の苦しみあり。三の愛するものを持てる人には三の苦しみあり。二の愛するものを持てる人には二の苦しみあり。一の愛するものを持てる人には一の苦しみあり。愛するものを持たざる人は亦苦もなし。彼等には憂悲なく塵垢なく絶望なしと我はいふと。世尊はこ

の事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「何人にもせよ、この世にて諸の形に於て憂や悲や苦あるもの、これ等は喜を縁として存す。喜なき處にはこれ等もなし。それ故にこの世の何處にも喜なき彼等は安樂にして憂なし。されば無憂離塵を望むものはこの世の何處にも喜を生ずることなかれ」と。

九^⑩

是の如く我聞けり。世尊は或る時、王舍城の竹林、迦蘭陀迦園に住まりたまへり。尊者陀驃摩羅子^{ダラバラマラフタ}は世尊に近づきて、禮敬し一隅に坐せり。一隅に坐するや、尊者陀驃摩羅子は世尊に白して次の如くいへり、「善逝よ、今は我が涅槃の時なり」と。世尊の宣はく、「陀驃よ、汝今正に時よしと思はばそをなせ」と。尊者陀驃摩羅子は座より起ちて、世尊を禮敬し右繞の禮をなして空中に飛び上り、空中に趺坐を組みて火大定に住し、出でて涅槃を入れり。空中に飛び上り、空中に趺坐を組みて火大定に住し、出でて涅槃を入れる尊者陀驃摩羅子の身體の茶毘に附せられ、焼かれつゝある時、灰も煤も見られざりき。恰も醍醐味や胡麻油の焼か

れ燃やされたる時、灰も煤も残らざる如く、空中に飛び上り、中空に趺坐を組みて火大定に住し、出でて涅槃に入れる尊者陀驃摩羅子の身體の茶毘に附せられ焼かれつゝある時、灰も亦煤も見られざりき。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「身は壞れ想は滅び受も亦總て焼き失せたり。諸行は止息せり。意識は滅盡に達したり」と。

一〇

是の如く我聞けり。世尊は或る時、舍衛城の祇陀林なる給孤獨長者の遊園に住まりたまへり。その時、世尊は比丘等を呼びて、「比丘等よ」と宣へり。「大德よ」とかの比丘等は世尊に應諾せり。世尊は次の如く告げたまへり、「比丘等よ、陀驃摩羅子は空中に飛び上りて……灰も亦煤もなかりき。(八の九に同じ)恰も醍醐味や胡麻油の……灰も亦煤もなきが如く、比丘等よ、空中に飛び上り……涅槃に入れる陀驃摩羅子……灰もなく亦煤もなかりき」と。世尊はこの事由を知りて、その時、この優陀那を唱へたまへり、

「鐵斧にて打たれたる焰々たる火花の次第次第に消え失せて、何人もその行方を知らざる如く、よく解脱を得、欲や束縛の大海上を超え、動搖なき安樂に達したるものゝ行方は知るべきなし」と。

波吒離村人品第八

茲に次の如き攝頌あり、

涅槃は四度語られ、淳陀^{チュンダ}、波吒離^{バーダリ}村人、岐路、毘舍佉、陀驥^{ダッバ}と共に、この十なりと。

註① Compare: Itivuttaka 43 P. 37.

② Compare: D. N. XVII Mahāparinibbāna-sutta vol. II, pp. 41-43; 47-48. 長阿含三卷遊行經(大正藏、一卷一八—二〇頁)參照。

③ 註釋三九九頁に「スーカラマッダヴァン」とは豚の柔く脂多き生の肉なりと大註疏(Mahā-tthakathā)にいはれてあり。然るに或るものはスーカラマッダヴァンとは豚肉にあらずして豚によりて蹂み躊躇じられし筈なりといふ。又或るものは豚によりて蹂みつけられし處に生じたる蛇の傘」といふ。然るに又或るものはスーカラマッダヴァンとは或味よきものとなせり」とあり。併し今は長阿含三卷遊行經(大正藏、一卷一八頁)により栴檀耳^{アヌ}となす。

④比丘衆の群中にて尊ばれたまへる師の原文 *sattā purakkhatō bhikkhuugapassa majhe* は比丘衆の群中に先だちてとなすも可なり。

⑤四重のものとは四重の衣なり。

⑥瑜伽師地論十九卷偈(大正藏三十八五頁)參照。

⑦ Compare: D. N. XVI, Mahaparinibbāna-suttañña vol. II, pp. 10-15, Mv. VI, 28 pp. 226-230. 長阿含二卷遊行經(大正藏一卷一一一三三頁)參照。

⑧「否、かくの如きことこれあるべし」は本文にては no h'etam なれど否定の間に對する和文の例に從ひてかく譯しなり。

⑨喜の原語 Piya を愛著と譯するも可なり。

⑩⑪雜阿含三十八卷(大正藏二卷二八〇頁) 別譯雜阿含一卷(大正藏二卷三七八頁)參照。

この第一品は最上菩提にして、この第二品は目眞隣陀なり。最上難陀品は第三にして、最上彌醯品は第四なり。第五の最上品は蘇那にして、第六最上品は生盲なり。第七最上品は小[品]にして、第八品は最上波吒離村人[品]なり。

この八品、八十に満てる最上經はこれ無垢の具眼者により、信心を以て分

類せられ、指示せられたり。これを自説經とはいふなり。

自
説
經

如是語經（イティヴァッタカ）

かの世尊、應供、正^①自覺者に歸命す。

一集 第一品

一(一・二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一法を斷つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり。何れの一法ぞ。比丘衆よ、貪の一法を断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「貪婪の有情は、貪によりて悪趣に行く、
勝觀の者はその貪を、正しく知りて断つ、

断ちてこの世に、決して再來せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

二〇
〔二・一・二〕

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一法を断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり。何れの一法ぞ。比丘衆よ瞋の一法を²断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「瞋れる有情は、瞋によりて悪趣に行く、

勝觀の者はその瞋を、正しく知りて断つ、

断ちてこの世に、決して再來せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三〇
〔一・三〕

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一法を断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり。何れの一法ぞ。比丘衆よ、癡の一法を

断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なりと。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「癡れる有情は、癡によりて悪趣に行く、

勝觀の者はその癡を、正しく知りて断つ、

断ちてこの世に、決して再來せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けりと。

四(一・一・四)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一法を断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり。何れの一法ぞ。比丘衆よ、忿の一法を断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「忿れる有情は、忿によりて悪趣に行く、

勝觀の者はその忿を、正しく知りて断つ、

断ちてこの世に、決して再來せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五(一・一五)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一法を斷つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり。何れの一法ぞ。比丘衆よ、覆の一法を斷つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「覆へる有情は、覆によりて惡趣に行く、

勝觀の者はその覆を、正しく知りて断つ、

断ちてこの世に、決して再來せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六(一・一六)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一法を断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり。何れの一法ぞ。比丘衆よ、慢の一法を断つべし。汝等よ、我は不還果の成就者なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次

のごとく説き給ふ、

「おごれる有情は、慢によりて悪趣に行く、
勝觀の者はその慢を正しく知りて斷つ、

断ちてこの世に決して再來せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、ど。

七^⑨(二・一七)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一切を通知せず遍知せず、それに就きて心を抛棄せず断ぜざる者は苦を盡す能はず。されど比丘衆よ、一切を通知し遍知しそれに就きて心を抛棄し断ぜる者は苦を盡すを得」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「一切を一切より知り、いつも貪らざる者、

そは實に遍き智もて、一切の苦をば超ゆ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、ど。

八^⑩(二・一八)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、慢を通知せず遍知せず、それに就きて心を抛棄せず断ぜざる者は苦を盡す能はず。されど、比丘衆よ、慢を通知し遍知し、それに就きて心を抛棄し断ぜざる者は苦を盡すを得」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「慢をもてる慢にいましめられし人々は、有を喜べり、

慢を遍く知らざる者は轉生せむ。

慢を無みし、慢を斷ちて解脱せる者は、

そは慢結を伏して、一切苦をば越えたり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

九(一・一九)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、貪を通知せず遍知せず、それに就きて心を抛棄せず断ぜざる者は苦を盡す能はず。されど、比丘衆よ、貪を通知し遍知し、それに就きて心を抛棄し断ぜざる者は苦を盡すを得」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「貪婪の有情は、貪によりて悪趣に行く、

勝觀の者はその貪を、正しく知りて断つ、
斷ちてこの世に、決して再来せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一〇二・一〇)

6
げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、瞋を通知せず遍知せず、それに就きて心を抛棄せず断ぜざる者は苦を盡す能はず。されど、比丘衆よ、瞋を通知し遍知し、それに就きて心を抛棄し断ぜざる者は苦を盡すを得」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「瞋れる有情は、瞋によりて悪趣に行く、

勝觀の者はその瞋を、正しく知りて断つ、
斷ちてこの世に、決して再来せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

その攝頌

貪(二)、瞋(一)、及び癡(三)、忿(四)、覆五、慢(六)、一切(七)、

慢(八)、貪(九)、瞋(十)、更に一つを説ける品を第一と言へり。

註① Visuddhimagga P. 201 により「自覺者」と譯せり。

② 本事經一三(天正藏、一七卷六六五頁) 増一阿含卷第五、不逮品第十一・一(天正藏、二卷五六六頁) 參照。

③ 成就者とは債主が負債者より貸金を得たるが如く不還果を得たる者證せる者との意
なり(註釋、迦羅版 *Itivuttakavappana* 四九頁) 參照。

④ 本事經一四(天正藏、一七卷六六五頁) 增一阿含卷第五、不逮品第十一・二(天正藏、二卷五六六頁) 參照。

⑤ 本事經一五同上 增一阿含卷第五、不逮品第十一・三(同上) 參照。

⑥ 本事經一八同上 參照。

⑦ 本事經一六同上 參照。

⑧ 本事經二三(同六六六頁) 參照。

⑨ 本事經四七同六七〇頁 參照。

⑩ 過去等により一切諸種の有身法を貪らず、聖道に達するを以て貪等を生じないと
なり(註釋七〇頁)。

⑪本事經四五同上参照。

⑫蛆・蠅・蟲・蝗等の自性と雖も、慢によりて束縛され、慢結と相應する。さればこそ長夜住し、利己心によりて「これは我のなり」と諸行を非常に執する。こゝに於て常樂我等の願倒心をもつて欲等の有を喜ぶなり註釋七〇頁)。

⑬本事經三五(同六六八頁)参照。

⑭本事經三六(同上)参照。

⑮二つとは第九第一〇の二偈を指す。此の兩偈は第一・第二の再説なり。

一集 第二品

一一(二二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、癡を通知せず遍知せずそれに就きて心を抛棄せず斷ぜざる者は苦を盡す能はず。されど、比丘衆よ、癡を通知し遍知し、それに就きて心を抛棄し斷ぜる者は苦を盡すを得」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「癡れる有情は、癡によりて惡趣に行く、

勝觀の者はその癡を、正しく知りて斷つ、

断ちてこの世に、決して再來せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一一一・二二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、忿を通知せ
ず遍知せず、それに就きて心を抛棄せず断ぜざる者は苦を盡す能はず。されど、
比丘衆よ、忿を通知し遍知し、それに就きて心を抛棄し、断ぜざる者は苦を盡すを得
と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「忿れる有情は、忿によりて惡趣に行く、

勝觀の者はその忿を、正しく知りて断つ、

断ちてこの世に、決して再來せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一三(一・二・三)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、覆を通知せず遍知せず、それに就きて心を抛棄せず斷ぜざる者は苦を盡す能はず。されど、比丘衆よ、覆を通知し遍知し、それに就きて心を抛棄し断ぜる者は苦を盡すを得」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「覆へる有情は、覆によりて悪趣に行く、

勝觀の者はその覆を正しく知りて斷つ、

斷ちてこの世に、決して再来せず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一四 (二二四)

8
げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我は他に一蓋と雖も隨觀せず。比丘衆よ、蓋によりて覆はれし群生の長時に馳騁し流轉すること無明蓋の如くなるを。何となれば、比丘衆よ、無明蓋によりて覆はれし群生は長時に馳騁し流轉すればなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「他に一法もなし、有覆の群生の、

日に夜に流轉すること、癡に覆はれしごとくなるは。

されど癡を捨て、闇聚を破らば、

そは更に流轉せず、その因なれば」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一五(二・五)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我は他に一
結と雖も隨觀せず。比丘衆よ、結と相應せる有情の長時に馳騁し流轉すること
愛結の如くなるを。何となれば、比丘衆よ、愛結と相應せる有情は長時に馳騁し
流轉すればなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

^⑩「愛を第二とせる者は長時流轉し、
こゝの生、かしこの生の輪廻を超えず。

斯るわざはひを知り、愛の生するとき、
愛を無みし執らず、心せる比丘は遊行すべし」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一六(二二六)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我は有學未得者にして、無上なる安穩を希求しつゝ住する比丘のために内の縁と言ふものを作れり、比丘衆よ、如理作意の如く甚だ有用なるものを我は、他に一縁と雖も隨観せず。比丘衆よ、如理作意せる比丘は不善を捨離し善を修習す」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「正しき作意は、有學比丘の法なり、

他に斯く肝要なるものなし、至善を得んがため、

正しく勉めし比丘は、苦の滅を成さむ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一七(二二七)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我は有學未得者にして、無上なる安穩を希求しつゝ住する比丘のために、外の縁と言ふもの

を作れり、比丘衆よ、善知識の如く甚だ有用なるものを我は他に一縁と雖も隨觀せず。比丘衆よ、善知識の比丘は不善を捨離し善を修習すと。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

善知識の比丘は、從順にして恭敬なり、

知識の言葉を守り、正知・正念あり、

一切結縛の滅を、次第に遂げむと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一八(二二・八)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、世間に一法¹¹生じつゝあり、多衆生の不利のため多衆生の不安樂のため多くの衆生の不義のため不利のため天と人との苦のために生ず。何れの一法ぞ、破僧伽なり。即ち、比丘衆よ、僧伽の破壊せらるゝ時、相互に諍論するが如きことあり、又相互に訶責あり、又相互に凌蔑あり、又相互に棄捨あり、此處に於て若し未だ敬信せざる者あらば敬信せざるに至り、又既に敬信せる者は敬信せざるに至るなり」と。この義

を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「破僧伽の者は、永劫惡趣奈落に生るゝ者なり。
衆を悦べる非法に住める者は、安穩より墮ち、
僧伽の和合を破り、永劫奈落にさいなまると。」

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

一九(二二九)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、世間に一法生じつゝあり、多衆生の利のため、多衆生の安樂のため多くの衆生の義のため、利¹²のため、天と人との樂のために生ず。何れの一法ぞ僧伽の和合なり。即ち、比丘衆よ、僧伽の和合せる時、相互に諍論するが如きことなく、又相互に訶責なく、又相互に凌蔑なく、又相互に棄捨なし、此處に於て若し未だ敬信せざる者あらば敬信するに至り、又既に敬信せる者は敬信を増すに至るなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「僧伽の和合の樂と、和合の徳あり、

和合を悦べる、法に住める者は、安穩より墮ちず、
僧伽の和合をなし、永劫天界に樂しむなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

二〇(二二一〇)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、世に我は汚心の一類の人の心を自己の心⁽⁴⁾〔差別智〕もて分析して知る。此の人は死すべき時、重擔を捨つるが如く斯く地獄に〔生ぜむ〕。所以は如何。比丘衆よ、實に彼の心の汚るればなり。則ち比丘衆よ、世に一類の有情は心汚るゝに因りて身壞し死後、無幸處、惡趣、墮處、奈落に生ずるなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「世に一類の人の汚心を知りて、

佛陀は比丘衆の前に、この義を宣へり。

かの心汚れし者、死すべき時、

奈落に生れなむ。

運び捨てられむごと、そのごと、

げに有情は心の汚れに因りて、悪趣に行くなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

品 第二

その攝頌

癡(一二)、忿(一二)、及び覆(一三)、癪(一四)、欲(一五)、有學(一六・一七)、
破(一八)、悅(一九)、及び人(二〇)を品第二と稱せりと言はる。

註①本事經三七天正藏一七卷六六八頁参照。

②本事經四〇同六六九頁参照。

③本事經三八同六六八頁参照。

④本事經一同六六二頁参照。

⑤今説かれたる無明蓋より他にの意なり註釋七二頁。

⑥「一蓋とは一の障礙の法なり(同上)」。

⑦「隨觀」に見の隨觀と智の隨觀との二隨觀あり。その中、色を我なりと隨觀する等と説かれたるはこれ見の隨觀と名づけらる。更に無常なりと隨觀し常に非ず等と説かれたるはこれ智の隨觀と名づけらる。今の場合は智の隨觀の意なり(同上)。

⑧ 本事經二(同上)參照。

⑨ 愛を友とせる者の意。

⑩ 此の人間世界とそれ以外の有情居、或は有情現在の自性と未來の自性を指す等種々の意味あり(註釋七六——七七頁)。

⑪ 本事經五〇(同六七〇頁)參照。

⑫ 「未得者」とは阿羅漢を得ざる者の意。

⑬ 「安穩」とは欲有見・無明の四流によつて惱まされざること。

⑭ 自己内心に存在する因を指す。漢譯に「内強縁」とあり。

⑮ 本事經四九(同上)參照。

⑯ 善知識に親近する比丘の意なり。

⑰ 善知識の教を恭く受けて隨順し尊敬することなり。(註釋八四——八五頁)

⑯ 本事經九(同上)參照。

⑲ 原文は。kaccānaṁ aññathattāni hoti (ある變化あり)、註釋には「ある變化とは凡夫が信仰の消えたるを欣ぶ變化なり」(九〇頁)とあり、漢譯に已敬信者還不敬信とあるを意味するを以て敬信せざるに至る」と意譯せり。

⑳ 破僧伽と稱する衆(vagga)に於ける悦びなり(註釋九〇頁)。

㉑ 本事經一〇(同上)參照。

㉒ 本事經四(同六六三頁) 増一阿含卷第四、一子品五(大正藏、二卷五六二頁) A. N. vol. I, p. 8

爾傳藏、一七卷一二頁)参照。

㉓「汚心」とは瞋恚或は貪等の心を指す。

㉔原文は *cetasā* (心より)のみなるも註釋によつて挿入せり註釋九三頁。

㉕註釋に *paricchinditva* とあるによる。精神分析の意ならん同上)。

一集 第三品

一一(一・三・一)

14
げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、世に我は淨心の一類の人の心を〔自己の〕心〔差別智〕もて分析して知る、此の人は死すべき時、重擔を捨つるが如く斯く天界に〔生ぜむ〕。所以は如何。比丘衆よ、實に彼の心清淨なればなり。則ち、比丘衆よ、世に一類の有情は心淨きに因りて身壞し死後、善趣・天界に生ずるなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「世に一類の人の淨心を知りて、

佛陀は比丘衆の前に、この義を宣へり。

かの心淨らかなる者、死すべき時、

善趣に生れなむ。

運び捨てられむごと、そのごと、

げに有情は心淨きに因りて、善趣に行くなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

二二(三二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、福を畏るゝ
勿れ、比丘衆よ、こは樂・希・欲・愛・悅の同義語なり、即ちこれ福なり。則ち、比丘衆よ、我

は長時福の爲された時、長時の希・欲・愛・悅の果報の經驗せらるゝを知る。七年間
慈心を修習し、七壞成劫の間此の世に再來せず、比丘衆よ、退轉しつゝある劫の間に
正しく光音天に入り、進轉しつゝある劫の間に空なる梵天宮に生ず。比丘衆
よ、此處に於て正しく我は梵天・大梵天・征服者・非被征服者・一切を見たる權威者な
り。則ち、比丘衆よ、我は諸天の主帝釋たること三十六度なりき。更に法の法王
にして、四方に戰捷し、住民の安全を得せしめ、七寶成就せる轉輪王となりしこと
幾百度なりき。然らば地方王國に對する教説とは何ぞ。比丘衆よ、その我は斯

く思へり、今我斯る大神力者、斯る大威力者となりしは、こは我に於ける如何なる業の果なるや、如何なる業の果報なるや。その我は斯く思へり、今我斯る大神力者、斯る大威力者となりしは、こは我に於ける三の業の果なり、三の業の果報なり、則ち布施・調御・節制の〔果報なり〕^④と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「彼は未來の樂根たる福をば學ばむ、

又施と靜と慈心とを修めむ。」

三の樂因たるかゝる法を修め、

瞋なき樂しき世界に、智者は生る」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

二三^⑤(一・三・三)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一法あり、若し修習せる、多く作爲せる者は現法の利と未來の〔利の〕三一利を攝持し安住す。何れの一法ぞ。善法への不放逸なり。比丘衆よ、若し此の一法を修習せる、多く作

爲せる者は現法の利と未來の「利の三利を攝持し安住す」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「智者は福を作爲するに不放逸なるをたゞえ、
智者は不放逸にして二の利を攝持す。」

現法の利と、未來の利と、

利を現觀し持てるは、智者と言はる」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

二四二・三・四

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一人一劫に馳騁し流轉せる者の骸骨骨の堆積骨の積聚はかの毘^ビ補^ブ羅^ラ山の如く斯く大なり。若しそれを克く集めし者あらば蓄積せるものを失はざるべし」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「一人一劫に、積める骨は

山の如き量なり、と大仙は宣へり。

そは實に摩揭陀なる耆梨跋提の

ギリバダ

靈鷲山より高き、毘盧羅山より大なりと宣へり。

正智もて、聖諦、即ち苦と苦の集と、

苦を超ゆること、苦滅の道なる

聖なる八支の道とを觀するにより

その人は最高七度、馳騁して後

一切の結を無みする、滅苦者となると。

世尊はこの義をも亦説き給へりと、我聞けり、と。

二五 二・三・五

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、一法有り、それを犯せる人間には惡業として爲されざるはなしと我は説く。何れの一法ぞ。比丘衆よ、そは知りて妄語することなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「法を犯し、妄語をなし

他世を遮せる者は、惡として犯さざるなし」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

二六(二三六)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我知るが如く、斯く若し衆生は布施均分の果報を知らば與へずして食することなく且つかの慳惜の汚れを心に懷きて住することなけむ。假令かの最後の一搏最後の一口たりとも有する者は則ち若し受く可きもの有らば均分せずして食すること無からん。何となれば、比丘衆よ、我知るが如く衆生は斯く布施均分の果報を知らざるが故に與へずして食し、慳惜の汚れをその心に懷きて住するなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「均分の果報の如何に大果あるやを、

大仙の宣へるがごと、斯く若し衆生知らば、

清き心もて吝嗇の汚れを拂ひ、

大果の得らるゝ聖なる者に適時に施せよかし。

多くの人に飯與へ、應施者に施をなして

施主は此處より逝きて天上に到るなり。

かく天上に行ける者は欲を満し喜び

吝嗇を無み均分の果報を受く』と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

二七(二三七)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、あらゆる一切の有依福業事はかの慈心解脱の十六分の一の價值だになし、かの慈の心解脱こそ卓絶して光り輝き且つ照り渡るなり。譬へば、比丘衆よ、一切の星の光り輝きもかの月光の十六分の一の價值だになきが如し、月こそ卓絶して光り輝き且つ照り渡るなり。是の如く、比丘衆よ、あらゆる一切の有依福業事はかの慈心解脱の十六分の一の價值だになし、かの慈の心解脱こそ卓絶して光り輝き且つ照り渡るなり。譬へば、比丘衆よ、秋の季節なる雨期の最後の一ヶ月は清朗たる雲なき空の太陽が中空に昇りつゝ明きもの暗きものゝ一切を良く滅し而かも光

り輝き照り渡るが如し。是の如く、比丘衆よ、あらゆる一切の有依福業事はかの慈心解脱の十六分の一の價值だになし、かの慈の心解脱こそ卓絶して光り輝き照り渡るなり。譬へば、比丘衆よ、あけの明星の夜より晨にかけて光り輝き且つ照り渡るが如し。是の如く、比丘衆よ、あらゆる一切の有依福業事はかの慈心解脱の十六分の一の價值だになし、かの慈の心解脱は卓絶して光り輝き且つ照り渡るなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「かぎりなく慈を修め念ぜる、

依の滅を見し者は有結少し。

人若し一人にすら邪心なくして慈あらば、それによりて善人なり、
はた一切の人々に愍みの情あらば、聖者にして澤なす福を爲せるなり。
衆生の満てる地を〔法をもて〕服し、

⁽²⁰⁾ 仙のごとき王は施しつゝ遊行せり。

(馬の供犠人の供犠釘座強飲門は)

慈をよく修めし者の十六分の一の値だになし、

(一切群星の月光に於けるがごと)。

殺さず、殺さしめず、征めず、征めしむるなき。

一切衆生を慈しむものは、何人にも怨まるゝなし」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

攝頌

定心(二)、一利(三)、福(三)、毘盧山(一四)、

知而故妄語(三五)、及び布施(三六)、及び慈修習(一七)。

七のこれ等の經スラタマと前の二十とは

一法につきて集めし經スラタマ一十七なり。

一集を終る、二法に關しては下に叙ぶ。

註① 本事經五大正藏、一七卷六六三頁 增一阿含卷第四、一子品六天正藏、二卷五六三頁 參照。

A. N. vol. I, p. 89 甯傳藏、一七卷一二一三頁)

② 本事經になし。中阿含卷第三四、第二二福經天正藏、一卷六四五頁 增一阿含卷第四、護

心品七天正藏、二卷五六五頁 參照。

③ 其處に誰も衆生の生じて居らざる空いたる初禪地の梵天宮なり註釋九九頁。

④「地方王國」とは小王國 (Khuddakaraja) なり(註釋一〇一頁)。

⑤摩尼寶・象寶等を始めとしての寶を有する者及び住民の安全を得せしめる者、是の如きが「大神力」なり(同上)。

⑥輪寶等を所有するを以て更に亦如何なる苦痛をも作らざる者として一切王より尊敬を受けたる虛空を行く等、是の如きが「大威力」なり(註釋一〇一一二頁)。

⑦「布施」とは飯等の施物の喜捨。『調御』とは眼根等の調御、そして斯く取ることによる貪等の煩惱の調御なり。『節制』とは身・語の節制、こゝにも亦調御による煩惱の調御あり、その修習より成る福なり(註釋一〇二頁)。中阿含には布施・調御・守護とあり。

⑧本事經一二(大正藏、一七卷六六四頁) 増一阿含卷第四、護心品一(大正藏、二卷五六三頁)參照。

⑨本事經三(同六六二頁) 雜阿含卷第三四、九四七(大正藏、二卷二四二頁) S. N. XV, 10 (vol. II, p. 185) 參照。

⑩極七有或は極七返を指す。

⑪本事經五四(同六七一頁) 中阿含卷第三、度經(大正藏、一卷四三五頁) 偶は法句經世俗品(同四卷五六六頁) Dhammapada v. 176 (今卷四四頁) 參照。

⑫本事經五一(同上) 參照。

⑬「欲を満し」とは天の享樂等求めらるべき一切の欲を實現し満足し自ら歡喜に浸ることなり(註釋一一七頁)。

⑭ 本事經四八同六七〇頁(參照)。

⑮ 「有依」とは依・(upadhi) 卽ち蘊を有することを意味す。

⑯ 「慈心解脱」とは慈の修習によつて得たる第三・第四禪定なり。所以は慈とは近行(禪) *upā-* *cāra* 或は安(定) *appāna* を得ることなりとも言はれたり。「心解脱」とは安定を得ることのみが言はれたり、所以は障礙等に關する法より心を良解脫する修習によつて心解脱は言はれる註釋一八頁)。近行禪と安定に就ては清淨道論に詳し。

⑰ 「光る」とは煩惱の清淨を謂ふ。

⑯ 「輝く」とは殘餘の一切法に於て等しく輝くことなり。

⑯ 「照り渡る」とは慈心解脱の煩惱を遠離せるを月世界に譬へて言へるなり。

⑰ 原語 *rājasi* とは仙の如き法王なり(註釋一二三頁)。

⑲ S. N. vol. I, p. 76 〔南傳藏、一二卷一三一頁〕に同文あり。英譯の脚註に佛音の註を参照して説明せり。

二集 第一品

二八(二・一・二)

23
げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、二法を成就せる比丘は現法に於て苦に住し、患ひを有し、惱みを有し、焦慮を有し、身壞したる死後の惡趣期待さるべし。何れの二ぞ。諸根に於ける不護門と食に於ける不知量となり。比丘衆よ、此等の二法を成就せる比丘は現法に於て苦に住し、患ひを有し、惱みを有し、焦慮を有し、身壞したる死後の惡趣期待さるべし」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「眼と耳と鼻と、はた舌・身意と、

これらの門を守らざる比丘の

食の量を知らざると、諸根に節制なきは、
身の苦しみと、心の苦しみの苦を受く。

日か夜か何れかに、焼かれし身、焼かれし心もて
かゝる者は苦に住するなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

24
げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、二法を成就せらる比丘は現法に於て樂に住し、患ひなく、惱みなく、焦慮なく身壞したる死後の善趣期待さるべし。何れの二ぞ。諸根に於ける護門と食に於ける知量となり。比丘衆よ、此等の二法を成就せる比丘は現法に於て樂に住し患ひなく、惱みなく、焦慮なく、身壞したる死後の善趣期待さるべし」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「眼と耳と鼻と、はた舌・身意と、

これらの門を守る比丘の

食の量を知ると、諸根に節制なるは、

身の楽しみと、心の楽しみの樂を受く。

日か夜か何れかに、焼かれざる身、焼かれざる心もて
かゝる者は樂に住するなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三〇(ニ・一・三)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等焦惱さるべき二の法あり。二とは何ぞ。比丘衆よ、茲に或者は善を作さず、拂惡(善)を作さず、護畏を作さず、惡を作し、頑固を作し、罪過を作す。彼は『我は善を作さりき』とて惱み、『我は惡を作せり』とて惱む。比丘衆よ、此等は焦惱さるべき二の法なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「身惡行をなし、あるは語惡行、

意惡行をなし、他の惡とし言はるゝものを[なし]、
善き業をなさず、あまた不善をなし、

愚しき者は身壞して、そは奈落に生るゝなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三一(二・四)^⑥

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等焦惱さるべき二の法あり。二とは何ぞ。比丘衆よ、茲に或者は善を作し、拂惡(善)を作し、護畏を作し、惡を作さず、頑固を作さず、罪過を作さず。彼は『我は善を作せ

り」とて惱まず、我は惡を作さゞりき」とて惱まず。比丘衆よ、此等は焦惱さるべからざる二の法なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「身惡行を斷ち、あるは語惡行、

意惡行を斷ち、他の惡とし言はるゝものを〔断ち〕、
不善業をなさず、あまた善をなし、

賢しき者は身壞して、そは天界に生るゝなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三二三・一五

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、二法を成就せる人は重擔を捨つるが如く、斯く地獄に〔生ぜむ〕。何れの二ぞ。惡戒と惡見となり。比丘衆よ、此等の二法を成就せる人は重擔を捨つるが如く、斯く地獄に〔生ずるなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「惡しき戒と、惡しき見との
これらの二法を成就せる者、

その愚しき者は、身壞して地獄に生るゝなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三三(三・一・六)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、二法を成就²⁷せる人は重擔を捨つるが如く、斯く天界に「生ぜむ」。何れの二ぞ。善戒と善見となり。比丘衆よ、此等の二法を成就せる人は重擔を捨つるが如く、斯く天界に「生ずるなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「善き戒と、善き見との

これらの二法を成就せる者

その賢しき者は、身壞して天界に生るゝなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三四(三・一・七)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、無勤・無愧なる比丘は、等覺を證する能はず、涅槃を證する能はず、無上なる安穩を證する能は

ず。比丘衆よ、有勤有愧なる比丘は等覺を[證するを得]、涅槃を[證するを得]、無上なる安穩を證するを得」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「努力なく、愧なく、懶惰なる、精進を缺ける

惛睡多き、無慚、不敬なる、

かゝる比丘は、最上等覺に至るを得じ。

念あり、深慮あり、定あり、努力あり、愧あり、不放逸なる者は、

生死の結縛を斷ちて、今、無上等覺に至るべし」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三五三・一八

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、諸人の詭詐のため、諸人の矯妄のため、利養恭敬・稱譽勝利のため、又人は斯く我を知れとて、梵行に住するに非ず。却つて比丘衆よ、律儀のためと捨離のため梵行に住するなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、
 律儀のため、捨のための、患ひに打たるゝなき梵行、

そは涅槃に沈み行く、と世尊は説き給へり。

この大道は、大仙の歩み給ひけるものなり。

師の教をよくまもり、佛の示し給ひしごと、

それを踏める人々は、苦邊を爲すべし」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三六(三一・九)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、諸人の詭詐のため、諸人の矯妄のため、利養恭敬稱譽勝利のため又人は斯く我を知れとて、梵行に住するに非す。却つて、比丘衆よ、通知のためと遍知のため梵行に住するなりと。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「通知のため、遍知のための患ひに打たるゝなき梵行、

そは涅槃に沈み行く、と世尊は説き給へり。

この大道は、大仙の歩み給ひけるものなり、

師の教をよくまもり、佛の示し給ひしごと、

そを踏める人々は、苦邊を爲すべしと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三七(ニ・一〇)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、二法を成就³⁰せる比丘は現法に於て多くの快樂と歡喜とに住し、有漏の滅に對する如理の努力を有す。如何なる二ぞ。憂ふべき事に對する憂ひと憂ひに對しての如理の努力となり。比丘衆よ、此等の二法を成就せる比丘は現法に於て多くの快樂と歡喜とに住し、有漏の盡に對する如理の努力を有す」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「智者は憂ふべき事を憂ひ、

熱ある、賢なる比丘は慧を觀るべし。

斯く熱と靜けさもて住めるは、慢なく

心の寂靜と相應し、苦の盡を成すべしと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

その攝頌

これら二人比丘(1八・二九)、焦惱さるべき焦惱さるべからざる(11〇・三一)、他世による(111・三11)。

有勤(三四)、無詐(三五・三六)、及び歡喜による(三七)、これらの十なりと。

註①本事經六一(大正藏、一七卷六七三頁)参照。

②本事經六二同上参照。

③本事經六三(同上)参照。

④善(kalyāna)と拂惡(kusala)とは同義語にして前者は利を生ずること、未來の樂幸福の義、後者は惡を振り拂ふこと(kucchittasalana)を意味す。

⑤苦の畏れ、輪廻の畏れを護ること註釋一三四頁)。

⑥本事經六四(同上)参照。

⑦本事經六七同六七四頁)参照。

⑧本事經六八(同上)参照。

⑨本事經八二同六七九頁)参照。

⑩「等覺」は聖道の義涅槃は煩惱の絶対に休止せる不死大涅槃無上なる安穩」は阿羅漢果を

意味す註釋一三九頁。

⑪本事經七四(同六七六頁)参照。

⑫忠ひに打たるゝなきは an+ti+ha(已)と讀む。渴愛等の雜染に現世來世に忠はさることなきの意なり(註釋一四七頁)。

⑬本事經七三(同上)参照。

⑭漢譯相當經なし。

⑮生老病死の苦及び過去現在未來に亘る根本の苦に對し畏れを懷くなり(註釋一五一二頁)。

⑯生れ出づる苦等を觀じ精進方便により正しき精勤により不善法を捨て善法の修習をするなり(同上)。

二集 第一品

三八(三二二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、如來應供正自覺者は二の尋思を大いに修行し給ふ、安穩の尋思と孤獨の〔尋思と〕なり。比丘

衆よ、如來は無害の欣喜と無害の悦樂とあり。比丘衆よ、如來はこの無害の欣喜と無害の悦樂あるところの尋思を大いに修行し給ふ。我はこの威儀によりて如何なる有情も非情も害することなし」と。比丘衆よ、如來は孤獨の欣喜と孤獨の悦樂とあり。比丘衆よ、如來は此の孤獨の欣喜と孤獨の悦樂あるところの尋思を大いに修行し給ふ。不善なるものを捨離す」と。故に比丘衆よ、汝等も亦無害の³²欣喜と無害の悦樂とに住すべし。比丘衆よ、汝等の中かの無害の欣喜と無害の悦樂とに住せる者は則ち尋思を大いに修行するならむ。「我々はこの威儀により如何なる有情も非情も害することなし」と。比丘衆よ、孤獨の欣喜と孤獨の悦樂とに住すべし。比丘衆よ、汝等の中かの孤獨の欣喜と孤獨の悦樂とに住せる者は則ち尋思を大いに修行するならむ。「あらゆる不善を、あらゆる未だ捨離せざるものを作り、我々は捨離せり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「耐ふべからざるものを作り、如來佛陀は、
その二の尋思を修行し給ふ、

一を安穩尋思と言ひ、二を孤獨[尋思]と言ふ。

暗を消し彼岸に行ける大仙は、かの利を得、力を得、漏なく、一切の渴愛を盡せる解脱者なり。

その牟尼こそ最後身を得たる

慢を断ち老の彼岸に達せる者なり。

山巔の巔に立てる者の四方に人を見下すごと

そのごと一切眼の賢者は、法の殿に上り

憂ひを無みせる者は、憂ひに沈めると、生老に惱める人々を見下すと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

三九(二・二・二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、如來・應供・正自覺者の二種の説法差別して存す。如何なる二ぞ。『惡より惡を見よ』と言ふはこれ第一の説法なり。『惡より惡を見て茲に嫌厭し、離れ、離脱せよ』と言ふはこれ第二の説法なり。比丘衆よ、如來・應供・正自覺者の此等二種の説法差別して存すと。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「一切衆生を愍める如來佛陀の

差別の教を見よ、二法は說かれたり。

惡を見よ、又離れよ、されば離れし心に、

苦の終りあらむ」と。

世尊はこの義をも亦說き給へりと我聞けり、と。

四〇二・二・三

げにこれを世尊は說き應供は說き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、無明は不善法に到達する先驅なり、後に無慚と無愧あり。されど、比丘衆よ、明は善法に到達する先驅なり、後に慚愧あり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく說き給ふ、

「あらゆる惡趣、此世にも彼世にも

みな無明を根とせる、望みと欲との累なり。

惡欲あり、無慚不敬なるをもて

それより惡を生ず、されば地獄に墮するなり。

されば貪と欲と無明とを離れ

明を生ぜし比丘は、一切の悪趣を断つべし」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

第一 詠品

四一(三・二・四)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、甚だ不足せる者とは聖なる慧の不足せる衆生なり、彼等は現法に於て苦に住し、患ひを有し、惱みを有し、焦慮を有し、身壞したる死後の悪趣期待さるべし。比丘衆よ、不足せざる者とは聖なる慧の不足せざる衆生なり、彼等は現法に於て樂に住し、患ひなく、惱みなく、焦慮なく、身壞したる死後の善趣期待さるべし」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「慧の足らざるをもて名色に執せる

天と共になる世を見て、こは眞なりと思ふなり。

慧は良くこの世にて未來を洞察し、

生存の亡ぶを正しく知るなり。

かの天と人とは、自覺者、思念を有する者、
有慧者最後身を持てる者を羨むなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

四二（三二・五）

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等二種の白法は世間を護るなり。二とは何ぞ。慚及び愧なり。比丘衆よ、若し此等の二種の白法世間を護らすむば、この世に母或は叔母或は義理の叔母或は阿闍梨の妻或は師の妻（の差別）を識らるゝこと無けむ。恰も山羊・羊・雄鶲・野猪・犬・豺の如く世間は混亂に陥らむ。されど、比丘衆よ、此等二種の白法は世間を護るが故に母或は叔母或は義理の叔母或は阿闍梨の妻或は師の妻（の差別）は識らる」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「慚と愧とを、若し常に知らば、

〔善法に入れる白法〕を根とせる者は、生死に赴かず。

常に慚と愧とに近づける、

梵行を增長せる者は後有を盡すなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

四三(三二六)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、無生無有無作無爲あり。比丘衆よ、若しその無生無有無作無爲なくむば此處に生有作爲の出離は知られざるべし。されど、比丘衆よ、無生無有無作無爲あるが故に生有作爲の出離は知らるべし」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、「生と有と起と作と爲と不定と、

老死に襲はれしと病巣と脆きものと、

食(渴愛)の導因とを、悦ぶを得ず。

そを出離せるは静けく、疑ひを越えて安けし、

無生・無起・無憂・無染の道は

苦の法を無みせる、諸行の静まりし安けさなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

四四^⑨(三・二七)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等二の涅槃界あり。二とは何ぞ。有餘依涅槃界及び無餘依涅槃界なり。比丘衆よ、有餘依涅槃界とは何ぞ。比丘衆よ、此處に應供たる比丘は已に漏を盡し、〔梵行〕に住し、作すべき事を辨じ、重擔を捨て、自義を證し、有結を盡し、正しき智によりて解脱せり。彼の五根は安立し、それに傷はるゝことなきが故に喜びと喜びならざることを經驗し、樂しきと苦しきとを感じらる。彼は貪を滅し、瞋を滅し、癡を滅したるものなり、それを、比丘衆よ、有餘依涅槃界と説く。然らば、比丘衆よ、無餘依涅槃界とは何ぞ。比丘衆よ、此處に應供たる比丘は已に漏を盡し、〔梵行〕に住し、已に作すべき事を辨じ、重擔を捨て、自義を證し、有結を盡し、正しき智によりて解脱せり。比丘衆よ、此處にその一切の知覺せるものを喜ばざる者は清涼ならむ、それを、比丘衆よ、無餘依涅槃界と説く。比丘衆よ、これ二の涅槃界なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「此等二種の涅槃界は具眼者たる斯る無依者によりて明されたり。
 初界は現法の有に導くもの（愛等）を盡せる有餘依にて、
 他は未來一切の有を滅せる無餘依なり。」

この無爲の道を知り、心解脱し、有に導くものを盡せる
 法味に達し、滅を悦べる者は斯る一切の有を捨てり」と。
 世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

四五(二・二・八)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、獨居を欣喜し、獨居を悦樂し、内に心寂靜と隨順し、靜慮を離れず、勝觀を成就し、空處を增長して住すべし。比丘衆よ、獨居を欣喜し、獨居を悦樂し、内に心寂靜と隨順し、靜慮を離れず、勝觀を成就し、空處を增長して住せる者は二果の中の一果期待さる、現法に於ける智（阿羅漢果）或は「煩惱の餘依あらば不還果なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「心しじまなる、慎ましき、思念し、專念せる者は、

正法を勝觀し、欲を離る。

不放逸を悦び放逸を見ては畏る、安穩なる者は減損し得べからで、涅槃にのみ近づくなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けりと。

四六(二二一九)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、學ぶべきものゝ勝利を有し、最上の慧を有し、解脫味を有し、至上なる四念處觀に住すべし。比丘衆よ、學ぶべきものゝ勝利を有し、最上の慧を有し、解脫味を有し、至上なる四念處觀に住せる者は二果の中の一果期待さる、現法に於ける智_{阿羅漢果}或は「煩惱の餘依あらば不還果なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、「學を圓満し、法を斷たず、最上の慧を有ち、生の滅盡を見たる、

その牟尼こそ最後身を持し、慢を捨て老の彼岸に達せる者なり。

されば靜慮を悦び等持せる熱心なる者は生の滅盡を見たり。

比丘衆よ、兵を擁する魔を服し、生と死とを越えし者たれ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

四七⁽²⁰⁾ (三・二・一〇)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、覺悟し、正念し、正知し、等持し、悅豫し、此等を勝觀し、諸善法に於て時宜を勝觀して住すべし。比丘衆よ、覺悟し、正念し、正知し、等持し、悅豫し、此等を勝觀し、諸善法に於て時宜を勝觀せる比丘は二果の中の一果期待さる、現法に於ける智(阿羅漢果)或は(煩惱の)餘依あらば不還果なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「醒めし者はこれを聞け、眠れる者は覺めよ、

醒むるは寢ぬるに勝り、醒めし者に畏なし。

醒め正念し、正知し、等持し、悦び、勝觀せる者、

そは時宜に正法を修し、心を集中し暗を消すべし。

されば實に覺醒を得よ、熱心なる靜慮を有てる

賢しき比丘は生老のほだしを斷ちて、

此處に無上菩提を證せむ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

四八(三二二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、彼等二人はそれを捨てざるをもて無幸處・奈落に墮する者なり。二人とは誰ぞ。凡そ梵行者に非ずして梵行者なりと稱する者、又凡そ圓滿清淨なる梵行を修せる者を無根なる非梵行をもて誹謗する者なり。比丘衆よ、此等二人はそれを断たざるをもて無幸處・奈落に墮する者なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「僞を言ひて奈落に墮つる人、爲してなさじと言ひけむ人、
かの二人は逝きて、等しく他世に惡業の者となるなり。
頸に袈裟をかけし多くの者も惡法を守らば、

惡人等は惡業により奈落にぞ生るべし。

破戒無慚の者は國の團飯をはまむより
火のごと焼ける鐵丸を喰ふに如かじ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

四九（三・二・一二）

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、二見によりて障礙されたる人と天との或者は執著し、或者は超越す、されど具眼者は見るなり。然らば、比丘衆よ、或者は執著すとは何ぞ。比丘衆よ、有を喜ぶ、天と人の身」を受けたる有を享樂せる者はかの滅有の法を説かれし時、心踊躍せず、晃耀せず、安穩ならず、愛著を感じず、是の如く、比丘衆よ、或者は執著するなり。然らば、比丘衆よ、或者は超越すとは何ぞ。併し或者は有に惱まされ「有を慚ぢらひ嫌厭しつゝ、⁴⁴有の滅をば歡喜す。この意味は身の壞したる死後切斷され、失はれ、再度の死あることなし、これ安穩、これ最勝、これ眞實なりと謂はると。比丘衆よ、是の如く或者は超越するなり。比丘衆よ、具眼者は見るとは何ぞ。比丘衆よ、此處に存せるものを存するものとして見る存せるものを存するものとして見て存在の嫌惡と離貪と滅盡とに入るなり。比丘衆よ、是の如く具眼者は見るなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次の如く説き給ふ、

「在るものをして見、在るもの超えしは、
如實に解脱し、有愛を盡す。」

若し在ることを知りて、有と非有との愛を離るれば、
比丘は在ることを滅し、後有あらじ」と。
世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

二集を終る

その攝頌

二根(三八・二九)、二焦惱(三〇・三一)、戒による他世の二(三一・三三)
無愧(三四)及び二種の詭詐(三五・三六)、憂ふべきによる(三七)、此等の十。
尋思(三八)、教説(三九)、明(四〇)、慧(四一)、法による(四二)は第五。
無生(四三)、界(四四)、獨居(四五)、學(四六)及び覺悟による(四七)、
無幸處(四八)及び見(四九)の二十二は明されたり、と。

註① 本事經八六天正藏、七卷六八〇頁参照。
② 本事經七六同六七六頁参照。

③ 本事經九〇(同六八一頁)參照。

④ 漢譯相當經なし。

⑤ 本事經八五同六八〇頁) A. N. vol. I, p. 51 (南傳藏、七卷七七頁) 雜阿含卷第四七(大正藏二卷三四〇一—一頁) 增一阿含卷第九慚愧品二(同五八七頁) 參照。

⑥ 漢譯相當經なし。

⑦ Udana, VIII, 3 (p. 80-81) に同文あり。(今卷111六頁)。

⑧ 底本に jarāmarapasaṅkhataṁ とあるも暹羅本の註により sanghatatām と改む。

⑨ 本事經七八同六七八頁) 參照。

⑩ 重擔とは蘊煩惱・現行(現前の諸行)の三を指す。

⑪ 自義とは阿羅漢果を意味す。

⑫ 阿羅漢は諸行無常等と如實智により知見し、一切煩惱を斷盡せる心解脫及び涅槃解脫を有するなり(註釋二一七頁)。

⑬ 佛法天慧・一切眼の五眼を有するもの。

⑭ 覆と見とに依らざるもの或は貪結等に依らざるもの。

⑮ 原文は pahāṇsu (打てり) とあるも註釋に「打てりとは捨てり (Pajahāṇsu) なり」といふ(註釋二一九頁)。

⑯ 本事經八一同六七八頁) 參照。

⑰ 減損し得べからで「とは寂靜(止)と勝觀(觀)、或は道と果とに依るが故に退歩すること

能はず、未だ達せざるもの進んで成滿することなり(註釋二二二頁)。

⑯增上戒學增上心學増上慧學を指す。

⑰底本には念とのみあるも註により補へり。

⑯本事經八〇(同六七八頁)参照。

⑭本事經九三同六八二頁)参照。

⑮A. N. vol. I, p. 26 參照。(南傳藏、一七卷四三八頁)。

⑯「無根なる」とは見等の根なきをもつて見聞を疑へりといふ其等非難すべき根によりて遮するを以てなり(註釋二三〇頁)。

⑰Dhammapada vv. 306-308 參照。(今卷六四一六五頁)。

二集 第一品

五〇(三・一・一)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ此等は三の不善根なり。三とは何ぞ。貪不善根・瞋不善根癡不善根なり。比丘衆よ此等は實に三の不善根なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次の如く説き給ふ。

貪と瞋と癡とは、恶心の者を害ふ

自ら生ぜしものにて、竹の自果の如し^①と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五一(三・一・二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、此等は三界なり。三とは何ぞ。色界・無色界・滅界なり。比丘衆よ、此等は實に三界なり^②と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説きたまふ、

●
色[界]を識りて、無色[界]に停まらず、

滅[界]に解脱せる人々は、死を捨てし者なり。

無漏正自覺者は、身もて不死の界に觸れ

依著を離れ、依著の捨を現じ給ひ、

無憂離染の道を説き給ふと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五二(三・一・三)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、此等は三受なり。三とは何ぞ。樂受・苦受・不苦不樂受なり。比丘衆よ、此等は實に三受なりと。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「專念し、熟慮し、思念せる佛弟子は、

受と受の生を知る、

心止みしとき、滅へ導かるゝ道を知り、

受を滅したる比丘は、欲を無み、涅槃に入りし者なり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五三(三・一四)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、此等は三受なり。三とは何ぞ。樂受・苦受・不苦不樂受なり。比丘衆よ、此等は三受なり。比丘衆よ、樂受は苦より見らる可く、苦受は投槍より見らる可く、不苦不樂受は無常より見らるべし。實に、比丘衆よ、比丘の樂受は苦より見たるもの、苦受は投槍より見たるもの、不苦不樂受は無常より見たるものなり。比丘衆よ、正しく見たる、

渴愛を断ち、結縛を退轉せしめ、正しく慢を洞察し、苦を滅したるところの比丘は聖者と言はる」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「苦より樂を見、投槍より苦を見たる、

賢しき者は無常より不苦不樂を見たり、

かく正しく見たる比丘は、此處に「受を解脱す、

神通を悟れる、賢しき者こそ、繼離れし牟尼なれ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五四(三一五)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三求なり。三とは何ぞ。欲求有求、梵行求なり。比丘衆よ、此等は實に三求なり」と。この義を世尊は宣ひ、此處に次のごとく説き給ふ、

「専念し、熟慮し、思念せる佛弟子は

求と求の生を知る。

心止みしとき、盡へ導かるゝ道を知り、

求を盡したる比丘は、欲を無み涅槃に入りし者なり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五五(三・一・六)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三求なり。三とは何ぞ。欲求有求・梵行求なり。比丘衆よ、此等は實に三求なり」と。この義を世尊は宣ひ、此處に次のごとく説き給ふ。

欲求有求・梵行求共に

〔貪等の見處の堆積より、こは眞なりと執す。〕

一切の貪を離れ、愛を盡し解脱し

求を捨て、見處を滅し、

求の盡きし比丘は、無欲・無疑なり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五六(三・一・七)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三漏

なり。三とは何ぞ。欲漏・有漏・無明漏なり。比丘衆よ、此等は實に三漏なり」と。

この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ

「専念し、熟慮し、思念せる佛弟子は

漏と漏の生を知る。

心止みしとき、滅へ導かるゝ道を知り、

漏を盡したる比丘は、欲を無み涅槃に入りし者なり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五七(三一八)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三漏なり。三とは何ぞ。欲漏・有漏・無明漏なり。比丘衆よ、此等は實に三漏なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「欲漏を盡し、無明を捨て、

有漏を破り、依著を無み、解脫せる者は

魔^④とその象とを服し、最後身を得るなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五八(三・一九)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三愛なり。三とは何ぞ。欲愛有愛非有愛なり。比丘衆よ、此等は實に三愛なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「欲の縊と相應し、有と非有とに心染まり、

魔の縊にむすぼれし人々は安らひなく、

生死にさ迷へる衆生は、輪廻に赴く。

されど愛を斷ち、有と非有との愛を離れ、

漏盡に達せる者はこの世にて彼岸に渡りし者なり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

五九(三・一〇)

51 げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ三法を成就せらる比丘は魔の域を超えて太陽の如く輝くなり。如何なる三ぞ。比丘衆よ、此

處に比丘は無學の戒蘊を成就し、無學の定蘊を成就し、無學の慧蘊を成就す。比
比衆よ、此等三法を成就せる比丘は魔の域を超えて太陽の如く輝くなり」と。こ
の義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「戒と定と慧とをもてる者は、

魔の域を超えて、日のごと輝くなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

品 第一

攝頌

根界(五〇・五二)、及び受二(五二・五三)、且つ求二(五四・五五)、漏二(五六・五七)
及び愛(五八)更に魔の域(五九)は始終最上なる品と謂ふ。

註① 雜阿含卷第三八(天正藏、二卷二七七頁) S. N. vol. I, p. 70; 98 (南傳藏、一二卷一二二頁、一六四頁參照)。

② 雜阿含卷第三八に譬如芭蕉竹蘆生果即死來年亦壞とあり、法句經一六四偈には竹蘆の
果は自滅の爲にのみ實るゝとあり。

③ 中阿含卷第四八多界經(天正藏、一卷七二三頁) 雜阿含卷第一七(天正藏、二卷一一八頁) 等

參照。

④ 雜阿含卷第一七(同上)參照。

⑤ 雜阿含卷第二八同、一九九頁) S. N. vol. V, p. 21 等參照。

⑥ 「正しく」とは原因によりてなり。「慢を洞察する」とは慢の見解を洞察し又は捨離を洞察するなり(註釋二九八頁)。

⑦ D. N. vol. III, p. 216(南傳藏、八卷二九五頁) A. N. vol. II, p. 42(南傳藏、一八卷七六頁)等參照。

⑧ S. N. vol. V, p. 56 中阿含卷第七(大正藏、一卷四六二頁)等參照。

⑨ 魔は象に乗る。Dhammapada v. 175 (今卷頁)參照。

⑩ 本事經一二一(大正藏、一七卷六九三頁)參照。

三集 第一品

六〇^①(三·一·一)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三福業事なり。三とは何ぞ。布施に關する福業事、戒に關する福業事、修習に關する福業事なり。比丘衆よ、此等は實に三福業事なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「彼は未來の樂根たる、福をば學ばむ、

又施と靜と、慈心とを修めむ。」

三の樂因たる、斯る法を修め、

眞なき樂しき世界に、智者は生る」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六一(三二二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。『比丘衆よ、此等は三眼なり。三とは何ぞ。肉眼天眼慧眼なり。比丘衆よ、此等は實に三眼なり』と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「肉眼と天眼と無上の慧眼と、

これら三眼を上人(佛)は説き給ふ。」

肉眼の生ずるは、天眼の道

智生ずるをもて、慧眼は無上なり、

この眼を得し者は一切の苦を脱す」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六二(三二三)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三根なり。三とは何ぞ。未知當知根・知根・具知根なり。比丘衆よ、此等は實に三根なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「學びにいそしむ有學者の、直なる道を行ける者に
〔煩惱〕滅盡の上の第一智あり、そより直ちに知〔根〕あり。

更に斯る知解脱者に、有の繼の滅盡により

我が解脱は不動なりとの智あり。

かの根を具せる賢しき者は、靜道(涅槃)を喜び

魔とその象とを服し、最後身を得るなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六三(三二四)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、此等は三時

なり。三とは何ぞ。過去時、未來時、現在時なり。比丘衆よ、此等は實に三時なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

みことを想ふ衆生は、みことの上に立ち

みことを識らざるは、死のほどしまつはる。

されどみことを識れるは、説く者を思はず、
心解脱し、無上の靜道に觸る。

げにみことかしこむ賢者は、靜道を悦び、
つゝしみて戒に従ひ、法に住む。
〔されど〕識者は數に入らず」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六四 三・二・五

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三惡行なり。三とは何ぞ。身惡行、語惡行、意惡行なり。比丘衆よ、此等は實に三惡行なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「身惡行をなし、あるは語惡行、

意惡行をなし、他の惡とし言はるゝものを[なし]、

善き業をなさず、あまた不善をなし、

愚しき者は身壞して、そは奈落に生るゝなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六五^①（三二六）

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三妙行なり。三とは何ぞ。身妙行・語妙行・意妙行なり。比丘衆よ、此等は實に三妙行なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「身惡行を捨て、あるは語惡行、

意惡行を捨て、他の惡とし言はるゝものを[捨て]、

不善業をなさず、あまた善をなし、

賢しき者は身壞して、そは天界に生るゝなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六六(三二七)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、此等は三清淨なり。三とは何ぞ。身清淨語清淨意清淨なり。比丘衆よ、此等は實に三清淨なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「身淨く、語淨く、意淨く、漏なく

白淨をもてるを一切を離るゝ者といふと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六七(三二八)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三寂黙なり。三とは何ぞ。身寂黙語寂黙意寂黙なり。比丘衆よ、此等は實に三寂黙なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「身靜けく、語靜けく、意靜けく、漏なく、

寂黙をもてるを、罪なき者といふと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六八（三二九）

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、貪欲を断たず、瞋恚を断たず、愚癡を断たざるところの者は、比丘衆よ、こは魔に縛められたる者、不解脱者の魔の罠に陥りし者」、惡の傀儡なりと言はる。比丘衆よ、貪欲を断ち、瞋恚を断ち、愚癡を断てるところの者は、比丘衆よ、こは魔に縛められざる者、解脱者の魔の罠に陥りし者」、惡の傀儡に非ず、と言はる」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「貪と瞋と無明との去りし、

その身を修めし者は梵天・如來・佛陀となる、

怒りと怖れとを超え、一切を断ちし者といふと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

六九（三二一〇）

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、貪欲を断たず、瞋恚を断たず、愚癡を断たざるところの比丘及び比丘尼は、比丘衆よ、こは波浪

あり、渦巻あり、種々の羅刹ある海を渡りし者に非ずと言はる。比丘衆よ、貪欲を
断ち、瞋恚を断ち、愚癡を断ちたるところの比丘及び比丘尼は、比丘衆よ、こは波浪
あり、渦巻あり、種々の羅刹ある海を渡り、渡り畢りて彼岸に行き陸地に立てる婆
羅門なりと言はる」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「貪と瞋と無明とを離れし者は、

種々の羅刹や浪の怖れある、渡り難き海をば渡れり。

繼を脱し死を断ち、煩惱をやみ、苦を離れし者は後有なし、

そは逝きて生に還らず、死王を困惑せしめたりと我はいふと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

第二品

攝頌

福(六〇)、眼(六二)、及び根(六三)、時(六三)、行二(六四・六五)、清淨(六六)

寂默(六七)、及び貪欲二(六八・六九)は次に最上なる第二品と謂ふ。

註① 本事經一三四(大正藏、一七卷六九六頁)參照。

② 三福業事に關しては増一阿含卷第十一「三寶品(同二卷六〇二頁)に詳し。

③ 本事經一三〇(同六九五頁)參照。

④ S. N. vol. I, p. 11(南傳藏、一二卷一六頁) 雜阿含卷第三八(大正藏、二卷二八二頁)參照。
「ふことを想べ」(akkheyyasannino)とは告げられ、語られ、慧の動くがみこと(宣べられたこと)

なりと論事に言ふ。義としては色等の五蘊なり……五取蘊に於て衆生・人等を想ふ者
との義なり(註釋二七六頁)⁶ Kathavatthu vol. I, p. 140-1; S. N. vol. III, p. 71 を見よ。

⑤ 読者(vedagū)とは了解あるべく四諦の彼岸に行く故に vedagū なり(註釋二七八頁)。

⑥ 本事經六九(大正藏、一七卷六七四頁)參照。本事經六九七〇は巴利文六四・六五兩經を合
採せるものに相當し、増一阿含卷第一・二・三寶品八同二卷六〇(四頁)は二經を一經とせる
ものなり。A. N. vol. I, p. 49 南傳藏、一七卷七三頁參照。

⑦ 本事經七〇(同上) A. N. vol. I, p. 49 (同上) 參照。

⑧ A. N. vol. I, p. 273 南傳藏、一七卷四五〇頁) 參照。

⑨ 波浪は煩惱、渦巻は五欲樂、海は輪迴海を意味する(註釋二八三頁)。

二集 第三品

七〇 (三三·一)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我は身惡行

を成就し、語悪行を成就し、意悪行を成就し、聖者を誇り、邪見を懷き、邪見の業を受くる衆生が身壊し死後、無幸處・惡趣・墮處・奈落に生れたるを見たり。比丘衆よ、こ⁵⁹をげに沙門又は婆羅門の何れの者よりも聞かずして我は説く。比丘衆よ、我は身惡行を成就し、語惡行を成就し、意惡行を成就し、聖者を誇り、邪見を懷き、邪見の業を受くる衆生が身壊し死後、無幸處・惡趣・墮處・奈落に生ぜるを見たり。而して亦、比丘衆よ、そを完全に知り、完全に見、完全に理解すればこそ我は説くなり。比丘衆よ、我は身惡行を成就し、語惡行を成就し、意惡行を成就し、聖者を誇り、邪見を懷き、邪見の業を受くる衆生が身壊し死後、無幸處・惡趣・墮處・奈落に生ぜるを見たり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「此處に邪心を懷き邪語を談らひ、

身に邪業をなせる者あり。

此處の短き生涯に、學尠く不善をなせる、

愚者は身壊して、そは奈落に生るゝなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

七一(三三・二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我は身妙行⁶⁰を成就し、語妙行を成就し、意妙行を成就し、聖者を非難せず、正見を懷き、正見の業

を受くる衆生が身壞し死後、善趣天界に生ずるを見たり。比丘衆よ、こをげに沙門又は婆羅門の何れの者よりも聞かずして我は説く。比丘衆よ、我は身妙行を成就し、語妙行を成就し、意妙行を成就し、聖者を非難せず、正見を懷き、正見の業を受くる衆生が身壞し死後、善趣天界に生ずるを見たり。而して亦、比丘衆よ、そを完全に知り、完全に見、完全に理解すればこそ我は説くなり。「比丘衆よ、我は身妙行を成就し、語妙行を成就し、意妙行を成就し、聖者を非難せず、正見を懷き、正見の業を受くる衆生が身壞し死後、善趣天界に生ずるを見たり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「此處に正心を懷き正語を談らひ、

身に正業をなせる者あり。

此處の短き生涯に、學多く、善をなせる、

賢者は身壞して、そは天界に生るゝなり」と。
世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

七二(三・三・三)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等は三出離界なり。三とは何ぞ。欲の〔界〕、これを出離するは捨棄なり、色の〔界〕、これを出離するは無色なり、あらゆる存在せるもの、作られしもの、縁によりて起りしもの、それを出離するは滅盡なり。比丘衆よ、此等はげに三出離界なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「欲〔界〕の出離を知り、色〔界〕を越えし、

常に勇猛なる者は、一切行の靜けさに觸る。

かく正しく見たる比丘は、此處に解脱す、

神通を悟れる賢しき者こそ、繼離れし牟尼なれ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

七三(三・三・四)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。『比丘衆よ、色より無色は勝れ、無色より滅盡は勝ると。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

●
「色界に入る衆生と、無色界に停まる者とは
滅界を知らず、他生にゆく。」

●
「色界を識りて、無色界に停まらず、

滅界に解脱せる人々は、死を捨てし者なり。

無漏正自覺者は、身もて不死の界に觸れ

依著を離れ、依著の捨を現じ給ひ、

無憂離染の道を説き給ふと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

七四 (三三五)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。『比丘衆よ、世間に此等三兒の存すること知らる。三とは何ぞ。優生・隨生・劣生なり。さらば、比丘衆よ、

優生兒とは如何なるものぞ。比丘衆よ、此處に兒童の父母あり、佛に歸依せず、法に歸依せず、僧に歸依せず、殺生を慎まず、不與取を慎まず、欲の邪行を慎まず、噓言を慎まず、穀酒及び木酒を飲む放逸なる狀態を慎まず、戒を犯し、惡法を成すものなり、しかも彼等の子にして佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、殺生を慎み、不與取を慎み、欲の邪行を慎み、噓言を慎み、穀酒及び木酒を飲む放逸なる狀態を慎み、戒を具し、善法を成すものなり、比丘衆よ、是の如きは、げに優生兒なり。さらば、比丘衆よ、隨生兒とは如何なるものぞ。比丘衆よ、此處に兒童の父母あり、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、殺生を慎み、不與取を慎み、欲の邪行を慎み、噓言を慎み、穀酒及び木酒を飲む放逸なる狀態を慎み、戒を具し、善法を成すものなり、しかも彼等の子にして佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、殺生を慎み、不與取を慎み、欲の邪行を慎み、噓言を慎み、穀酒及び木酒を飲む放逸なる狀態を慎み、戒を具し、善法を成すものなり、比丘衆よ、是の如きは、げに隨生兒なり。さらば、比丘衆よ、劣生兒とは如何なるものぞ。比丘衆よ、此處に兒童の父母あり、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、殺生を慎み、不與取を慎み、欲の邪行を慎み、噓言を慎み、穀酒及び木

酒を飲む放逸なる状態を慎み、戒を具し、善法を成すものなり、しかも彼等の子にして佛に歸依せず、法に歸依せず、僧に歸依せず、殺生を慎まず、不與取を慎まず、欲⁶⁴の邪行を慎まず、嘘言を慎まず、穀酒及び木酒を飲む放逸なる状態を慎まず、戒を犯し、惡法を成すものなり、比丘衆よ、是の如きは、げに劣生兒なり。げに比丘衆よ、世間にこれら三兒の存すること知らる」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「智者は優生隨生の兒を欲し、
善家を損ふ、劣生を欲せず。」

この世間の兒等は、信と戒とを具へ、

吝ならざる美はしき信士となるなり、

むら雲の上に出づる、さやけき月のごと」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

七五（三・三・六）

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、世間に此等

三者の存すること知らる。三とは何ぞ。旱魃に擬せらるゝ者、地方的降雨に擬せらるゝ者、一切處の降雨に擬せらるゝ者なり。然らば、比丘衆よ、如何なる人が旱魃に擬せらるゝ者ぞ。比丘衆よ、此處に或種の人は一切の人々に對する施與者に非ざるなり。〔即ち沙門・婆羅門・貧民・旅人・乞食に對し、食物・飲物・衣服・乘物・華鬘・香油・香水・臥床・住居・燈明を與ふる者として。〕比丘衆よ、是の如き人は旱魃に擬せらるゝ者なり。さらば、比丘衆よ、如何なる人が地方的降雨に擬せらるゝ者ぞ。比丘衆よ、此處に或種の人は一部の者に對しては施與者なれど一部の者に對しては施與者に非ざるなり。〔即ち沙門・婆羅門・貧民・旅人・乞食に對し、食物・飲物・衣服・乘物・華鬘・香油・香水・臥床・住居・燈明を與ふる者として。〕比丘衆よ、是の如き人は地方的降雨に擬せらるゝ者ぞ。比丘衆よ、此處に或種の人は一切の者に施すなり。〔即ち沙門・婆羅門・貧民・旅人・乞食に對し、食物・飲物・衣服・乘物・華鬘・香油・香水・臥床・住居・燈明を與ふる者として。〕比丘衆よ、世間にこれら三者の存すること知らる」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「沙門に婆羅門にはた貧しき者と旅人とに、
有てる飯と水と食とを分けざる
悪き人をぞ、旱魃に擬せらるゝ者といふ。」

ある者には與へず、或者には與ふるを、

賢しき人々は、地方の降雨に擬せらるゝ者といふ。
總ての者を憐れみ、澤なす食を約せし人は、

悦びと誇りとを覺え、「與へよ、與へよ」といふ。
雨雲立ち昇り、いかづち轟き、雨降りて、

霽れて、にはたずみの、高き低きを浸すごと、
この世の或者は斯のごとし。

そは法をもて集め、勉めて富を得しとき、

正しく飯と水もて、旅する衆生を悦ばしむ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。『比丘衆よ、此等三樂を
希求しつゝ智者は戒を護るべし。三とは何ぞ。我に名譽を與へよ、とて智者は
戒を護るべし。我に富を生ぜしめよ、とて賢者は戒を護るべし。我は身壊し死
後、善趣天界に生せん、とて賢者は戒を護るべし。比丘衆よ、此等三樂を希求しつ
つ賢者は戒を護るべし』と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

賢しきは戒を護るべし、三つの樂を求めつゝ、

そは譽れと富を得ると、逝きて天界を楽しむとなり。
たとひ罪を爲さずとも、犯せし者と交らば、

罪を疑はれ、更に非難をたかむなり。

あらゆるものを犯せし、友と交らば、

そは斯る者となる、共住はげに斯くのごとし。

交る者に交り、觸るゝ者に觸る

汚れし箭の淨き箭束を瀆すごと

耀ける巖のごとき智者こそ、悪友にあらず。

吉祥草の葉もて、人うれし魚を包まば

草亦惡臭を放つごと、愚しきに交るも似たり。

されど葉もて人、多掲羅^{タガ}を包まば、

葉亦香を放つごと、賢しきに交るも似たり。

されば自ら葉籠の中を知り

智者は惡人と交らで、善人と交る、

惡は奈落に曳かれ、善は善趣に導かる^トと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

七七(三・三・八)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、この「色」身は
斷滅す。識は染法なり。一切の依著は無常・苦・轉變の法なり^トと。この義を世尊
は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「身の破るゝと、識の移ろひ易きとを知り、
依著に畏れを見、生死を知り、

最勝の寂靜に達し、克己せる者は、「涅槃の時を待つなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

七八(三・三九)

70
げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、世界の衆生は衆生同士交り親しむ。^④劣れる傾向の衆生は劣れる傾向の衆生同士交り親しみ、勝れたる傾向の衆生は勝れたる傾向の衆生同士交り親しむなり。比丘衆よ、過去時に於ても世界の衆生は衆生同士交り親しみき、劣れる傾向の衆生は劣れる傾向の衆生同士交り親しみ、勝れたる傾向の衆生同士交り親しみなり。比丘衆よ、未來時に於ても世界の衆生は衆生同士交り親しむならむ。比丘衆よ、劣れる傾向の衆生は劣れる傾向の衆生同士交り親しみ、勝れたる傾向の衆生は勝れたる傾向の衆生同士交り親しむならむ。比丘衆よ、現在時に於ても世界の衆生は衆生同士交り親しむ、劣れる傾向の衆生は劣れる傾向の衆生同士交り親しみ、勝れたる傾向の衆生は勝れたる傾向の衆生同士交り親しむなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

交るより杜の下生え生れ、交らざれば芟らる、

木片に凭る者の大海に沈まむごと、

なりはひ正しくも懈怠者に親しまば沈まむのみ。

されば、その精進なき懈怠者を避けむ

遠離し精勤し禪思せる聖者

常に精進せる智者と共に住すべしと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

七九 三三一〇

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等三法は有學の比丘衆を退失に導くなり。三とは何ぞ。此處に、比丘衆よ、有學の比丘は事業を喜び、事業を享樂し、事業に耽ることあり。談話を喜び、談話を享樂し、談話に耽ることあり。睡眠を喜び、睡眠を享樂し、睡眠に耽ることあり。げに、比丘衆よ、此等三法は有學の比丘衆を退失に導くなり。此等三法は有學の比丘衆を不退失に導くなり。三とは何ぞ。此處に、比丘衆よ、有學の比丘は事業を喜ぶこと

なく、事業を享樂することなく、事業に耽ることなし。談話も喜ぶことなく、談話を享樂することなく、談話に耽ることなし。睡眠を喜ぶことなく、睡眠を享樂することなく、睡眠に耽ることなし。げに、比丘衆よ、此等三法は有學の比丘衆を不⁷²退失に導くなり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「わざを喜び、談るを楽しみ、眠るを喜び、不遜なる、

斯る比丘は、いと勝れし正しき菩提を證り得じ。

されば、げに斯る務めなく、眠りなく、誇りなき、

斯る比丘は、いと勝れし、正しき菩提を證り得」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

第三品

攝頌

二見(七〇・七二)、出離(七三)、色(七三)、兒(七四)及び旱魃に擷せらるゝ者につき(七五)、

樂(七六)、及び斷滅(七七)、世界(七八)、退失につきて(七九)、此等の十なりと。

註①最初の一^行S. N. vol. I, p. 131 (南傳藏一二卷二二四頁)に出づ。

②以下第五一經に出づ。

③本事經一二四(天正藏一七卷六九四)參照。雜阿含卷第三二(天正藏二卷二二〇一一頁)に相當經あり。

④本事經一二二(同六九三頁)參照。

⑤依著(upadhi)とは蘊依煩惱依行依・五欲樂依を指す。

⑥本事經一一一(同六八九頁)參照。

⑦五欲樂に傾くもの(註釋三二〇頁)。

⑧善き出家に傾くもの(同上)。

⑨本事經一二七(同六九四頁)參照。

三集第四品

八〇(三四二)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、此等三の不善尋思あり。三とは何ぞ。無蔑相應の尋思、利養稱譽・世評相應の尋思、慈愍遠離

⁷³ 相應の尋思なり。げに比丘衆よ、此等三の不善尋思あり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「親しさと、富と、譽と、敬ひとになすみ

友と共に悦ぶは、ほどし離るゝこと遠し。

され童や獸をはなれ、種々のものを捨てし、

斯る比丘はいと勝れし、正しき菩提を證り得るなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

八一(三・四・二)

「比丘衆よ、我は恭敬によりて服せられし(慢心)、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生ぜるを見たり。比丘衆よ、我は恭敬されざることによりて服せられし(憎み)、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生ぜるを見たり。比丘衆よ、我は恭敬により、恭敬されざることにより、その兩者によりて服せられし、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生ぜるを見たり。されど、比丘衆よ、我はそれを他の沙門或は婆羅門に聞きて説くに

非ざるなり、比丘衆よ、我は恭敬によりて服せられし、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生せるを見たり。比丘衆よ、我は恭敬されざることによりて服せられし、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生せるを見たり。比丘衆よ、我は恭敬により、恭敬されざることにより、その兩者によりて服せられし、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生せるを見たり」と。されど比丘衆よ、我は完全に識り、完全に見、完全に理解せることのものを是の如く説くなり、「比丘衆よ、我は恭敬によりて服せられし、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生せるを見たり」と。比丘衆よ、我は恭敬されざることによりて服せられし、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生せるを見たり。比丘衆よ、我は恭敬により、恭敬されざることにより、その兩者によりて服せられし、心の消耗せる衆生の身壊し死後、無幸處・悪趣・墮處・奈落に生せるを見たり」と。

「敬はれつゝある時も、又敬はれざるとその兩者によりても不懈怠に住して三昧の動ぜざる人

その三昧に入れる、つとめて撓まさる、緻密に勝觀せる
執著の盡くるを悦べる者を善人とはいふなりと。

八二三・四・三

「比丘衆よ、諸天の中に於て時々此等三種の天聲生ず。三種とは何ぞ。比丘衆よ、聖弟子の髪鬚を剃り黃衣を著して家なき出家たらむと思ひし時、その節、比丘衆よ、諸天の中に於て天聲生ずるなり。この聖弟子は魔と共に鬪はむと思へり」と。これ、比丘衆よ、諸天の中に於て時々生ずる中の第一の天聲なり。更に又、比丘衆よ、聖弟子が七の菩提分法の修習の行に相應して住する時、その節、比丘衆よ、諸天の中に於て天聲生ずるなり。この聖弟子は魔と共に鬪ひ始めたり」と。これ、比丘衆よ、諸天の中に於て時々生ずる中の第二の天聲なり。更に又、比丘衆よ、聖弟子が諸漏を盡し、無漏の心解脱と慧解脱とを現法に於て自らよく證し通達して住する時、その節、比丘衆よ、諸天の中に於て天聲生ずるなり。この聖弟子は戰捷せり、則ちその戰線を征服して住すと。これ、比丘衆よ、諸天の中に於て時々生ずる中の第三の天聲なり。げに、比丘衆よ、諸天の中に於て此等三種の天聲生ずるなり」

と。

76

「戰に勝てる正自覺者の弟子を見て、

常に諸天もさわにほめなむ。」

解脱もて死の軍に打ち勝ち障へられざるを

かの氣高き者は「汝は捷ち難きに捷てり」とほむ。」

げにそを得つゝあるを、諸天はほめ

死の力を服したれば、彼等はそを讚へむ」と。

八三 (三・四・四)

「比丘衆よ、天[子]が天身を歿せむとする時、五の前兆顯はる、「花鬢は萎み、衣服は破れ、腋の下より汗は流れ、體は醜くなり、天子は己が天の座を欣ばざるに至る」と。」
よりて、比丘衆よ、諸天は「此の天子は死すなり」と知りて三種の語をもて鼓舞す「君
々よ、善趣に行け、善趣に行きて善き所得を得よ、善き所得を得て君は善き安立とな
れ」と。是の如く言はれて或比丘は世尊に次のごとく申せり、「世尊よ、諸天の善
趣と稱せるは何處なりや。又、世尊よ、諸天の善き所得と稱せるは奈何なるもの

なりや。更に世尊よ、諸天の善き安立となれと稱せるは奈何なることなりや」と。
 比丘衆よ、人間界こそその善趣と稱せるものなり。人間として如來の説き給へ
 る法と律とに信を得るは、これ、比丘衆よ、諸天の善き所得と稱せるものなり。而
 してその信は安立し、根は生じて定著し、世間に於ける沙門・婆羅門又は天魔・梵天
 或は如何なる者によるも堅固にして拘束さることなし、これ、比丘衆よ、諸天の
 善き安立と稱するものなり」と。

「天[子]天身の命終のとき、

諸天のはげます三聲起る。

行け、君よ、人と親しき善趣へ、

人としては正法の上に、こよなき信を得よ。

その、しかと立てる信は根を生じて定まり、
 命のかぎり搖がず正法を克く知るなり。

身惡行を斷ち、あるは語惡行、

意惡行を斷ち、他の惡とし言はるゝものを〔断ち〕、

身もて善を語もて善を澤になし、

意もて限りなく善をなして依身なし。

施により依身の大なる福をなして、

他をも亦死の正法の梵行に入らしむ。

諸天は死する天〔子〕を知りしどき、

親しみもて勵ますなり、幾度も天〔子〕よ、行け」と。

八四^④（三・四・五）

世間に生れたる此等三種の人は多數の人の利のため、多數の人の樂のため、世の中に對する哀愍のため、天と人との義のため、樂のために生ぜり。三とは何ぞ。⁷⁹比丘衆よ、こゝに如來應供正自覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫夫人師佛世尊は世に出興せられたり。佛は初めに善く、中に善く、終りに善き法を開闡し給ひ、義を具し文を具せる法を説き、比類なき完全清淨なる梵行を明し給ふ。これ、比丘衆よ、世間に生れたる第一人者にして多數の人の利のため、多數の人の樂のため、世の中に對する哀愍のため、天と人との義のため、樂のために生じたるなり。

復次に、比丘衆よ、彼の師の弟子たる阿羅漢あり、諸の煩惱を盡し、已に生活し、已に所作をなし、重擔を捨て、自らの義利を得、諸の有縁を離れ、正智によりて解脱せり。彼は初めに善く、中に善く、終りに善く、義を具し文を具せる法を説き、比類なき完全清淨なる梵行を明す。これ亦、比丘衆よ、世間に生れたる第二人者にして多數の人の利のため、多數の人の樂のため、世の中に對する哀愍のため、天と人との義のため、樂のために生じたるなり。復次に、比丘衆よ、彼の師の弟子たる有學者あり、道を修し、多聞にして戒行を具す、彼も亦初めに善く、中に善く、終りに善く、義を具し文を具せる法を説き、比類なき完全清淨なる梵行を明す。これ亦、比丘衆よ、世間に生れたる第三人者にして多數の人の利のため、多數の人の樂のため、世の中に對する哀愍のため、天と人との義のため、樂のために生じたるなり。げに、比丘衆よ、世間に生れたるこれら三種の人は多數の人の利のため、多數の人の樂のため、世の中に對する哀愍のため、天と人との義のため、樂のために生ぜり」と。

「師こそ世に第一の大仙なり、彼に從へる者はこゝろ厚く、

有學者もはた克く學び多聞にして戒を具ふ。

斯る三人の天と人との師は光を與へ法を宣べ、

不死の戸を開き、もろ人にほだしを盡さしむ。

こよなき師の導きにより、示し給へる道をたどり、

善逝の教にあつきは、苦の終りをなすなり」と。

八五（三・四・六）

「比丘衆よ、身に不淨觀を修せよ、而して汝等は出入息念を内心の前に緊く持せ
よ、諸行につきては無常觀に任せよ。比丘衆よ、不淨觀に任せば則ち淨界に於て
貪心を捨てべし。出入息念を内心の前に緊く持せば則ち外部より尋思を碎く
⁸¹ものあらじ。諸行につきて無常觀に任せば則ち諸の無明を捨離し則ち諸の明
を生ずるなり」と。

「身のけがれを思ひ、呼吸を念じ、

諸行の靜けさを常に熟く見たる、

げに正しく見たる比丘は、此處に解脱す、

神通を悟れる賢しき者こそ、繼離れし牟尼なれ」と。

八六(三・四・七)
④

「法隨法に入れる比丘に、この隨法あり、この「法隨法に入る」といふことを説明せば、彼は法のみを説きつゝありて非法を説かず、或は法の尋思をのみ尋思しつゝありて非法の尋思を尋思せず、その兩者を滅して忍辱・正念・正知に住するなり」と。

「法を楽しみ、法を欣び、法を隨念し、

法をかへりみし比丘は、正法を斷たじ。」

若し行くにも、立つにも、坐すにも、はた臥すにも、

内心そろはゞ、安穩に入るなり」と。

八七(三・四・八)
⑩

「比丘衆よ、此等三の不善尋思は諸の闇黒を作るもの、〔慧眼〕を作らざるもの、無智を作るもの、慧盡をなすもの、「惡の」滅を碎くもの、「煩惱の」寂滅に資せざるものなり。三とは何ぞ。比丘衆よ、欲尋思は諸の闇黒を作るもの、〔慧眼〕を作らざるもの、無智を作るもの、慧盡をなすもの、「惡の」滅を碎くもの、「煩惱の」寂滅に資せざるものなり。比丘衆よ、恚尋思は諸の闇黒を作るもの、〔慧眼〕を作らざるもの

の、無智を作るもの、慧盡をなすもの、「惡の」滅を碎くもの、「煩惱の」寂滅に資せざるものなり。比丘衆よ、害尋思は諸の闇黒を作るもの、「慧眼を作らざるもの、無智を作るもの、慧盡をなすもの、「惡の」滅を碎くもの、「煩惱の」寂滅に資せざるものなり。げに、比丘衆よ此等三不善尋思は諸の闇黒を作るもの、「慧眼を作らざるもの、無智を作るもの、慧盡をなすもの、「惡の」滅を碎くもの、「煩惱の」寂滅に資せざるものなり。比丘衆よ、此等三善尋思は諸の闇黒を作らざるもの、「慧眼を作らざるもの、智を作るもの、慧を增長するもの、「惡の」滅を碎かざるもの、「煩惱の」寂滅に資するものなり。三とは何ぞ。比丘衆よ、出離尋思は諸の闇黒を作らざるもの、「慧眼を作らざるもの、智を作るもの、慧を增長するもの、「惡の」滅を碎かざるもの、「煩惱の」寂滅に資するものなり。比丘衆よ、無恚尋思は諸の闇黒を作らざるもの、「慧眼を作らざるもの、智を作るもの、慧を增長するもの、「惡の」滅を碎かざるもの、「煩惱の」寂滅に資するものなり。比丘衆よ、無害尋思は諸の闇黒を作らざるもの、「慧眼を作らざるもの、智を作るもの、慧を增長するもの、「惡の」滅を碎かざるもの、「煩惱の」寂滅に資するものなり。げに、諸比丘よ、此等三善尋思は諸の闇黒を作らざるものなり。

るもの、〔慧眼〕を作るもの、智を作るもの、慧を增長するもの、〔惡の〕滅を碎かざるもの、〔煩惱の〕寂滅に資するものなりと。

「三のよき尋思を懷き、さらに惡しき三を捨てなば、

彼の尋と伺を靜めること兩の塵を除くが如し

その尋思の靜まりし心もて、彼は安穩の道に入るなりと。」

八八(三・四・九)

「比丘衆よ、此等三の内の汚れ、内の敵、内の敵愾心、内の殘忍性、内の反對性あり。」

三とは何ぞ。比丘衆よ、貪欲は内の汚れ、内の敵、内の敵愾心、内の殘忍性、内の反對性なり。比丘衆よ、瞋恚は内の汚れ、内の敵、内の敵愾心、内の殘忍性、内の反對性なり。比丘衆よ、愚癡は内の汚れ、内の敵、内の敵愾心、内の殘忍性、内の反對性なり。」
げに比丘衆よ、此等三の内の汚れ、内の敵、内の敵愾心、内の殘忍性、内の反對性あり」と。

「貪は不義をまねき、貪は心をおどらす、

この内より起る畏れを、人は覺らず。」

貪れる者は義を知らず、貪れる者は法を見ず、
人を貪の服せし時、盲と闇あり。

されど貪を捨て、貪るべきを貪らざる者

そより貪は捨てらる、蓮葉より落つる露のごと。

瞋は不義をまねき、瞋は心をおどらす、

この内より起る畏れを、人は覺らず。

瞋れる者は義を知らず、瞋れる者は法を見ず

人を瞋の服せし時、盲と闇あり。

されど瞋を捨て、瞋るべきを瞋らざる者

そより瞋は捨てらる、枝[より落つる]多羅の果のごと。

愚さは不義をまねき、愚さは心をおどらす、

この内より起る畏れを、人は覺らず。

癡れる者は義を知らず、癡れる者は法を見ず、

人を愚さの服せし時、盲と闇あり。

されど愚さを捨て、癒るべきを癒れざる者
そは總ての愚さを斷つ、闇に日の昇るがごとと。

八九(三・四・一〇)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、三の惡法によりて征服されたる心の消耗せる提婆達多は、まぬかれ難き惡趣・奈落に永劫住せり。三とは何ぞ。比丘衆よ、惡欲によりて征服されたる心の消耗せる提婆達多は、まぬかれ難き惡趣・奈落に永劫住せり。比丘衆よ、惡友によりて征服されたる心の消耗せる提婆達多は、まぬかれ難き惡趣・奈落に永劫住せり。然し最上の作すべき事に⁽¹¹⁾達せず此の世のみに屬することにより、又は特種のものに達せるを以て功中ばに終れり。げに、比丘衆よ、此等三の惡法によりて征服されたる心の消耗せる提婆達多は、まぬかれ難き惡趣・奈落に永劫住せり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のとく説き給ふ、

「**「**惡しき欲を懷きて、いかなる世にも生るゝ勿れ、
そをば復惡欲の者の趣と知るべし。**」**

われ聞けり、提婆達多は智者といはれ、

身を修めし者と崇められ、譽れ焰のごと高かりき、と。

懈怠をなし如來をなやまして、彼は、

怖ろしき阿鼻地獄の四つの門に入る。

悪しき業をせざる、汚れなき人をそこなはむ者は

心汚れ、敬ひを失し、惡にのみ觸れむ。

毒瓶もて海を汚さむと思へる人も、

そともて得ざるべしげにそより海は大なればなり。

言の葉もて、この如來を、そこなふ者ありとも、

行ひ正しく心善き彼の上に言は及ばじ。

智者はかゝる友を作り、そに従ふべし、

道に従へる比丘は苦の滅を成さむと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

その攝頌

尋思(八〇)、恭敬(八二)、聲(八三)、死ぬこと(八三)、世間(八四)、不淨(八五)、

法(八六)、闇黒の所作(八七)、汚れ(八八)、提婆達多につきて(八九)、此等の十なりと。

註① 本事經一二六天正藏、一七卷六九四頁參照。

② 本事經一三七同六九八頁參照。

③ 雜阿含卷第二六見品三天正藏、二卷六九三一四頁參照。

④ 本事經一三六同六九七頁參照。

⑤ 本事經一三二同六九六頁參照。

⑥ 本事經一二五(同六九四頁)に正法尊重を説く點一致す。

⑦ 此處に法と名づくるは九種の出世間法(四向・四果・涅槃)なり。その法の隨法は戒清淨の前分修行の法なり(註釋三五二頁)。

⑧ 「この隨法あり」とはぞれ相應の自性適當の自性なり(同上)。

⑨ A. N. vol. II, p. 14 南傳藏、一七卷二四頁に出づ。

⑩ 本事經一〇〇一〇一に同一法數を説く點に於て類似す。

⑪ 不放逸による單なる禪智を指す。

⑫ 上人法を指す。

⑬ 未だせざる義務あり乍ら已にせる義務多しと思ひ沙門法の失に墮すなり(註釋三六五頁)。

三集 第五品

九〇三・五二

88 げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ此等三の勝信あり。三とは何ぞ。比丘衆よ無足二足四足多足有色無色有想無想及び非想非非想の所有有情の中に於て應供正自覺者なる如來は勝れたるものなりと宣説せらる。比丘衆よ佛を信じたる人々は最勝を信じたるものにして更に最勝

を信じたる勝果あり。比丘衆よ有爲無爲の所有法の中に於て離貪は勝れたるものなりと宣説せらる。そは慢を離れ渴を無みし執著を捨て流轉を斷じ愛を盡し無貪滅盡の涅槃なり。比丘衆よ法を信じたる人々は最勝を信じたるものにして更に最勝を信じたる勝果あり。比丘衆よ所有僧伽衆の中に於て四雙者八輩者なるところの如來の弟子僧伽は勝れたるものなりと宣説せらる。此の世尊の弟子僧伽は尊敬され恭敬され供養され合掌さるべく世間無上の福田なり。比丘衆よ僧伽を信じたる人々は最勝を信じたるものにして更に最勝を信

じたる勝果あり。げに此等三の勝信あり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次の
ごとく説き給ふ。

「勝れし者を信じ、勝れし法を知り、

こよなき應施者たる、勝れし佛を信じ

無貪・安靜の樂たる、勝れし法を信じ

こよなき福田たる、勝れし僧を信じ

勝れしものに施をほどこさば、勝れし福をば増し、

勝れし壽と色と譽れと世評と悦びと力とを〔増す〕。

さかしき人は勝れしものに與へ、勝れし法を等持し、

天あるは人として、勝果を悦ぶなり」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

九一(三・五・二)

比丘衆よ、こは最後の生活即ち托鉢なり。比丘衆よ、この托鉢者は手に鉢をして世間を遊行すとの謂なり。而して比丘衆よ、この賢しき善男子は〔勝〕義のた

めに行くなり。曾て王に捕縛されし者にあらず、曾て盜賊に拉致されし者にあらず、負債のために[出家せる者に]あらず、怖畏のために[出家せる者に]あらず、生きむがためにせるものにあらず。しかのみならず、已に陥りし生老死・愁悲苦憂惱の苦を服せる者・苦を滅せる者なり。されば比類なき此の苦蘊の終りを知るべし^⑤と。「比丘衆よ、是の如き出家せる善男子にして切望あり、欲につきて劇情を懷き、恚心を懷き、邪思惟を懷き、放逸にして知解なく堅固ならず、惑心を懷く自性根の者あり。譬へば、比丘衆よ、火葬場の炬火にて兩端の燃えしものゝ眞中に糞を塗りし物は聚落に於て薪の用をなさず林間に於ても[木材の用をなさざるが如し。同様に、比丘衆よ、我はこの者は「一方に在家の享樂を捨てし者なり、而も[他方に]沙門の勝義を成満せず」と説くなり^⑥と。

「世の人のたのしみと沙門の義とを捨つるはつれなし、

失はれつゝ捨てらる、焼場の炬火の捨てらるゝごと。

破戒無慚のものは、國の飯を食まむより

火焰のごと灼熱せる鐵丸を食ふにしかじ^⑦と。

九二（三五三）

「比丘衆よ、假令比丘が和合衣の裳を執り後より隨行して我が足跡を踏まむも、彼若し切望あり、欲につきて劇情を懷き、恚心を懷き、邪思惟を懷き、放逸にして知解なく、堅固ならず、恶心を懷く自性根あらば、則ち彼は我よりばた我は彼より遠ざかる。所以は如何。何となれば、比丘衆よ、彼の比丘は法を見ず、法を見ざる者は我を見さればなり。比丘衆よ、假令かの比丘が百由旬の處に住するも彼若し切望なく、欲につきて劇情を懷かず、恚心を懷かず、邪思惟を懷かず、不放逸にして知解し、堅固にして一境心なる護根あらば、則ち彼は我にばた我は彼に近づく。所以は如何。何となれば、比丘衆よ、彼の比丘は法を見る法を見る者は我を見ればなり」と。

「若し彼の隨ふ者も大欲にして心顛倒せば、

欲求する者は無欲より、清涼ならざる者は清涼より、

貪婪の者は離欲より、いと遠ざかるを見るべし。

法をよく學び、法を解したるは智者なり、

深き池の底のごと、欲なき者は心鎮まる。

欲なき者は無欲に清涼なる者は清涼に、

離欲の者は離貪に、いと近づくを見るべし」と。

九三(三・五四)

「比丘衆よ、此等三火あり。三とは何ぞ。貪火、瞋火、癡火なり。げに比丘衆よ、此等三火あり」と。

「貪のほむらは欲に染み、しびれし人を焼き、

瞋のほむらは殺生の恶心を懷くものを[焼き]

癡のほむらは迷へる者の聖法を知らざる者を[焼く]

わが身を悦ぶ人々は、此等のほむらを知らず

奈落と傍生と阿修羅と餓鬼境を増大す、

彼等は魔の縛めを脱れ得ずして。

日に夜に正自覺者の教に依るものは、

常に不淨想により貪のほむらを消す。

勝れし人はめぐみもて瞋のほむらを消し、
證得の慧もて癡のほむらを消す。

そを消して日に夜に倦まさる賢しき者は、
残りなく圓寂し、残りなく苦をば越えたり。
識ある聖見の者、智者は正しき智によりて
生滅をよく知り、後有に行かじ」と。

九四 三・五五

94
「比丘衆よ、比丘はそれぞれの方法にて考察すべし。その如く考察せる者は外
にその知解を流さず顛倒せしめず、内に安立せざる〔愛等を〕取らずして、未來を怖れ
ず生老死の苦因を生ずることあらじ」と。

七のほだしを断ち、誘引を切れる比丘の

かの生の流轉を破るは、彼に後有あらじ」と。

九五 三・五六

「比丘衆よ、此等三欲生あり。三とは何ぞ。現欲・化樂〔欲〕・他化自在〔欲〕なり。げに

比丘衆よ此等三欲生あり」と。

「現在の欲を有てる者と、他に欲を受用する

〔他化〕自在の諸天と、化樂の諸天あり。

智者は此處の有、彼處の有、欲樂に於ける

天と人との一切の欲を斷つ。

いとしさと、喜びと、執著の、越え難き流れを切り

残りなく圓寂し、残りなく苦をば越えたり。

識ある聖見の者、智者は、正しき智によりて
生滅をよく知り、後有に行かじ」と。

九六 三五七

「比丘衆よ、欲の繫縛と相應し、有の繫縛と相應せるは〔一〕來なり、此の世への歸還
あり。比丘衆よ、欲の繫縛に束縛されず、有の繫縛と相應せるは不還なり、此の世
への不還あり。比丘衆よ、欲の繫縛に束縛されず、有の繫縛に束縛されざるは阿
羅漢〔應供〕なり、漏盡あり」と。

「欲のほだしと生くる縊との兩つにむすぼれし衆生は、

生死を得輪廻に逝く。

されど欲を斷ち漏を盡し得ず、

生くる縊にまつはれるは不還者なりと言はる。

され輪廻を断ち慢と後有とを無みし、

漏を盡し得たる者は此の世にて彼岸に達せる者なり」と。

九七 三・五・八

「比丘衆よ、戒に善く法に善く慧に善き比丘は此の法と律とに完全に住し而も上人と言はる。さらば、比丘衆よ、戒に善き比丘とは如何なる者なりや。比丘衆よ此處に戒を有する比丘ありて波羅提木叉律儀の抑制に住し、行と行處とを具足し、微細なる罪にも畏れを見、懷きて學處を學ぶ。是の如きは實に、比丘衆よ、戒に善き比丘なり。これ戒に善き者なり。又法に善き者とは如何なる者なりや。比丘衆よ、此處に比丘は七の菩提分法の修習の行に相應して住す。是の如きは

第三誦品

實に比丘衆よ、法に善き比丘なり。これ戒に善く、法に善き者なり。又慧に善き者とは如何なる者なりや。比丘衆よ、此處に比丘は諸漏を盡し無漏の心解脱と慧解脱とを現法に於て自ら通知もて實證し到達して住す。是の如きは實に、比丘衆よ、慧を善くせる比丘なり。是の如き戒に善く、法に善く、慧に善き者は此の法と律とに完全に住し而も上人と言はる」と。

「身と語と、意に惡を無み、

慚を知れるかの比丘を、戒によき者とは言ふ。

法をよく守り、正覺に達し、

隨念せるかの比丘を、法によき者とは言ふ。

苦を知り此の世を捨て、

漏なきかの比丘を、慧によき者とは言ふ。

輪廻を斷ち、惱みなきを、

一切世間の闇を、皆捨てし者とは言ふと。

「比丘衆よ、此等二施あり、財施及び法施なり。比丘衆よ、此等二施の中、法施が最勝なり。比丘衆よ、此等二均分あり、財の均分及び法の均分なり。比丘衆よ、此等二均分の中法の均分が最勝なり。比丘衆よ、此等二の攝益あり、財の攝益及び法の攝益なり。比丘衆よ、此等二の攝益の中法の攝益が最勝なり」と。

「世尊の均分として宣へるを、勝れしこよなき施と言ふ。

勝れし(覺)を得、心靜けき賢しき智者は常に祀らず。

善逝の教を談り、聞ける心靜けき

善逝の教にあつき者は、その勝れし的(阿羅漢果)を淨むべしと。

九九(三・五・一〇)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我は唯口にて語るのみに非^{あら}で法によりて三明を〔證せる〕婆羅門を識る。さらば、比丘衆よ、我は唯口にて語るのみに非^{あら}で法によりて三明を〔證せる〕婆羅門なりと識るとは何ぞや。^⑩比丘衆よ、此處に比丘は種々の宿住を隨念す。譬へば一生も二生も三生も四生も五生も十生も二十生も三十生も四十生も五十生も百生も千生も百千

生も幾壞劫も幾成劫も幾壞成功劫も我は彼處に於て是の如き名・是の如き姓・是の如き族なりき、是の如き食¹⁰⁰を喫し是の如き樂と苦とを受け・是の如き壽限なりき、彼は其處より歿して彼處に生れたりき、我は彼處に於て是の如き名・是の如き姓・是の如き族なりき、是の如き食を喫し是の如き樂と苦とを受け・是の如き壽限なりき、彼は彼處より歿して此處に生じたり、と是の如く彼は相と狀とを併せて種種の宿住を隨念す。これ彼が第一の明を證せるなり。無明は滅せられて明は生じ、闇黒は拂はれて光明は生じたり、そは不放逸に、勇猛に、己を捨て、住するときにあるが如し。復次に、比丘衆よ、比丘は清淨なる超人の天眼もて衆生を見、死し生れ劣れる勝れたる妙色の悪色の善趣の悪趣の業に應じて生れたる衆生を知る。げにこれら衆生は身惡行を成就し、語惡行を成就し、意惡行を成就し、聖者を謗り、邪見を懷き、邪見の業を受く、彼等は身壞し死後、無幸處、惡趣、墮處、奈落に生れたり。或はげにこれら衆生は身妙行を成就し、語妙行を成就し、意妙行を成就し、聖者を謗らず、正見を懷き、正見の業を受く、彼等は身壞し死後、善趣、天界に生ぜり。是の如く清淨なる超人の天眼をもて、乃至、業に應じて生れたる衆生を

知る。これ彼が第二明を證せるなり。無明は滅せられて明は生じ、闇黒は拂はれて光明は生じたり、そは不放逸に、勇猛に、己を捨て、住するときにあるが如し。復次に、比丘衆よ、比丘は諸漏を盡し無漏の心解脱と慧解脱とを現法に於て自ら通知もて實證し到達して住す。これ彼が第三明を證せるなり。無明は滅せられて明は生じ、闇黒は拂はれて光明は生じたり、そは不放逸に、勇猛に、己を捨てて住するときにあるが如し。是の如く、比丘衆よ、我は唯口に語るのみに非^{あら}で法によりて三明を〔證せる〕婆羅門を識る」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ、

「唯口のみならで、宿住と

天界と悪趣とを知れる婆羅門を我は知る。

^①宿住を知り、天界と悪趣とを見、

はた生を盡し得て、神通を得たるは牟尼なり。

此等三つの明による、三明の婆羅門有り、

そを我は口のみにあらざる三明なりと言ふと。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

第五品

その攝頌

信(九〇)、生活(九一)、和合衣(九二)、火(九三)、考察(九四)

生(九五)、欲(九六)、善(九七)、施(九八)、法(九九)による此等の十なり、と。

三集を終る

註① 本事經一三五(大正藏、一七卷六九七頁) A. N. vol. II, p. 345; vol. III, p. 356 (南傳藏、一八

卷六二一四頁、一九卷四六一七頁) 參照。

② 勝果(aggappatta)とは各衆生類に於て生じたる者は各勝れたる生、秀でたる生を證し、或は勝れたる生の出世間の道果を證して悦び歡喜し、樂しむと言ふ(註釋三七八頁)。

③ 本事經九二(同六八二頁) 中阿含一四〇至邊經大正藏、一卷六四七頁) 雜阿含卷第十同二卷七一一二頁) S. N. vol. III, p. 93 (南傳藏、一四卷) 參照。

④ Milindapañha, p. 31 に出家の目的を説いて般涅槃は我等の勝義(paramattha)なりと云ふに同じ。

⑤ 王の所有物を食して牢につながれ逃走せる者が王の捕縛を怖れて出家せるを云ふ(註釋三八一頁)。

⑥ 賊の爲に森林に拉致され殺されんとせし時、出家を約し、佛供養を約し、財を與ふることを約せし爲に許され、後出家せるを云ふ(同上)。

⑦ 愛見慢忿無明煩惱惡行の七繫縛(sanga)を指す註釋三九一頁)。

⑧ 本事經一一四(同六九〇頁)参照。

⑨ 本事經九七(同六八三頁)に施のみを説く。增一阿含卷第七、有無品三一五(天正藏、二卷五七七頁) A. N. vol. I, pp. 91, 92 (南傳藏、一七卷一四八、一四九頁) 參照。

⑩ A. N. vol. I, p. 164 (南傳藏、一七卷二六五—六頁) D. N. vol. I, p. 82 f. (南傳藏、六卷一一一三頁) 參照。

⑪ 宿住……牟尼なりは S. N. vol. I, p. 175 (南傳藏、一一卷三一〇一頁) Dhammapada v. 423 (今卷八三頁)に出づ。宿住……三明の婆羅門有りは S. N. vol. I, p. 167 (同二八五頁)に出づ。
宿住……三明なりと言ふは A. N. vol. I, p. 165; pp. 167-8 (同一七卷二六八、九頁)に出づ。

四 集

一〇〇(四・一)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。「比丘衆よ、我は乞ふ者に相應せる、常に淨き手の、最後身を得たる婆羅門なり、無上の内科醫・外科醫なり。

汝等はわれ自身の子なり、口より生ぜる、法より生ぜる、法によりて作られたる、法の後繼者なり、財の後繼者にあらず。比丘衆よ、此等二施あり、財施及び法施なり。

¹⁰² 比丘衆よ、此等二施の中法施が最勝なり。比丘衆よ、此等二均分あり、財の均分及び法の均分なり。比丘衆よ、此等二均分の中、法の均分が、最勝なり。比丘衆よ、此等二の攝益あり、財の攝益及び法の攝益なり。比丘衆よ、此等二の攝益の中、法の攝益が最勝なり。比丘衆よ、此等二の供養あり、財の供養及び法の供養なり。比丘衆よ、此等二の供養の中、法の供養が最勝なり」と。この義を世尊は宣ひ此處に次のごとく説き給ふ。

「如來は一切の有類を愍み

惜まず法の供養をなせり。

斯る人天の最勝者、有の彼岸に到れる

如來に有情は歸命す」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

比丘衆よ、此等の四は瑣々たるものにして得易く且つ此等は訶責なきものなり。四とは何ぞ。衣としての糞掃衣は瑣々たるものにして得易く且つこれは訶責なきものなり。比丘衆よ、食物としての團飯は瑣々たるものにして得易く且つこれは訶責なきものなり。比丘衆よ、坐臥處としての樹下は瑣々たるものにして得易く且つこれは訶責なきものなり。比丘衆よ、藥品としての家畜の尿にして得易く且つそれは訶責なきものなり。比丘衆よ、薬品としての家畜の尿は瑣々たるものにして得易く且つそれは訶責なきものなり。げに、比丘衆よ、此等の四は瑣々たるものにして得易く且つ此等は訶責なきものなり。されば、比丘衆よ、比丘は瑣々たるものにして且つ得易きものによりて満足す、我はこれを或沙門分といふと。

「悪からず、瑣々たる、得やすきものもて心足る者は住處と衣と飲食とに就きて、心苦します、

〔快樂の〕敵に擊たるゝなし。

足るを知る不放逸の比丘によりて保たるゝ法は沙門の修むべきものなり、と言はると。

一〇二(四・三)

「比丘衆よ、我は知るもの見るものの有漏の盡を説く、知らざるもの、見ざるものには非ず。さらば、比丘衆よ、何を知るもの何を見るものに有漏の盡あるや。比丘衆よ、こは苦なり、と知るもの見るものは有漏を盡したるものなり。比丘衆よ、こは苦の因なり、と知るもの見るものは有漏を盡したるものなり。比丘衆よ、こは苦の滅盡なり、と知るもの見るものは有漏を盡したるものなり。比丘衆よ、こは苦の滅盡に到る道なり、と知るもの見るものは有漏を盡したるものなり。げに比丘衆よ、是の如く知るもの見るものに有漏の盡あり」と。

「學びにいそしむ有學者の直なる道を行ける者に、

〔煩惱滅盡の上の第一智あり、そより直ちに知〔根〕あり。

更に知解脱者に勝れたる解脱智あり、

「繼は盡きたり」と、漏盡に於ける智を生す。

懈怠者と無知なる愚者によりては

一切のほだしの離脱、涅槃は到達せられず」と。

一〇三(四四)

105

「げに比丘衆よ、如何なる沙門或は婆羅門も、こは苦なり、と如實に理解せず、こは苦の因なり、と如實に理解せず、こは苦の滅盡に到る道なり、と如實に理解せざる者は、比丘衆よ、我は彼等を沙門或は婆羅門なりとせず、且つ諸の沙門の中に於ても沙門なりと惟はず、諸の婆羅門の中に於ても婆羅門なりと惟はず、且つ又命終の時、現法に於て彼等は沙門の義又は婆羅門の義を自ら通知もて實證し、到達せずして住す。されど實に、比丘衆よ、如何なる沙門或は婆羅門も、こは苦なりと如實に理解し、こは苦の滅盡なり、と如實に理解し、こは苦の因なり、と如實に理解せる者は、比丘衆よ、我は彼等を沙門或は婆羅門なりとし、且つ諸の沙門の中に於ても沙門なりと惟ひ、諸の婆羅門の中に於ても婆羅門なりと惟ひ、且つ又命終の時、現法に於て彼等は沙門の義又は婆羅門の義を自ら通知もて實證し到達して住す」と。

「苦しみと苦しみの因を知らず、

106

何處にもみな苦しみを残りなく無みせざる者は

はた苦滅にゆく道を知らず、

心の解脱と慧の解脱とを失せし者は、

それを根絶し得て生と老とに到るなり。

されど苦しみと苦しみの因を知り

何處にもみな苦しみを残りなく無みせざる者は

はた苦滅にゆく道を知り、

心の解脱と慧の解脱とをもてる者は

それを根絶し得て生と老とに到らじ」と。

一〇四四五)

「比丘衆よ、戒を具足し、定を具足し、慧を具足し、解脱を具足し、解脱智見を具足せ
る比丘は説諭する者、教授する者、說示する者、訓誡する者、感動せしむる者、満足せ
しむる者、正法の完全なる説明者なり。されば、比丘衆よ、我は斯る比丘衆と會ふ
事の甚だ有益なるを告ぐ。又、比丘衆よ、我は斯る比丘衆より聞くことの甚だ有

益なるを告ぐ。又、比丘衆よ、我は斯る比丘衆に近づく事の甚だ有益なるを告ぐ。
又、比丘衆よ、我は斯る比丘衆に侍する事の甚だ有益なるを告ぐ。又、比丘衆よ、我
は斯る比丘衆を隨念する事の甚だ有益なるを告ぐ。又、比丘衆よ、我
は斯る比丘衆を模倣する事の甚だ有益なるを告ぐ。所以は如何。比丘衆よ、斯る比丘衆に
對して奉仕し尊敬し扈從せる者は假令戒蘊未圓成なりと雖も修習し圓成する
¹⁰⁸
に至り、假令定蘊未圓成なりと雖も修習し圓成するに至り、假令慧蘊未圓成なり
と雖も修習し圓成するに至り、假令解脫蘊未圓成なりと雖も修習し圓成するに
至り、假令解脫智見蘊未圓成なりと雖も修習し圓成するに至る。されば、比丘衆
よ、斯る比丘衆は教師と言はれ、商主と言はれ、過患を離るゝ者と言はれ、闇を滅す
者と言はれ、明を與ふる者と言はれ、榮光を輝かす者と言はれ、光彩を放つ者と
言はれ、炬火を掲ぐる者と言はれ、光を與ふる者と言はれ、聖者と言はれ、具眼者と
言はると。

「こころ鎮める、け高き、正しく生くる者は
悦びの生ずる、因を知る。」

正しき法をかがやかし放てるは

光を與へ、明るみを與ふる、さかしき

眼を具ふる、過を離るゝ者なり。

げに法を聞き、正しき智もて

生の滅を知るさかしき者は、後有に往かじ」と。

一〇五 四・六

「比丘衆よ、比丘の渴愛の生ずる性質を起すところの此等四の愛生起の因あり。^③

四とは何ぞ。比丘衆よ、衣服に因りて比丘の渴愛の生ずる性質起る。或は、比丘衆よ、團飯に因りて比丘の渴愛の生ずる性質起る。或は比丘衆よ、坐臥處に因りて比丘の渴愛の生ずる性質起る。或は、比丘衆よ、此處の有、彼處の有に因りて比丘の渴愛の生ずる性質起るなり」と。

「愛」を第二とせる者は長時流轉し、

此處の有、彼處の有の輪廻を超えず。

斯る過患を知り、愛の生ぜるとき、

「比丘衆よ、己が家に於て父母が子供達より尊敬さるゝ其等の家庭は梵天のそ
れに同じ。比丘衆よ、己が家に於て父母が子供達より尊敬さるゝ其等の家庭は
古の天人のそれに同じ。比丘衆よ、己が家に於て父母が子供達より尊敬さるゝ
其等の家庭は先師のそれに同じ。比丘衆よ、己が家に於て父母が子供達より尊
敬さるゝ其等の家庭は崇拜さるべき人のそれに同じ。比丘衆よ、梵天とはこれ
父母の謂なり。比丘衆よ、古の天人とはこれ父母の謂なり。比丘衆よ、先師とは
これ父母の謂なり。比丘衆よ、崇拜さるべき人とはこれ父母の謂なり。所以は
如何。比丘衆よ、父母は子供達を大いに世話をする者・保護する者・養育する者・この
世を案内する者なればなり」と。

110

家庭の父母は梵天、先師と言はれ、

子供等の應供養、子孫を愛愍す。

されば實に智者は、飲食と衣と床と

「比丘衆よ、己が家に於て父母が子供達より尊敬さるゝ其等の家庭は遊行せむ」と。

一〇六(四七)

塗身と沐浴と足を清むるをもて

父母に歸命せよ、恭敬せよ。

智者はかく父母に仕へるをもて、

世にそは讚へられ、逝かば天上に樂しまむ」と。

一〇七(四・八)

比丘衆よ、婆羅門及び家長は卿等の大なる援助者なり。そは卿等に衣服團飯坐臥處病氣に必要なる薬品道具等もて供養すればなり。比丘衆よ、卿等と雖も婆羅門及び家長の大なる援助者なり。何となれば初め善き、中も善き、終りも善き其等の法を指示し、義を具し文を備ふる比類なき圓満なる清淨の梵行を知らしめばなり。是の如く、比丘衆よ、相互に支持し合ひて瀑流を横切らむがため、正しく苦を滅せんがために梵行に住するなり」と。

「家あると無きは、互に支持し合ひ、

こよなく安けき正法をさとるなり。

家ある者より、衣と資具と住み家と

危害の避難を、家なき者は受く。

又家ある者在家者は、善逝を憑み、

阿羅漢を信じて、聖慧もて三昧に入り、

こゝに善趣への道なる法をば修め

天界を楽しみ、望みを懷き自ら悦ぶなり」と。

一〇八四九

「比丘衆よ、如何なる比丘衆も欺瞞片意地・饒舌・虛偽・尊大・專心ならざるところの
者は、比丘衆よ、我が比丘衆に非ず。比丘衆よ、かの比丘衆は此の法と律とより離
れ、又比丘衆よ、かの比丘衆は此の法と律とに於て增長發達開展するに至らず。
されど實に、比丘衆よ、欺瞞ならず、饒舌ならず、賢しき、片意地ならず、專心なるとこ
ろの比丘衆は、比丘衆よ、我が比丘衆なり。比丘衆よ、かの比丘衆は此の法と律と
より離れず、又、比丘衆よ、かの比丘衆は法と律とに於て增長・發達・開展するに至る
なり」と。

「詐り、頑な、喧々しく、虚偽なる、たかぶれる、專心ならざるは

正自覺者の示し給ひし法に於て進歩せず。

詐らず、騒がず、賢しき、頑ならず、專心なるは

正自覺者の示し給ひし法に於て進歩するなり」と。

一〇九(四二〇)

114

「比丘衆よ、恰も人が河の流れに從ひて樂し氣に嬉し氣に流れ行くとき、岸邊に立てる具眼の者は曰はむ、「おゝ君よ、何故君は河の流れに從ひて樂し氣に嬉し氣に流れ行くや、この河下には波あり、渦あり、鰐魚棲み、夜又栖む湖水あり、おゝ君よ、君は其處に著きて死或は死程の苦しみを受くべし」と。そのとき、比丘衆よ、かの人はその聲を聞きて手足もて流れを横斷せむと焦せるならむ。げに、比丘衆よ、我が説ける此の譬喻は義を教へんがためなり。こは斯くの如き義なり。河の流れとは即ち、比丘衆よ、これ愛の謂なり。樂し氣に嬉し氣にとは即ち、比丘衆よ、これ六内處の謂なり。河下の湖水とは即ち、比丘衆よ、これ五下分結の謂なり。波ありとは即ち、比丘衆よ、これ忿りと絶望の謂なり。渦ありとは即ち、比丘衆よ、これ五欲樂の謂なり。鰐魚棲み、夜又栖むとは即ち、比丘衆よ、これ女人の謂

なり。流れを横断する、とは即ち、比丘衆よ、これ出離の謂なり。手足をもて焦せ
るとは即ち、比丘衆よ、これ精進・努力の謂なり。岸邊に立てる具眼の者とは即ち、
比丘衆よ、これ如來・應供・正自覺者の謂なり」と。

「苦と共に諸欲を捨てなば、來む世には靜けき安らひあらむ。

正智あり、心解脫せる者は、到る處解脫もて〔涅槃に〕觸れざるなし。

〔四諦を〕識り、梵行に住し、世の終りを識れるは到彼岸者と言はると。^⑥

一一〇 四一二

¹¹⁶ 比丘衆よ、若し歩行せるときに比丘が欲尋思又は瞋尋思又は害尋思を生ずる
も、比丘衆よ、若し比丘がそれを懷き、斷たず、拂はず、除かず、滅せんば、比丘衆よ、斯
る比丘は歩行にも無勤なる、無愧なる、相續し、常に懶怠なる、精進を缺ける者と言
はる。比丘衆よ、若し立てるときに比丘が欲尋思又は瞋尋思又は害尋思を生ず
るも、比丘衆よ、若し比丘がそれを懷き、斷たず、拂はず、除かず、滅せんば、比丘衆よ、
斯る比丘は立てるにも無勤なる、無愧なる、相續し、常に懶怠なる、精進を缺ける者
と言はる。比丘衆よ、若し坐せるときに比丘が欲尋思又は瞋尋思又は害尋思を

生ずるも、比丘衆よ、若し比丘がそれを懷き、斷たず、拂はず、除かず、滅せば、比丘衆よ、斯る比丘は坐せるにも無勤なる、無愧なる、相續し、常に懶怠なる、精進を缺ける者と言はる。比丘衆よ、臥して醒めたるとき、比丘が欲尋思又は瞋尋思又は害尋思を生ずるも、比丘衆よ、若し比丘がそれを懷き、斷たず、拂はず、除かず、滅せば、比丘衆よ、斯る比丘は臥して醒めるにも無勤なる、無愧なる、相續し、常に懶怠なる、精進を缺ける者と言はる。されど、比丘衆よ、若し歩行せるときに比丘が欲尋思又は瞋尋思又は害尋思を生ずるも、比丘衆よ、若し比丘がそれを懷かず、斷ち、拂ひ、除き、滅せば、比丘衆よ、斯る比丘は歩行にも熱心なる、愧を知る、相續し、常に勤精進なる、果斷なる者と言はる。比丘衆よ、若し立てるときに比丘が欲尋思又は瞋尋思又は害尋思を生ずるも、比丘衆よ、若し比丘がそれを懷かず、斷ち、拂ひ、除き、滅せば、比丘衆よ、斯る比丘は立てるにも熱心なる、愧を知る、相續し、常に勤精進なる、果斷なる者と言はる。比丘衆よ、若し坐せるときに比丘が欲尋思又は瞋尋思又は害尋思を生ずるも、比丘衆よ、若し比丘がそれを懷かず、斷ち、拂ひ、除き、滅せば、比丘衆よ、斯る比丘は坐せるにも熱心なる、愧を知る、相續し、常に勤精進なる、果斷なる者と言はる。

なる者と言はる。比丘衆よ、若し臥して醒めたときに比丘が欲尋思又は瞋尋思又は害尋思を生ずるも、比丘衆よ、若し比丘がそれを懷かず、断ち拂ひ除き滅せば比丘衆よ、斯る比丘は臥して醒めるにも熱心なる、愧を知る、相續し、常に勤精進なる、果斷なる者と言はると。

「行くにも、立つにも、坐すにも、はた臥すにも、

あしき家にもとづく尋思を懷く者、

あしき道に入り、癪れし、弱き、

斯る比丘は勝れし、正菩提を證らじ。

行くにも、立つにも、坐すにも、はた臥すにも、

尋思をやめ、尋思のやむを樂しめる、

かゝる比丘は、こよなき正菩提を證るなり」と。

一一一(四・一二)

「比丘衆よ、戒を具足して任せよ、波羅提木叉を具足し、波羅提木叉律儀を調制して任せよ、行と行處とを具足し、微細なる罪にも怖れを見、自ら學處を學ぶべし。

119

比丘衆よ、戒を具足して住し、波羅提木叉律儀を調制して住し、行と行處とを具足し、微細なる罪にも怖れを見、自ら學處を學びたる者に、比丘衆よ、この上作すべきこと何がある。比丘衆よ、若し歩行せるときも比丘が已に貪欲を滅し、已に瞋恚を滅し、已に惛沈・睡眠を滅し、已に掉舉・惡作を滅し、已に疑を捨て、勤・精進・正直にして、念は安立して惑亂せず、身は靜謐にして粗暴ならず、心は專心にして一境ならば、比丘衆よ、斯る比丘は歩行にも熱心なる、愧を知る、相續し、常に勤・精進なる、果斷なる者と言はる。比丘衆よ、若し立てるときも比丘が已に貪欲を滅し、已に瞋恚を滅し、已に惛沈・睡眠を滅し、已に掉舉・惡作を滅し、已に疑を捨て、勤・精進・正直にして、念は安立して惑亂せず、身は靜謐にして粗暴ならず、心は專心にして一境ならば、比丘衆よ、斯る比丘は立てるにも熱心なる、愧を知る、相續し、常に勤・精進なる、果斷なる者と言はる。比丘衆よ、若し坐せるときも比丘が已に貪欲を滅し、已に瞋恚を滅し、已に惛沈・睡眠を滅し、已に掉舉・惡作を滅し、已に疑を捨て、勤・精進・正直にして、念は安立して惑亂せず、身は靜謐にして粗暴ならず、心は專心にして一境ならば、比丘衆よ、斯る比丘は坐せるにも熱心なる、愧を知る、相續し、常に勤・精進なる、

果斷なる者と言はる。比丘衆よ、臥して醒めたるときも比丘が已に貪欲を滅し、已に瞋恚を滅し、已に惛沈・睡眠を滅し、已に掉舉・惡作を滅し、已に疑を捨て、勤・精進・正直にして、念は安立して惑亂せず、身は靜謐にして粗暴ならず、心は專心にして一境ならば、比丘衆よ、斯る比丘は臥して醒めるにも熱心なる、愧を知る、相續し、常に勤精進なる、果斷なる者と言はると。

「心して歩み、たゞみ、坐し、臥せる、

比丘は心して、「肢を屈し伸すべし。

前に横に後に地を進むとき、

〔五蘊の法の生滅を見る。〕

かく篤く靜けく誇らで住める、

心靜けく、直き、常に學び、心せる、

斯る比丘を斷えず果斷なる者と言ふと。

一一二 (四・一三)

げにこれを世尊は説き應供は説き給へりと我聞けり。比丘衆よ、如來は世間

此處に次のとく説き給ふ。

「一切世間にて如實なる、一切世間を遍く知り、

一切世間より離れしは、一切世間に比ぶ者なし。

賢しきは一切に勝ち、一切のほだしを脱る、

彼は最上の寂止、無畏の涅槃をさとる。

有漏を盡し、惱みを無み、輪廻を断てるこの佛は、
一切の業を亡くし得て、煩惱を滅して解脱せり。

この應供佛陀こよなきこの獅子こそ、

天と俱なる世に、梵輪をまろばさむ。

斯くて佛の教を信ぜし天と人は、

群がり行きて、大いなる無畏者に歸命す。

御者中の優れし御者、隱者中の寂靜の仙、

解脱者中の最上解脱者、度脫者中の最勝度脫者なり。

斯る賢しき大いなる無畏者に歸命す。

天と俱なる世に彼と等しき者あらじ」と。

世尊はこの義をも亦説き給へりと我聞けり、と。

四集を終る

その攝頌

婆羅門(1〇〇)、四(1〇一)、知(1〇二)、沙門(1〇三)、戒(1〇四)、愛(1〇五)、梵(1〇六)、大なる援助者(1〇七)、欺瞞(1〇八)、諸人(1〇九)、步行(1一〇)、具足(1一一)世間(1一二)による此等の十三なり、と。

如是語經に於ける一一二經なり、と。

註❶ A. N. vol. II, pp. 267 (南傳藏、一八卷四八一九頁參照)。

❷ [沙門の義]とは沙門と稱する意義、四の沙門果といふ意なり。婆羅門の義とはそれと同義語なり。又[沙門の義]とは四聖道、婆羅門の義とは四聖果なりと言ふ(註釋四三一頁)。

❸ uppajjamanā とは uppajjanasi なり(註釋四三七頁)。

❹ 第一五經の偈に同じ。

❺ A. N. vol. I, p. 132; vol. II, p. 70 (南傳藏、一七卷二一四頁、一八卷一一一頁參照)。

❻ A. N. vol. II, p. 6 (同一八卷一〇頁)參照。

- ◎ A. N. vol. II, pp. 13-14 (同 1111 - 四頁) 參照。
- ◎ A. N. vol. II, pp. 14-15 (同 1151 - 六頁) 參照。
- ◎ A. N. vol. II, pp. 23-24 (同 111 - 四頁) 中阿含世間經(天正藏、一卷六四五頁) 參照。

如是語經

三七四

漢字索隱(老—惑)

老品	Jarāvagga	39
六逆罪	cha abhiṭṭhānāni	7
六觸處	cha phassāyatana	127
六內處	cha ajjhattikāni āyatanañi	2, 364
六入	saññayatana	85, 86
鹿母講堂	Migāramatā-pāsāda	112, 167, 190, 233
鹿母毘舍佉	Visākhā-Migāramatā (優婆夷)	112, 233

ヲ

惱跋單	Upavattana	(林)	143
惑	katharhkhathā		164

漢字索隱(無—老)

無相の	animitta	31	欲愛	kāmatañhā	300
無明	avijjā		欲覺	kāmavitakka	140
	85—87, 136, 282, 283, 299, 308, 332, 350, 356		欲求	kāmesanā	297, 298
無明蓋	avijjānivarapa	251	欲生	kāmupapatti	345
無明漏	avijjāsava	299	欲心	icchā	28
無餘(依)涅槃(界)	anupādisesa-nibbāñadhatu		欲尋思	kāmavitakka	333, 365
		174, 224, 286	欲の繋縛	kāmayoga	346
無欲	nirāsa	208, 298	欲の邪行	kameeu micchācāro	315
無漏	anāsava	327, 348, 351	欲望	icchādosa	73
			欲漏	kāmāsava	299
メ					
滅界	nirodhadhatu	295	ヲ		
滅(盡)	nirodha	164; 141, 313	裸行	naggacariyā	38
滅の法	nirodhadhanuma	164	裸體	jatā	38
モ					
妄語	musāvāda	2	羅刹	rakkhasa	309
妄語者	musāvādin	154	羅婆那跋提	Lakunṭhakabhadḍiya (比丘)	
妄想企	papañcasāñhā	212		207, 208, 210	
目眞闇陀	Mucalinda	(樹)	來生	abhisamparīya	96
目眞闇陀品	Mucalindavagga		樂	sukha	112
文眞闇陀	Mucalinda	(龍王)	樂苦	sukhadukkha	96
間沙彌文	Kumārspaṇha	2	樂受	sukhā vedanā	296
ヤ					
野離那	Yasoja	(比丘)	離越	Revata (比丘)	89
藥叉; 夜叉	yakkha	12, 147, 364	離欲; 離食	virūga	141; 340
藥品	bhesajja	355	律儀	sañvara	275
ニ					
由旬	yojana	26, 171, 175, 343	龍	nāga	12, 171, 175; 94, 148, 179
逆行者	paribbāja	65	靈鷲	Gijjhakūta (山)	263
瑜伽	yoga	61	輪迴	saṁsāra; vatta	
優生	atijāta	314		31, 81, 157, 158, 201, 252, 300, 347, 348, 360, 371; 208	
ヨ					
預流	sotāpanna	165, 215	羅色	vanna	225
預流果	sotāpattiphalā	44, 175	劣生	avajāta	314
預流向	sotāpanna	175	ル		
羊群	Ajakalāpaka	(夜叉)	漏	ūsava	121, 286, 347
羊群	Ajakalāpaka	(祠堂)	漏盡	khīpāsava	157
羊牧尼拘律	Ajapālanigrodha	(樹)	老	jara	342
惱尤那	Yamunā	(河)	老死	jaramarapa	86, 87
欲	kāma	15, 99, 347			

漢字索隱(狀一無)

吠舍	vessa	(種姓)	173	擇企	Mahī	(河)	170, 173
吠舍鄰	Vesāli	(市)	124, 185	魔(王)	Māra		
吠陀	veda		88	慢	māna	18, 23—25, 33, 44, 60, 70, 299, 304, 329	
				慢結	mānagantha	31, 244, 246, 288, 297	
				慢心	māna; ussada	246 28, 51, 80; 88	
亦、示				ニ			
法	dhamma	1, 6, 39, 46, 63		彌釐	Meghiya	(比丘)	138
		107, 164, 315, 329, 363		彌釐品	Meghiyavagga		138
法行者	dhammacārin	154		名	nāma		2
法句經	Dhammapadā	(經)	17	未來時	anāgata-addhā; anāgata-addhāna		
法眼	dhammacakkhu		164			305; 321	
法住者	dbammattha		56				
法住品	Dhammatthavagga		56	彌釐	Meghiya	(比丘)	138
法將	dhāmmasenāpati		111	彌釐品	Meghiyavagga		138
法施	dhāmmadāna	72, 348, 354		名	nāma		
法味	dhammarasa		72	未來時	anāgata-addhā; anāgata-addhāna		
法問	dhammādhibharapa		96	名色	nāmarūpa	51, 74, 85, 86	
法樂	dhammarati		72	明	vijja	13, 282, 283, 332, 350	
法・律	dhammavinaya	157, 166, 172		明行足	vijjācarapassapanna		330
放逸	pamāda	20, 227, 288		命	jivita		110, 194
本質	upadhi	103, 136, 180, 215					
菩薩	bodhisatta		162				
菩提	sambodhi		289				
菩提樹	bodhirukkha	85—87, 138		牟尼	muni	58, 83, 153, 190, 212	
菩提的支分	sambodhiyaṅga	30				281, 288, 297, 313, 332, 351	
菩提分法	bodhipakkhiya; bodhipakkhika		327; 347	無悲尋思	avyapādavitakka	334	
菩提品	Bodhivagga		85	無爲	asariñkata	285, 340	
瀑流	ogha	21, 24, 61, 75, 208, 362		無有	abhlūta	285	
牧牛士	gopālaka		145	無憂	asoka	285	
凡夫	puthujjana		59	無憂難染之道	asoka-viraja-pada	295, 314	
梵行	brahmacariya	4, 41, 65, 88, 113		無衣外道	acela	190	
		118—120, 136, 162, 170, 177, 181		無依者	anissita	287	
		189, 203, 211, 231, 275, 276, 285, 330, 362, 365		無我	anatta	60, 218	
梵行水	brahmacariyesanā		297, 298	無我想	anattasannā	143	
梵行者	brahmacārin	154, 168, 173, 290		無害尋思	avilihirsävitakka	334	
梵住	brahma-vihāra		15	無起	asamuppāna	285	
梵天	Brahman	33, 52, 212, 260, 329, 361		無聚	akatharinikathī	298	
梵天宮	Brahmavimāna		260	無礙解	paṭisambhidā	13	
梵輪	brahmacakka		371	無幸處	apāya	256, 290, 311, 325, 350	
煩惱	āsava	30, 31, 36, 52, 56		無作	akata	285	
		59, 62, 77, 82, 95, 207, 331		無色	arūpa	96, 313, 314	
				無色界	arūpadhātu	295	
				無所有處	ākiñciniñāyatana	217	
				無生	ajūta	285	
				無上士	anuttara	8, 330	
末羅	Malla	(族, 國)	143, 213, 219	無常	anieca	60, 136, 296, 320	
末利迦	mallikā	(樹)	25	無常觀	aniecasanā; aniecanupassin	143; 332	
摩伽婆	Maghavan	(帝釋の異名)	21	無尋定	avitakka-samādhi	202	
摩揭陀	Magadha	(族, 國)	100, 225, 228, 263	無染	viraja	285	

漢字索隱(渡一過)

波吒離村	Pāṭaligāma	225, 228	フ、フ
波吒離村人品	Pāṭaligāmiyavagga	217	
波陀	Pāṭileyyaka	(林) 149	不苦不樂受 adukkhamasukhā vedanā 296
婆娑	Pāvā	(邑) 219	不還 anāgāmin 215, 346
波羅提木叉	pātimokkha	141, 152, 167, 367	不還果 anāgāmiphala; anāgāmitā 175, 241, 242, 244; 287, 288
波羅提木叉律懺	pātimokkhasaṅvaraśarūvata	347, 387	
波樓多	Pavatta	(山) 176	不還向 anāgāmin 175
破戒	sañcīvapatti	226	不護門 aguttadvāratā 270
破僧伽	sañghabheda	254	不死の界 amatadhatu 295, 314
八支聖道; 八正道	ariyo atthaṅgiko maggo	3; 174	不淨觀 asubha-saññā; asubhānupassīn 143; 332
八種の人	attha puggalā	6	
八聖者	attha purisapuggalā	340	不善根 akusalamūla 294
婆求末	Vaggumudā	(河) 123, 124	不善等思 akusalavittakka 324, 333
婆薩	Bāhiya	(比丘) 93	不善法 akusaladhamma 141, 270
婆羅門	brahmaṇa	38, 68, 77, 86—89, 92 96, 104, 129, 136, 173, 182, 193, 198, 213 227, 311, 317, 325, 329, 349, 351, 353, 357	不退轉の法 avipatipādhamma 165 不知量 amattaññutā 270 不動三昧 ānājī-samādhi 125 不平等 atula 190
婆羅門道	brāhmaṇīna	154	
婆羅門の義	brāhmaṇīnattha	357	不放逸 appamāda 20, 25, 227, 288
婆羅門品	Brāhmaṇavagga	77	不放逸品 Appamādavagga 20
跋聞	Vaggi	(族, 國) 123, 228	不與取 adinnādāna 315
跋陀沙羅	bhaddasāla	(樹) 149	布薩日 uposatha 167, 181
跋提梨迦	Bhaddiya	(比丘) 113	布施 dāna 4, 12, 264, 302 布施の話 dānakathā 163 怖畏 bhaya 115
ヒ、ヒ			
非有	vibhava; abhava	136; 300	普行沙門; 普行出家 paribbājaka 102, 104, 153, 190, 204; 193, 198
非有の渴愛; 非有愛	vibhavataññā	136; 300	風 vāya 96, 217
非時食	vikālabhojana	2	伏藏經 Nidhikandhasutta (經) 11
非想非非想處	nevaśāmānāsaññāyatana	217	福業 puñña 12, 51
非彼征服者	anabhibhū	260	福樂 bhadra 35
非法	udhamma	55	覆 sukha 225
非梵行	abrahmacariya	2	拂惡 makkha 244, 251
非梵行者	abrahmacārin	154	忿怒 kusala 272
悲	parideva	86, 87, 342	忿怒品 kodha 51; 243, 250
鄙人	vasala	128	糞掃衣 Kodhavagga 51
畢鉢羅窟	Pippalighū	90, 129	糞掃衣者 pariñukūla 79, 355
畢陵迦婆蹉	Piliñlavaccha	(比丘) 128	佛眼 pariñukūlikā 152
賓頭盧頗羅墮督	Piñḍolabharadvāja	(比丘) 152	佛陀 buddhacakkhu 135
比丘	bhikkhu	11, 38, 58, 73, 74 129, 149, 164, 187, 308, 347	佛陀的 buddha 1, 5, 46, 63, 315, 330, 371 45, 47, 78, 110, 230, 256, 280, 308, 371
比丘尼	bhikkhuni	149, 188, 308	佛地 buddhasāsana 74, 76
比丘品	Bhikkhuvagga	73	佛陀品 Buddhavagga 44
毘彌羅	Vepulla	(山) 262	佛地 buddhabhūmi 13
鼻	ghāna	73	
白淨	suciōcēyya	307	
白法	sukkadhamma	30, 284	平和住者 samacārin 154
平等	tula	190	遍知 pariññā 276

漢字索隱(智—波)

智慧的話	paññākathā	141	貪欲	rāga ; lobha ; rāgadosa ; kāma ; abhijjhā
憾	moha	135, 225, 242, 249, 252, 286, 295		19, 20, 48, 56, 70, 74, 76, 80, 137
憾火	mohagaggi	344		308 ; 55, 335; 72 ; 122 ; 368
憾不善根	moha-akusalamūla	294	努力精進者	āraddhaviriyā
竹林	Vejuvana	89, 128, 129		152
	146, 157, 162, 181, 202, 236		同梵行者	sabrahmacārin
中分	majjhima-yāma	86	勤轉	calita
長老	thera	57	道	magga
調御丈夫	purissādhammasārathi	330	道行	tapa
			道品	Maggavagga
				59

ツ, ツ

通知	abhiññā	276, 348, 357
通力	iddhi	44
頭陀說者	dhutavāda	152

テ, テ

天界	sagga ; sagga-loka ; devaloka	
	36, 44, 83, 255, 256, 273, 274, 306 ; 166	
	228, 259, 312, 319, 320, 350 ; 363	
天眼	dibba-cakkhu	92, 147, 229, 308, 350
天上の樂	diviya-sukha	101
天聲	devasadda	327
天身	devakāya	328
天耳	dibba-sotadhātu	130, 148
天人	devatā	361
天人師	satthā devamanussānāth	330
轉生	pavatta	217
轉變の法	vipariṇāmadhamma	136
轉輪王	cakkavatti rājā	13, 260
田相術	khettavijjāsippa	134

ト, フ

兜率天衆	Tusitakāya	162
塗香	vilepana	191
刀杖品	Dāṇḍavagga	37
東園	Pubbārāma	112, 167, 190, 233
到彼岸者	pāragata	365
塔婆	thūpa	96
等覺	sambodhi	224, 274, 275
統御安息	damatha-samatha	94
度脫者	tiṇṇa	371
貪	rāga ; lobha	135, 143, 225
		236, 308 ; 241, 246, 295, 335
食火	rāgagaggi	344
食不善根	lobha-akusalamūla	294

貪欲	rāga ; lobha ; rāgadosa ; kāma ; abhijjhā
	19, 20, 48, 56, 70, 74, 76, 80, 137
	308 ; 55, 335; 72 ; 122 ; 368
努力精進者	āraddhaviriyā
同梵行者	sabrahmacārin
勤轉	calita
道	magga
道行	tapa
道品	Maggavagga
	59

ナ

那伽娑摩羅	Nāgasamāla	(比丘)	232
奈落	niraya	255, 256, 272, 290	
		306, 311, 320, 325, 337, 350	
泥鬼	pañhusupisācaka	148	
難陀	Nanda	(比丘)	118, 120
難陀品	Nandayagga		117

ニ

尼乾子	nigañtha	(外道)	190
尼連禪	Nerañjarā	(河)	85—88, 99, 135
耳	sota		73
肉眼	marhsacakkhu		303
如是語經	Itivuttaka	(經)	241
如來	tathāgata	5, 58, 60, 108, 165	
		169, 186, 189, 194, 204, 279, 280	
		281, 308, 330, 338, 340, 354, 365, 369	
忍受	titikkhā	-	45
忍辱	khanti ; akkodha		45 ; 51

木

涅槃	nibbāna	4, 7, 13, 20, 22, 28, 37
		45, 48, 52, 61, 74, 107, 128, 137
		141, 143, 217, 274, 340, 354, 365, 369

涅槃界	nibbāpadhātu	174, 286, 370
-----	--------------	---------------

八, 八

波斯匿	Pasenadi	100, 104, 112, 154, 160, 190
波旬	Pāpimant	(惡魔)
波吒梨	Pātāli	(邑)

漢字索隱(隨—知)

隨僧	pacchāsamaṇa	232	雙品	Yamakavagga	17
隨法行者	anudhammacārin	188	觸	phassa	86, 103
			觸處	photthabba	131
			孫陀利	Sundari	(外道女) 153
			躋踐	ukkutīka	38
七, ゼ			象頭	Gayāśīsa	(山) 92
世間	loka	370	象品	Nāgavagga	67
世間解	lokavidū	330	增上心定	adhicitta	152
世尊	bhagavant	1, 17, 43, 85, 94, 157, 164, 174, 241, 330			
世品	Lokavagga	43			
生命の素因	āyusaṅkhāra	190			
征服者	abhibhū	260	他化自在(欲)	paranimmitavasavattin	345
誓願	paṇidhi	3	他生	punabbhava	314
刹帝利	khattiya (種姓)	63, 77, 173, 227	多迦羅支棄	Tagarasikhin	(辟支佛) 165
殺生	pāṇātipāta	1, 315, 344	多揭羅	tagara	(樹) 25, 320
千品	Sahassavagga	32	多子	Bahuputta	(祠堂) 186
先師	pubbacariya	361	帝釋	Sakkha	(天) 260
洗尼耶頻尾沙羅	Seniya-Bimbisāra (王)	100	帝魔	timi	(魚) 171, 175
染法	virāgadhamma	320	帝魔伽羅	timiñgala	(魚) 171, 175
栴檀香	candana	191	帝魔羅頻伽羅	timirapiñgala	(魚) 171, 175
栴檀樹莖	sūkaramaddava	220	體	sarira	194
般若	Saṅgāmaji (比丘)	91	托鉢者	pindapātika	152
舌	jivhā	73	但三衣者	teciavarika	152
絕對信	vesārajja	160	陀螺摩羅子	Dabba-Mallaputta (比丘)	236, 237
絕望	upāyāsa	86, 87	墮處	vinipāta	227, 256, 311, 325, 350
善覺	Suppabuddha (優婆塞)	163	大迦葉	Mahākassapa (比丘)	89, 90, 129
善行	sucarita	53	大迦旃陀羅	Mahākaccāna (比丘)	176, 212
善行者	kalyāṇadhamma	154	大拘致羅	Mahākoṭṭhitā (比丘)	89
善業	sukata	66	大劫賓那	Mahākappina (比丘)	89
善趣	sugati	19, 66, 166, 228, 259 271, 283, 312, 319, 320, 328, 350	大地獄	mahāniraya	147
善生	Sujātā (阿修羅の女)	130	大淳陀	Mahācunda (比丘)	89
善導思	kusalavatikka	334	大梵天	Mahābrahman	260
善逝	sugata	6, 61, 94, 186 187, 189, 223, 236, 330, 332, 349, 363	大目犍連	Mahāmoggallāna (比丘)	89, 110, 127, 146, 168
普知識	kalyāṇamitta	254	大林	Mahāvana	124, 185
普法	kusala-dhamma; kalyāṇa-dhamma	141, 193, 282; 315	提婆達多	Devadatta (比丘)	89, 181, 337
禪思者	jhāyin	181	第八の生	atthama-bhava	7
禪定	samādhi; jhāna	39, 45, 75	醍醐味	sappi	105, 145, 237
禪定の話	samādhikathā	141			
ゾ, ゾ					
蘇那俱胝耳	Sopā-kotikāṇa (優婆塞)	176	地(界)	paṭhavī	24, 96, 217
蘇那長老品	Sopatherassa-vagga	160	地獄	niraya	36, 38, 64, 165, 227, 256, 273
僧(伽)	saṅgha	46, 63, 315, 182, 254, 255, 340	地獄品	Nirayavagga	64
僧伽梨衣	saṅghāṭī	221, 223, 233	地上の横臥	thaṇḍilasāyikā	38
僧團	saṅgha	1, 6, 12	知根	āniñdrīya	304
			知足者	santuṭṭha	152
			知足の話	santuṭṭhikathā	141
			知量	mattanñūtā	271

漢字索引(正一隨)

正等覺者	sammāsambuddha	自說經	Udāna	(經)	85
	1, 17, 26, 46, 78, 85, 94, 107, 157, 178, 204	事象	saṅkhāra		60
正念食	parinātabhojana	持戒者	śīlavant; vatavant	25, 141, 154, 227; 49	
正菩提	sambodhi	持戒的話	śīlakathā		163
正法	saddhamma	持法者	dhammadhara		57, 188
生	jāti	慈心	mettaicitta		260
生有	bhava	慈心解脫	mettā cetovimutti		265
生有の渴愛	bhavataphā	慈悲	mettā		5, 74
生天の話	saggrakatha	慈悲觀	mettā-saṅñā		143
生盲品	Jaccandhavagga	慈悲經	Mettasutta	(經)	13
勝觀	vipassanā	實語者	saccavādin		154
勝觀の者	vipassin	邪見	micchādiṭṭhi		43, 66
勝鬘	Mallikā	邪見者	dudditthīn		70
聖慧	ariyapaññā	邪思惟	micchāsaṅkappa		19
聖者	ariya	邪心	aduṭṭhacitta		266
聖跡	ariyasacca	闍闍	Jantu	(村)	138
精	sāra	受	vedanā		86, 87
精勤	padhīna	衛室	māṇavaka		99
精進	viriya	壽命	āyu		224
精進の話	viriyārambhakathā	十戒文	Dasasikkhāpada		1
精鍊	sāra	重闈講堂	Kūṭāgārasāla		124, 183
稱譽	yasa	淳陀	Cunda	(優婆塞)	219, 223
聲聞波羅蜜	sāvakapāramī	順世術	lokāyatasisappa		134
證者	pāṭibhoga	上流者	uddharīsota		51
證智	aññā	成戒	silasampadā		227
攝護	saṁvara	成功	vivatṭakappa		349
攝益	anugghāha	成就者	pāṭibhoga		241—244
心一境	ekaggačitta	定	samādhi		
心解脫	cetovimutti		85, 88, 99, 129, 135, 146, 301, 358		
心品	Cittavagga	定蘊	samādikkhandha		301, 359
身	kāya	淨界	subhadhātu		332
身惡行	kāyaduccarita	淨心	passannacitta		259
	272, 273, 305, 310, 329, 350	常住	sassata		194, 199
身見	sakkhāyadiṭṭhi	掉舉惡作	uddhaṭṭeukukkucca		368
身寂默	kāyamoneyya	靜道	santipada		304, 305
身清淨	kāyasocceyya	靜慮	jhāna		287—289
身妙行	kāyasucarita	神通	iddhi; abhiññā	100, 279, 313, 332, 351	
信	saddhā	尋(思)	vitakka		202; 279, 332, 367
信度馬	sindhava	塵垢	raja-jalla		38
眞諦	sacca	塵勞	raja		118
森林住者	araññaka				
曠	dosa 135, 225, 242, 247, 286, 295, 308, 336	須尼陀	Suniñha	(大臣)	228
曠恚	dosa, vyāpāda	須菩提	Subhūti	(比丘)	202
	20, 56, 74, 76, 80, 90, 129, 308, 335; 368	水	āpa		96, 217
曠火	dosaggi	數術	saṅkhānasippa		134
曠辱恩	vyāpādavitakka	數息觀	ānāpānasati		143
曠不善根	dosa-akusalamūla	隨生	anujāta		314
親近處	gocara				
自己品	Attavagga				

— (8) —

漢字索彙(最—正)

最後身	antimasamussaya ; antimasārīra ; antimadeha	72, 79, 281, 288, 299, 304, 353	七菩提分；七覺支 satta bojjhaṅgāni	3 ; 174
最上義	uttamattha	77, 80	沙門 samanera	4, 38, 45, 56, 57, 78, 104, 129, 136, 147, 168, 173
薩羅迦	Sarabhū	(河) 170, 173		193, 198, 227, 311, 317, 325, 329, 355, 357
三愛	tisso taṇhā	300	沙門道 sāmaneñā	65, 154
三惡行	tiṇī ducecaritāni	305	沙門の義 sāmaneñattha	357
三惡不善の覺	tayo pāpakkā-akusalā-vitakkā	140	沙門分 sāmaneñhaṅga	355
三意念	tayo vitakkā	107	舍衛 Sāvatthi	(市)
三歸文	Sarapattaya	1		3, 89, 91, 93, 94, 100—106, 112, 117, 118, 122, 127, 131
三求	tisso esanā	297		133, 151—153, 158, 160, 162, 166, 167, 176, 179, 181
三結	tayo saṃyojanā	165		183, 190, 193, 198, 202, 204, 207—212, 217, 233, 237
三眼	tiṇī cakkhūni	303	舍利弗 Sāriputta	(比丘)
三業道	tayo kammapatnā	61		89, 111, 127, 146, 152, 158, 207, 208
三時	tayo addhā	304	耆摩囉帝 Sāmavati	(優婆夷)
三寂默	tiṇī moneyyāni	307	捨離 cāga ; pahāna	215
三受	tisso vedanā	2, 296	遮煩羅 Cāpāla	(祠堂)
三十三天	Tāvatiṁsa (天) 119, 120, 166, 229		釋迦族 Sakyakula	213
三十二身分	dvattirūpakkāra	2	釋迦牟尼 Sakyamuni	6
三十六流	chattirūpasi sotā	70	釋迦拘因 Sakyaputtiya	154, 173
三清淨	tiṇī soceyāni	307	釋提桓因 Sakko devānarh indo (天)	119, 130
三願業事	tiṇī puṇnakiriyavatthūni	302	取 upādāna	86, 87, 136
三寶經	Ratanautta (經) 5		周利槃持 Cūlapanthaka (比丘)	183
三昧	samādhi	6, 55, 74, 126	首陀羅 suddha (種姓)	173
三明	tisso vijjā ; tevijja	124 ; 349, 351	衆生 satta ; pojā	2, 66, 300, 305, 314 ; 56, 72
三妙行	tiṇī sucariāni	306	執著 upādāya	95, 207
三漏	tayo āsavā	298	集 samudaya	164
算術	gaṇanasippa	134	集の法 samudayadhamma	164
財施	āmisadāna	348, 354	愁 soka	342
雜品	Pakipñakavagga	62	宿住 pubbenivāsa	350
慚(愧)	hiri	38, 284	出家の樂 nekkhammasukha	59
			出入息念 ānāpānasati	332
			出離 nissarapa ; nekkamma	285, 313 ; 365
			出離界 nissarapāṇī dhātu	313
支提	cetiya	12	出離尊恩 nekkhammavitakka	334
四惡趣	cattāro apāyā	7	所護林 Rakkhitavanasan̄da	(森)
四正勤	cattāro sammappadhānā	174	初分 pathama-yāma	85
四聖諦	cattāri ariyasaccāni	2	書術 lekhāsippa	134
四神足	cattāro iddhipādā	174, 186	小誦經 Khuddaka-pāṭha	(經)
四姓	cattāro vaṇṇā	173	Cūlavagga	207
四雙	cattāri yugāni	6	小品 appiccha	152
四雙者	cattāri purisayugāni	340	少欲者 appicchakathā	141
四念處	cattāro satipaṭṭhānā	174	少欲の話 sambuddha	45, 165
四觀	catuyoga	202	正覺 dassana ; sammāditthi	7, 15, 50
死王	Maccurājā	24, 43, 106, 183	正見 sammāsaṅkappa	19, 144
詩術	kāvyeeyasippa	134	正思惟 sammāsambodhi	370
色	rūpa	2, 96, 314	正自覺 sammāsambuddha	241, 279, 281, 295, 314, 328, 340, 344, 364, 365
色界	rūpadhātu	295		sammadaññā ; abhiññā 25, 31, 331 ; 141
識	vिनापाणानाचायता	85, 86, 320		
識無邊處	viññāpāṇānācāyatana	217	正智	

— (7) —

漢字索隱(九—再)

タ, タ		解説	vimutti; vimokha 13, 211, 304, 358, 365; 31, 328		
九衆生居	nava sattavāsā	3	解脫蘊	vimuttikkhandha	359
拘尸那羅	Kusināra	(市) 143, 221	解脫者	vimutta	281, 371
拘翼	Kosiya	(天) 130	解脫智	vimuttiñāpa	356
拘羅羅伽羅	Kuraraghara	176	解脫智見	vimuttiñāpadassana	358
拘利	Koliya	(族) 107	解脫智見蘊	vimuttiñāpadassanakkhandha	359
苦	dukkha	46, 60, 86, 87, 107, 112 136, 164, 208, 297, 320, 342, 356, 357	解脫智見の話	vimuttiñāpadassanakathā	141
苦蘊	dukkhakkhandha	342	解脫の話	vimuttikathā	141
苦行	tapa	45	解脫の樂	vimuttisukha	85—88, 99, 135
苦根	aghamūla	106	解脫味	vimuttirasa; vimuttisāra	174; 288
苦受	dukkhā vedanā	296	眼	cakkhu	73
苦棄の生起	dukkhakkhandhassa samudayo	86, 87	現在時	paccuppanna-addhā; paccuppanna-addhāna	305; 321
苦棄の滅	dukkhakkhandhassa nirodho	87	現欲	paccupaṭṭhitakāma	345
苦樂	sukhadukkha	199			
垢穢品	Malavagga	53			
鳩足天	Kakutapādīni	(天女) 119	コ, ゴ		
瞿私多林	Ghositārāma	(園) 149, 215			
瞿曇	Gotama	6, 63, 88, 163, 213, 230	戶外經	Tirokuddasutta	(經) 9
瞿曇	Gotamaka	(同堂) 186	孤獨	paviveka	279
瞿曇波場	Gotamatittha	281	光音天	Ābhassarā devā	(天) 48, 260
瞿曇門	Gotamadvāra	281	香	gandha	191
空處	suññāgāra	287	後有	punabbhava	285, 309, 346, 347
空の	suññata	31	後分	pacchima-yāma	87
空無處處	ākāśānafcāyatana	217	黒法	kaṇhadhamma	30
具眼者	cakkhumant	59, 287, 291, 359	惛沈睡眠; 惱眠	thinamiddha	368; 275
具知根	aññatāvindriya	304	五下分結	pañca orambhāgiyāni sahyojanāni	364
愚癡	moha	20, 56, 73, 81, 122, 215, 308, 335			
愚品	Bālavagga	26	五根	pañca indriyāni	174, 286
軍持	Kundijā	(村) 107	五取蘊	pañca upādānakkhandhā	2
軍持處林	Kundijītthānavana	107	五著	pañca sañgā	74
群生	pajā	251	五欲樂	pañca kāmaguṇāni	192, 364
			五力	pañca balāni	174
			語	vācā	73
			語惡行	vaciḍuccarita	272, 273, 305, 311, 329, 350
化樂〔欲〕	nimmānaratin	345	語寂默	vacimoneyya	307
華品	Pupphavagga	24	語清淨	vacisoceyya	307
華鬘	mālā	191	語妙行	vacisucarita	306, 312, 350
袈裟	kāsīva	18, 65, 290	護畏	bhūruttāpa	272
輕安	passaddhi	218	護根	sarīvutindriya	343
血痢	lohitapekkhandikā	221	護門	guttadvāratā	271
結使	sañyojana	209	恆伽; 恒河	Gaṅgā	(河) 170, 173; 231
結髮外道	jatila	92, 190	業	kamma	371
見處	dīṭṭhitthāna	298			
乾闥婆	gandhabba	33, 82, 171, 175			
劍術	tharusippa	133			
賢品	Pañjītavagga	28	作	kata	285
外道派	aññatiththiya	102, 193, 198, 204	再生	punabbhava	137

漢字索謄(儀一行)

優婆塞	upāsaka	103, 106, 110, 149, 164, 176, 188, 225, 228	戒	sīla 118, 157, 166, 191, 301, 302, 319, 358, 367
優波先那婆檀提子	Upasena-Vāngantaputta	(比丘) 157	戒蘿	silakkhandha 301, 359
優樓比螺	Uruvelā	(村) 85—88, 99, 135	戒行	sīla ; vata ; silavata 12, 18, 25, 39, 50 ; 65 : 331
工				
依謹	patiṭṭhā	217	戒禁(取見)	silabbata 7 ; 203
依所	nātha ; sarapa ; dipa	42 ; 46 ; 53	戒の香	silagandha 25
依著	upadhi	295, 299, 314, 320	戒法の話	silakathā 141
慧	paññā	166, 301, 358	戒律	pātimokha 45, 75
慧蘊	paññākkhandha	301, 359	覺	vitakka 148
慧解脫	paññāvimutti	121, 327, 348, 351	覺者	buddha 89
慧眼	paññācakkhu	303	渴愛	tanhā 137, 281, 297, 360
墮劫	sarivatṭakappa	349	伽耶	Gayā (町) 92
墮成劫	sarivatṭavivatṭakappa	260, 349	伽耶	Gayā (河) 92
厭離	nibbida	141	我所見	mama 118, 129, 135
闇浮擅金	jambonada	52	我慢	asamīmāna 99, 143
闇魔	Yama	53	餓鬼	peta 9
闇魔界	Yamaloka	24	害覺；害尊思	vihirñśavitakka 140 ; 334, 365
緣覺	paccekkabodhi	18	學處	sikkhāpada 1, 141, 347, 367
緣起の法	paticcasamuppāda	85—87	キ、ギ	
絆境	ārammaṇa	217	喜	rati 218
才				
汚戒者	dussila	154, 226	給孤獨[長者の遊]園	Anāthapiṇḍikassa ārāmo 3, 89, 91, 93, 100—106, 118, 122, 127, 131, 133 151—153, 158, 160, 162, 166, 176, 179, 181, 183 193, 198, 202—204, 207—209, 211, 212, 217, 237
汚心	padutṭhacitta	256	吉祥	mahāgala 3
汚泥	pañkā	38	吉祥經	Mahgalasutta (經) 3
王舍	Rājagaha	(市) 89, 128, 129, 146, 157, 162, 181, 202, 236	吉祥	kusa (草) 320
應供	arahant	1, 17, 85, 94, 157, 178, 204, 241, 279, 281, 330, 340, 365, 371	弓術	dhanusippa 133
遠離	viveka	28	休息堂	āvasathāgāra 225
遠離者	pavivitta	152	憍薩羅	Kośala (族, 國) 100, 104, 112, 144, 154, 160, 182, 190, 232
遠離の話	pavivekakathā	141	憍賞彌	Kośambi (族, 國) 149, 215
力、ガ				
火	teja	96, 217	憍慢性	huhuñkajātika 88
火神	aggi	92	均分	saññivibhāga 264, 349, 354
火大定	tejodhātu	236	金臂	Kimikalā (河) 138
迦毘嚩	Kukutṭhā	(河) 222	技藝	sippa 133
迦尸	Kāsi	(族, 國) 191	祇陀林	Jetavana (林)
迦布德迦	Kapotakandara	(寺) 146		89, 91, 93, 100—106, 117, 118, 120—122, 127, 131 133, 151—153, 158, 160, 162, 166, 176, 179, 181 183, 193, 198, 202, 203, 204, 207—212, 217, 237
迦蘭陀迦園	Kalandakanivāpa	(89, 128, 129, 146, 157, 162, 181, 202, 236)	耆梨跋提	Giribbaja 263
迦毘梨	kareri	(樹) 131	愧	ottappa 284
過去時	atīta-addhā ; atīta-addhāna	305 ; 321	疑	vicikicchā 164, 368
			疑惑離曰	Kahkhārevata (比丘) 181
			行	sañkhāra 85, 86
			行と行處	śārāgocara 347, 367

漢字索隱

阿夷那和提	Aciravati	(河) 170, 173	伊車能伽羅	Iechānaṅgala	(村) 103
阿闍梨	ācariya	284	威儀	iriyā	280
阿修羅	asura	130, 169, 171, 175	悲	býápāda	143
阿難	Ānanda	(比丘) 89, 122 162, 167, 179, 181, 186, 204, 213, 221, 224, 229	悲覺	býápādavitakka	140
阿若憍陳如	Aññatakonḍañña	(比丘) 211	悲心	výápānnacitta	342
阿耆夾	Anupiya	(昌) 113	悲尊恩	výápādavitakka	333
阿耆根駄	Anuruddha	(比丘) 89	意惡行	manoducearita	
阿欝提	Avanti	(族, 國) 176		272, 273, 305, 311, 329, 350	
阿欝提南路	Avantisudakkipiṭṭapatha	177	意寂默	manomoneyya	307
阿鼻地獄	Aviciniraya	338	意淨淨	manosooeyya	307
阿羅漢	arahant	3, 32, 42, 82 93, 121, 157, 191, 192, 331, 346	意妙行	manoeucarita	306, 312, 350
阿羅漢果	arahatta	175, 363	爲	sankhata	285
阿羅漢向	arahant	175	一衣外道	ekasāṭa	190
阿羅漢道	arahattamagga	93, 191, 192	一如す	samesti	151
阿羅漢品	arahantavagga	30	一來	sakadāgāmin; āgāmin	215, 346
愛	tanhā	86, 87, 300	一來果	sakadāgāmiphala	175
愛結	tanhāsarayojana	252	一來向	sakadāgāmin	175
愛好品	Piyavagga	49	印契の術	muddāsippa	183
愛盡の業	tanhakkhayasukha	101			
愛欲	tanhā	56, 69			
愛欲品	Tanhbāvagga	69			
惡行	ducearita	53			
惡業	pāpaka-kamma; dukkata	7, 27, 36, 38, 44, 65; 66			
惡業者	nibhnikammā	64			
惡趣	duggati	19, 54, 66, 144, 227, 241, 242 244, 245, 247, 249—251, 256, 270, 282, 311, 325, 337, 350			
惡生	apāya	227			
惡不善の法	pāpakakusala-dhamma	193			
惡法	pāpaka-dhamma	54, 315			
惡品	Pāpavagga	35			
惡魔	Māra	135, 137, 144, 187			
安穩	yogakkhema	20, 253, 255, 274, 279			
安靜	upasama	141			
安樂品	Sukhavagga	47			
著應叢林	Ambavana	113, 138, 219, 223			
間聚	tamokhandha	252			

— (4) —

發音索隸(マ—エ)

Mahāmoggallāna マヒー	Mahī	大目犍連(比丘) 摩訶(河)	89 170			
		ム		レーブタ	Revata	離越(比丘) 89
ムチャーリング	Mucalinda	目眞闍陀(樹)	99		ヴ	
		メ		ヴァグムダーヴ ヴァサカラ	Vaggumudā Vassakāra	婆求末(河) 禹舍(大臣) 123 228
メーギヤ	Meghiya	彌醯(比丘)	138	ヴァシッカ ヴァシキ	vassikā vassiki	(草) (樹) 76 25
メーラヤ	meraya	(酒)	55	ヴァッヂ	Vajji	跋闍(族, 國) 123, 228
		ヤ			ギ	
ヤソーデャ	Yasoja	野輸那(比丘)	122			
ヤムナー	Yamunā	拘尤那(河)	170	ギーサーカー	Visākhā	毘舍佉(優婆夷) 112
		ラ			エ	
ラクンタカバッディヤ				エーサーリー	Vesāli	吠舍離(市) 124
Lakunṭhakabbaddiya		羅婆那跋提(比丘)	207	エーブラ	Vepulla	毘舍羅(山) 262
ラタナ	rattana	(尺度)	147			

發音索隱(ス—マ)

スヂーター	Sujātā	善生(阿修羅の女)	130		ナ
スッパーラカ	Suppāraka	蘇波羅哥(邑)	93	ナーガ	nāga 龍 171
スッパーヴーサー	Suppavāsā	(優婆夷)	107	ナーガサマーラ	Nāgasamāla 那迦婆羅(比丘) 232
スニーダ	Suniđha	須尼陀(大臣)	228	ナンダ	Nanda 那陀(比丘) 118
スブーティ	Subhūti	須菩提(比丘)	202		
スラー	surā	(酒)	55		
スンダリー	Sundarī	孫陀利(外道女)	153		
				木	
				ネーランヂラーナ	Nerañjala 尼連禪(河) 85
セ				バ、バ	
セニニヤビンビサーラ				バーヒヤ	Bāhiya 婆憍(比丘) 93
Seniya-Bimbisāra		洗尼耶頻毘沙羅(王)	100	バッダカラ	Bhaddasāla 跋陀沙羅(樹) 149
				バッディヤ	Bhaddiya 跋提梨迦(比丘) 113
ソ				バータリー	Pāṭali 波吒梨(邑) 90
ソーナコーディカンナ				バータリガーマ	Pāṭaligāma 波吒難(村) 225
Sopā-Kotikappa		蘇那俱胝耳(優婆塞)	176	バーリレーヤカ	Pālileyyaka 波婆(林) 149
				バーブー	Pāvā 波婆(邑) 219
タ				バセーナディ	Pasenadi 波斯匿(王) 100
タガラ	tagara	多揭羅(樹)	25, 320	バヴァッタ	Pavatta 波樓多(山) 176
タガラシキン					
Tagarasikhin		多迦羅支棄(辟支佛)	165		
ダッバーマッタブッタ				ヒ、ビ、ビ	
Dabbā-Mallaputta		陀黎摩羅子(比丘)	236	ヒマラヤ	Himavant (山) 64
ダナーバーラカ	Dhanapālaka	(衆)	67	ビーラナ	birapa (草) 69
ダンマパダ	Dhammapada	法句經	17	ピッバリグハ	Pipphaliguhā 番鉢羅窟 90, 129
				ピリンダヴァッチャ	Pilindavaccha 榜陵迦婆蹉(比丘) 128
				ビンドーラバーラドゾーディ	
				Pindolabhāradvāja	賓頭盧頌羅墮誓(比丘) 152
チ					
チャーバーラ	Cāpāla	迦頭羅(祠堂)	186		
チャーリカー	Cālikā	(村)	138		
チャーリカー山	Cālikā-pabbata	(山)	138		
チューラパンタカ	Cūlapanthaka	周利槃特(比丘)	183		
チュンダ	Cunda	淳陀(優婆塞)	219		
チャントゥ	Jantu	闡陀(村)	138		
チャータヴァナ	Jetavana	祇陀林	89		
				マ	
				マガダ	Magadha 摩揭陀(族, 國) 100
				マガバン	Maghavan 摩伽婆(帝釋の異名) 21
				マッラ	Malla 末羅(族, 國) 143
ティミ	timi	帝魔(魚)	171	マッリカー	mallikā 末利迦(樹) 25
ティミラビンガラ	timirapiṅgalā	帝麗羅頻伽羅(魚)	171	マッリカー	Mallikā 𩫓(妃) 160
ティミンガラ	timingala	帝麗伽羅(魚)	171	マハーカッサバ	Mahākassapa 大迦葉(比丘) 89
デーヴダッタ	Devadatta	提婆達多(比丘)	89	マハーカッチャーヤナ	Mahākaccāyana 大迦旃延(比丘) 89
				マハーカッピナ	Mahākappina 大劫那(比丘) 89
				マハーコッティカ	Mahākotthita 大拘跋羅(比丘) 89
ト				マハーセンダ	Mahācunda 大津陀(比丘) 89
トーナ	Thūna	(村)	213	マハーモガッラーナ	

發音索隱

ア		Kalandakanivāpa		迦蘭陀迦國	
アーナンダ	Ānanda	阿難(比丘)	89	カリ	kali (骸子數)
アスラ	asura	阿修羅	171	カレーリ	kareri 迦里梨(樹)
アチラブティー	Aciravati	阿夷那和提(河)	170	カンカーレーヴタ	Kanhkhārevata 疑惑雄(比丘)
アヂカラーパカ	Ajakalāpaka	羊群(夜叉)	90	ガヤー	Gayā 伽耶(町)
アヂバーラニグローダ	Ajapalanigroda	羊屁尼拘律(樹)	88	ガンガー	Gangā 恒伽(河)
	Atula	(優婆塞)	52	ガンダバ	gandhabba 乾闥婆
アスピヤー	Anupiyā	阿菟夷(邑)	113	キ, キ	
アスルッダ	Anuruddha	阿菟樓駄(比丘)	89	キミカーラー	Kimikālā 金麟(河)
アヴァンティ	Avanti	阿槃提(族, 國)	176	ギリッパチャ	Giribbaja 耆梨跋提
アヴァンティスダッキナーバタ	Avantisudakkhināpatha	阿槃提南路	177	ク	
アンニャータコーンダンニヤ	Ānnātakondanāna	阿若憲陳如(比丘)	211	クックター	Kukuttā 迦屈底(河)
アンバvana	Ambavana	菴摩羅林	113	クサ	kusa (草)
イッチャーナンガラ	Icchānaṅgala	伊車能伽羅(村)	103	クシナーラー	Kusinārā 拘尸那羅(市)
イティヴァッカ	Itivuttaka	如是語經	241	クッダカ・パート	Khuddaka-pāṭha 小圖經
				クララガラ	Kuraraghara 拘羅羅伽羅
ウ		クンディッターナナヅナ		222	
ウシーラ	usira	(香)	69	Kukuttā	Kukuttā 迦屈底(河)
ウダーナ	Udāna	自說經	86	クサ	kusa (草)
ウデーナ	Udena	優陀延(祠堂)	186	クシナーラー	Kusinārā 拘尸那羅(市)
ウデーナ	Udena	優填(王)	215	クッダカ・パート	Khuddaka-pāṭha 小圖經
ウバセーナナンガンタブタ	Upasena Vaṇgañatputta	優波先那婆提子(比丘)	157	クンディヤー	Kunḍīyā 軍持(村)
ウバッタナ	Upavattana	憍跋單(林)	143	ク, ク	
ウルヌーラー	Uruvelā	優樓比螺(村)	85	Kundītthānavana	Kundītthānavana 軍持處林
カ, カ		クンディヤー	Kunḍīyā 軍持(村)	107	
カーシ	Kāsi	迦戶(族, 國)	191	コーサラ	Kosala 憍薩羅(族, 國)
カーリゴーダー	Kāligodhā	(優婆夷)	113	コーサンビ	Kosambi 憍賞彌(族, 國)
カッタカ	kaṭṭhaka	(草)	42	コーシヤ	Kosiya 拘翼(天)
カボータカンダラー	Kapotakandarā	迦布德迦(寺)	146	ゴーシターラマ	Gositārāma 瞿私多林園
カラシカニーバ	Kāpotañakandarā			サ	
				サーマーヴティー	Sāmāvati 奢摩鳴帝(優婆夷)
				サーランダダ	Sārañadada (祠堂)
				サーリップタ	Sāriputta 舍利弗(比丘)
				サーヴァッティー	Sāvathī 舍衛(市)
				サッタンバ	Sattambā (祠堂)
				サラブー	Sarabhū 薩羅遊(河)
ス					

索
隱

南傳大藏經初刊關係者

第二十三卷

高楠博士功績記念會纂譯

昭和四十六年十月二十日再刊發行

代表者

文學博士
宇井伯四郎
辻直四郎
吉村壽

發初版編輯者

東京都文京区目白台一丁目17番6号
木村泰造社

吾

昭和十二年八月八日發行

昭和四十六年十月二十日再刊發行

監修

マクスター
オブリテア
ロザチュイツ
ドクターハイロゾラチュイツ

高楠順次郎

代再刊發行者
再刊印刷所

東京都文京区目白台一丁目17番6号
木村泰造社

吾

昭和十二年八月八日發行

昭和四十六年十月二十日再刊發行

翻譯
學士

--	--	--	--	--

